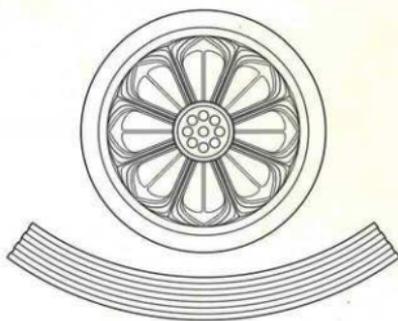


高岡市埋蔵文化財調査概報第67冊

市内遺跡調査概報XVIII

— 平成19年度、越中国府・御亭角遺跡の調査他 —



2009年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋藏文化財調査概報第67冊

市内遺跡調査概報XVIII

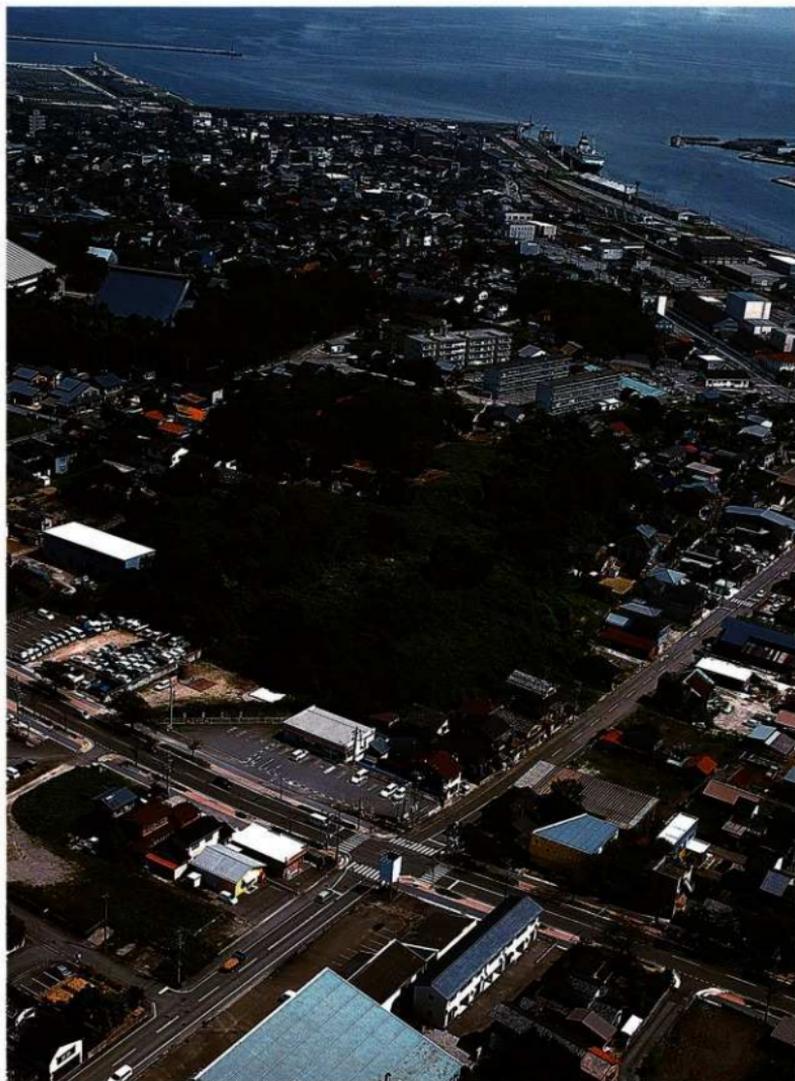
— 平成19年度、越中国府・御亭角遺跡の調査他 —



2009年3月

高岡市教育委員会

表紙カット：御亭角遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦の想定模式図
大扉カット：御亭角遺跡（越中国府関連遺跡能松地区）出土瓦



越中国府関連遺跡能松地区 遠景（南西）

※右上方は小矢部川の河口部。中央の藪が御亭角遺跡、その左上方に勝興寺本堂の屋根が見える。



1. 中世城郭の腰曲輪土塁S A02断面（第9トレンチ、南東）

※主郭の北側に新たに確認された腰曲輪の土塁の断面。基本層序の反転が明瞭に分かる。



2. 古代の土坑S K01（第7トレンチ、北）

※中世の整地層下で検出された土坑。バラス状に砕かれた瓦を取り除くと、土坑中央部から須恵器杯が出土した。土坑の壁面には丸瓦の大型破片が立て並べてある。



瑞龍寺遺跡芹原地区 全景（北東）

※上方は瑞龍寺、左に山門、そこから回廊がL字形に延び中央の大庫裏に取り付く。奥の方に見えるのが禅堂の屋根。

下方は調査地区で、中央部に溝S D01・02が平行して東北東～西南西方向に走る。

序

富山湾や小矢部川河口を臨む伏木台地の中央に浄土真宗本願寺派の寺院、雲龍山勝興寺が所在しています。この境内の南西側一帯は御亭角と呼ばれている地区で、越中国府関連遺跡のなかにあつて、特に御亭角遺跡と称されている所です。

御亭角地区からは古瓦が出土することから寺跡・御亭角庵寺の存在が指摘され、当地の上土や堀は戦国時代の古国府城にかかる御亭角城郭遺構とされてきました。

この度、開発工事に伴い当地区の発掘調査を実施しました。多量の古瓦が出土し、土塁や堀の規模が大きく複雑な様相を示すことが判明しました。

この報告書では、この御亭角遺跡をはじめ、平成19年度に開発工事に伴い実施した瑞龍寺遺跡・東木津遺跡・石塚江之戸遺跡などの調査結果を取録しました。

瑞龍寺遺跡は加賀2代藩主前田利長の菩提寺・瑞龍寺にかかる遺跡です。伽藍の外側で外堀の内側にあたる地点の調査を実施し、東西に延びる堀址を確認しました。

東木津遺跡・石塚江之戸遺跡は、高岡市街地の南西郊外の佐野台地に立地する遺跡群です。古代・中世の遺構・遺物を確認しました。

最後になりましたが、調査実施にご協力いただきました関係各位、地元の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

高岡市教育委員会
教育長 村井 和

例 言

1. 本書は富山県高岡市において、高岡市教育委員会が平成19年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の調査概要報告書である。
2. 当調査は各種の開発工事に対応して実施したものである。
3. 現地調査は平成19年度国庫補助金、報告書作成は平成20年度国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
4. 本書で報告する遺跡ならびに調査地区は、15遺跡22箇所である。
5. 調査関係者は以下のとおりである。

[高岡市教育委員会]
文化財課長：笹島千恵子（平成19年度）、東保英則（平成20年度）
[埋蔵文化財担当]
主幹：本林弘吉（平成19年度）、岡山哲剛（平成20年度）
副主幹：山口辰一、主査：荒井隆
6. 当調査は、山口・荒井が担当した。
7. 現地調査・報告書作成において、以下の調査員の支援を得た。

岡田一広・桶谷潤・後藤浩之・澤田雅志・宮脇満（以上、株式会社エイ・テック）
浅岡隆・伊藤順一・小島拓磨・常澤尚・土井道昭（以上、有限会社毛野考古学研究所）
稲垣森太・江藤敦・桶田泰之（以上、国際文化財株式会社）
池田昌美・稲垣祐二・菊地出至了（以上、北陸航運株式会社）
8. 現地調査・報告書作成において、以下の各氏の御教示・御援助を得た。（順不同、敬称略）

大橋康二、垣内光次郎、川崎晃、熊谷葉月、関清、西井龍儀、古岡英明、宮山進一
雲龍山勝興寺（土山照煇住職）、高岡市万葉歴史館（小野寛館長）
9. 本書の執筆担当者は以下のとおりである。
 1. 越中国府関連遺跡能松地区：常深（序説・鍛冶関連－伊藤、近世近代瓦－山口）
 2. 東木津遺跡今井地区：常深
 3. 瑞龍寺遺跡丹原地区：遺構等－岡田、遺物等－山口
 4. 石塚江之戸遺跡福島地区：桶谷
 5. その他の遺跡・調査地区：桶谷※ 全体調整：山口

凡 例

1. 遺構記号は以下のとおりである。

SA：欄柱・土塀址・土塁	SI：堅穴建物址	SX：その他の遺構
SB：建物址（掘立柱建物址）	SM：盛土（整地層）	（粘土探掘坑・
SD：溝（堀址）	SN：畝址（畝状遺構）	防空壕・門地）
SK：土坑	SU：遺物集積（瓦溜り）	
2. 遺物番号は以下のとおりである。

1000番台：越中国府関連遺跡－土器類	6000番台：瑞龍寺遺跡－木製品等
2000番台：越中国府関連遺跡－瓦	7000番台：東木津遺跡
3000番台：越中国府関連遺跡－土製品等	8000番台：石塚江之戸遺跡
4000番台：瑞龍寺遺跡－陶磁器類	
5000番台：瑞龍寺遺跡－瓦	

目 次

卷首図版	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
1. 越中国府関連遺跡、能松地区	1
I 序 説	3
II 遺 構	5
III 遺 物	11
IV 結 語	19
2. 瑞龍寺遺跡、芹原地区	25
I 序 説	27
II 遺 構	29
III 遺 物	31
IV 結 語	35
3. 東木津遺跡、今井地区	37
I 序 説	39
II 遺 構	41
III 遺 物	46
IV 結 語	49
4. 石塚江之戸遺跡、福島地区	51
I 序 説	53
II 遺 構	55
III 遺 物	57
IV 結 語	58
5. その他の遺跡・調査地区	59

図 面 目 次

図面01～42 遺構実測図

図面43～92 遺物実測図

図 版 日 次

巻首図版01 越中国府関連遺跡能松地区 遠景（南西）

巻首図版02 越中国府関連遺跡能松地区

1. 中世城郭の腰輪土塁S A02断面（第9トレンチ、南東）

2. 古代の上坑S K01（第7トレンチ、北）

巻首図版03 瑞龍寺遺跡芹原地区 全景（北東）

図版01～30 遺構写真

図版31～64 遺物写真

挿 図 目 次

第1図	越中国府関連遺跡位置図「1」（1/15万）	1
第2図	越中国府関連遺跡位置図「2」（1/5万）	2
第3図	越中国府関連遺跡能松地区位置図（1/5,000）	3
第4図	越中国府関連遺跡能松地区 基本順序（第11トレンチ、北から）	4
第5図	越中国府関連遺跡能松地区 城郭遺構概略図（1/1,600）	5
第6図	越中国府関連遺跡能松地区 土塁S A01の断面想定図	6
第7図	越中国府関連遺跡能松地区 堀址・土塁の断面比較（1/250）	7
第8図	越中国府関連遺跡能松地区 縄文土器実測図（1/2）	11
第9図	越中国府関連遺跡能松地区 中世土師器皿法量分布	12
第10図	越中国府関連遺跡能松地区 中世土師器皿の遺構別法量構成（1/8）	12
第11図	越中国府関連遺跡能松地区 白鳳時代の丸瓦叩き分類（1/2）	14
第12図	越中国府関連遺跡能松地区 白鳳時代の平瓦凸面格子叩き分類（1/4）	14
第13図	越中国府関連遺跡能松地区 白鳳時代の平瓦凸面叩きと凹面の調整	15
第14図	越中国府関連遺跡能松地区 文字瓦「寺カ」実測図（1/2）	15
第15図	越中国府関連遺跡能松地区 奈良時代の平瓦割縁の面取り	16
第16図	越中国府関連遺跡能松地区 近世瓦実測図（1/4）	16
第17図	棧瓦概念図	17
第18図	越中国府関連遺跡能松地区 白玉写真（2倍）	18
第19図	富山県内の「寺」文字資料	19
第20図	越中国府関連遺跡能松地区 御亭角廃寺所用瓦と関連資料（1/12）	20
第21図	越中国府関連遺跡能松地区 御亭角廃寺周辺の主な調査地区（1/2,000）	22
第22図	越中国府関連遺跡能松地区 古国府城関連遺構及び中世土師器出土地点（1/2,500）	24

第23図	瑞龍寺遺跡位置図〔1〕 (1/15万)	25
第24図	瑞龍寺遺跡位置図〔2〕 (1/5万)	26
第25図	瑞龍寺遺跡芹原地区位置図 (1/5,000)	27
第26図	瑞龍寺遺跡芹原地区 トレンチ配築図 (1/400)	28
第27図	瑞龍寺遺跡芹原地区 瓦溜りSU01出土瓦分取図	30
第28図	瑞龍寺遺跡芹原地区 菊丸瓦接着面の状況 (1/2)	32
第29図	釉薬瓦模式図 (1/8)	34
第30図	瑞龍寺遺跡芹原地区 瓦刻印の分類	36
第31図	東木津遺跡位置図〔1〕 (1/15万)	37
第32図	東木津遺跡位置図〔2〕 (1/5万)	38
第33図	東木津遺跡今井地区位置図 (1/5,000)	39
第34図	東木津遺跡今井地区 調査地区位置図 (1/1,000)	40
第35図	東木津遺跡今井地区 掘立柱建物址概略図 (1/200)	41
第36図	東木津遺跡今井1地区 古墳時代土坑位置図 (1/400)	43
第37図	東木津遺跡今井1地区 溝断面模式図 (1/80)	44
第38図	東木津遺跡今井地区 古墳時代土師器分類 (1/8)	47
第39図	東木津遺跡今井地区 古代土器類分類 (1/8、1/10)	47
第40図	東木津遺跡今井地区 古代遺構変遷図 (1/800)	50
第41図	石塚江之戸遺跡位置図〔1〕 (1/15万)	51
第42図	石塚江之戸遺跡位置図〔2〕 (1/5万)	52
第43図	石塚江之戸遺跡福島1・福島2地区位置図 (1/5,000)	53
第44図	石塚江之戸遺跡福島2地区 出土銅銭(実人)	57
第45図	石塚江之戸遺跡 周辺既往の開業地区位置図 (1/2,000)	58
第46図	中保B遺跡位置図 (1/5万)	61
第47図	中保B遺跡ア・ライズ地区位置図 (1/5,000)	61
第48図	中保B遺跡ア・ライズ地区全体図 (1/800)	61
第49図	岩坪岡田島遺跡位置図 (1/5万)	62
第50図	岩坪岡田島遺跡船元地区位置図 (1/5,000)	62
第51図	東木津遺跡位置図 (1/5万)	63
第52図	東木津遺跡二上商事地区位置図 (1/5,000)	63
第53図	赤丸古村遺跡位置図 (1/5万)	64
第54図	赤丸古村遺跡大谷地区位置図 (1/5,000)	64
第55図	蓮花寺遺跡位置図 (1/5万)	65
第56図	蓮花寺遺跡トーカン地区位置図 (1/5,000)	65
第57図	越中国府岡連遺跡位置図 (1/5万)	66
第58図	越中国府岡連遺跡麻生地区位置図 (1/5,000)	66
第59図	越中国府岡連遺跡麻生地区全体図 (1/400)	66
第60図	出来田南遺跡位置図 (1/5万)	67
第61図	出来田南遺跡小林地区位置図 (1/5,000)	67
第62図	出来田南遺跡小林地区全体図 (1/400)	67
第63図	中曾根船遺跡位置図 (1/5万)	68
第64図	中曾根船遺跡区西整理地区位置図 (1/5,000)	68
第65図	越中国府岡連遺跡位置図 (1/5万)	69

第66図	越中国府関連遺跡ハヤマ興産地区位置図 (1/5,000)	69
第67図	中保B遺跡位置図 (1/5万)	70
第68図	中保B遺跡オスカーホーム地区位置図 (1/5,000)	70
第69図	鶯北新遺跡位置図 (1/5万)	71
第70図	鶯北新遺跡今市地区位置図 (1/5,000)	71
第71図	鶯北新遺跡今市地区全体図 (1/400)	71
第72図	石塚遺跡位置図 (1/5万)	72
第73図	石塚遺跡平島地区位置図 (1/5,000)	72
第74図	前田墓所遺跡位置図 (1/5万)	73
第75図	前田墓所遺跡中田地区位置図 (1/5,000)	73
第76図	前田墓所遺跡中田地区全体図 (1/400)	73
第77図	守山城跡位置図 (1/5万)	74
第78図	守山城跡イー・モバイル地区位置図 (1/2,500)	74
第79図	守山城跡イー・モバイル地区遺構図 (1/200)	75
第80図	守山城跡イー・モバイル地区上層断面図 (1/80)	75
第81図	下石瀬遺跡位置図 (1/5万)	76
第82図	下石瀬遺跡吉田地区位置図 (1/5,000)	76

挿 表 目 次

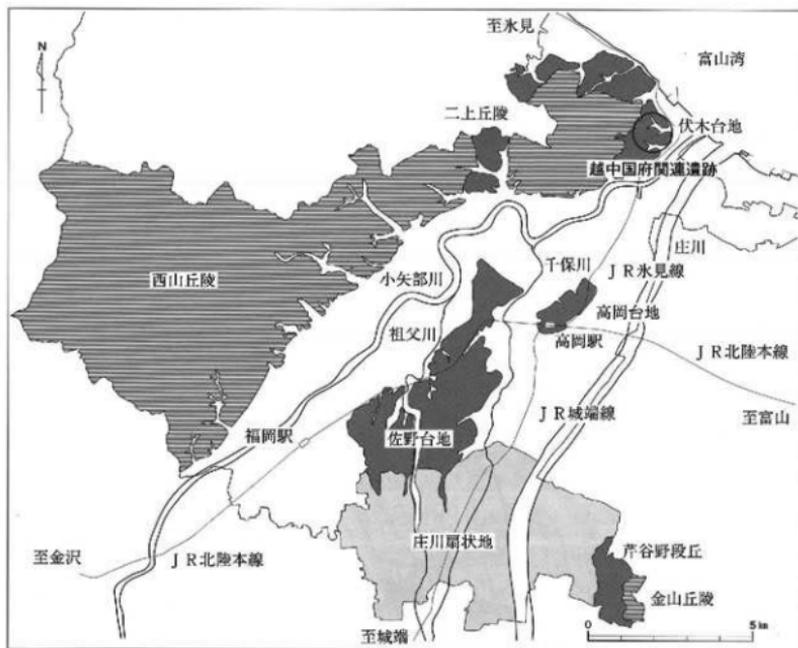
第1表	越中国府関連遺跡能松地区 近代枕元計測表	17
第2表	瑞龍寺遺跡芹原地区 瓦出土数量一覧表	31
第3表	瑞龍寺遺跡芹原地区 瓦刻印一覧表	33
第4表	その他の遺跡・調査地区一覧表	60

別 表 目 次

別表 土器類観察表	77~88
-----------	-------

調査参加者名簿	発掘	浅井貴之、安藤誠吾、石田敏行、大館佳奈、大橋欣次、奥山なをみ、河原康弘、久保田真英、黒田貴之、小坂達郎、後藤利信、小林央、近藤謙、沢田和明、清水不二雄、新堂秀次、高岡誠一、高嶋輝雄、竹内啓三、塚原祐幸、塚本健一、富田幸吉、仲谷巧正、中山賢富、奈良原節子、轟山行男、平井健之、深田力、松本雄祐、松本真由美、山口忠男、山崎一男、山城一夫、山田祥一、山田誠晃、吉村文雄
	整理	安藤誠吾、大野紗恵子、大村南津子、片岡志保、木村宏次、黒田香里、上坂哲也、小島智子、小林央、駒山未希、作田芳、菅谷万須美、杉恵理子、高土友希、瀧澤梓、武石雅美、竹部光希、民野加奈子、西川愛、野瀬貴、野原哲哉、原真知子、宮野美重子、森本舞子、柳瀬香奈
	協力者	伊藤昭子、高木奈美、前馬みゆき、三島幸代、南真弓、吉田有里

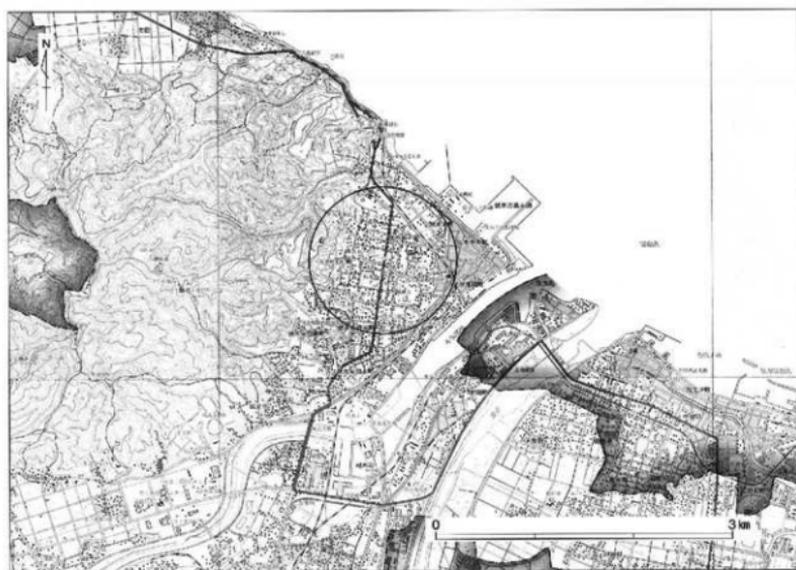
1. 越中国府関連遺跡、能松地区



第1図 越中国府関連遺跡位置図【1】(1/15万)

越中国府関連遺跡能松地区、目次

I 序 説	3	III 遺 物	11
II 遺 構	5	1. 縄文土器	11
1. 土 壘	5	2. 古代の土器類	11
2. 堀 址	6	3. 中世の土器類	12
3. 竪穴建物址	8	4. 近世の陶磁器類	13
4. 橋 址	8	5. 白鳳時代の瓦	13
5. 土 坑	8	6. 奈良時代の瓦	15
6. 溝	9	7. 近世の瓦	16
7. 瓦溜り	10	8. 近代の瓦	16
8. 整地層	10	9. 土製品	18
9. 粘土採掘坑	10	10. 鉄製品	18
10. 防空壕	10	11. 石製品	18
		IV 結 語	19



第2図 越中国府関連遺跡位置図〔2〕(1/5万)

I 序 説

遺跡概観

越中国庁跡推定地とされる勝興寺の南側一帯では、白鳳時代の瓦が多く採集されており、国庁設置以前に寺院が存在したとされている。小字名から「御亭角鹿寺」と称されるこの寺院は、伊弉諾国造射水臣氏との関連が指摘されている。越中国庁跡については、勝興寺南接地区において獨立柱建物趾群が検出されている。この建物の柱穴は方形で一辺の長さが1m以上、柱間寸法が7尺（2.1m）以上という規模を有することから、国庁を構成する建物群の一部と考えられている。また、美野下遺跡高岡古府庁舎地区では多量の国分寺瓦・供膳用土器のほか、「傳厨」と墨書された須恵器など国庁周辺施設の存在を示す遺物が出土している。

戦国時代に入り、天正9年（1581）、佐々成政は勝興寺・瑞泉寺を中心とする一向一揆を制圧し越中を支配した。その3年後の天正12年（1584）、成政と守山城を拠点とする神保氏張により勝興寺は現在の地に土地を寄進された。現在の勝興寺の土塁と堀については、勝興寺移転後に築いたとする説と、天正12年以前にすでにあったとされる古国府城の一部を利用したとする説がある。

明治時代に富山県内では大火が頻発し、それに伴い瓦の需要が増加した。明治45年当時、伏木は県内の瓦生産における43%の割合を占めており、富山県下で最も瓦生産が盛んな地域であった。



第3図 越中国府庁遺跡跡能松地区位置図（1/5,000）

調査に至る経緯

当該地（高岡市伏木古府2丁目207番地）は、土塁状の高まりの上に住宅建物があり、周囲に土塁や堀状の窪地がある広い宅地であった。平成17～18年に土塁等を切り崩して11区画の宅地造成を行う工事計画がもち上がった。その後能松豊氏・能松富士子氏が取得され、現地形を活かした住宅地整備を行うこととなり、遺跡の破壊が極めて限られた工事内容と変わった。能松氏及び建築設計の雅風建築工房との協議を経て、当該地の重要性を窺って調査地区全体の遺跡確認を目的とする試掘調査を実施するに至った。

調査経過

試掘調査は平成19年5月18日に着手した。第2～6トレンチは堀址の構造、第7トレンチは主郭内部の状態、第9～11トレンチは土塁・堀址の構造を把握することを調査目的として、各地点における現況に即して試掘トレンチを設定した。その結果、第9トレンチ及び第1トレンチにおいて、新たな郭が確認されたほか、それと併行して東西に走行する堀址が検出された。これらの成果を踏まえ、9月8・9日には現地説明会を開催し、2日間の来場者数は約500人であった。現地作業は10月3日に終了した。

基本層序

第Ⅰ層から第Ⅴ層までを確認している。第Ⅰ層（表土）、第Ⅱ層（黒色土）、第Ⅲ層（黄褐色粘質土）、第Ⅳ層（灰白色粘質土）、第Ⅴ層（灰白色砂質土）である。第Ⅱ層は古代の遺物包含層である。近代の粘土探掘坑は第Ⅳ層の探掘を意図したものと考えられる。

検出遺構

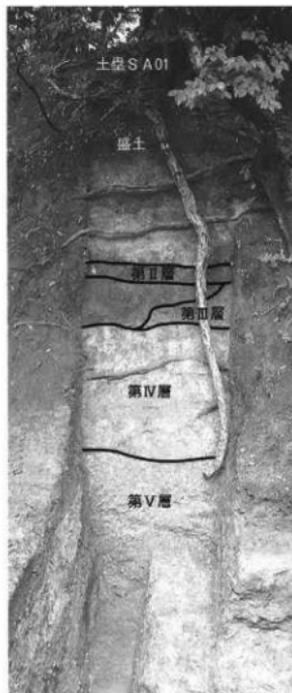
検出遺構は次のとおりである。

- 土塁2条（S A01・02）
- 堀址4条（S D01～04）
- 竪穴建物址3軒（S I01～03）
- 横址1条（S A03）
- 土坑5基（S K01～05）
- 溝5条（S D05～09）
- 瓦溜り1基（S U01）
- 整地層1基（S M01）
- 粘土探掘坑3基（S X01～03）
- 防空壕2基（S X04・05）
- ピット80個

出土遺物

出土遺物は次のとおりである。

- 土器類：縄文土器、土師器、須恵器
灰釉陶器、緑釉陶器、陶磁器
- 瓦：古代瓦、近世瓦、近代瓦
- 土製品：獸脚・土錘
- 鉄製品：釘
- 石器：打製石斧・台石
- 石製品：白玉・砥石・茶臼
- その他：鍛冶関連遺物、黒曜石剥片



第4回 越中国府間連絡跡能松地区
基本層序（第11トレンチ、北から）

Ⅱ 遺 構

調査地区内には中世の城郭遺構があり、土塁と堀趾に囲まれた主郭及び腰曲輪の存在が判明している。主郭内には戦国時代の竪穴建物址や土坑、整地層などが検出された。戦国時代の遺構に切られる、あるいは土塁の下で検出される遺構は、概ね飛鳥～平安時代のもので、横埴・土坑・溝・瓦溜りがある。

1. 土塁

土塁 SA01

主郭に伴う土塁である。主郭の北辺と、東辺及び西辺の一部を検出した。土塁の外側には堀趾 S D01 が廻る。この土塁については、『加賀藩年寄役前田土佐守家文書』所収の「古国府門前地及び周辺村々絵図」に四周完結の土居構えとして描かれていたが、昭和30年代頃までに東辺・西辺・南辺ともに土塁と堀趾のほとんどが消滅したとされる。西辺は、宅地を挟んだ南部にわずかな痕跡を留めている。同絵図では東辺と西辺に開口部があり、現況と一致している。土塁の北東隅は丸みを帯びた形状である。土塁に囲まれた主郭は南北70m以上、東西50mの規模となる。

土塁の幅は、旧地表面（第Ⅱ層上面）で8.6mを測り、頂部では北辺中央部が4.8mと広く、他は2.5m以下である。土塁頂部の標高は、北辺西部及び東部で21.00m（旧地表面からの高さ2.2m）、北辺中央部で20.25m（同1.45m）を測る。土塁外側の斜面には幅20m～30m、長さ20m～40m規模の溝状の窪地が複数あり、樹木痕なし防空壕の痕跡とみられ、調査では防空壕2基を検出している。表土が薄い部分を精査したところ、東辺の南部で集石 SA01-S S01 が、北辺の東部で中世土師器の集積 SA01-S S U01 が検出された。第10トレンチでは土塁上で瀬戸美濃天日碗（1602）が出土した。

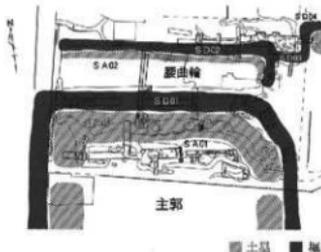
土塁の一部を掘削したのは第7・9・10トレンチである。第9トレンチでは土塁外側下部の構築状況が観察された（図面11）。旧地表面から高さ85cm付近までは第Ⅱ・Ⅲ層を、その上70cmには第Ⅳ層を主体的に盛土しており、その上は未掘削だが、第10トレンチから類推すれば第Ⅴ層を盛っていると考えられる。すなわち堀の掘削土を盛ることによって基本層序の逆転がみられる。各層の堆積状況から、土塁外側を起点に層厚5～10cmで版築状に盛土されている。第10トレンチでは土塁頂部の構築状況が判明した（図面16）。旧地表から高さ20mに達した地点で幅3.6mの平坦面を作り出している。この段階の土塁上部には第Ⅴ層が主体的に使われている。平坦面の上に再び第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の順に版築されるが、盛土の起点は前述とは逆の土塁内側となっている。最終的に土塁表面を第Ⅴ層で覆うのは、第Ⅴ層が砂礫を含み、硬く締まりやすいという特性による選択と考えられる。

土塁 SA01上の集石 SA01-S S01

主郭東辺の土塁南端部付近、標高21.00mの位置で検出された集石である。長さ10cm前後の川原石23個を、長軸60cm、短軸30cmの楕円形の範囲内に置いた状態である。長軸方位はN-50°-Wを示す。下部は未掘削である。

土塁 SA01上の遺物集積 SA01-S S U01

主郭北辺の土塁上、中央部やや東寄りで中世土師器が

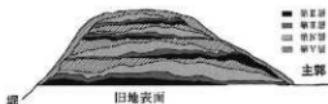


第5図 越中国府間連絡道跡能松地区城郭遺構概略図（1/1,600）

集中して出土した。倒木ないし防空壕の痕跡と考えられる土塁上の窪みが北東側に接し、その壁面を精査していたところ、表土下から土師器と川原石が出土したものである。土師器は皿に限られ、東西3.5m、南北20mの範囲内から20個体以上が細かく破砕された状態で出土した。油煙の付着はみられない。

土塁 SA02

第9トレンチで検出された腰曲輪の北辺に位置する土塁である。北側には堀址 S D02が並走している。現状では住宅の庭であり、土塁頂部を削平した土で曲輪を埋め立てていたため、これまで存在を確認できていなかった。腰曲輪の規模は南北6.2m、東西60m前後と推定されるが、東辺及び西辺の土塁の検出は行っていないために確定はできない。土塁は、頂部と南北の斜面ともに後世の削平を受けているため、基部を検出しただけである。幅は旧地表面で4.8mを測る。高さは76cm残存するが、少なくとも2.0mはあったものと考えられる。残存する土塁下部は、主郭の土塁と同様に、堀址 S D02に近い北側が盛土の起点となる点や第Ⅱ層～第Ⅴ層の堆積の逆転から、堀址 S D02の掘削土を盛ったと考えられる。



第6図 越中国府関連遺跡松地区
土塁 SA01の断面想定図

2. 堀址

堀址 S D01

主郭の土塁 SA01の周囲を廻る堀址である。第2～6・9・11トレンチで検出され、主郭の北辺と東辺にあたる。北側には腰曲輪が存在する。長さは北辺で約75m、東辺で約25mである。第2～6トレンチは近代の瓦を包含する層までの掘削に止め、第9・11トレンチにおいて堀の底面まで調査を行った。

第9トレンチによれば、堀の幅は旧地表面で9.3mを測る。断面形は箱堀で、深さは3.7m、底面の幅は4.2mである。第11トレンチにおいても同規模である。堀の斜面は、第11トレンチでは底面から高さ1.7mまでの下部が69°の急角度で立ち上がり、上部では57°やや緩やかになる。第9トレンチでも同じ高さで傾斜変化がみられるが、この標高は基本層序第Ⅳ層と第Ⅴ層の境界と一致している。微細にみれば、第Ⅲ層と第Ⅳ層の境界にもわずかな傾斜変化が認められることから、堀の掘削が層位ごとに行われた可能性を示している。土塁構築土にみられた基本層序の逆転と整合するものである。第11トレンチでは、主郭側の傾斜変化地点に幅20cmの犬走り状の平坦面が存在するが、第9トレンチではみられない。犬走り状の平坦面は、第Ⅴ層を掘削する際の足場として一部で掘り残されたものと考えられる。

堀の覆土はレンズ状堆積を示し、上層と下層に分けられる。上層は近代の瓦廃棄を契機に開始される人為的な堆積土である。下層は中世から近世にかけての自然堆積土である。下層については、第9トレンチで主郭側、腰曲輪側双方から均等に埋没しているのに対し、第11トレンチでは主郭側の埋没が早い。これは第11トレンチ付近の主郭の土塁が他所より75cmほど低くなっていることから、土塁の崩落によるものと理解される。底面標高は第9トレンチが第11トレンチより約50cm低くなっている。第4～6トレンチにおいては、下層の最終段階の堆積土（第4・第6トレンチ22層、第5トレンチ11層）に古代の瓦が多く含まれる。

堀の中央部では、底面から高さ20cm～35cmほどで上層の堆積が始まる。上層の最初の堆積土は、近代の瓦を含む黒色土である（第9トレンチ29層、第11トレンチ14層）。この黒色土は灰を特徴的に含むことで他の黒色土との区別が容易であり、近代とそれ以前を区切る鍵層となる。第7トレンチ西側に存在する粘土採掘坑 S X01の底面にも同じ黒色土があり（図面17の32層）、粘土採掘と堀の上層堆積開始の時期が一致するこ

とを示している。近代に開始される瓦生産に伴い、不良品などを堀の中へ廃棄したものと考えられる。瓦の廃棄は第4・6トレンチで顕著である。第4トレンチの黒色土(21層)からは、多量の素焼き瓦、少量の釉薬瓦及び礎石状の竈田石が折り重なって出土した。第6トレンチの黒色土(21層)では瓦のほか、関西系の灰釉鉢(1705)などの土器も確認された。第4トレンチでは、瓦の廃棄後に厚さ60cmに及ぶ、第IV層・第V層を主体とした土が堆積しているが、他のトレンチではみられない堆積土である。これに関連して、土塁北東隅が不整形に細まり、堀と乖離する状況がみられる。おそらく土塁外側を崩した土で第4トレンチ付近が埋められたものと考えられる。粘土採掘坑や防空壕などの、近現代の土地利用に関係したものであろう。

堀址S D02A・S D02B

第9トレンチで検出された腰曲輪の土塁S A02の北側で、東西方向に延びる堀址S D02が確認された。S D02は第9トレンチから第1トレンチへ40mほど東進し、その後南へ折れてすぐに二股に分岐する。一方はそのまま南進し、第12トレンチで検出され、もう一方は東へ進む(S D03)。S D02の第9トレンチ以西の状況は明らかではないが、第12トレンチ以南は主郭の堀址S D01の北東隅へ合流すると考えられる。

S D02は第1トレンチC地点にて底面までの調査を行った。土層断面で一度の掘り直しが認められたことから、掘り直し前をS D02A、掘り直し後をS D02Bとした。一部を粘土採掘坑に壊されているが、S D02Aの幅は旧地表面で4.3mと推定され、断面形は箱堀である。深さ2.2m、底面幅2.2mを測り、斜面の立ち上がりは概ね52°である。底面標高は16.15mで、第11トレンチにおける主郭の堀址より1.35m浅くなっている。S D02Bは幅約4.0m、深さ2.0mの規模であるが、断面形は不整形な箱堀である。S D02Aの覆土にはほとんど礫が含まれないのに対し、S D02Bの場合には多量に含まれている。第9トレンチや第12トレンチにおいてもS D02Bの覆土が検出されている。掘り直しは第1トレンチD地点でも認められ、D地点での堀の深さはS D02Aが2.2m、S D02Bが1.7mを測る。S D02Bの最終埋没土(図面12の18層、図面13の5層)は、第IV層と第V層の混土であることから、腰曲輪の土塁を崩したものと推測される。

堀址S D03A・S D03B

S D03はS D02から東へ分岐した堀址である。第1トレンチD地点と第13トレンチで検出された。S D02と同様に掘り直しが認められることから、掘り直し前をS D03A、掘り直し後をS D03Bとした。それぞれS D02A、S D02Bに対応している。幅は4.5mを測るが、断面形状と底面幅は不明である。深さはS D02より浅く、S D03Aで1.7m、S D03Bで1.1mを測る。S D03Aの底面標高は16.60mである。掘り直しの前後における礫の混入率はS D02と同様であるが、S D03Bの埋没はS D02Bよりも早い。S D03は第1トレンチE地点の堀址S D04に連結する可能性が考えられる。

堀址S D04

第1トレンチ東端のE地点で検出された、南北に走向する堀址である。過去の調査で、第1トレンチ東方には東西に延びる土塁とその北側に堀址が確認されており、S D01の北側はその堀址に連なる可能性が考えられる。幅は第三層上面で3.0mである。断面形は箱堀を呈し、深さ1.6m、底面幅40cmを測る。土塁と接する東斜面の傾斜は概ね55°、西斜面は上部で25°、下部で54°である。底面標高は15.9mで、S D02-03より深い。底面付近から土師器皿(1418・1423・1425)が出土している。埋没が早く、近世以降の遺物は出土していない。



第7図 越中国府間遺跡能松地区
堀址・土塁の断面比較(1/250)

3. 竪穴建物址

竪穴建物址 S I 01

第7トレンチの東側に位置する。東西6.4m以上、南北2.0m以上の長方形と推定される。深さは西部で53cmである。南壁の方位はN-72°-Eを示す。中央から東部にかけては周溝状の溝が廻り、幅45cm~66cm、深さ10cm~18cmを測る。溝に囲まれた部分の深さは西部より10cm高い。土層堆積や遺物の出土状況からは、溝に囲まれた部分と西部とが同一の遺構であると判断される。底面付近の覆土(10・15・16層)には炭化物が多く含まれ、鍛冶関連遺物(鍛造剥片)や土師器皿(1401など)、犬目碗(1603)が出土した。S I 01は第7トレンチで検出された整地層S M01を切っているが、S M01と同質の土(3・4層)で埋没しており、遺構の埋め戻しに際し、整地層の復旧が図られたと考えられる。

竪穴建物址 S I 02

第7トレンチの東側に位置する。上部には礫を落とし入れた現代の土坑が重複し、その土坑上面には小石の集石がみられた。S I 02は東西3.50m、南北1.20m以上の長方形と推定され、深さは28cmである。西壁の方位はN-6°-Eを示す。覆土下層には炭化物が多く含まれていた。東西隅の底面には、小礫を伴った明瞭な炭化物の堆積範囲が検出され、周辺の土からは鍛冶関連遺物(鍛造剥片)が出た。また覆土中層以下(2・3層)からは土師器皿(1409など)が多く出土した。覆土上層(1層)は整地層であり、その切り合いからS I 02がS I 01より古いことが分かる。

竪穴建物址 S I 03

第7トレンチの中央部に位置し、S K04を切っている。東西5.24m、南北2.26m以上の長方形と推定され、深さは32cmである。東壁の方位はN-6°-Eを示す。覆土下層は礫を多く含むが、土器は出土しない。覆土上層からは中世の在地産土師器鉢(1501)・碗(1503)、龍泉窯青磁碗(1601)、越前焼、瀬戸灰染鉄泥甗鉢が少量出土した。鍛冶関連遺物は出土していない。

4. 柵址

柵址 S A03

第7トレンチの東部に位置し、整地層下から検出された柱穴列である。N-84°-Wの方向に3基の柱穴が並ぶが、調査区域外に拡がって掘立柱建物址になる可能性もある。柱穴は60cm~70cm四方の方形基調である。柱間距離は1.70mである。未掘削のために深さ等は不明である。時期は古代と考えられる。

5. 土坑

土坑 S K01

第7トレンチの東端部に位置し、整地層S M01で検出された。東西70cm以上、南北50cm以上の楕円形ないし隅丸長方形を呈すると推定され、深さ42cmである。土坑底面から側面には厚さ10cmの灰褐色粘土(3層)が充填されている。その上には平瓦ないし丸瓦の比較的大型の破片が厚さ22cmほど乱雑に積み重ねられ(2層)、側面上部には、凸面を内側に向けて立て掛けられた丸瓦の破片がほぼ全周していた。この丸瓦は2個体分に接合している。土坑の中心には須恵器杯(1303)が正位の状態で置かれ、その上をバラス状に砕か

れた瓦の小片（1層）が高さ20cmまで覆っていた。出土した瓦は白鳳時代、奈良時代の両者を含んでいる。

土坑S K02・03

第9トレンチの南端部に位置し、土塁S A01の下から検出された。S K02は長径120cm、短径65cmの隅丸長方形と推定され、南西部は防空壕S X04に壊されている。北東部を掘削したところ、深さ48cmであったが、さらに下から深さ62cmの土坑S K03が検出された。S K02の覆土は、下部では第Ⅱ層～第Ⅳ層の互層をなし、上部は鍛冶関連遺物（鍛造剥片・粒状滓・筒形滓・炉滓）、炭化物、土師器杯（1238・1240）、須恵器杯（1312・1325）、瓦（白鳳時代・奈良時代）、土錘（3104）、鉄釘（3201～3205）を含んでいた。鍛冶関連遺物や鉄釘はS K02の南側にも分布しており、平安時代において、周辺での鍛冶遺構の存在が想定される。

土坑S K04

第7トレンチの中央部に位置し、竪穴建物址S I03に切られる。東西88cm、南北74cmの隅丸長方形を呈するが、未掘削のため深さ等は不明である。確認面の中央部から土師器皿（1449）が正位で出土している。

土坑S K05

第1トレンチの東部に位置する。南北168cm、東西70cmの隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-10°-Wを示す。未掘削のために深さ等は不明であるが、土師器高杯（1201）が確認面で出土している。

6. 溝

溝S D05

第1トレンチの東部に位置する。N-4°-Eの方向に直線的に走向し、南端は腰曲輪の堀址S D02に切られている。幅は64cmから88cmを測るが、未掘削のために深さ等は不明である。確認面において、土師器甕、須恵器杯、朱の付着した灰釉陶器碗（1349）などが出土している。

溝S D06

第9トレンチの中央部に位置する。主部の堀に切られるために残存状態がよくないが、N-83°-Wの方向に直線的に走向すると思われる。幅は36cmから84cmである。西端の試掘によると深さは85cmほどであるが、樹木の擾乱により断面形は乱れている。確認面からは白鳳時代と奈良時代の瓦が出土している。

溝S D07

第1トレンチの東部に位置し、N-15°-Eの方向に直線的に走向する。幅は88cmから96cmを測り、北端の試掘によると、深さは24cmである。

溝S D08

第7トレンチの東部に位置し、中世の整地層S M01を切っている。幅20cmから36cmで、菱形のプランに全周すると推定される。未掘削のために深さ等は不明である。遺物は出土していない。

溝S D09

第7トレンチ中央部に位置する。幅75cmから95cmで、南北方向に直線的に走向する。溝の底面が遺存するだけであったが、覆土には小石が多く含まれていた。土師器皿（1439）や鉄滓などが出土している。

7. 瓦溜り

瓦溜りSU01

第7トレンチの中央部に位置する。北から南西方向へL字状に折れるプランを示している。北部で幅2.04m、南部で幅3.78mを測る。完掘していないために深さ等は不明であるが、確認面から深さ10cmまでに奈良時代を主体とした多量の瓦、少量の上師器杯(1215)、須恵器鉢・甕(1342・1344)が含まれていた。

8. 整地層

整地層SM01

第7トレンチにて、東端部から西へ約13mの間で検出された整地層である。第7トレンチ東部は、西部に比べ最大で30cmほど低い旧地形を示すことから、旧地表面の平坦化を意図したものと考えられる。整地層は、旧地表面である第II層の上に第IV層と第V層の混土を10cmから15cmの厚さで盛ったもので、表面は硬化している。整地層下で古代の横址SA03や土坑SK01が検出された。竪穴建物址S I01は整地層を切っているが、廃棄に際して整地層の復旧がなされている。整地層にV層が含まれることから、堀や土塁の構築と整地が一体のものであった可能性が考えられる。

9. 粘土採掘坑

調査地区内には、幕末～明治時代の瓦生産に関わる粘土採掘坑群が3箇所が存在する(SX01～03)。採掘される土層は第III層及び第IV層である。第7トレンチSX01などから、幅2.2m、長さ4.0mの楕円形ないし隅丸長方形を最小単位とした採掘坑が連続して並んで一つの群を形成している。採掘坑内には、瓦に不要な第II層を主体とした土が堆積し、不要な瓦も廃棄されていた。SX01では、第7トレンチ東部で礎石状の礎田石が出土したほか、第7トレンチ西部では採掘坑の埋没後に岩崎石の礎石が置かれていた(図面03)。

10. 防空壕

防空壕SX04

第9トレンチで検出された。主郭の土塁SA01の北側斜面を掘り込んだもので、天井は既に落下し、窪地として現存していた。幅60cmの入り口部分を奥行き1.60mまで掘削し、底面で柱穴と浅い溝を検出した。

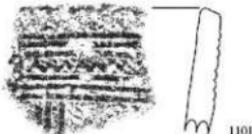
防空壕SX05

第7トレンチで検出された。主郭の土塁SA01の西側斜面を南側から掘り込んでいることから、土塁がこの地点で途切れていたことを示している。入り口は幅90cmを測り、天井である第III層が落下していた。

Ⅲ 遺 物

1. 縄文土器

1101（第8図）は第1トレンチで出土した縄文時代前期末葉～中期初頭の深鉢である。口縁は平口縁で、地紋に単節LRを施文する。上下3条の結節浮線による横位区画を施し、区画内には鋸歯状の浮線を施文する。胴部は縦位の結節浮線を施文する。



第8図 越中国府関連遺跡能松地区
縄文土器実測図（1/2）

2. 古代の土器類

土師器

図面43・44-1201～1259。1201～1204は飛鳥時代の高杯である。1201は外面に赤彩を施す。1205は蓋である。1206～1253は平安時代後期の杯・皿で、1206～1211は杯、1212～1241は杯ないし皿、1242～1253は皿である。全てロクロ成形で、底部は右回転糸切り未調整である。1240・1241は高台付、1246～1253は柱状高台を呈する。赤彩は1206・1225・1237、内黒処理は1240に施される。1207・1209・1210・1212・1220・1222・1223・1226・1231は漆容器、1208・1214・1219・1233・1236は灯明具として使用されている。1254～1258は飛鳥時代の壺底部と甕口縁部である。1259は奈良平安時代の鍋で外面カキ目調整である。

須恵器

図面45・46-1301～1348。奈良平安時代を主体とする須恵器である。1301～1309は杯Aである。口径は13.3cm～12.0cmで、底部はヘラ切りである。底部内面にナデを施すのは、SK01で出土した1303である。1307には油煙の痕跡がある。1310～1321は杯Bである。口径は12.4cm～11.1cmで、底部はヘラ切りである。底部内面に同一方向のナデを施すのは1311・1313・1315～1318、不定方向のナデを施すのは1314である。1310には焼成前のヘラ書き、1318には焼成後の刻書がみられる。1314は転用硯と考えられる。1318・1321は高台に自然軸がみられ、逆位で焼成されたものである。1322～1325は杯Aないし杯Bの口縁部である。口径は16.4cm～11.8cmである。

1326～1341は杯壺である。口径は16.6cm～11.4cmで、宝珠形つまみが付く。1326～1328は口縁部内面にかえりが付く、飛鳥時代のものである。天井部をヘラ削り調整するのは1329・1332・1333・1334・1336である。内面にナデを施すのは1329・1332・1340・1341である。1331は天井外面に2条の沈線を施している。1334は内面に油煙が付着している。

1342～1348は鉢・甕・壺・瓶である。1342・1343は鉢の口縁部で、1343は外面にカキ目調整がみられる。1344は甕の口頸部、1345は肩部に4個ないし5個の副口縁を有する多口瓶である。1346～1348は壺ないし瓶の胴下底部である。

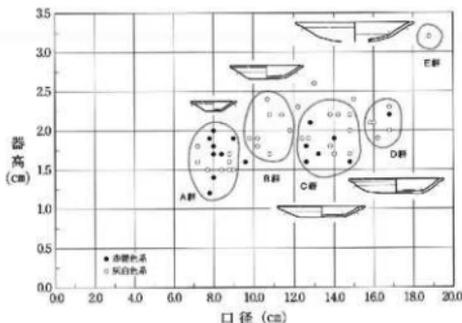
古代施釉陶器

図面44-1349～1351。1349は灰軸陶器碗で、底部内面に朱が付着している。1350は緑軸陶器皿である。いずれも9世紀後半のものである。1351は中国製白磁碗で、11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

3. 中世の土器類

土師器皿

図面47・48-1401-1482。戦国時代の土師器皿である。S I 01・02, S D 04, S K 04, S A 01-S S U 01などで出土している。全て非ロクロの手づくね成形である。口縁部は大きく外反し、端部をつまみ上げたような形状になるものが大多数である。底部は平底である。1449は器壁が厚く、口縁部の外反も弱くやや異質である。成形は粘土紐の巻き上げによっており、巻き上げ痕の方向は1427・1430・1436・1457で右回り、1432で左回りである。粘土紐の幅は小型品の1457で0.5cm、他は1.5cm前後である。口径は7.2cm～18.8cmと多様であり、A群（7.2cm～9.0cm）、B群（9.6cm～11.8cm）、C群（12.2cm～14.8cm）、D群（15.8cm～17.0cm）、E群（18.8cm）に分類される（第9図）。特大のE群は1401の1点のみと例外的であり、A群からD群の4法量が主体的である。土師器の色調には赤褐色系と灰白色系の2種が存在し、赤褐色系はA群とC群に偏りがあるが、灰白色系は法量の偏りは認められない。器高は2.0cmを境に大小があり、C群では灰白色系が赤褐色系の器高を上回る傾向が認められる。外面の調整は、口縁部には1段のナアが、体部から底部には指圧ないしナアが施される。内面の調整は、底部を一定方向にナアたあとに、口縁部・体部の順に右回りの横ナアを施す。体部のナア上げ技法は2種あり、体部から口縁部へと斜めにナア抜く「の」字状ナアがA群にみられる。それと反対方向へナア抜く、逆「く」字状がB群・C群にみられる（図版33）。体部ナアの結果、底部周縁に圏線を生じるものがある。油煙付着の皿はA群～C群にみられるが、D群・E群にはみられない。



第9図 越中国府関連遺跡能松地区 中世土師器皿法量分布

	A群	B群	C群	D群	E群
S I 01	1480, 1485, 1479, 1483, 1459	1480, 1481, 1482, 1483, 1484	1444, 1440, 1441, 1411	1410, 1403	1401
S I 02	1462, 1470, 1461, 1462, 1478, 1456, 1494		1433, 1432, 1413, 1431	1409	
S A 01 S S U 01	1471, 1471, 1469, 1473, 1472, 1467, 1475, 1483, 1462	1453			
S D 04		1425, 1421	1418		
S K 04		1449			

第10図 越中国府関連遺跡能松地区 中世土師器皿の瀬川別法量構成（1/8）

土師器碗・鉢

図面49-1501~1503。皿以外の土師器である。いずれも在地産と考えられる。S I 03から出土した1501・1503はそれぞれ摺ね鉢の口縁部、碗の底部である。1502は鉢の底部で、室町時代のものである。

陶磁器

図面49-1601~1603。1601は15世紀代の龍泉窯青磁碗で、S I 03出土である。1602・1603はそれぞれ、第10トレンチの上皿S A 01上、S I 01から出土した瀬戸美濃系の日皿碗である。1602は16世紀代、1603は16世紀後半と考えられる。

4. 近世の陶磁器類

図面49-1701~1707。1701は第7トレンチ出土の在地産火鉢である。1702は表探の在地産灰釉皿である。1703は18世紀末~19世紀前半の肥前染付益台、1704は第1トレンチで出土した19世紀代の瀬戸美濃系白濁釉鉢である。1705は第6トレンチ内のS D 01で出土した関西系の灰釉鉢で、19世紀代のものである。1706は関西ないし在地産の軟質施釉陶器碗、1707はS D 01から出土した関西ないし在地産の獅子形香炉で、ともに18~19世紀代のものである。

5. 白鳳時代の瓦

7世紀中葉以降の白鳳時代に比定されている、いわゆる御亭角庵寺所用瓦である。この時期の瓦は、堀址S D 01、土坑S K 01・02、溝S D 06、瓦溜りS U 01などから出土しているが、いずれも奈良時代の瓦と混在した出土状態である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅平瓦、甍斗瓦を確認している。成形は、凹面に横骨痕、糸切り痕、分割界線、分割裁線、粘土の合せ目(2119など)等が確認され、粘土板巻きつけ桶巻作りが主体である。一部に粘土板巻き上げ桶巻作りがみられる。瓦の焼成は、灰色を呈し、一部に自然釉を伴う硬質のI類と、白色系で軟質のII類に区別される。軒平瓦・平瓦の凸面にみられる叩きの分類は、西井龍儀氏の分類(西井1983)に従っている。凹面の布目の経緯本数は、3cmの方形区画内で23~33×32~39本で網布である。

軒丸瓦

図面50-2101~2103。2型式の瓦当各1点と丸瓦との接合部1点がある。2101(第7トレンチ)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦(素文緑花弁端円形)の瓦当下部である。瓦当の側面はヘラ削り、表面は平行叩きが残る。2102(S X 01)は素弁八葉蓮華文軒丸瓦(素文緑有稜線花弁端尖形反転)である。2103(S K 01)の丸瓦広端部は、面取り後に先端に刻みを施している。焼成は2101・2103がI類、2102がII類である。

軒平瓦

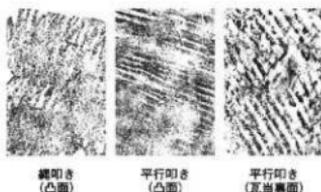
図面51-2104~2107。2104~2106は三重弧文軒平瓦で、平瓦の端面下部に粘土板を貼り付けて段額を作り出す。段額には4条の沈線が施文される。2104は段額幅7.5cmで、凸面はA 2叩きである。2107は四重弧文軒平瓦で段額が剥離している。2107は粘土板巻き上げ痕が残る。焼成は2104・2107がI類、2105・2106がII類である。2105は第6トレンチ、2106は第7トレンチ、他は表探である。

丸瓦

図面52-55-2108~2138。丸瓦には玉縁式と行基式とがある。2131~2134は玉縁式丸瓦である。2135~2138は胎土・焼成・調整等の類似から、その同一個体と考えられる副部片である。焼成はI類で、降灰ない

し自然軸が顕著である。玉縁式丸瓦は、胴部から玉縁部を連続した粘土で成形し、肩部に補助粘土を貼り付ける手法である。玉縁部の断面はほぼ直角に折れ曲がっている。側縁は面取りされる。凹面は布目痕が残り、引き紐痕がみられるものがある（2137など）。凸面は縄叩き後に横方向のナデを施す。

2108～2130は行基式丸瓦である。法量に分かる2108（SK01）は全長40cm強、広端面径18cmである。側縁は面取りされ、凹面は布目と糸切り痕が残る。凸面は縦方向のケズリ後、板状具によるナデを横方向に施す。行基式丸瓦の焼成はⅠ類が多い。凹面は布目痕を残し、凸面の調整はケズリないしナデがある。ケズリはⅠ類にのみ施され、ケズリの方向は縦である（2117・2119など）。凹面の広端面側ないし狭端面側に幅1cm前後のケズリを施すものがある（2111・2117など）。2109・2113の凹面には分割界線がみられる。凸面をナデ調整するものなかには、ナデの下に平行叩きが残るものがある（2127～2130）。焼成は2128・2129がⅠ類、2127・2130がⅡ類である。



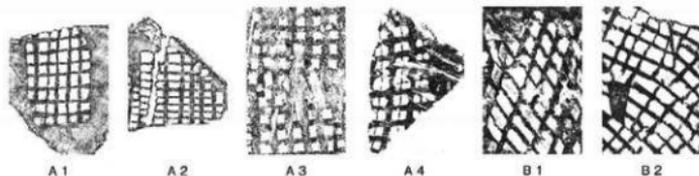
第11図 越中国府関連遺跡能松地区
白鳳時代の丸瓦叩き分類（1/2）

平瓦・隅平瓦・鬘斗瓦

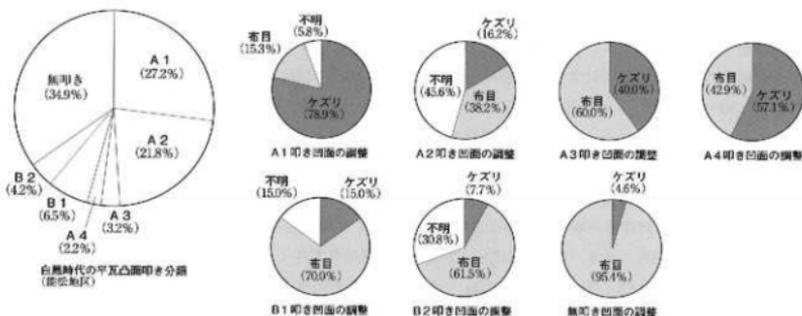
図面56～60-2139～2185。2164は隅平瓦、2172は隅切瓦、2173は鬘斗瓦、その他は平瓦である。2174は平瓦の加工円盤である。平瓦の凸面には格子叩きのあるものと、無いものがある。格子叩きは、叩き板の側縁に平行ないし直交するA類と、側縁に斜交するB類があり、叩き目の特徴から以下のように細分されている（A1～A4、B1～B3）。今回、B3は出土しなかった。

- A1 格子列は縦7列、横9列。縦長の格子で刻線に歪みがある。左から1列目と2列目の間隔が広い。
- A2 格子列は縦8列、横14列。横長の格子で刻線は整然とするが、縦中央2列は小さな方形である。
- A3 格子列は縦4列以上、横9列以上。方形の格子で刻線は整然とするが、刻線の間隔が広い。
- A4 格子列は縦4列以上、横7列以上。横長の格子の中央に縦方向の浅い刻線が入る。
- B1 菱形と横長の平行四辺形が組み合わさった斜格子である。
- B2 方形と長方形が組み合わさった格子である。
- B3 平行四辺形をみの斜格子である。

A1・A2と無叩きが白鳳時代の平瓦の83.9%を占めて主体的である。A類は叩きの間隔が粗いが、B類は凸面全体に施される。凹面は布目痕を残すものと、縦方向のケズリで布目を消すものがある。第13図に示したように、ケズリを施す割合はA1では78.9%と高く、A2の16.2%と対照的である。無叩きの4.6%にみられるケズリが、A1などの破片である可能性を考慮すれば、無叩きで凹面にケズリを施すものはほとんどないといえる。側縁は面取りされるが、凹面の広端面側ないし狭端面側に幅1cm前後で横方向のケズリを施すものがある（2144など）。無叩きの2182・2183では、狭端面の面取りがみられる。A1・A2の端面に



第12図 越中国府関連遺跡能松地区 白鳳時代の平瓦凸面格子叩き分類（1/4）



第13図 越中国府関連遺跡能松地区 白鳳時代の平瓦凸面叩きと凹面の調整

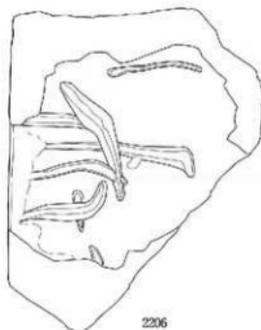
は、乾燥時に付いたと思われる蕨状圧痕が残るものがあるが(2139・2140・2142・2144・2148)、大部分はその後のヘラ削り調整によって消される。2166は粘土の剥離面にもB2叩きがあり、粘土板の補充が行われる場合があることを示している。2142の凸面にはA1叩き後の縄圧痕が、2149の凹面にはヘラ書きがみられる。2168～2170は広端側に釘穴をもつ。2172は隅切瓦で、広端面側の隅をケズリによって丸く仕上げている。2177の側面の凹面側には、深さ0.9cmの分割裁線が入り、凸面側は破面を無調整のまま残している。2164(B2)の広端面側は、模骨痕に対して約45°の角度で焼成前に削り落ちており、隅平瓦と考えられる。焼成はI類・II類とも存在するが、A1がI類56%、II類47%であるのに対し、A2ではI類28%、II類72%とII類の多さが指摘される。2175・2180では自然釉が認められる。

6. 奈良時代の瓦

8世紀中葉～後葉に比定される、越中国分寺所用瓦である。出土遺構は白鳳時代と同じであるが、出土量は白鳳時代を上回る。周知の単弁八葉蓮華文軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦は出土しておらず、すべて丸瓦ないし平瓦である。焼成はI類、II類に加えて、赤褐色系で軟質のⅢ類が加わる。II類は白鳳時代に比べ表面が焼された色調となる。布目の経緯本数は、3cmの方形区画内で15～18×21～25本を数え、白鳳時代より粗い布である。

丸瓦

図面61-2201～2206。行基式丸瓦である。玉縁式丸瓦は確認されていない。広端部の残る2205・2206は厚さ3.5cm前後と厚手である。2201では側縁及び広端部凸面側の面取りがみられる。凹面は布目痕、凸面は横方向のナデ調整だが、2201・2203ではナデの下に縄叩き痕が残る。焼成は2205がI類、2203・2204・2206がII類、2201がIII類であり、I類はごく少ない。2206(第6トレンチ)の凹面広端側には焼成後の刻書「寺カ」がみられる。



第14図 越中国府関連遺跡能松地区 文字瓦「寺カ」実測図(1/2)

平瓦

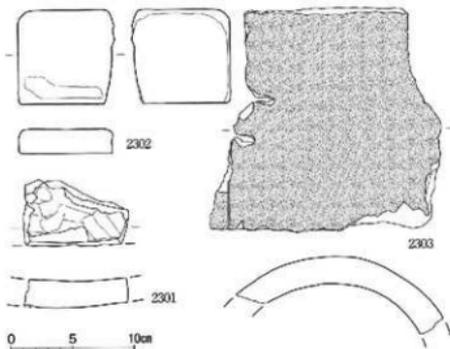
図面62～64・2207～2225。凸型台を使用した一枚作りの平瓦である。凸面は離れ砂を併用した縦位の縄叩きにより叩き締められる。2212・2216・2223では、粘土の剥離面に離れ砂や縄叩きの痕跡が残ることから、複数の粘土板を重ねて成形した場合もあったと考えられる。凹面には糸切り痕がみられるものがあるほか（2207・2212・2222・2223など）、2210では横方向の刷毛状具が施されている。2209は凸面狭端側に指圧痕が顕著に残る。凹面の端面側にケズリを施すのは2207・2209・2221・2223・2225である。側面の面取りは次のように多様である。①成形時の側面を大きく残し、凹面側を面取りする（2208・2221）。②成形時の側面を大きく残し、凹面・凸面を面取りする（2215・2216・2218・2223）。③成形時の側面をわずかに残し、凹面・凸面を面取りする（2211・2212・2217・2220・2225）。④成形時の側面を残さず、凸面を大きく面取りする（2213・2222）。⑤面取り後のナデによって丸く仕上げる（2214）。2216の凹面には鉄器による記号「×」が付けられる。焼成は2207・2208・2209・2214がⅠ類、2216・2222～2225がⅢ類、その他はⅡ類である。



第15図
越中国府関連遺跡
能松地区
奈良時代の平瓦
側面の面取り

7. 近世の瓦

白鳳・奈良時代の古代の瓦以外は、近世・近代の瓦である。近世の瓦は少量である。燻し瓦と軸葉瓦であり、前者は2点、後者は5点出土している。第16図の2301は燻し瓦の小破片である。本瓦葺きの平瓦か棧瓦である。2302は燻し瓦の小型の樽である。平面は1面が平滑にされている。多面は表面が磨滅・剥離している。周縁は塊状にやや膨らむ。2303は軸葉瓦で本瓦葺きの丸瓦である。厚さは24mmで、幅は20cm以上になると推定される。赤茶色の軸葉が凹凸の両面に掛かり、芯部は褐色である。なお燻し瓦は中世末まで遡る可能性もある。



第16図 越中国府関連遺跡能松地区 近世瓦実測図（1/4）

8. 近代の瓦

近代の棧瓦である。素焼き段階で遺棄・廃棄等がなされ出土した未成品と軸葉が掛かる本焼きがなされた完成品の両方がある。

明治時代以降盛んになる伏木の瓦産業は、その開始が江戸時代に遡るものである。大正・昭和時代と多くの瓦工場が伏木台地にみられたが、昭和40年頃には終焉を迎えた。今回出土の近代瓦は当地伏木で生産され

た瓦である。

軒棧瓦

図面65-2401~2408。2401~2404は鎌人唐草文軒棧瓦で素焼き段階の未成品である。全幅は、2401を37.0cm、2402~2404を28.8cmに想定復元した。2405~2408は万十軒瓦で素焼き段階の未成品である。小巴が付き剣重れに模様はない。

棧瓦未成品

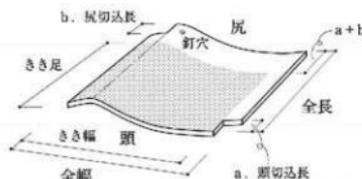
図面66・67-2409~2420。素焼き段階の未成品でほぼ完成品である。明褐色を呈する。頭と尻に切り込みがある切落棧瓦である。2418~2420は裏面の尻の部分に引掛用の突起が付いている。2409~2416は頭の木口部分に丸刻印「作」が付いている。

棧瓦完成品

図面67-2421~2424。本焼きされ、釉薬が掛かっている製品の破片である。2421・2422は頭の切り込み付近の破片である。2421は表面と木口・側縁に赤茶色の釉薬が付く。裏面は無釉である。2422は全体に緑灰色の釉薬が付く。2423は尻付近のみ無釉で他は黒黁色の釉薬である。2424は棧側の破片で全体に黒黁色の釉薬が掛かる。全長は32.5cmとなる。棧瓦未成品2409~2420の全長30.4~31.6cmと比べると一回り大きい瓦である。

特殊瓦

図面65-2425・2426。素焼きされた段階の特殊な瓦である。2425は水返しのような突起が付く。2426は箱型の瓦である。



第17図 棧瓦概念図

番号	図面	種類	全長	全幅	きき足	きき幅	頭切込長	尻切込長	厚さ	特徴等	出土位置
2409	66	素焼瓦	31.5	30.1	23.9	26.1	3.9	3.8	1.7	丸刻印「作」	第4トレンチ
2410	66	素焼瓦	31.2	29.6	23.7	25.6	3.6	3.9	1.6	丸刻印「作」	第4トレンチ
2411	66	素焼瓦	31.0	29.2	23.4	25.5	3.9	3.7	1.7	丸刻印「作」	第4トレンチ
2412	66	素焼瓦	31.1	28.9	23.7	25.7	3.6	3.8	1.6	丸刻印「作」	第4トレンチ
2413	66	素焼瓦	31.2	29.3	23.5	25.6	3.9	3.8	1.7	丸刻印「作」	第4トレンチ
2414	66	素焼瓦	31.3	28.9	23.8	25.4	3.6	3.9	1.7	丸刻印「作」	第4トレンチ
2415	66	素焼瓦	31.6	29.4	23.8	26.0	3.9	3.9	1.7	丸刻印「作」	第4トレンチ
2416	66	素焼瓦	31.2	29.1	23.5	25.7	3.7	4.0	1.5	丸刻印「作」	第4トレンチ
2417	67	素焼瓦	31.5	29.3	23.9	25.8	3.8	3.8	1.75		第4トレンチ
2418	67	素焼瓦	30.4	29.8	22.2	25.7	3.9	4.3	1.5	引掛棧瓦	第4トレンチ
2419	67	素焼瓦	30.8	30.3	22.7	25.9	4.0	4.1	1.6	引掛棧瓦	第4トレンチ
2420	67	素焼瓦	30.8	26.0	22.6	25.9	4.1	4.1	1.6	引掛棧瓦	第4トレンチ
2421	67	本焼瓦	-	-	-	-	-	-	1.8	釉薬=赤褐色、部分施釉	第1トレンチ
2422	67	本焼瓦	-	-	-	-	-	-	1.7	釉薬=緑灰色、部分施釉	S D01
2423	67	本焼瓦	-	-	-	-	-	-	1.6	釉薬=黒黁色、略全面施釉	S X01
2424	67	本焼瓦	32.5	-	-	-	-	4.5	2.0	釉薬=黒黁色、全面施釉	第4トレンチ

第1表 越中国府関連遺跡能松地区 近代棧瓦計測表

9. 土製品

獸脚と土錘がある。図面68-3101はS X01出土の獸脚である。底径2.4cmで、底面に奥行き1.3cmの穿孔がみられる。土師質である。図面68-3102-3104は土錘である。3102は長さ7.4cm、厚さ5.8cm、孔径1.9cmの大型品である。第7トレンチにて粘土採掘坑の埋没土上面から出土した。3103は第9トレンチで出土したもので、長さ5.8cm、厚さ5.1cm、孔径1.7cmを計る。3104はS K02周辺からの出土である。

10. 鉄製品

釘

図面68-3201-3206。3201-3205はS K02と、その周辺から出土した鉄釘である。ほぼ完形の3201は長さ12.7cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm、重さ15.41gである。3202は頭部が残存し、幅1.3cm、厚さ1.2cm、重さ18.42gである。3203は頭部がわずかに残存する。幅1.2cm、厚さ0.9cm、重さ14.58gである。3204は幅1.2cm、厚さ0.9cm、重さ25.37g、3205は幅1.1cm、厚さ0.8cm、重さ12.76gである。3206はS I01出土で、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重さ0.94gである。

鍛冶関連遺物

S I01・02、S K02では、鍛冶に関連した遺物が出土したことから、覆土を採取し水洗いを行った。S I01からは鍛造剥片1.26g、再溶解物12.79gの他、製品の一部と考えられる鉄片0.09gが検出された。S I02からは鍛造剥片0.22g、再溶解物0.59gが検出された。S K02では、鍛造剥片4.64g、再溶解物66.35g、粒状滓3.27g、碗形滓170.85g（5点）、炉壁もしくは鑪羽口の先端と考えられるガラス質化した鉄滓23.51g（4点）、不定形鍛冶滓93.96g（8点）、製品の一部と考えられる鉄片48.00gが検出された。碗形滓は、内面に細かい木炭痕や気泡がみられ、外面には細かい木炭痕とともに、地山の土や小礫が付着している。炉底の形状を窺い知れるだけの資料はないが、概ね断面は半円状を呈する。炉壁もしくは鑪羽口の先端と考えられる鉄滓は、気泡が顕著でガラス質化が著しい。一部ガラス質化していない部分には細かい木炭痕がみられる。

11. 石製品

打製石斧、台石、白玉、砥石、茶臼が各1点出土している（図面69-3301-3305）。3301は第6トレンチ出土の打製石斧である。上部の両側面にえぐりを入れる。残存長15.9cm、幅9.2cm、厚さ3.0cm、重さ387.3gである。3302は第1トレンチ出土の台石である。表面は浅く窪んだ磨面を形成し、裏面は工具による削痕がみられる。長さ13.9cm、幅12.6cm、厚さ4.6cm、重さ755.3gである。3303はS K01出土の白玉である。径3.5mm、厚さ3.0mm、孔径1.3mmである。3304は第9トレンチ出土の砥石である。長さ6.0cm、幅4.5cm、厚さ2.9cm、重さ98.42gである。6面に使用痕がある。3305は茶臼の下臼で、受皿推定径37.0cm前後、えぐり3.3cmである。S D01から出土した。



第18図 越中国府関連遺跡能松地区
白玉写真（2倍）

IV 結 語

今回の調査地区は、古代越中国の国庁跡推定地でもある勝興寺の南西側にあり、小字名から御亭角遺跡と称される地区である。御亭角遺跡は、白鳳時代の寺院「御亭角廃寺」の存在が想定されるとともに、中世の城郭遺構である土塁や堀を今日に伝える遺跡である。遺跡の主な時代と遺構は以下のとおりである。

1. 飛鳥～白鳳時代（御亭角廃寺）：土坑SK05
2. 奈良～平安時代（越中国府）：横址SA03、土坑SK01～03、溝SD05・06、瓦溜りSU01
3. 戦国時代（古国府城）：土塁SA01・02、集石SA01-SSS01、遺物集積SA01-SSU01、
堀址SD01～04、竪穴建物址S101～03、土坑SK04、溝SD09、整地層SM01
4. 江戸時代以降（勝興寺御亭）：粘土探掘坑SX01～03、防空壕SX04・05

御亭角廃寺所用瓦

出土した古代瓦はⅠ～Ⅲ期に分類される（第20図）。御亭角廃寺創建期（Ⅰ期）の軒丸瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦と素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、軒平瓦との組み合わせが不明ながら、A1叩き平瓦、無叩き平瓦、隅切瓦、行基式丸瓦と組み合わせることが、射水市小杉丸山窯の調査で明らかにされている。一方の素弁八葉蓮華文軒丸瓦は、A1叩きと並んで平瓦の多くを占めるA2叩きの平瓦と組み合わせることが想定されている。これまでA2叩き平瓦は、段額施文型式四重弧文軒平瓦と同伴することが知られていたが、段額施文型式三重弧文軒平瓦とも同伴することが判明した。A2叩き平瓦は、A1叩き平瓦に特徴的な凹面のへう削りが省略傾向にあり、焼成も軟質なⅡ類が多数を占めるなど、A1叩き平瓦と同じ創建期瓦でも製作は後出する要素が認められる。ただし、今回出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦(2101)の瓦当裏面、昭和61年度御亭角地区の素弁八葉蓮華文軒丸瓦(201)の丸瓦部凸面には、ともに平行叩きがみられること、A1・A2叩き平瓦ともに端面に席状正痕を残す例があるなどの共通性も指摘され、素弁八葉蓮華文軒丸瓦とA2叩き平瓦も小杉丸山窯と同じ射水丘陵内の窯で生産された可能性が高い。平行叩きは、瓦陶兼業窯で生産された創建期軒丸瓦・丸瓦に特徴的な叩きであるといえる。

A3～B3叩き平瓦、離れ砂を使用しない縄叩き平瓦(2171)と縄叩きの玉緑式丸瓦(2131～2138)は、少量の出土に留まっていることから国分寺造営以前の補修瓦(Ⅱ期)と考えられる。国庁整備の前後と想定される。この時期の県内の瓦窯にみられる平瓦は、7世紀末～8世紀初頭の水見市小窪瓦窯では桶巻作りで凸面は斜格子叩きである。8世紀第2～第3四半期の富山市橋谷南窯では桶巻作りであるが、凸面は縄叩きへと変化している。これに従えば、国庁整備期の御亭角廃寺補修瓦のうち、格子叩き平瓦(Ⅱ1期)は縄叩き平瓦と縄叩き玉緑式丸瓦(Ⅱ2期)に先行するものである。B2叩きの隅平瓦(2164)は、焼成前に隅が削り落されることから、御亭角廃寺が総瓦葺きであって、Ⅱ1期の補修時においてもそれが維持されたことを示すものである。平成3年度下水道地区出土の無額の五重弧文軒平瓦は、凸面に縄叩きがあることからⅡ2期に相当し、重弧文軒平瓦における段額から無額への変化を示している。Ⅱ2期の玉緑式丸瓦は、凹面の断面が直角(2134)から鈍角(2132)へ変化すると想定され、凸面の縄叩きは格子叩きと同様の叩板に縄を巻いたものと考えられる。

越中国分寺が造営される奈良時代後半になると、御亭角遺跡の瓦は平城京の影響を強く受けた国分寺瓦へと変化する



図19 富山県内の「寺」文字資料

		I期 (白鳳期創建瓦)			II期 (國庁整備期補修瓦)			III期 (國分寺遺構補修瓦)
軒丸瓦・丸瓦	御幸角鹿寺所用瓦	單弁八葉蓮華文軒丸瓦	表弁八葉蓮華文軒丸瓦	行基式丸瓦	III-1期 玉縁式丸瓦 (純印瓦) 2134 2132 純印瓦 2135 2136 2137			文字瓦 (寺々) 2306(1-6)
					III-2期 五葉弧文軒平瓦 純印 (純印瓦) 均形唐草文軒平瓦 純印瓦平瓦 覆石砂 2233			
軒平瓦・平瓦	瓦葺方間通資料	三葉弧文軒平瓦 段壁	四葉弧文軒平瓦 段壁	行基式丸瓦	III-1期 A3印瓦平瓦 2156 A4印瓦平瓦 2157 B1印瓦平瓦 2161 B2印瓦平瓦 2164 B3印瓦平瓦 2171(1-6)			均形唐草文軒平瓦 純印瓦平瓦 覆石砂 2233
					III-2期 純印瓦平瓦 2171(1-6)			
瓦葺方間通資料	瓦葺方間通資料	單弁八葉蓮華文軒丸瓦	行基式丸瓦	單弁十葉蓮華文軒丸瓦	單弁八葉蓮華文軒丸瓦	單弁八葉蓮華文軒丸瓦	單弁八葉蓮華文軒丸瓦	

寺号付は能松地区出土瓦

第20圖 越中國庁間通遺跡能松地区 御幸角鹿寺所用瓦と間通資料 (1/12)

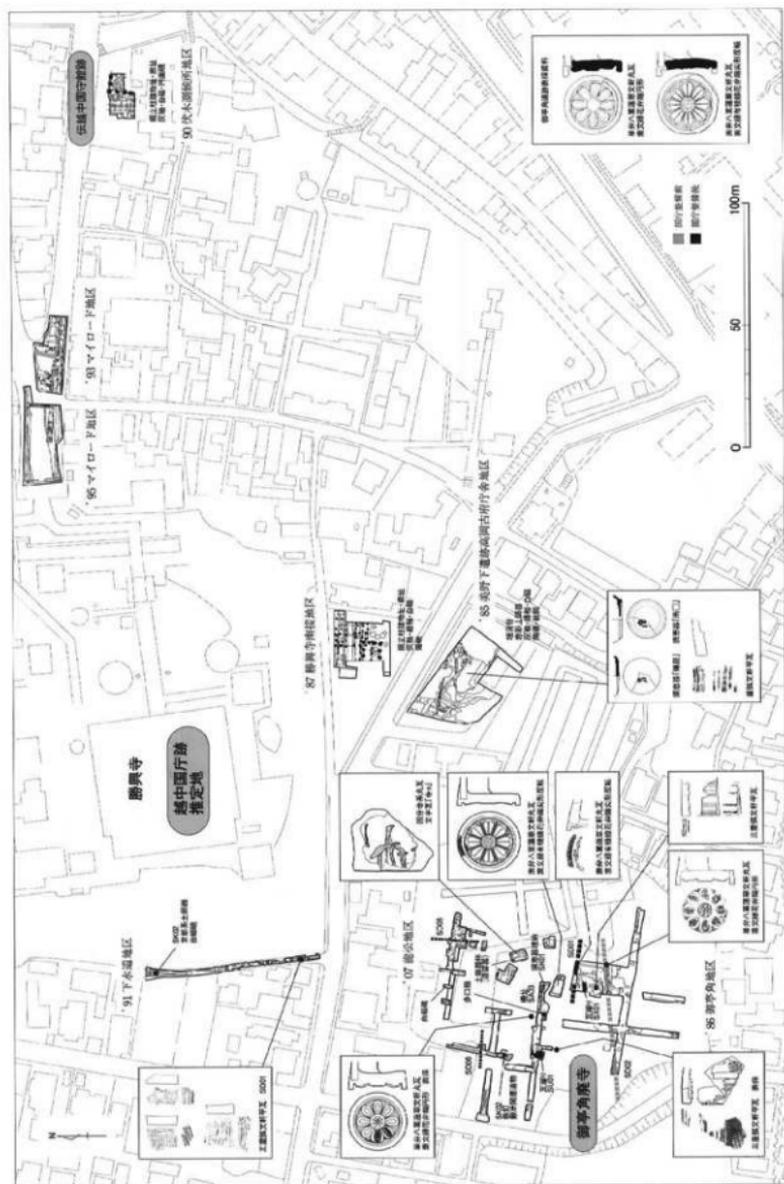
る(Ⅲ期)。大量の平瓦が出土しており、大規模な補修ないし新たな堂宇の建立があったことが推測される。平瓦は成形台を使用した一枚作りで、凸面は離れ砂を併用した縄叩きである。縄叩きは広端から狭端まで縄の条が通り、幅30cm前後の細長い板状の圧痕を伴う。離れ砂は、国分寺瓦に先行する栃谷南窯の軒丸瓦の瓦当面にも部分的に存在してはいたが、縄叩き平瓦の一枚作りと一体的に普及した技法である。第6トレンチ出土の丸瓦(2206)には、焼成後の凹面広端側に文字「寺カ」が刻まれており、供給地を示したものと考えられる。県内における「寺」の文字資料は、射水市小杉流通業務団地内遺跡群No16遺跡で、8世紀前半の須恵器杯Bの底部外面に「小橋寺」と墨書されたもの、東木津遺跡都市計画道路地区出土の木簡に「氣多大神宮寺涅槃浄土築米入使」と墨書されたものが知られる(第19図)。

御亭角鹿寺と文字瓦「寺カ」

昭和61年度御亭角地区では、当調査地区の南方50m付近で東西方向の溝S D02が検出され、出土遺物により白鳳時代～奈良時代の溝とされている(第21図)。御亭角鹿寺は、S D02を南限として、当調査地区周辺での存在が確実視されながら、伽藍配置は明らかではない。それは中世の城郭遺構や近代瓦生産に伴う粘土採掘によって、古代以前の遺構が失われているためである。S D02の方位に直交するN-2°-Wが御亭角鹿寺の基軸方位と考えられるが、当調査地区で同方位を示す遺構は、土坑S K05と瓦溜りS U01である。S U01は、L字状に屈曲する点を重視すれば、建物との関連も想定されるが、最終埋没土に国分寺瓦を含むことから、白鳳時代に遡る確証は得られていない。

国庁整備以後は遺構の基軸方位がやや東へ変移する。昭和62年度勝興寺南接地区の掘立柱建物址が示すN-3°-Eである。御亭角遺跡では、昭和61年度御亭角地区の溝S D01、当調査地区における溝S D05・06、構址S A03が該当するが、ただちに寺院の存在と結びつく遺構ではない。御亭角鹿寺が、奈良時代以降もなお寺院として存続したかどうか、遺構からは立証できない状況である。しかし、文字瓦「寺カ」を含む大量の国分寺瓦や、仏器的器種である多口瓶(1345)などの遺物から類推すれば、寺院としての存続は確実なものといえる。補修瓦に国分寺瓦を採用することは、国庁の関与なくしては考えられず、奈良時代の御亭角鹿寺は広義の官寺であったと判断される。もともと伊弉諾国造の射水氏の氏寺とされている御亭角鹿寺は、奈良時代には国庁付属寺院として官寺化していき、さらには国分寺が造営されるまでの間、国分寺の仏教行政や法務を代行するような寺院であったとする指摘もある(占岡1987)。御亭角鹿寺が、国分寺制度に先立って成立したとされる定額寺として認定されていたことも充分に考えられるところである。ただし、御亭角遺跡で出土する国分寺瓦の多くは平瓦で占められ、軒瓦は軒平瓦1点が過去に知られるだけであることから、御亭角鹿寺への国分寺系軒瓦の採用は確定的ではない。国分寺との階層差の表現か、あるいは成形方法が一枚作りへと変化した平瓦を試験的に導入したことも考えられる。

当調査地区では10世紀代に遺物の減少がみられ、11世紀～12世紀前半にかけて再び増加する。勝興寺に西接する平成3年度下水道地区の土坑S K02では、ロクロ土師器のほか、京都系の非ロクロ土師器、白磁碗が出土し、12世紀前半～中頃とされる。律令体制が衰退するなかで、国府が依然として地域拠点としての役割を失っていなかったことを示すものである。第1トレンチ出土の白磁碗(1351)も同様に理解されるものである。第6トレンチで多量に出土した土師器輪・皿は、中世城郭の堀址S D01の覆土中でありながら、11世紀代の一括性の高いものである。漆容器として使用されたものが多く、第6トレンチ周辺で漆の保管ないし塗り作業が行われたことを示している。第9トレンチでは、中世城郭の土塁S A01下の第Ⅱ層から、鍛造剥片などの鍛冶関連遺物や鉄釘が集中して出土しており、周辺に鍛冶遺構が想定される。11世紀～12世紀前半の土師器を伴っている。大型の鉄釘は、御亭角鹿寺の建物などに使用されていたものを、素材として再利用するためのものであった可能性も考慮される。このように、平安時代後期における御亭角鹿寺の痕跡は希薄であり、11世紀には漆塗りや鍛冶を行う工房的な空間へ変化していったものと考えられる。



第21図 越中国府郡邊跡能松地区 御幸角廣寺周辺の主な調査地区 (1/2,000)

中世の城郭遺構

勝興寺周辺の土塁と堀址については、勝興寺が当地に寺地を得る天正12年（1584）以前に城郭（古国府城）がすでに存在し、それを勝興寺が城郭寺院として継承したというのが通説である。また遺構・遺物が鎌倉～室町時代には少なく、戦国時代に増加することから、古国府城の築城は戦国時代に下るとみられている。古国府城は四方を谷や窪地によって守られた要害地にあり、現在の勝興寺境内が本丸として有力視されているが、周辺に点在する単郭跡や館跡を含めた縄張りはこれまで明らかになっていない（第22図）。当調査地区に遺存する城郭遺構は、これまで単郭の弊ないし館跡と考えられていたが、主郭北側の腰曲輪の存在が明らかとなり、古国府城の縄張りを探る上で貴重な発見となった。

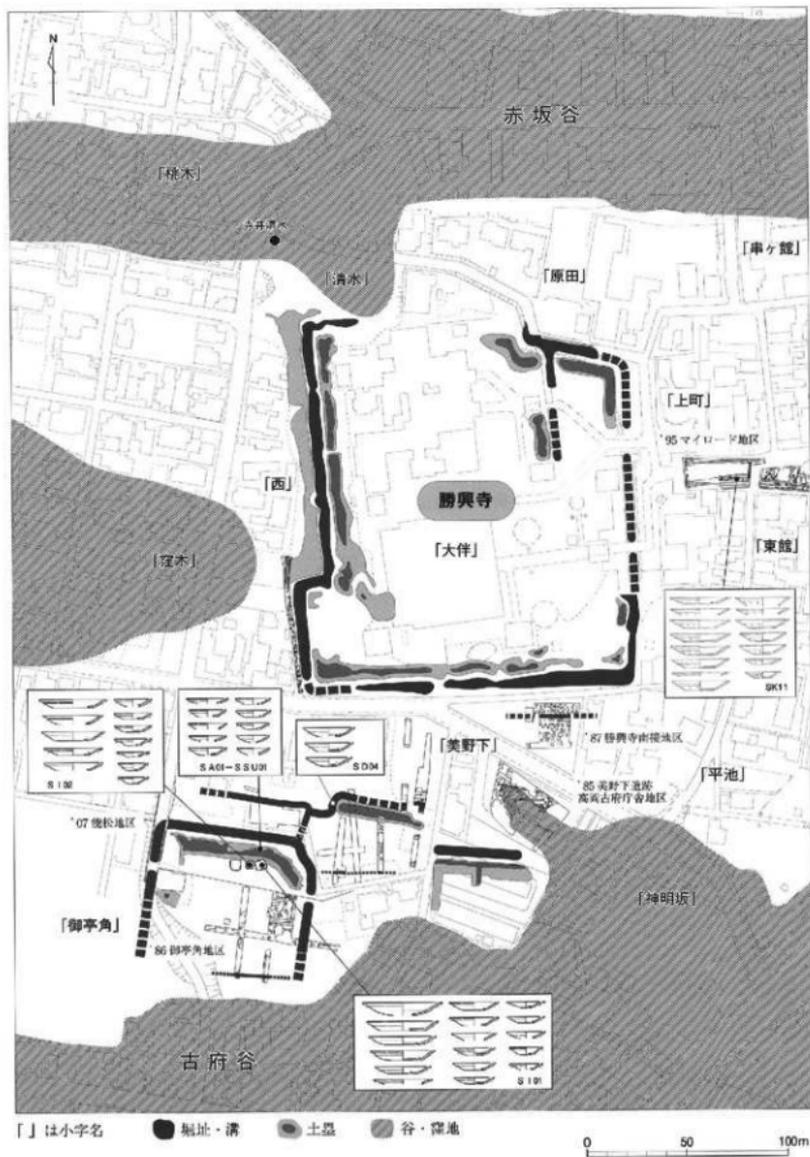
当調査地区の土塁と堀址は、堀址 S D04の底面付近や主郭の土塁 S A01上で出土した土師器皿が、16世紀第3四半期を主体に、16世紀第1～第3四半期の時期を示すことから、勝興寺以前の遺構であることは確実である。第9トレンチの土塁 S A01の下面からは12世紀代の土師器が出土しており、土塁構築時期の上限を示している。既往の調査と同じく、鎌倉～室町時代の遺物が欠落することなどから、当調査地区の土塁や堀の構築時期は16世紀に下る可能性が考えられる。このうち S D04は、S D01～03と異なった箱蓋研状の場であることから（第7図）、掘削時期が異なる可能性があり、16世紀前半の土師器を含むことから、S D01～03に先行して掘削されたと考えられる。また S D01以外の S D02～04は、近世以降の遺物を含まないことから、勝興寺の移転を前後する16世紀後半に人為的に埋められたものと考えられる。さらに主郭の堀址 S D01は、中世の遺物をほとんど含まずに、掘深くまで近世遺物が含まれることから、勝興寺段階に改修を受けているとみられる。つまり勝興寺が移転してくる16世紀後半頃に、主郭の堀址 S D01の改修と腰曲輪等の堀址 S D02～04の埋め戻しが行われたものと考えられるのである。

主郭の北端に位置する第7トレンチでは、3軒の竪穴建物址が検出されている。S I01・02は鍛冶関連遺物を出し、特に S I02では竪穴隅の底面に炭化物の拡がりがあり、竪穴建物址は鍛冶遺構であると考えられる。S I01・02は切り合いがあるものの、出土した土師器皿には時期差がなく、それぞれ埋め戻しの際に整地層の復旧が図られていることから、継続的な建物ではなく、鍛冶の需要に応じて随時建てられた仮設的な建物であったと判断される。

中世土師器

出土した土師器皿は非ロクロ成形の京都産土師器を在地で模倣した、いわゆる京都系土師器と称されるものである。16世紀代のものである。越中国府関連遺跡では、平成7年度マイロード地区 S K11で16世紀後半の一括資料が得られている。当調査地区の京都系土師器は、多量であること、小型品と中・大型品における内面ナデ上げ技法の使い分けなど、同時期の京都産土師器を忠実に模倣したものといえる。京都産土師器における内面ナデ上げ技法は15世紀代に確立するもので、口径9.0～10.0cmを境に、小型品は「の」字状ナデ上げ、中・大型品は逆「く」字状ナデ上げを施すものである（図版33）。京都産土師器の情報が的確に伝わっていた背景には、明応2年（1493）から5年の間、將軍足利義材が越中守護代神保長誠を頼って放生津城へ下向したことが関係していると考えられる。放生津城には結城としての守山城があり、古国府城は守山城の出城に位置づけられている。このような神保氏の支城関係や、古代以来の国府の政治的・文化的機能の集積を背景として、古国府城に京都系土師器がもたらされたのであろう。

土塁上の遺物集積 S A01～S U01で出土した土師器皿は、分量がほぼA群に限られ、色調はすべて赤褐色系である。油煙の付着は一切みられず、細かく破砕されていた。儀礼後の一括廃棄とみられる。このような、特定の場面に特定の分量と色調の京都系土師器を選択的に使用している状況は、京都系土師器の使用に規範が存在したことを推測させ、古国府城における饗宴文化意識の高さを窺わせるものである。



第22図 越中国府間遺跡能松地区 古国府城間遺構及び中世土師器出土地点 (1/2,500)

瑞龍寺遺跡芹原地区、目次

I 序 説	27	III 遺 物	31
II 遺 構	29	1. 陶磁器類	31
1. 土塚址	29	2. 瓦	31
2. 瓦溜り	29	3. 木製品	34
3. 土 坑	29	4. 鉄製品	34
4. 溝	29	IV 結 語	35
5. 畝状遺構	30		



第24図 瑞龍寺遺跡位置図〔2〕(1/5万)

I 序 説

遺跡概観

当遺跡は、高岡市街地の南西約0.9kmに位置し、旧瑞龍寺(伽藍瑞龍)の境内にあたる東西365m×南北330mが遺跡範囲である。当遺跡の中央西寄りを通る丁R城端線が南北方向に走る。遺跡の西方では千保川が、遺跡の東方では庄川がそれぞれ北流している。現在の庄川本流は、寛文10年(1670)から正徳4年(1714)にかけて加賀藩による河川改修によって固定され、それまでは千保川筋が庄川本流であった。

当遺跡は高岡台地の南西端に位置する。高岡台地は標高約15mを測り南西～北東方向に延びる。当地には後期旧石器時代の古定塚遺跡や縄文時代中後期の小竹藪遺跡などが確認されている。慶長14年(1609)に加賀藩2代藩主前田利長が隠居地としてこの高岡台地上に高岡城を築城し、現在の高岡市街地の基礎を造った。

高岡城の南西側に位置するのが瑞龍寺であり、慶長19年(1614)に前田利長が逝去した後は菩提寺として整備された。また東北東約1kmには前田利長の墓所(前田墓所遺跡)が営まれ、これらを結ぶ八丁道(八丁道遺跡)も整備された。

調査に至る経緯

平成19年8月に、当該地(高岡市岡本町93)において個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。その後、協議を行い、施主の芹原清志氏の承諾を得て、試掘調査を実施するに至った。



第25図 瑞龍寺遺跡岸原地区位置図(1/5,000)

調査経過

発掘調査は、平成19年11月8日から同年12月26日まで実施した。

調査対象地は、東西15.0m、南北34.8mと南北に細長いため、試掘坑は幅約2mで南北方向に2箇所設定することを企図した。第1トレンチを調査対象地の東半部に設定し、南からバックホーで掘削を開始した。現代の盛土（第Ⅰ層）及び近代の整地層（第Ⅱ層）を除いた直後に溝S D08とS D08上面に拡がる瓦溜りS U01を検出した。S U01を検出した面は第Ⅱ層直下であり、それ以前の整地層（第Ⅲ層）がS U01検出面とはほぼ同じ標高で北側に水平堆積していた。そのため、第1トレンチの西半部を第Ⅲ層上面、東半部を地山（第Ⅳ層）上面までそれぞれ掘削し、遺構の有無を確かめた。第1トレンチの北半部で土塚址S A01や地山直上面で伽藍塔籠中軸線に斜行する溝S D01・02を検出し、調査対象地の西半部に設定した第2トレンチでも検出したため、第2トレンチのS A01より北側に西に拡張した。また、S D01・02の東側の拡がりを確認するため第3トレンチを設定した。

S D08とS U01の拡がりを確認するため、第1トレンチの南端部を西側に拡張し、さらにS U01の延長線上の調査対象地両端に第4・5トレンチを設定した。S U01は第4トレンチでは検出されなかったため、第4トレンチより東側に拡がっていると推定した。また、S D08に第1・4トレンチで約1m幅のサブトレンチを設定しS U01の厚さ及びS D08の深さを確認した。

調査対象面積は522㎡、発掘調査面積は180㎡である。

基本層序

基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 褐色粘質土（現代の盛土）20cm
- 第Ⅱ層 灰褐色粘質土：（大正～昭和時代の整地層）10～20cm
- 第Ⅲ層 灰色粘質土：（江戸～明治時代の整地層）15～25cm
- 第Ⅳ層 黄褐色粘質土（基盤層）

検出遺構

- 土塚址1条（S A01） 溝8条（S D01～08）
- 瓦溜り1箇所（S U01） 畝状遺構1箇所（S N01）
- 土坑3基（S K01～03）

出土遺物

- Ⅲ: 器類：古代－土師器、須恵器
- 中世－土師器、瓦質土器、珠洲、瀬戸美濃、青磁
- 近世・近代－肥前陶磁器、瀬戸美濃、備前
- 越中瀬戸、関西系陶器

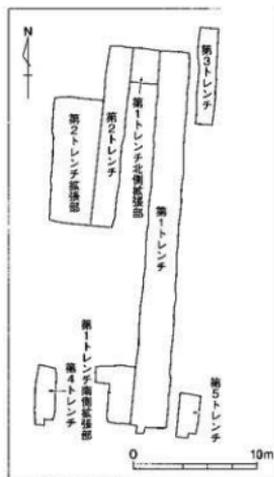
瓦：近世瓦－焼し瓦、釉薬瓦

木製品：楔

鉄製品：鉄釘、環金具、刀子

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系の第Ⅶ座標系（原点は北緯36° 00' 00"、東経137° 10' 00"）に合わせた。東西をX軸とし、南北をY軸とした。グリッドの左下隅の数値がそのグリッドを表す。X = 1、Y = 1の地点は、原点より、西へ13.870km、北へ81.700km向かった位置である。辺5m四方を1区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第26図 瑞穂寺遺跡跡原地区
トレンチ配置図（1/400）

Ⅱ 遺 構

1. 土塀址

土塀址SA01

調査地区中央、第1・2トレンチ(2～4, 5)区で検出した。規模は長さ5.1m以上、幅1.0m、高さ20cm以上を測る。ほぼ東西方向に延び、両端は調査地区外へ延びる。SD03の上部に構築し、江戸～明治時代の整地層を切り、大正～昭和時代の整地層に切られる。現在の瑞龍寺通開口の延長上に位置することから、瑞龍寺が規模縮小した際に北端の区画として造られた整地層の可能性がある。出土遺物は土師器である。

2. 瓦溜り

瓦溜りSU01

調査地区南端、第1・5トレンチ(3・4, 1・2)区で7.2m以上にわたり検出した。SD08の覆土で、南側は調査地区外へ延びている。西側の第4トレンチでは確認していないため限られた範囲での瓦溜りであると推測する。検出した瓦は細かいものが多くを占め、焼し瓦と釉薬瓦が混在している。一部掘削を実施し、瓦の堆積は最大厚約45cmであった。出土遺物は土師器、近世陶磁器、鉄製品、焼し瓦、釉薬瓦である。

3. 土坑

土坑SK01

調査地区北側、第1トレンチ(3・4, 6・7)区で検出した。規模は長軸1.2m以上、短軸1.0mを測る。北側をSD02に切られ、東側は調査地区外へ広がる。遺物は出土していない。

土坑SK02

調査地区南西側、第4トレンチ(2, 2)区で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸0.6m、短軸0.3m以上、深さ34cmを測る。SD08を切り、西側は調査地区外へ広がる。遺物は出土していない。

土坑SK03

調査地区の北東、第3トレンチ(3, 6)区で検出した。規模は長軸1.0m、短軸0.8m、深さ1.0mを測る。平面形は隅丸方形で、東側は調査地区外へ広がる。第Ⅱ層の大正～昭和時代の整地層を切り込み、さらにSD01を切っている。昭和時代の溜井としての素掘りの井戸址と考えられる。出土遺物は混入品である珠洲である。

4. 溝

溝SD01

調査地区北側、第1・2トレンチ(2～4, 6・7)区で江戸～明治時代の整地層下より検出した南西～北東方向に走る溝である。規模は長さ9.8m、幅0.5～1m、深さ34cmを測る。南西側は徐々に浅くなり途切れ、北東端部は第3トレンチで土坑SK03に切られる。SD02と平行することから道路の側溝の可能性があ

る。また、S D03とはほぼ直角方向に走る。遺物は出土していない。

溝S D02

調査地区北側、第1～3トレンチ（2・4、6・7）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した南西～北東方向に走る溝である。規模は長さ11.9m以上、幅0.4～0.7m以上、深さ34cmを測る。北東側は調査地区外へ延び、南西側はS D01同様に浅くなり途切れる。S D01と平行し、S D03とはほぼ直角方向に走る。出土遺物は土師器の細片である。

溝S D03

調査地区北西側、第2トレンチ（2、5・6）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した北北西～南南東方向に走る溝である。規模は長さ6.5m以上、幅1.1～1.8m、深さ30cmを測る。北北西側及び南南東側は調査地区外へ延びる。調査地区中央で土層址S A01が覆土上面に堆積する。S D01・02とはほぼ直角方向に走る。遺物は出土していない。

溝S D04

調査地区中央南寄り、第1トレンチ（3・4、3・4）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した東西方向に走る溝である。規模は長さ1.0m以上、幅1.0～1.4mを測る。東側及び西側は調査地区外へ延びる。畝状遺構S N01と重複する。遺物は出土していない。

溝S D05

調査地区南側、第1トレンチ南側拡張部（2・3、2・3）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した北北西～南南東方向に走る溝である。規模は長さ0.8m以上、幅0.8～1.0mを測る。南側でS D07に切られ、北側は調査地区外へ延びる。S D06とはほぼ平行に走る。遺物は出土していない。

溝S D06

調査地区南側、第1トレンチ（3、2・3）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した北西～南東方向に走る溝である。規模は長さ2.7m以上、幅1.0mを測る。S D05とはほぼ平行する。北西側は調査地区外へ延びる。S D03と同一の溝となる可能性がある。遺物は出土していない。

溝S D07

調査地区南側、第1トレンチ南側拡張部（2・3、2）区で江戸～明治時代の整地層下より検出した西北西～東南東方向に走る溝である。規模は長さ2.4m以上を測る。幅は部分的な検出のため不明である。S D05を切り、西北西側は調査地区外へ延びる。遺物は出土していない。

溝S D08

調査地区南側、第1・4トレンチ（2～4、2）区で検出したほぼ東西方向に走る溝である。規模は長さ10.5m以上、幅2.5m以上、深さ136cm以上を測る。北岸を検出し、それ以外は調査地区外へ延びる。南端には瓦溜りS U01がある。一部掘削を実施した結果、瑞龍寺の内濠である可能性が高い。また溝岸部で護岸のための木板と楔を検出した。出土遺物は土師器、中近世陶磁器、燻し瓦、釉薬瓦である。

5. 畝状遺構

畝状遺構S N01

調査地区中央、第1トレンチ（4・5、3・4）区の明治時代の整地層下で検出した。幅20～40cm程の溝が東西方向に約40cm間隔で並ぶ。部分的な検出のため性格は明確ではないが、一定方向にはほぼ等間隔で存在するため、畝状遺構とした。遺物は出土していない。

III 遺 物

1. 陶磁器類

土器・陶磁器類は古代から近代に至るまで96点出土した。図面70に図示したのは4101～4118の18点である。内訳は中世のもの1点(4101)、戦国時代末頃～明治時代までのもの17点(4102～4118)である。青磁碗4101は龍泉窯の製品で13～14世紀中葉のもの。土師器皿4102・4103は明確な時期は不明ながら、近世のものとした。4104は瀬戸美濃系の鉢で鉄軸が掛かる。16世紀後半～17世紀前半のもの。肥前陶器碗4105は鉄絵が付く。1590～1610年の年代が与えられている。4108は備前系の焼き締め陶器で擂鉢である。17世紀代のものである。その他の陶磁器は18～19世紀の製品である。

2. 瓦

黒瓦と赤瓦

今回出土した瓦は、近世の瓦で瑞龍寺所用のものと断定してもよいものである。福井県・石川県を中心に北陸の近世瓦については、「黒瓦」と「赤瓦」として対照的に述べられることが多い。黒瓦は焼し焼きの黒灰色の瓦であり、赤瓦は中世越前焼の系譜を引き、鉄軸が掛かる軸葉瓦である。

今回出土の瓦はほぼこれらの瓦であり、いずれも本瓦葺きの瓦(本葺型・本葺瓦)である。焼し焼き瓦(焼し瓦)は表面の色調は黒色・黒灰色が基本だが、焼しが弱く灰色や灰褐色を呈するものもある。芯部は灰色である。軸葉瓦は2区分し、「黒軸瓦」と「赤軸瓦」と仮称することとした。黒軸瓦は黒色を基本とする軸葉が掛かり芯部は灰色である。赤軸瓦は赤茶色・赤紫色・暗紫色を基本とする軸葉が掛かり芯部は明赤褐色である。軸葉瓦は全面に施釉をしないものである。

瓦の出土状態

瓦が出土した箇所は、瓦溜りSU01、溝SD08、各トレンチの整地層(Ⅱ・Ⅲ層)である。それぞれの出土点数は第2表に示した。大多数の瓦が出土したSU01の内容については第27図としてまとめた。この図からも分かるように焼し瓦が主体である。

焼し瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・菊丸瓦・輪漣瓦・面戸瓦・鬘斗瓦・鬼瓦がある。また本来の形態・使用箇所が不明である飾り瓦や、小型の丸瓦状のものもみられる。

軒丸瓦：梅鉢文軒丸瓦(図面71-5101・5102)。中心軸の円と周りの花卉を円で表現したもの。剣や軸が付いていない無剣無軸梅鉢文である。他の資料を参考に2つのタイプの梅鉢文軒丸瓦とした。

Aタイプ(5101)：中心軸の円と花卉の円が同じ大きさのもの、面径16.4cmと復元。

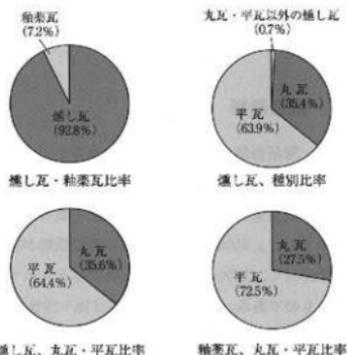
Bタイプ(5102)：中心軸の円が花卉の円より小さいもの、面径16.8cmと復元。

巴文軒丸瓦(図面71-5103・5104)。周囲に珠文が廻る三巴文軒丸瓦と推定される。5103は、頭から尾へ流れる右回り(右巻き)三巴文軒丸瓦で珠文は16個、面径は16.8cmと復元した。

遺構名	焼し瓦	軸葉瓦
瓦溜りSU01	4311	338
溝SD08	28	6
第1トレンチ	47	7
第2トレンチ	49	4
第3トレンチ	12	3
第4トレンチ	64	36
小計	4511	394
総計		4905

第2表 瑞龍寺遺跡芹原地区
瓦出土数量一覽表

種 類	個 数	小 計	合 計		
焼し瓦	軒丸瓦	3	30	4311	
	軒平瓦	5			
	荷丸瓦	6			
	輪違瓦	8			
	葵斗瓦	5			
	その他	3			
	丸瓦破片	426	1526		
	丸瓦細片	1100			
	平瓦破片	611			
	平瓦細片	2144	2755		
粘葉瓦	丸瓦破片	37	93		338
	丸瓦細片	56			
	平瓦破片	71	245		
	平瓦細片	174			
	總 計			4649	



第27図 瑞龍寺遺跡原地区 瓦溜りSU01出土瓦分類図

軒平瓦（図面71-5105・5106）。均整唐草文軒平瓦である。瓦当上弧幅は、5105を27.2cm、5106を29.2cmと想定復元した。5106は周縁の脇区が広い型式である。

丸瓦（図面72-5107～5115）。玉縁付の丸瓦。9点図示した。すべて瓦溜りSU01からの出土である。焼し瓦で黒色・黒灰色であるが、5111は焼しが不十分で灰褐色を呈する。丸瓦部凸面はヘラナデが丁寧に行われている。玉縁部凸面は横ナデである。丸瓦部凹面後部側から玉縁部凹面にかけて荒い刺し縫いがみられるのは5107～5111・5113で、5109には内面の棒状叩き痕が付く。丸瓦部前部側破片である5114・5115は凹面に布目付き、荒い棒状具による横ナデがみられる。5113は径18cmの釘穴が穿たれている。

平瓦（図面73・74-5116～5120）。5116は溝SD08の確認面より約60cm下方で単独で出土した（図版19-2参照）。約8割余り残存している瓦である。狭端幅26.2cm、広端想定幅27.2cm、長さ30.4cm、中央部での厚さ1.9cmを計る。凹凸面とも丁寧にナデられている。瑞龍寺遺跡では小型の部類に属する焼し平瓦である。5117は第3トレンチ整地層からの出土で、5118～5120は瓦溜りSU01からの出土である。凸面に櫛目が付く共通点がある。櫛目は連続山形（5117）、たすき掛け（5118～5120）、波状（5119）、直線（5120）等の形態がある。

菊丸瓦（図面71-5121～5125）。5121～5123は瓦当部分の破片である。5121・5122は間弁がみられるが5123は間弁が付く形態である。5124・5125は丸瓦部の破片で瓦当は取れており、狭端側は欠損している。5121・5124・5125は瓦当部と丸瓦部との接合部分の様子が観察できる。瓦当の付け方は双方を接合させる「芋付け方」である。それぞれの接着面に櫛目を入れている。瓦当側が縦に櫛目を入れるのに対して、丸瓦側は横に入れている状況が観察できる。

輪違瓦（図面75-5126）。焼しが不十分で灰色の部分が多い。作りは比較的粗雑である。凸面は荒いヘラナデで、凹面も荒いナデである。若干欠損しているが、想定値も含めての規模は、広端幅9.2cm、狭



第28図 瑞龍寺遺跡原地区 菊丸瓦接合面の状況（1/2）

幅6.8cm、長さ15.4cmである。

特殊瓦（図面75-5127）。行基式の丸瓦尻部が屈曲して窄まり、さらに半截したような形態である。凸面は丁寧にヘラナデされている。凹面の尻側は荒い刺し縫いが見られる。

面戸瓦（図面75-5128）。面戸瓦の下方部分の破片である。凸面は丁寧にヘラナデされている。凹面はコピキによる粘土切断痕を一部斜めに消すように側縁方向にナデが施されている。

製斗瓦（図面75-5129-5132）。4点図示した。瓦溜りSU01からの出土である。他の資料より幅17.5cm程に復元できると考えられる。凹面側に縦に溝が3条入るものである。ただし5130は溝のある方が凸面側の可能性がある。溝のない面は荒くヘラ削りされている。溝幅は1.2～1.5cmである。

鬼瓦（図面75-5133）。鬼面の鼻・口の部分である。

飾瓦（図面75-5134）。どのような形態になるか不明である。

刻印（図面76-5108～5110・5135～5155）。刻印のある瓦は24点、丸瓦17点、平瓦7点である。5108～5110は丸瓦の項でも紹介した。すべて瓦溜りSU01からの出土である。刻印の種類は3種類で角印「上」・角印「丁」・逆V字形の上に短い横棒が付く丸印「八」である。5154は同じ刻印が2つ付いている。丸瓦の刻印の位置は、丸瓦部凸面に付く5146以外、丸瓦後端部の段の部分（木口）である。平瓦の刻印は木口に付く。丸瓦の例に例えば、広端面に付いているものと推定される。

軸葉瓦

軸葉瓦は黒軸瓦と赤軸瓦である。本瓦葺きの丸瓦と平瓦で、丸瓦は玉縁付のものである。施軸の範囲は、丸瓦は凸面側、平瓦は凹面側が基本となっている。

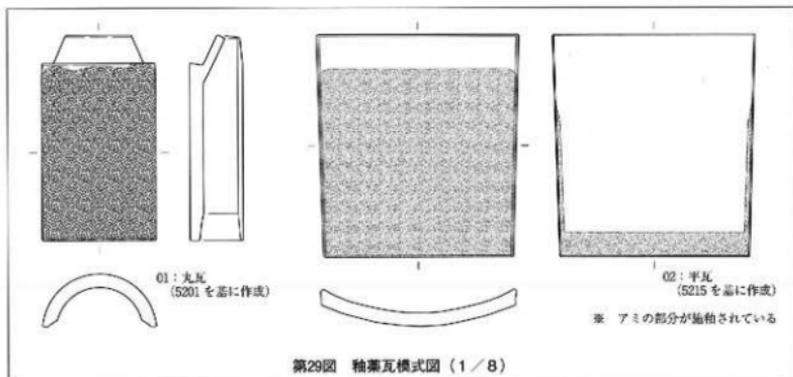
丸瓦（図面77-5201～5209）。9点図示した。出土位置は、瓦溜りSU01：5202・5203・5205・5207～5209、第1トレンチ：5204、第4トレンチ：5201・5206である。黒軸葉瓦は5201・5202の2点である。5201は丸瓦後部・玉縁部の破片である。丸瓦後端部幅18.4cm、丸瓦部厚さ1.7cmを計る。丸瓦部凸面に端部付近まで黒色の軸葉が掛かる。胎土は灰色である。凹面は丸瓦後端部から玉縁部は刺し縫いされている。ここより前側には経痕が見られる。5202は丸瓦後部片である。丸瓦部凸面には黒茶色の軸葉が掛かる。軸葉は一部凹面にも掛かる。芯は灰色である。凹面には布目付き、棒状叩き痕や痕跡が見られる。玉縁部付近は刺し縫いされている。赤軸瓦は5203～5209の7点である。5203～5205は丸瓦部後端部・玉縁部片である。凸面に赤葉の軸葉が掛かり、胎土は明赤褐色である。軸葉は3者で異なっている。5203は丸瓦後端部～玉縁基部と玉縁端部を意図的に除いて軸葉が掛けられている。5204は丸瓦部凸面に限定して施軸したようである。5205は丸瓦部凸面に掛けられた軸葉がそのまま玉縁部に移行するよう施軸されている。玉縁

番号	図面	種類	刻印名	刻印部位
5108	76	丸瓦	h a	丸瓦後端部段
5109	76	丸瓦	j a	丸瓦後端部段
5110	76	丸瓦	八	丸瓦後端部段
5135	76	丸瓦	e b	丸瓦後端部段
5136	76	丸瓦	上 b	丸瓦後端部段
5137	76	丸瓦	上 b	丸瓦後端部段
5138	76	丸瓦	f c	丸瓦後端部段
5139	76	丸瓦	上 c	丸瓦後端部段
5140	76	丸瓦	上 c	丸瓦後端部段
5141	76	丸瓦	e d	丸瓦後端部段
5142	76	丸瓦	上 d	丸瓦後端部段
5143	76	丸瓦	上 d	丸瓦後端部段
5144	76	丸瓦	f d	丸瓦後端部段
5145	76	丸瓦	上 e	丸瓦後端部段
5146	76	丸瓦	上 c	丸瓦部凸面
5147	76	丸瓦	丁 b	丸瓦後端部段
5148	76	丸瓦	丁 b	丸瓦後端部段
5149	76	平瓦	上 a	広端面？
5150	76	平瓦	上 a	広端面？
5151	76	平瓦	上 b	広端面？
5152	76	平瓦	上 c	広端面？
5153	76	平瓦	上 e	広端面？
5154	76	平瓦	上 e	広端面？
5155	76	平瓦	上 f	広端面？

第3表 瑞穂寺遺跡芦原地区 瓦刻印一覧表

上=□、丁=□、八=○

(a・b等は分類名、36頁の第30図参照)



部の軸葉は薄い。凹面は刺し縫い状で、5203・5204の丸瓦部には叩き痕が付く。5206は丸瓦中央片である。赤紫の軸葉、明赤褐色の胎土、凹面は刺し縫いと叩き痕となる。厚さは2.8cmで、図示したなかでは最も厚い。5207・5208は丸瓦前部片である。凸面の黒赤紫の軸葉は、丸瓦前端部木口面まで及ぶ。芯部は暗赤灰色である。5207の凹面は叩き痕が付く。5208の凹面は刺し縫いがみられる。5209も丸瓦前部片である。黒赤紫の軸葉、明赤褐色の胎土、凹面は刺し縫いと叩き痕となる。胎土は5205と類似し砂が多いものである。

平瓦 (図面78・79-5210~5217)。8点図示した。出土位置は、瓦溜りSU01:5211・5213・5214・5216・5217、第2トレンチ:5215、第4トレンチ:5210・5212である。黒釉瓦は5210~5214の5点である。5210~5212は広端側の破片である。凹面広端縁付近と凸面側には施釉されていない。芯部は灰色である。凸面には罫目が付く。5213は小破片のためもあり確認されないが、これらと同様なものとした。5214は狭端側の破片である。凹面・狭端面 (狭端面木口)・凸面狭端縁付近に軸葉が付く。赤釉瓦は5215~5217の3点である。5215・5216は広端側の破片である。凹面広端縁付近と凸面側には施釉されていない。赤紫色の軸葉、赤褐色の胎土である。5215は凸面の離れ砂が顕著である。5217は狭端側の破片である。赤紫色の軸葉、赤褐色の胎土である。軸葉は凹面・側面・狭端面 (狭端面木口)・凸面端部付近に付く。

3. 木製品

木製品は櫛6101 (図面79) 1点で、溝SD08より出土した。幅3.6cm、長さ13.2cmを計る。

4. 鉄製品

鉄製品は鉄釘2点、環金具1点、刀子1点を図面79で示した。すべて瓦溜りSU01より出土した。鉄釘6201の頭部は、叩き出して形成している。先端は欠損しており、長さは6.0cm、頭部幅は1.0cmである。6202は両端が欠損しているが、鉄釘とした。長さ3.3cmである。環金具6203は先端が欠損している。6204は明確ではないが刀子とした。

IV 結 語

瑞龍寺の草創

瑞龍寺遺跡の中心である高岡山瑞龍寺は、慶長18年(1613)に加賀藩2代藩主前田利長が、広山即陽禪師を招き開山した法圓寺が起源とされる。法圓寺は、文祿3年(1594)に前田利家・利長父子が織田信長・信忠父子の菩提を弔うため金沢に創建した。その後前田利長の隠居に伴い金沢より富山へ移転し、さらに慶長18年に高岡へ移転した。法圓寺は慶長19年(1614)に高岡で逝去した利長の菩提寺とした際に、利長の法名から「瑞龍院」と改称し、さらに伽藍整備に伴い「瑞龍寺」となった。

現在の「伽藍瑞龍」は、加賀藩3代藩主前田利常が前藩主利長の菩提を弔うために正保2年(1645)に起工され(他の年代とする説もある)、寛文3年(1663)頃に竣成したとされる。創建当時の寺地は、東西365m×南北330mで12haを測る。水濠(内堀)によって内区と外区に区分し、内区は平面形が正方形で、面積は3万㎡を測る。この内区に壮大な伽藍が造営されたのが「伽藍瑞龍」である。また、外区には4つの塔頭が建てられた。

その後、明治4年(1871)の廃藩置県後に、前田家による保護や援助が途絶えたため荒廃し、多くの寺地を失った。さらに、外区の一部を農地として貸与していたため、第二次世界大戦後の農地解放によって創建時の5分の1ほどの面積までに縮小し、今日の姿に至っている。しかし、現在もかつての外堀が用水や道路として姿を留めており、創建当時の広大さを窺うことができる。

瑞龍寺遺跡の変遷

瑞龍寺遺跡は「伽藍瑞龍」の想定される境内地、すなわち外堀ラインをもって遺跡範囲として設定したものである。これは瑞龍寺に直接かかわる遺跡としたものではあるが、その後調査の進展により、これ以前の遺構も検出されている。当遺跡は、文献資料・石造文化財・絵図、そして考古資料から以下のように時期区分できる。

- I期：瑞龍寺以前、古代～中世である。古代については、土器類の細片が出土しているのみで、遺構は確認していない。中世については溝を検出しており、珠洲等の遺物も出土している。当地は高岡台地の末端であり、周囲と比べて微高地である。寺院建立以前に一般の集落跡の所在地としても立地可能な所である。当期は細分して、I-1期=古代とI-2期=中世としたい。
- II期：瑞龍寺草創期、伽藍瑞龍以前の法(空)圓寺ないし瑞龍院の時代である。江戸時代初期であり、出土した1600年前後の陶磁器はこれと関連する可能性がある。
- III期：伽藍瑞龍期、広大な寺地と壮大な伽藍が整備・建設され維持された段階。江戸時代前期・1645年以降から明治維新頃までである。
- IV期：近代瑞龍寺期、加賀藩から援助が途絶えた瑞龍寺境内縮小期である。明治維新以降現在までである。

現在の瑞龍寺の中軸線に平行も直交もしない溝(斜行溝)が当遺跡から検出されている。今回は斜行溝SD01-07が検出された。第Ⅲ層：江戸～明治時代の整地層の下方よりの検出である。また遺構相互の新旧関係や出土遺物等より、これらは伽藍瑞龍寺以前のI-2期～II期と推定される。なおSD01・02とSD05・06は平行して走る溝である。この内側を道路本体とする側溝の可能性もあるが、硬化面が検出されていないことから、1周の道路が存在した可能性の指摘に止めておく。

伽藍瑞龍寺は2重の堀で囲まれていたことが絵図等から窺われる。外堀については現在も用水等にその名残がみられ、その位置はほぼ確実である。しかし内堀については想定案はあるものの確実とはいえない。今

回の調査地区南端で検出された東西溝S D08は内堀になる可能性がある遺構である。

現在の瑞龍寺の通用口に明治40年建立の門が建っている。この門は伽藍瑞龍寺の中軸線より北側98mに位置しており、この付近では現在の境内地の境界となっており、さらに東側延長線も宅地等の境界線となっている。このライン上に今回検出の土壌址S A01が位置する。第Ⅱ層：大正～昭和時代の整地層に切られており、第Ⅲ層：江戸～明治時代の整地層を掘り込んでいる。明治～大正時代の築造である。

明治42年(1909)は東宮(後の大正天皇)の北陸巡行を契機に前田墓所や八丁道が復元整備されることになった年である。これらと関連する瑞龍寺でも何らかの整備が行われたことは想像に難しくない。この頃の境内北限を区画するものとして、土塀・築地のようなものが整備されたかと思いたい。この名残がS A01であり、明治末年～大正初年頃の遺構と推定される。

Ⅳ期：近代瑞龍寺期はこの明治末頃に境に区分され、さらに戦後を1つの段階とする、すなわちⅣ-1期=明治維新～明治末、Ⅳ-2期=大正初め～昭和戦前、Ⅳ-3期=昭和戦後～現代と3区分が可能である。

さて内堀の可能性を指摘した東西溝S D08は、その南東側上層に近世瓦が充填された状態で検出された。瓦は一辺5cm程に砕かれた小破片であり、一次的な瓦の廃棄場所とはいえず、意図的に瓦を砕き敷き並べたものと理解される。S D08が遺棄され、土壌がある程度堆積した後、さらに確実に窪みをなくす意図とした。この時期については、Ⅳ期：近代瑞龍寺期の明治維新以降であり、明治42年頃も候補に上げ得るものである。

瑞龍寺の瓦

近世瑞龍寺の瓦は、本瓦葺きの瓦で、焼し瓦と軸葉瓦が主体である。出土量は焼し瓦が多く、軒丸瓦・軒平瓦をはじめ屋根を飾る瓦は、現在確認されている瓦ではすべて焼し瓦である。瑞龍寺の屋根は焼し瓦を基本として葺かれ、その後軸葉瓦も導入されたと予想している。

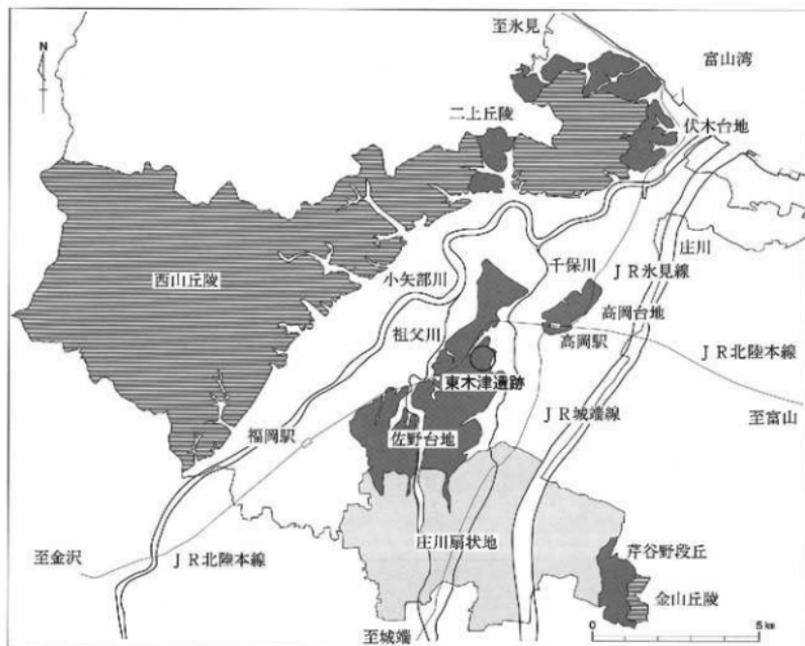
高岡市の瑞龍寺・前田墓所、石川県の金沢市金沢城・小松市小松城からの出土瓦の共通性が指摘されている。加賀藩にかかる近世の文化遺産群である。特に瑞龍寺(伽藍瑞龍)・前田墓所・小松城の瓦には共通する点が多い。これらは加賀3代藩主前田利常の造営によるものである。瓦の生産地については石川県小松市の日末窯跡と蓮台寺窯跡が確認されている。前田墓所出土瓦については日末窯跡の製品との指摘がある。今回出土の焼し瓦梅鉢紋軒丸瓦は日末窯跡の製品と類似している。

消費地と生産地との関連を考える上で、瓦に刻まれた「刻印」が有力な手がかりとなる。今回出土瓦では刻印が24点確認された。角印上が20点、角印丁が3点、丸印松葉が1点である。角印上はa～fに分類され、角印丁はa・bに2分類される。なお前田墓所では昭和63年度・平成元年度の調査により、同様なものが5点出土している。内訳は上a：2点(平瓦116・平瓦211)、上b：2点(丸瓦106・平瓦212)、上aないしb：1点(平瓦115)となる。

分類	代表例	点数
上 a		丸瓦1 平瓦2
上 b		丸瓦3 平瓦1
上 c		丸瓦3 平瓦0
上 d		丸瓦4 平瓦0
上 e		丸瓦2 平瓦3
上 f		丸瓦0 平瓦1
丁 a		丸瓦1 平瓦0
丁 b		丸瓦2 平瓦0
入		丸瓦1 平瓦0

第30図 瑞龍寺遺跡丹原地区
瓦刻印の分類

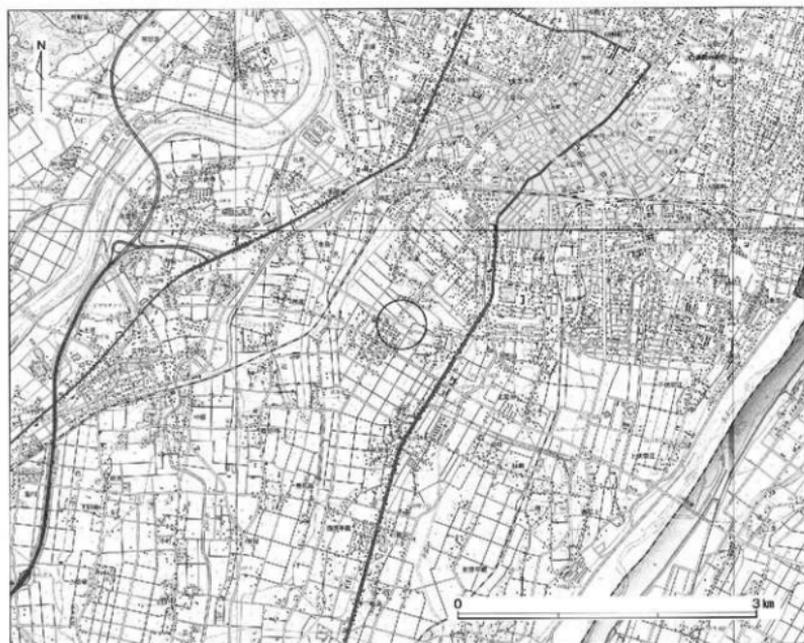
3. 東木津遺跡、今井地区



第31回 東木津遺跡位置図〔1〕(1/15万)

東木津遺跡今井地区、目次

I 序 説	39	III 遺 物	46
II 遺 構	41	1. 古墳時代の土器類	46
1. 掘立柱建物址	41	2. 古代の土器類	46
2. 橋 址	42	3. 中世の土器類	48
3. 土 坑	42	4. 土製品	48
4. 溝	44	5. 石製品	48
5. 畝状遺構	45	IV 結 語	49



第32図 東木津遺跡位置図〔2〕(1/5万)

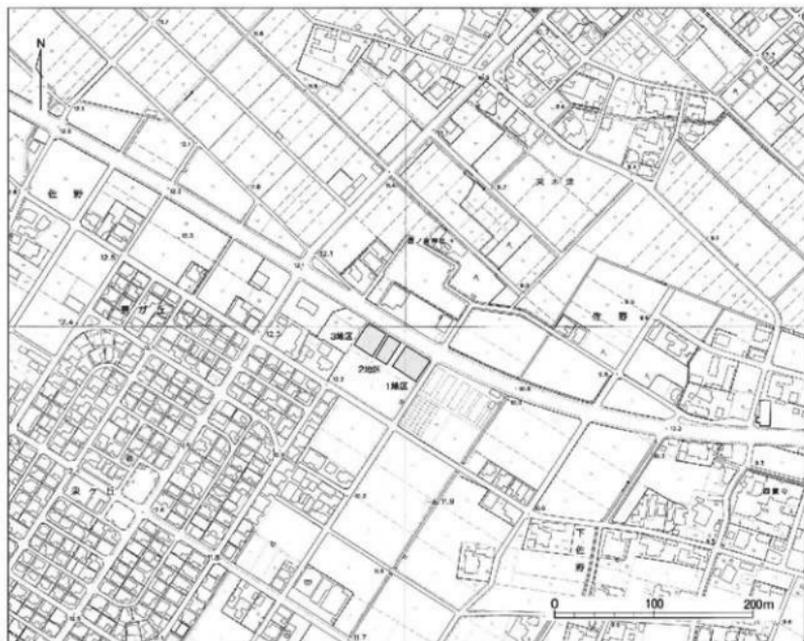
I 序 説

遺跡概観

東木津遺跡は、庄川扇状地の扇端部、東は千保川、西は祖父川が北流することにより生じた侵食によって段丘化した、佐野台地と呼ばれる標高10~20mほどの微高地の北東端部に立地する。

佐野台地は弥生時代中期~古墳時代初頭の遺跡が集中する地域で多くの墳墓や集落跡が検出されている。下佐野遺跡井波地区では古墳時代前期の竪穴住居址から土師器の一括資料が得られており、石塚遺跡都市計画道路地区・林地区では古墳時代初頭の前方後方墳を中心とする石塚古墳群が検出されている。東木津遺跡でも古墳時代初頭~中期の遺物が出土しており、佐野台地における該期の遺跡群との関連が想定される。

奈良平安時代の集落跡については、既往の調査から、整然とした建物配置や、土器に占める食膳具の比率の高さ、木簡・墨書土器・漆紙文書など文字資料の多さから官衙的性格が指摘されている。集落内を流れる溝では、人形・馬形・鳥形・琴柱形・刀子形・斎串などの木製祭祀具を使用した律令祭祀が行われている。北接する都市計画道路地区では「布忍郷」と刻書された横瓶や、「布師三□」と書かれた木簡が出土しており、当地が射水郡10郷の一つ「布師郷」に関連した地域の一つであった可能性も考えられている。



第33図 東木津遺跡今井地区位置図 (1/5,000)

調査に至る経緯

今井啓祐氏・今井イミ子氏所有の高岡市佐野890-1の水田が3筆に分割され、開発工事が計画された。今井氏及び仲介の関口不動産と協議して、計画が具体化した地区から順次試掘調査を実施するに至った。

1. 今井1地区、高岡市佐野890-4、店舗建設、調査対象面積960㎡、発掘調査面積683㎡
2. 今井2地区、高岡市佐野890-5、資材置場、調査対象面積705㎡、発掘調査面積331㎡
3. 今井3地区、高岡市佐野890-1、店舗建設、調査対象面積748㎡、発掘調査面積572㎡

調査経過

調査は平成19年10月10日から実施した。調査地区名は東から1～3地区とした。1地区から重機による表土掘削を開始した。調査は遺構確認を原則とし、土坑SK01・02や溝SD01～03などの主要な遺構は、一部の掘り下げを行った。掘立柱建物址(SB01～03)は、一部を掘り下げ、柱痕確認作業を行った。11月9日、1地区の重機による埋め戻しを行い、12月3日から2・3地区の重機による表土掘削を開始した。19日、2・3地区の空掘を行った。26日、重機による埋め戻しを行い、現地における調査を終了した。

基本層序

第I層から第VI層を確認した。第I層(灰褐色土=水田耕作土)、第II層(灰褐色土=水田床土)、第III層(暗褐色土)、第IV層(黒褐色土=古代の遺物包含層)、第V層(黒褐色土)、第VI層(黄褐色砂質土)である。

検出遺構

検出遺構総数は、掘立柱建物址4棟(SB01～04)、構址7条(SA01～07)、土坑114基(SK01～17)、溝41条(SD01～12)、畝状遺構3箇所(SN01～03)、ピット671基、噴砂である。遺構番号は、主なものについて1地区から3地区まで連番で付した。各地区の遺構数の内訳は次のとおりである。

[1地区]	[2地区]	[3地区]
構址1条(SA05)	掘立柱建物址1棟(SB04)	掘立柱建物址3棟(SB01～03)
土坑49基(SK01～12・15)	構址1条(SA04)	構址5条(SA01～03・06・07)
溝19条(SD01～10)	土坑34基(SK19)	土坑31基(SK16・17)
畝状遺構	溝3条(SD03)	溝20条(SD04～07・11・12)
ピット316基	畝状遺構	畝状遺構
	ピット109基	ピット246基

出土遺物

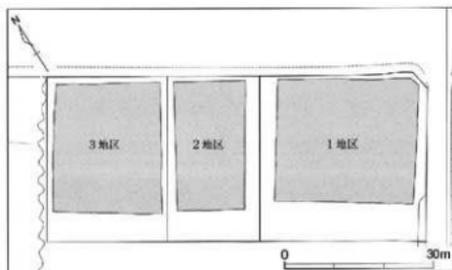
土器類：土師器、須恵器、珠洲

土製品：土錘、獸脚

石製品：砥石

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系の第Ⅷ座標系(原点は北緯36°00'00"、東経137°10'00")に合わせた。東西をX軸とし、南北をY軸とした。グリッド左下隅の数値がそのグリッドを表す。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ15.555km、北へ81.08km向かった位置である。一辺5m四方を一区画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第34図 東木津遺跡今井地区 調査地区位置図(1/1,000)

Ⅱ 遺 構

1. 掘立柱建物址

4棟の掘立柱建物址が確認され、いずれも奈良平安時代のものである。

掘立柱建物址 S B 01

3地区で検出され、S B 02・03に切られる掘立柱建物址である。桁行4間、梁間1間の側柱建物で、南西側に庇を有する。主軸方位はN-48°-Wを示す。柱穴は隅丸長方形を呈し、規模は50cm×70cmから85cm×1.4mまでの幅がある。柱間距離は桁行で1.8m~2.5m、梁間4.6mである。柱穴の確認面付近から須恵器杯蓋(7446)が出土している。

掘立柱建物址 S B 02

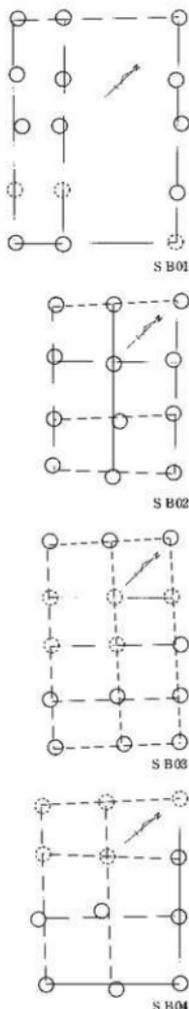
3地区で検出された、S B 01を切る掘立柱建物址である。桁行3間、梁間2間の総柱建物で、主軸方位はN-45°-Wを示す。柱穴は隅丸の方形ないし長方形を呈し、規模は40cm×50cmから80cm×1.3mを測る。柱痕が検出されなかったことから、柱は抜き取られていると考えられる。柱間距離は桁行2.1m~2.5m、梁間2.5mである。柱穴の確認面付近から須恵器杯(7432)・杯蓋(7455・7456)が出土している。

掘立柱建物址 S B 03

3地区で検出された。S D 07に切られるために全容は不明だが、桁行4間、梁間2間の総柱建物と考えられる。主軸方位はN-50°-Wを示し、S B 02とはわずかに異なる。柱穴は隅丸の方形ないし長方形を呈し、規模は60cm×70cmから70cm×1.1mを測る。柱痕は検出されず、柱は抜き取られていると考えられる。柱間距離は桁行1.9m、梁間2.4m~2.7mである。柱穴ないし柱の抜き取り穴の確認面付近から、土師器杯(7402)・須恵器杯(7436)・燵蓋(7469)・火甕(7474)・獸脚(7601)などが出土した。大甕(7474)はS B 03以南で広く出土した破片が接合したもので、2地区でも出土している(図面37)。

掘立柱建物址 S B 04

2地区で検出された。S B 01~03とは溝S D 04によって隔たれている。調査地区外にかかるために全容は不明だが、桁行3間、梁間2間の総柱建物と考えられる。主軸方位はN-53°-Wを示し、S B 03とはほぼ同じである。柱穴は隅丸の方形ないし長方形を呈し、規模は40cm×50cmから60cm×80cmを測る。柱間距離は桁行2.3m~2.8m、梁間2.6mである。



第35図 東木津遺跡今井地区
掘立柱建物址概略図(1/200)

2. 柵址

7条の柵址を検出した。いずれも奈良平安時代のものと考えられる。

柵址 S A 01

S B 02の北東側に位置し、S A 02と平行する。N-46°-Wの方位で4基の柱穴が並び、中央2基の柱穴はS B 02と柱筋が揃っている。柱穴は40cm~70cm規模の不整形を呈し、柱間距離は1.7m~1.9mを測る。

柵址 S A 02

S B 02とS A 01の間に位置する。暗渠の重複のため1基を欠くが、N-44°-Wの方位で4基の柱穴が並びと考えられる。柱穴は40cm~60cmの不整形を呈し、中央の柱穴はS B 02と柱筋が揃っている。

柵址 S A 03

S B 03の北東側に位置し、N-46°-Wの方位に3基の柱穴が並び、S D 07に切られるが、北西側に延びる可能性がある。柱穴は80cm~1.0m規模の隅丸長方形を呈し、S B 03と柱筋が揃っている。

柵址 S A 04

2地区のS B 04の南東側で検出された。S D 03とは3.5m~4.5mの距離でほぼ平行している。N-50°-Wの方位に4基の柱穴が並び、柱穴は20cm~35cm規模の不整形を呈し、柱間距離は1.7m~2.5mを測る。S A 04とS D 03の間に小ピットが多数検出されていることが注意される。

柵址 S A 05

1地区で検出された。S D 03とは2.8m~3.0mの距離で平行している。N-56°-Wの方位に5基の柱穴が並び、柱穴は25cm~35cm規模の不整形を呈し、柱間距離は1.3m~1.7mを測る。S D 03との間には遺構が少なく、S A 05以北に畝状遺構が密に検出されている点が注意される。

柵址 S A 06

3地区西部で検出された。N-52°-Eの方位に3基の柱穴が並び、S D 11とは1.6mの距離をおいて平行する。柱穴は60cm~75cm規模の隅丸長方形を呈し、柱間距離は2.1mを測る。

柵址 S A 07

3地区南部で検出された。N-37°-Eの方位に4基の柱穴が並び、S D 04とは2.5mほどの距離をおいて平行する。柱穴は50cm規模の隅丸長方形を呈し、柱間距離は1.8m~2.5mを測る。

3. 土坑

114基の土坑を検出したが、主要な19基について以下に記す。S K 01~03、S K 06~12は古墳時代と考えられる土坑である(第36図)。

土坑 S K 01・02

1地区北東部で検出された重複する土坑である。S K 02がS K 01を切っている。S K 01は長軸2.06m×短軸1.34mの隅丸長方形を呈し、深さ30cmである。南東側の壁は崩落により最大20cmほど抜がっている。長軸方位はN-80°-Wを示す。S K 02は長軸1.82m×短軸1.06mの隅丸長方形を呈し、深さ24cmである。南側の底面は一段高く、深さ14cmである。長軸方位はN-20°-Wを示す。

S K 01・02の埋没後の上面においては、長軸3.0m×短軸1.2mの楕円形の範囲内から多量の土器が出土した。出土した土器は古墳時代前期~中期の椀・高杯・器台・鉢・壺・甕である。土器の出土レベルは水平で、範囲内の離れた位置での接合関係もみられる。赤彩の壺(7111・7121)以外には完形に復元されるものはない。

土坑SK03

1地区の東側で検出された土坑である。長軸70cm以上、短軸62cmの隅丸長方形を呈するとみられる。深さ18cmである。長軸方位はN-62°-Wを示す。土坑西端の底面から、口縁部を北側にして倒れた状態の土師器甕(7147・7149)が出土した。

土坑SK04

1地区の南部で検出された。径2.1mの円形を呈し、断面は漏斗状である。中心部は径80cmで、深さ58cmを測る。形状から井戸址の可能性が考えられるが、時期は不明である。

土坑SK05

1地区の南部で検出された。長軸22cm以上、短軸20cmの楕円形を呈するとみられる。掘削を行っていないため深さは不明であるが、確認面で須恵器杯蓋(7235)が出土している。

土坑SK06~12

1地区の中央部で検出された土坑群である。いずれの土坑も隅丸長方形を基本とし、規模は長軸80cm×短軸45cm(SK08)から長軸1.66m×短軸70cm(SK11)までの幅がある。長軸方位はN-80°-Wの一群とN-10°-Eの一群に区別され、各群においては重複なく整然とした配置がみられる。

土坑群の南側、SK12周辺には遺物集中範囲がみられた。径3.8mの不整形円の範囲内で、古墳時代前期の高杯・器台・壺・甕などが出土した。SK01・02と同様に土坑埋没後の上面での出土であるが、SK01・02よりも破片の細片化が進んでいた。遺物集中範囲の南端には非赤彩の壺の破片がまとまって出土したが、復元には至らなかった。土坑群はこれらの遺物に近い時期が考えられる。

土坑SK13・14

1地区で検出された重複する土坑である。SK14がSK13を切っている。SK13は1.1m×1.8mの隅丸長方形を呈し、深さは20cmである。SK14は1.9m×2.3mの不整形円形を呈し、深さは37cmである。

土坑SK15

1地区の西部で検出された土坑である。径33cmの円形を呈し、深さ30cmである。奈良平安時代の柱穴掘り方の可能性が考えられるが、古墳時代の土師器壺の口縁部(7116)が出土している。

土坑SK16

3地区で検出された。北部をSD06に切られるが、1.4m規模の隅丸長方形と推測される。覆土上層から傘大の礫1点とそれを囲むように須恵器大甕(7474)の破片数点が出土している(図版25)。大甕は破砕されたものと考えられる。

土坑SK17

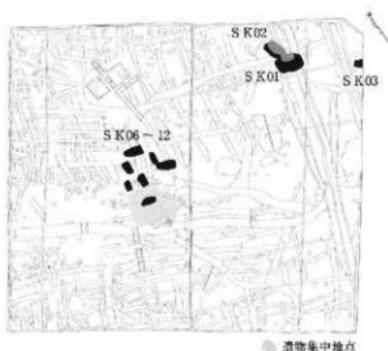
3地区で検出された。柱穴の重複の可能性もある土坑である。確認面で須恵器杯蓋(7454)が出土している。

土坑SK18

1地区で検出された。長軸4.0m、短軸1.6mの不整形円形を呈する。確認面で古墳時代の土師器壺が出土している。

土坑SK19

2地区で検出された。長軸130cm、短軸55cmの



第36図 東木津遺跡今井1地区
古墳時代土坑位置図(1/400)

隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-45°-Eを示す。掘削を行っていないため深さは不明であるが、確認面から須恵器杯(7304)が出土している。

4. 溝

41条の溝を検出したが、主要な12条について以下に記す。

溝SD01

1地区東部に位置する。N-19°-Eの方位に走向し、2.5m東側にはSD02が並走する。南部でSD08を切っている。幅50cm~90cm、深さ18cm~20cmである。断面形状は弧状である。底面標高は南端より北端が40cm低い。須恵器杯(7225)が出土している。

溝SD02

1地区東端に位置する。N-15°-Eの方位に走向する。2度の掘り直しが認められ、古い段階からSD02A→SD02B→SD02Cとする。SD02Aは逆台形の断面形を呈し、上幅130cm、下幅45cm、深さ55cmである。SD02BはSD02Aから西へわずかに逸れる。幅125cm以上、深さ36cmを測り、断面形状は弧状である。SD02CはSD02Aから東へ逸れる。幅93cm、深さ23cmを測り、断面形状は弧状である。遺物はSD02Aから須恵器杯・杯蓋、SD02Bから須恵器壺(7240)などが出土している。SD02B、SD02Cは、それぞれSD08、SD01と対になり、道路址の側溝となる可能性がある。側溝の中心距離は前者が5.1m、後者が4.5mである。SD02Aは道路址に先行する溝である。



第37図 東木津遺跡今井1地区 溝断面模式図(1/80)

溝SD03

1地区から2地区にかけて検出された溝である。N-59°-Wの方位に走向する。東はSD01・08に合流する可能性があり、西はSD04の手前で途絶すると考えられる。幅50cm~105cm、深さ16cm~38cmである。土師器器台(7127)・壺(7151)・鉢(7202)、須恵器杯(7205・7206・7215・7218・7227・7305・7310・7313・7314)・鍋(7319)・壺(7320)などが出土している。

溝SD04

3地区で検出された溝である。SD06との合流点でやや折れ曲がる。北部での方位はN-43°-Eを示す。幅50cm~105cm、深さ22cm~30cmである。出土遺物は須恵器杯(7419・7421・7433)・杯蓋(7447・7450・7452)・壺(7474)などである。

溝SD05

3地区北部に位置する。N-48°-Wの方位に走向し、東側はSD04に合流すると考えられる。幅22cm~30cmで、深さは未掘削のため不明である。

溝SD06

3地区の中央部をN-55°-Wの方位に走向し、東側はSD04に合流する。SK16・SD11を切り、SD07に切られる。幅86cm、深さ14cmである。須恵器杯(7420・7426)・稜杯(7445)・瓶(7462)・壺(7464)などが出土している。

溝SD07

3地区に位置し、SB01・03、SA03、SD05・06を切っている。幅2.2m～3.6mであるが、未掘削のため深さは不明である。確認面で須恵器杯(7437)・甕(7473)、珠洲甕(7502)が出土している。

溝SD08

1地区東部に位置し、南部でSD01に切られる。N-18°-Eの方位に走向し、幅45cm～65cm、深さ12cm～16cmを測る。SD02Bとともに道路址の側溝となる可能性が考えられる。土師器高杯(7106)、須恵器杯(7208)などが出土している。

溝SD09

1地区に位置する。不定方向に走向し、北部では北と東へ分岐する。幅126cm以上、深さ34cmである。須恵器杯(7207・7211・7221)などが出土した。

溝SD10

1地区に位置し、北部で東へ折れ曲がる。幅64cm、深さ18cmである。須恵器杯(7204)が出土した。

溝SD11

3地区に位置し、SB02・SD06に切られる。N-50°-Eの方位に走向し、西への直角の分岐があり、北端はSD12に合流する可能性がある。幅80cm、深さ20cmである。土師器甕(7409)、須恵器杯(7415・7422)・椀杯(7445)が出土した。

溝SD12

3地区北部に位置する。SB01に切られる。N-48°-Wの方位に走向し、東端はSD11に合流する可能性がある。幅61cm、深さ19cmである。土師器杯(7403)・甕(7410)、須恵器杯(7442)などが出土している。

5. 畝状遺構

細い溝が一定の間隔をおいて並走し、群をなすものであり、畑址と考えられる。1地区から3地区にかけての広範囲に検出されている。切り合いにより3時期に区分され、SN01→02→03の順に新しくなる。

畝状遺構SN01

1地区SD08から3地区SD04の間で検出された。北東・南西方向に走向し、SB04、SD03、SN02・03に切られる。溝の規模は、長さ0.5m～6.5m、幅30cm～50cmを測る。

畝状遺構SN02

1地区の北部から2地区の北東部で検出された。南北方向に走向するが、やや蛇行している。SK11、SN01を切り、SN03に切られる。各溝の南端はSD03と平行に揃っている。溝の規模は、長さ3.5m～13.0m、幅30cm～50cmを測り、溝の長さが際立っている。溝間の距離も概ね2.0mで、幅広である。

畝状遺構SN03

1地区のSD08から3地区のSD11の間で検出された。北西・南東方向に走向し、最も占有面積の広い畝状遺構である。SB03、SA03、SN01・02を切る。溝の規模は、長さ1.0m～8.0m、幅30cm～40cmである。2地区で須恵器杯(7312)が、3地区で須恵器杯(7444)・杯蓋(7453)が出土している。

Ⅲ 遺 物

1. 古墳時代の土器類

土師器

高杯9点・椀1点・壺10点・器台11点・鉢2点・台付壺2点・甕19点を図示した。すべて1地区出土である。古墳時代前期から中期にかけてのものである。

高杯：図面80-7101-7109。高杯は杯部の形状により、内湾口縁（7101-7103）、有段口縁（7104）、盤状（7105-7107）に分けられる。脚部は外反し、有段のもの（7107）もみられる。口径は30.0cm（7104）の大型と、15.9cm（7106）～20.6cm（7101他）の中型がある。7105-7107は内外面に、7108は外面に赤彩を施す。

椀：図面80-7110。口縁部が内湾し、外面をへら磨きするものである。

壺：図面80・81-7111-7120。壺は口縁部の形状により、有段口縁（7111・7112・7116）、有段で拡張するもの（7114・7115）、複合口縁（7113）、短く外反するもの（7120）に分けられる。外面はへら磨きが多用されるが、頸部に刷毛目がみられるのは7114・7115である。7114・7116は口縁部内面に、7120は胴部外面に刷毛目を施す。7111は赤彩を施す。

台付壺：図面80・81-7121・7122。7121は球形の胴部と有段口縁を呈する。外反する短い脚部が付き、赤彩を施す（7121・7122）。

器台：図面82-7123-7133。器台は受部の口径により、大型（7123・7124・7133）と小型（7125-7132）に分けられる。大型の7123・7124は内外面に刷毛目が多用される。小型器台の脚部には3方ないし4方の透孔が入る。

鉢：図面82-7134・7135。鉢は2点あり、7134は有段口縁で胴部刷毛目である。7135は鉢形のミニチュア土器である。

甕：図面82・83-7136-7154。甕は口縁部の形状により、有段口縁（7136-7140・7148）、平縁口縁（7141-7147）、丸縁口縁（7149）がある。口縁部に凹線状ないしカキ目状横ナデがみられるのは7137-7141・7145である。胴部外面はへら削り後の刷毛目を主体とし、内面はへら削り・刷毛目・ナデがみられる。

2. 古代の土器類

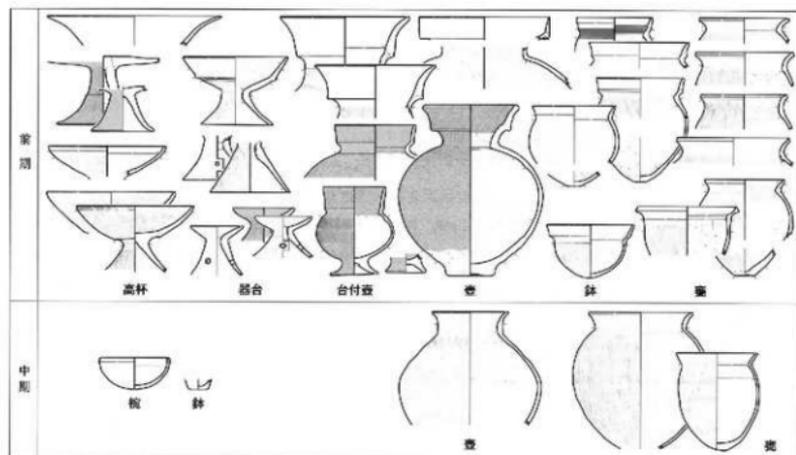
土師器

図面84-7201-7203、7401-7411。1地区は鉢2点、甕1点を図示した。鉢の胴部調整は回転へら削りするもの（7201）、叩き後に手持ちへら削りするもの（7202）がある。7203は長胴甕である。3地区は杯6点、蓋1点、甕4点を図示した。杯（7401-7406）は赤彩を施すもの（7401・7403）と施さないもの（7402他）がある。底部調整は回転へら削り（7401）、手持ちへら削り（7402）、回転糸切り無調整（7404）がある。7405・7406は高台が付く。7402・7403は内面へら磨きを施す。蓋（7407）は赤彩を施す。杯（7401・7402・7404）と蓋（7407）は胎土に海綿骨針を含む。甕は長胴甕（7408・7409）と小型甕（7410・7411）があり、長胴甕はカキ目を施す。

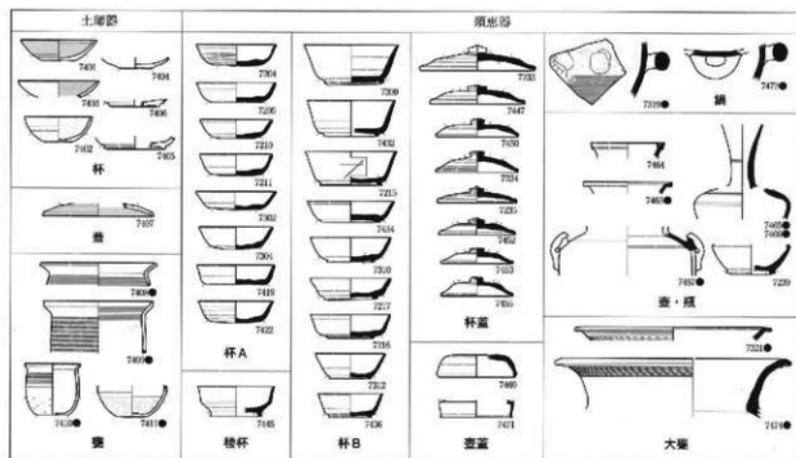
須恵器

計126点を図示した。器種は杯、杯蓋、壺蓋、横瓶、長頸瓶、壺、甕がある。

杯A：図面85・87・88-7204-7214、7301-7308、7412-7431。杯Aは39点を図示した（1地区11点、2地区8点、3地区20点）。口径は12.8cm（7301）～10.4cm（7308）である。底部はヘラ切り無調整を原則とするが、7211は回転ヘラ削り調整を、7415・7420はナデを施す。内底部の仕上げナデを施すのは7415である。7414は破断面が研磨されており、研磨具として転用されたと考えられる。



第38図 東木津遺跡今井地区 古墳時代土師器分類（1/8）



第39図 東木津遺跡今井地区 古代土器分類（1/8、●は1/10）

杯B: 図面85-89-7215-7232, 7309-7317, 7432-7445。杯Bは41点を図示した(1地区18点、2地区9点、3地区14点)。7445は稜杯である。口径は15.7cm(7224)~14.0cm(7432)の大型、12.7cm(7216)~11.0cm(7220)の中型、10.7cm(7221)~9.8cm(7437)の小型に分類される。底部はヘラ切りを原則とする。ヘラ切り後にナデを施すのは7229・7230、回転ヘラ削り調整を施すのは7316・7439である。内底部の仕上げナデ調整は、大型品を中心に約3分の1の割合で施される。杯A・Bでは、焼成前のヘラ書きは外面に、焼成後の刻書は内面に施されるものが目立つ。

杯蓋: 図面86・87・89-7233~7236, 7318, 7416~7461。杯蓋は21点を図示した(1地区4点、2地区1点、3地区16点)。口径は18.3cm(7233)~16.0cm(7318)の大型、15.2cm(7447)~12.9cm(7450)の中型、12.7cm(7235)~11.4cm(7455)の小型に分類される。つまみは宝珠形のほかにボタン状のもの(7461)がある。天井部はヘラ切りを原則とし、回転ヘラ削り調整を施すのは7318・7451・7452・7454・7460である。天井部内面にナデを施すのは7233・7318などの大型品に多い。

壺蓋: 図面86・90-7237, 7469~7471。7237は天井部ヘラ切り、7471は天井部ト端に沈線を施す。

壺・瓶: 図面86・90-7238~7240, 7462~7468。7238は横瓶の口頸部である。7239・7462・7463・7465・7466・7467は瓶である。7465・7466は同一個体で、口縁部と胴部に沈線を廻らせる。7467は凸帯付双耳瓶である。7240・7464・7468は壺である。

鍋: 図面87・90-7319, 7472。胴部に横方向の環状把手が付くものである。

甕: 図面86・87・90-7241~7245, 7320・7321, 7473・7474。7241・7320・7321・7474は人妻の口頸部である。7474はSK16で破砕され、SD04やSB03周辺に破片が散乱していたものである。

3. 中世の土器類

図面91-7501・7502は珠洲である。7501は口径54.0cmの甕の口頸部である。7502は甕の底部で、底径は14.2cmである。ともに3地区出土である。このほか、珠洲甕の胴部内面を研磨具として転用した破片がある。

4. 土製品

図面91-7601・7602。3地区出土の獣脚と土錘である。7601は獣脚で、長さ5.2cm、幅2.4cmである。ヘラ削りで多角柱状に成形され、下端に5条の切り込みを入れる。未還元焼成である。7602は長さ3.8cm、幅3.0cmの土錘である。孔径1.0cm、重さ25.6gである。

5. 石製品

図面91-7701・7702。2地区出土の砥石である。7701は長さ16.9cm、幅6.7cm、厚さ4.7cm、重さ591.5gであり、破砕されたものと考えられる。7702は長さ8.5cm、幅3.8cm、厚さ5.2cm、重さ235.5gである。

IV 結 語

検出された遺構の時期は、主に古墳時代前期から中期と奈良・平安時代である。前者はS K01～03、S K06～12、S K15・18などの土坑と、土坑周辺の遺物集中地点である。後者は掘立柱建物址S B01～04、柵址S A01～07、溝S D01～06・08・11・12などが挙げられる。このほか、中世以降の溝S D07がある。

古墳時代

古墳時代の土坑は1地区にまとまっており、このうちS K01・02とS K06～12はそれぞれ土坑群をなし、覆土上面から古墳時代前期を主体とした土器が出土している(第36図)。各土坑は隅丸長方形の平面形と二方向の長軸方位が共通し、規格的である。S K01・02以外は遺構確認に留まっているが、これらの土坑は墓坑である可能性が考えられ、土坑上に集中する土器は墓坑に供献されたものと考えられる。S K01・02は、S K06～12との間に、規模の大きさや供献土器の豊富さで格差を有しており、被葬者の階層差による違いと推測される。S K01・02上には古墳時代中期の土器供献も行われており、古墳時代前期～中期において1地区周辺が土坑墓からなる墓域であったことが窺われる。供献土器の器種は、有段壺・平縁壺、有段壺、有段鉢、有段高杯・盤状高杯などの在地系土器と、内湾高杯、小型器台などの外来系土器から構成される。周辺では東木津遺跡⁹⁸郡市計画道路地区の凹地S X06や、⁹²下佐野遺跡井波地区S I02で同時期の資料がある。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、切り合いによってI期からIV期にわたる変遷が想定される(第40図)。2・3地区においては、溝S D04～06に囲まれる長方形の区画内に新旧の掘立柱建物址と柵址があり(II期・III期)、これより古い遺構をI期、新しい遺構をIV期とした。1地区は、S D02の2度の掘り直しと廃絶がI期～IV期に相当し、畝状遺構の3時期の変遷は、掘立柱建物址などとの切り合いや位置関係により、II期～IV期に相当すると考えられる。I期からIV期の時期は概ね8世紀後半～9世紀前半のなかで推移する。

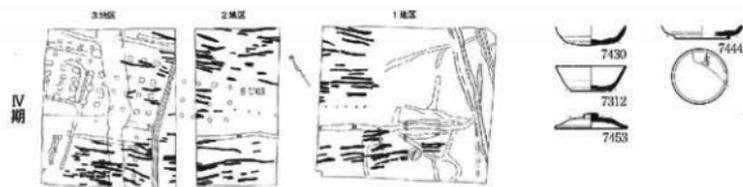
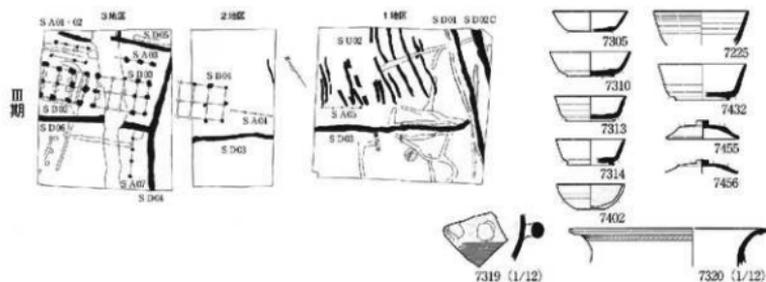
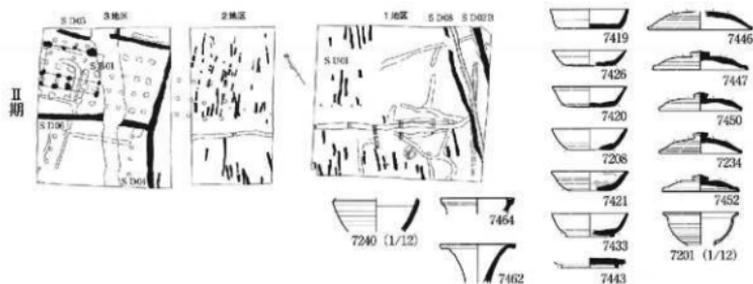
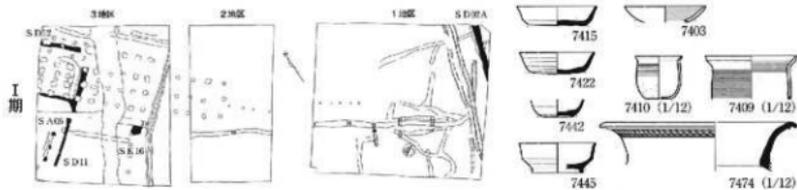
I期は、II期の祖形となるような小規模区画が3地区に出現する(S D11・12)。建物は未検出であるが、柵址S A06がある。3地区のS K16では須恵器大甕が破砕され、破片が2地区でも出土している。1地区では、集落の東限となる溝S D02Aが掘削される。

II期には、I期の小規模区画が拡張され、3地区に東西14m、南北20m以上の長方形区画が形成される(S D04～06)。区画内には竪柱の掘立柱建物址S B01が建てられる。I期のS D02Aを踏襲する形でS D02BとS D08が掘削され、道路址が想定される。1地区から2地区にかけては畑址とみられる畝状遺構S N01が拡がる。

III期は、II期から継続する長方形区画内に掘立柱建物址S B02・03と柵址S A01～03が建てられる。さらにS D06を東へ延長するS D03が掘削され、その北側にも掘立柱建物址S B04と柵址S A04・05が建てられる。掘立柱建物址は総柱建物へと変化する。柵址S A04・05より北東側に畝状遺構S N02が拡がるが、占有面積はII期から減少する。1地区の道路址は溝の掘り直しがあり(S D01・02C)、道路幅の縮小がみられる。

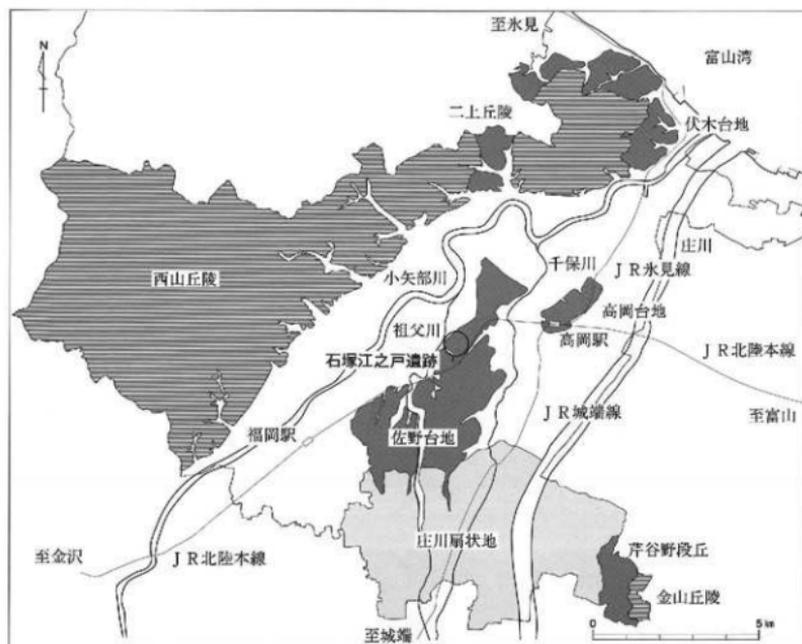
IV期には、掘立柱建物址や道路址が廃絶し、1地区から3地区にかけてほぼ全面に畝状遺構S N03が拡がる。畝状遺構の主軸方位が前代までと直交する方位へと変化する。

総柱建物のS B02～04は区画溝を伴い、棟方向を揃えて立ち並ぶ配置から、倉庫群と位置付けてよいものである。東木津遺跡の古代集落の最盛期はこの総柱建物が存在したIII期といえる。その後、これらの建物は柱が抜き取られていることから、IV期には建物の解体が行われ、当調査地区一帯は畑地へと転換されたものと考えられる。



第40図 東木津遺跡今井地区 古代遺構変遷図 (1/800) ※遺物は1/8

4. 石塚江之戸遺跡、福島地区



第41図 石塚江之戸遺跡位置図〔1〕 (1/15万)

石塚江之戸遺跡福島地区、目次

I 序 説	53	III 遺 物	57
II 遺 構	55	1. 土器類	57
1. 土 坑	55	2. 銅製品	57
2. 溝	55	IV 結 語	58
3. 凹 地	56		



第42図 石塚江之戸遺跡位置圖(2) (1/5万)

I 序 説

遺跡概観

当「石塚江之戸遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.4kmに位置する。庄川の形成した扇状地の末端部、佐野台地の縁辺部にあたる。遺跡の西側を祖父川が蛇行しながら北流し、国道8号線が北東～南西方向に走る。遺跡中央部は都市計画道路下伏間江福田線が北西～南東方向に走り、遺跡東側には主要地方道高岡環状線が南北に走る。

標高10～11mの微高地上に所在する当遺跡では幾度かの埋蔵文化財発掘調査が実施されており、縄文時代後期、古墳時代、中世を主体とする遺跡であることが確認されている。遺跡範囲は南北230m×東西310mを測る。また南東側には弥生時代の集落遺跡として県西部を代表する遺跡であり、縄文時代後期から中世に至る複合遺跡として認識されている石塚遺跡が隣接して所在している。



第43図 石塚江之戸遺跡福島1・福島2地区位置図 (1/5,000)
A—福島1地区・B—福島2地区

調査に至る経緯

平成19年4月に、施主及び地主の福島三千雄氏より当該地（高岡市上北島197-3、198-1、200-1、200-2、201-1）において共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。その後、協議を行い承諾を得て試掘調査を実施するに至った。また、同年9月に福島三千雄氏より隣接地（高岡市上北島201-5、200-1、199-1）において別棟の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出され、協議承諾の後、試掘調査を実施した。なお最初の調査を福島1地区、隣接地の調査を福島2地区とし整理報告する。

調査経過

発掘調査は、平成19年4月13日から同年4月20日までの福島1地区と平成19年10月3日～10月11日までの福島2地区の調査を実施した。

福島1地区

遺構が存在する可能性が高いと思われる調査地区北側に試掘坑（トレンチ）を設定し、重機により表土の掘削を行った。掘削開始から間もなく東西方向に延びる溝を検出、規模等の確認のため可能な限り拡張を行った。北側での掘削後南側で1箇所の試掘坑を設定、表土掘削を行った。その後、遺構の検出、確認、記録の作成を行った。今回は試掘調査のため、遺構は検出面の確認に止めた。また、溝の一部は掘り下げを実施し内容の把握に努めた。調査対象面積は1,241㎡、発掘調査面積は90㎡である。

福島2地区

福島1地区と隣接していることから、溝の繋がりを意識し南北に2本の試掘坑（トレンチ）を設定し、北側から重機により表土掘削を開始した。掘削開始直後溝の続きを検出、さらに調査地区中央で南北方向に延びる溝を検出した。このため2本の試掘坑の中央を繋ぐ形で拡張を行い、溝の繋がりを確認した。その後、遺構の検出、確認、記録の作成を行った。また前回同様遺構は検出面の確認に止め、一部分の掘り下げによる内容の把握を行った。調査対象面積は630㎡、発掘調査面積は160㎡である。

基本層序

両地区共通に厚さ約20cmの表土（耕作土）の下に、黄褐色粘質土からなる地山（基盤層）を確認した。

検出遺構

〔福島1地区〕

土坑4基（SK01～04）
溝5条（SD01～05）
凹地1基（SX01）

〔福島2地区〕

土坑3基（SK05～07）
溝3条（SD01、06、07）
凹地1基（SX02）

出土遺物

〔福島1地区〕

土器類：土師器、須恵器、珠洲、陶磁器

〔福島2地区〕

土器類：土師器、須恵器、珠洲、陶磁器
鋼製品：鋼銭

グリッド

調査地区のグリッドは世界測地系の平面直角座標系の第Ⅶ座標系（原点は北緯36° 00′ 00″、東経137° 10′ 00″）に合わせた。東西をX軸とし、南北をY軸とした。グリッドの左下隅の数値がそのグリッドを表す。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ16.770km、北へ81.675km向かった位置である。一辺5m四方を一區画とし、グリッドを割り付け、メッシュを表示した。

Ⅱ 遺 構

1. 土坑

土坑S K01

福島1地区の調査地区中央(2・3・3)区サブトレンチ内で検出した。規模は長軸1.1m、短軸0.3m以上、深さ78cmを測る。平面形は不整形を呈し、南北はサブトレンチ外へ延びる。遺物は出土していない。

土坑S K02

福島1地区の調査地区中央(3・3)区サブトレンチ内で検出した。規模は長軸0.6m、短軸0.3m以上、深さ69cmを測る。平面形は楕円形を呈し、南北はサブトレンチ外へ延びる。遺物は出土していない。

土坑S K03

福島1地区の調査地区中央南側(3・2)で検出した。規模は長軸0.7m、短軸0.4mを測る。平面形は不整形を呈する。遺物は出土していない。

土坑S K04

福島1地区の調査地区中央東側(4・3)で検出した。規模は長軸0.5m、短軸0.4mを測る。平面形は円形を呈し、S D01を切る。遺物は出土していない。

土坑S K05

福島2地区の調査地区西側(5・3)で検出した。規模は長軸0.7m以上、短軸0.6m以上、深さ37cmを測る。平面形は遺構の西側、南側が調査地区外に延びるため、不明である。遺物は出土していない。

土坑S K06

福島2地区の調査地区中央(7・8・2・3)で検出した。規模は長軸3.3m、短軸1.2mを測る。平面形は楕円形を呈し、S D06を切り、S X02に切られる。

出土遺物は土師器、須恵器、珠洲である。図示した遺物は図面92-8102である。

土坑S K07

福島2地区の調査地区中央南側(9・2)で検出した。規模は長軸0.5m、短軸0.4mを測る。平面形は不整形を呈し、北側は調査地区外へ延びる。遺物は出土していない。

2. 溝

溝S D01

福島1地区の調査地区北側(1~4・3・4)から福島2地区の北側中央(5~7・3)で検出した。ほぼ東西方向に延び、S D02と併走する溝である。福島2地区で福島1地区から延びる溝を確認し、同一の溝S D01とした。規模は長さ28.8m以上、幅1.7m、深さ82cmを測る。溝の東端はカクランに切れ、西端と北側は、調査地区外へ延びる。S K04に切られる。また断面の観察から2回の掘り直しが確認できる。東から西側にかけて深くなる傾向がある。

出土遺物は土師器、珠洲、陶磁器である。図示した遺物は図面92-8205・8207・8209である。

溝S D02

福島1地区の調査地区南側(1~3・2・3)で検出した。規模は長さ7.2m以上、幅1.4m、深さ83cmを測る。S D01と併走し、東西方向に延びる。東西端部は調査地区外へ延びる。

出土遺物は土師器、珠洲である。図示した遺物は図面92-8204である。

溝SD03

福島1地区の調査地区南側(3・4・1・2)で検出した。規模は長さ42m以上、幅0.3~0.6m、深さ15cmを測る。北西方向から南東方向に延び、南北端は調査地区外へ延びる。SD04と併走しSD05を切る。

遺物は土師器が出土しているが、小片のため図がしていない。

溝SD04

福島1地区の調査地区南側(3・4・1・2)で検出した。規模は長さ40m以上、幅0.6m、深さ9cmを測る。北西方向から南東方向に延び、南北端は調査地区外へ延びる。SD03と併走する。

遺物は土師器が出土しているが、小片のため図示していない。

溝SD05

福島1地区の調査地区南側(3・1)で検出した。南西~南東方向に屈曲する溝で、規模は南西方向に0.7m以上、南東方向に0.6m以上、幅0.4m以上である。北側はSD03に切られるが、SD03・SD04に設けたサブトレンチでの切り合いは不明確であった。遺物は出土していない。

溝SD06

福島2地区の調査地区中央(8・1~3)で検出した。規模は長さ7.5m以上、幅0.6~0.9mを測る。南北方向に走り、溝の南端は調査地区外へ延びる。SK06に切られる。

出土遺物は珠洲である。図示した遺物は図面92-8202である。

溝SD07

福島2地区の調査地区中央(8・1~3)で検出した。規模は長さ10.2m以上、幅1.0m、深さ22cmを測る。南北方向にSD08と併走し、南北端は調査地区外へ延びる。SD08を切る。

出土遺物は珠洲である。

溝SD08

福島2地区の調査地区中央(8・1~3)で検出した。規模は長さ7.2m以上、幅0.8m、深さ13cmを測る。南北方向にSD07と併走し、北端は調査地区外へ延びる。SD07に切られる。遺物は出土していない。

3. 凹地

凹地SX01

福島1地区の調査地区中央から中央北西(1~3・2~4)にかけて広がる。サブトレンチにおいて、断面を観察したところ、人為的な掘り込みがみられないことや、堆積した土や一部礫が混在した状態から凹地とした。調査地区外に延びるため、プランを明確にすることができなかった。福島1地区の調査地区西側と中央・中央東側のサブトレンチ内で、SK01、SK02の土坑2基とSD01、SD02の2条の溝を確認した。

出土遺物は土師器、須恵器、珠洲である。図示した遺物は図面92-8103である。

凹地SX02

福島2地区の調査地区中央から東(5~8・1~3)にかけて広がる。サブトレンチにおいて、断面を観察したところ、人為的な掘り込みがみられないことから凹地とした。暗灰褐色粘質土に黄白色粘質ブロックが混入した堆積状態で、北側、西側、南側は調査地区外へ延びるため、全体のプランは不明確である。出土遺物は珠洲である。図示した遺物は図面92-8206である。

III 遺 物

1. 土器類

須恵器

杯B：図面92-8101。高台の付く杯である。底部はヘラ切り。底部以外は欠損している。

杯蓋：図面92-8102。天井部中央は欠損している。

壺：図面92-8103。高台の付く壺である。胴下部外面はヘラ削り。胴下部・底部以外は欠損している。

珠洲

鉢：図面92-8201～8207。8201は鉢の口縁部から胴部である。8202は片口鉢の口縁部から胴上部である。8203は鉢の口縁部である。端部は水平になる。8204～8207は摺鉢である。8204は摺鉢の口縁部から胴部で、オロシ目幅は3.0cm、条数は7条である。8205は摺鉢の底部である。オロシ目幅は3.0cm、条数は12条である。底部は、静止糸切りである。8206は摺鉢の底部である。オロシ目幅は2.7cm、条数は7条である。底部は、静止糸切りである。8207は内外面ともに磨滅している。

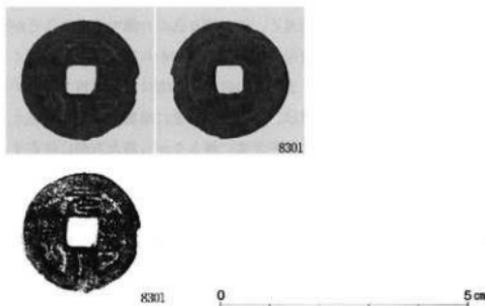
鉢形部：図面92-8208。鉢形の底部である。底部は、静止糸切りである。

壺：図面92-8209・8210。8209は壺の口縁部から頸部で、頸部はくの字に折れ端部はほぼ水平になる。8210は壺の口縁部で端部が外反する。

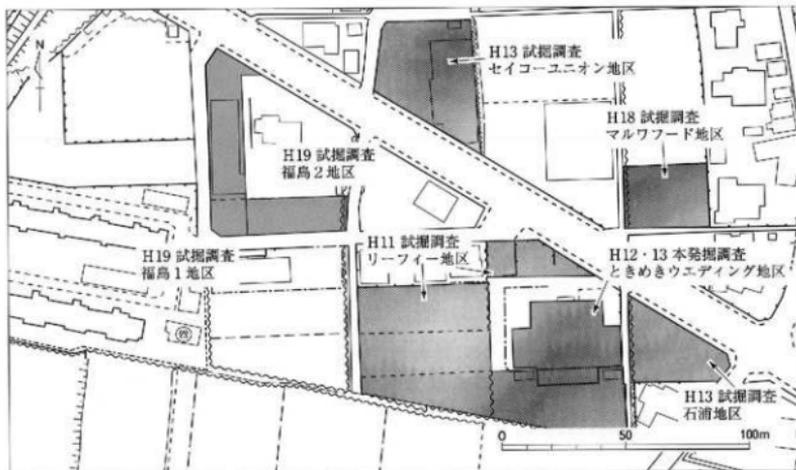
壺蓋：図面92-8211。天井部中央は欠損している。

2. 銅製品

銅銭 第44図-8301。北宋銭の元豊通宝（1078）である。



第44図 石塚江之戸遺跡福島2地区 出土銅銭（実大）



第45図 石塚江之戸遺跡 周辺既往の調査地区位置図 (1/2,000)

IV 結 語

今回の調査地区は遺跡のはほぼ中央に位置し、南東側には既往の調査地区であるリーフィー地区（平成11年度調査）、ときめきウェディング地区（平成12・13年度調査）、石漕地区（平成13年度調査）の3地区が隣接して並び、都市計画道路下伏間江福田線を挟んで北東側にはセイコーユニオン地区（平成13年度調査）、東側にはマルワフード地区（平成18年度調査）がある。これらの調査地区では主に中世の遺構・遺物が確認され報告されている。

今回の調査地区である福島1・2地区は表土直下に遺構確認面が存在し、検出した遺構の大半は圃場整備によって削平を受けていたため、遺構の残存状態は良好ではなかった。しかしながら、S D01・S D02は検出面から約80cmと残存率が比較的良く、深い掘り込みの溝であったことが窺える。S D01は2回の掘り直しが断面から確認でき、幾度かの使用が窺える。東側から西側にかけて深くなる傾向があり、排水溝の役割を持っていた可能性が考えられる。またS D01・S D02はほぼ東西方向に平行して走ることから区画溝としての性格が考えられる。これらの溝は、珠洲など中世に帰属する遺物が出上していることから、中世に属する可能性が高い。S D06・S D07はやや北東に傾きながら南北方向に併走する溝である。S D07からは珠洲が破片で少量出土しているのみで明確な性格・帰属時期は不明であるが、平行して延びる規格をもつことや覆土が類似していることからS D01・S D02と同時期に属する溝の可能性が考えられる。遺跡の存続時期に関しては、周辺地域において中世以前に属する遺物は確認されているが、遺構に伴うものは少ない。遺構に伴い遺物が出土するのは中世以降からで、周辺地区の調査成果を踏まえても当該遺跡は中世を主体とした遺跡として考えられる。今回の調査で中世の区画溝と思われる溝を確認したが、試掘調査といった限られた掘削範囲であったため、その規模などは明らかにはできなかった。また石塚江之戸遺跡において、中世段階の集落跡等が未だ確認されておらず、遺跡の性格付けをする判断は今後の調査に委ねたい。

5. その他の遺跡・調査地区

その他の遺跡・調査地区 目次

1. 中保B遺跡ア・ライズ地区	61
2. 岩坪岡田島遺跡稲元地区	62
3. 東木津遺跡二上商事地区	63
4. 赤丸古村遺跡大谷地区	64
5. 薮花寺遺跡トーカー地区	65
6. 越中国府岡連遺跡麻生地区	66
7. 出来田南遺跡小林地区	67
8. 中宮根館遺跡区画整理地区	68
9. 越中国府岡連遺跡ハマ興産地区	69
10. 中保B遺跡オスカーホーム地区	70
11. 鶯北新遺跡今市地区	71
12. 石塚遺跡平島地区	72
13. 前田墓所遺跡中田地区	73
14. 守山城跡イー・モバイル地区	74
15. 下石瀬遺跡吉田地区	76

No.	遺跡名	調査地区名	所在地	対象面積	発掘面積	調査期間
1	中保B遺跡	ア・ライズ地区	高岡市中保1289番	2,243㎡	158㎡	070409
2	岩坪岡田島遺跡	稲元地区	高岡市国吉1748番2	417㎡	32㎡	070423
3	東木津遺跡	二上商事地区	高岡市木津990番2	189㎡	40㎡	070510
4	赤丸古村遺跡	大谷地区	高岡市石堤210番	198㎡	4㎡	070524
5	蓮花寺遺跡	トーカン地区	高岡市蓮花寺643番	1,292㎡	54㎡	070605
6	越中国府岡達遺跡	麻生地区	高岡市伏木古国府15番2	109㎡	5㎡	070614～070627
7	出来田南遺跡	小林地区	高岡市出来田131番3	116㎡	16㎡	070627
8	中曽根館遺跡	区画整理地区	高岡市中曽根62番 外	7,675㎡	44㎡	070901～070903
9	越中国府岡達遺跡	ハヤマ興産地区	高岡市伏木古府元町430-5	2,856㎡	76㎡	070903～070906
10	中保B遺跡	オスカーホーム地区	高岡市中保1224番	1,707㎡	44㎡	070925～070926
11	鷺北新遺跡	今市地区	高岡市能町駅南28番	354㎡	47㎡	071001～071002
12	石塚遺跡	平島地区	高岡市石塚154番	199㎡	8㎡	071017
13	前田墓所遺跡	中田地区	高岡市大野136番1	809㎡	56㎡	071115～071120
14	守山城跡	イー・モバイル地区	高岡市東海老坂字馬鞍2089	25㎡	16㎡	080305～080307
15	下石瀬遺跡	吉田地区	高岡市石瀬574番9	158㎡	6㎡	080310

第4表 その他の遺跡・調査地区一覧表

遺跡概観

当「中保B遺跡」は、高岡市街地の南西郊、祖父川の左岸、標高10～13mの微高地に位置する。昭和39年の農業構造改善事業の工事により発見され、近年では平成8～11年にわたり土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施された。

基本層序

厚さ約10～20cmの表土の下に、厚さ約60～70cmの彰地土（盛土）があり、その下層に灰白色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市中保1289番

対象面積：2243㎡

発掘面積：158㎡

調査期間：平成19年4月9日

調査原因：宅地造成

調査結果

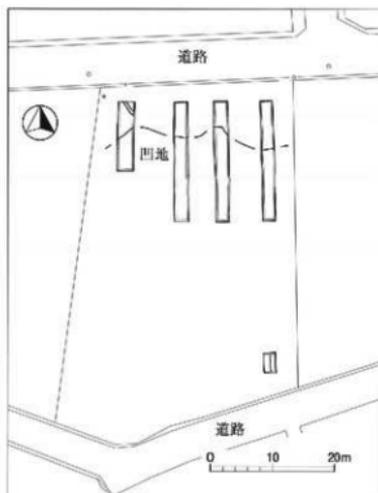
遺構は凹地を検出した。遺物は土師器、須恵器、珠洲、陶磁器が出土した。

1. 中保B遺跡

ア・ライズ地区



第46図 中保B遺跡位置図(1/5万)



第48図 中保B遺跡ア・ライズ地区全体図(1/800)



第47図 中保B遺跡ア・ライズ地区位置図(1/5,000)

2. 岩坪岡田島遺跡

稲元地区



第49図 岩坪岡田島遺跡位置図 (1/5万)

遺跡概観

当「岩坪岡田島遺跡」は、高岡市街地の北西郊、J R高岡駅の北西約4.6kmに位置する。岩坪集落の北側、岩坪工業団地の南西側に位置する。遺跡の東側を小矢部川が蛇行しながら北流し、北側から西側一帯には西山丘陵が広がる。古代の北陸道はこの丘陵の山麓を通り伏木の越中国府方向へ走る。近世以降は場所を変えながら山根道となり、小矢部川周辺を通る氷見街道と共に脇街道として利用された。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下に、厚さ約20cmの青灰色粘質土があり、その下層に灰色礫層からなる地山(基盤層)がある。

調査概要

所在地：高岡市四吉1748番2

対象面積：417㎡

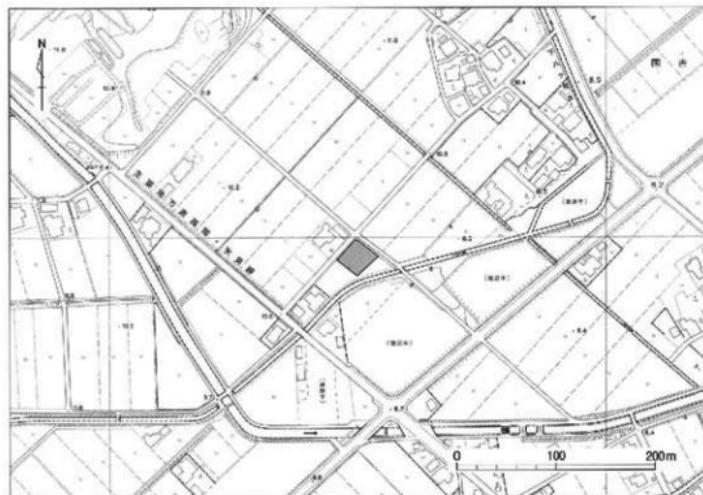
発掘面積：32㎡

調査期間：平成19年4月23日

調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第50図 岩坪岡田島遺跡稲元地区位置図 (1/5,000)

遺跡概観

当「東木津遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約3kmに位置し、泉が丘団地北側一帯にある。庄川の形成した扇状地の末端、佐野台地縁辺部にあたり、遺跡中央を都市計画道路下伏間江福田線が東西に走る。遺跡の東側を千保川、西側を和田川が流れ、これらに囲まれた標高約11～12mを測る微高地上に位置する。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下層に黄褐色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市木津990番2

対象面積：189㎡

発掘面積：40㎡

調査期間：平成19年5月10日

調査原因：駐車場造成

調査結果

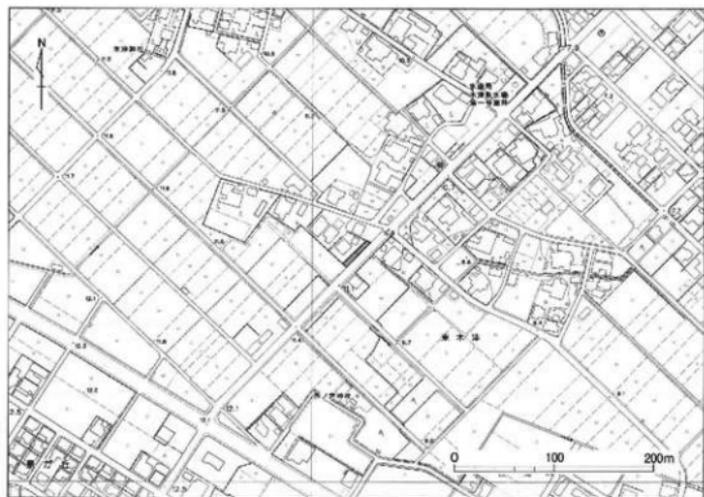
遺構は検出されなかった。遺物は土師器、須恵器が出土した。

3. 東木津遺跡

二上商事地区



第51図 東木津遺跡位置図（1/5万）



第52図 東木津遺跡二上商事地区位置図（1/5,000）

4. 赤丸古村遺跡

大谷地区



第53図 赤丸古村遺跡位置図 (1/5万)

遺跡概観

当「赤丸古村遺跡」は、高岡市街地の西方、J R 高岡駅の西6.3km、J R 西高岡駅の北西2.4km、小矢部川の左岸に位置する。高岡市の石堤地内の六市集落から谷内川を挟んで西側に隣接する旧福岡町の赤丸地内の古村集落にかけての遺跡である。

基本層序

厚さ約40cmの盛土の下に、厚さ約30cmの暗灰色粘質土があり、その下層に赤褐色粘質土からなる地山(基盤層)がある。

遺跡概要

所在地：高岡市石堤210番

対象面積：198㎡

発掘面積：4㎡

調査期間：平成19年5月24日

調査原因：物置の移設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は土師器が出土した。



第54図 赤丸古村遺跡大谷地区位置図 (1/5,000)

遺跡概観

当「蓮花寺遺跡」は、高岡市街地の東側、JR高岡駅の東約2kmに位置する。東西約150m×南北約200mの遺跡範囲をもつ、平安時代から中世にかけての寺院遺跡である。

基本層序

厚さ約50cmの盛土の下層に青灰色砂質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市蓮花寺643番

対象面積：1,292㎡

発掘面積：54㎡

調査期間：平成19年6月5日

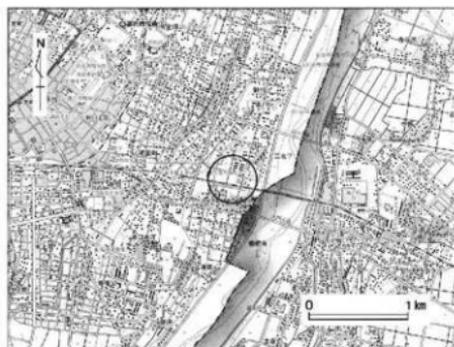
調査原因：宅地造成

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

5. 蓮花寺遺跡

トーカン地区



第55図 蓮花寺遺跡位置図（1/5万）



第56図 蓮花寺遺跡トーカン地区位置図（1/5,000）

6. 越中国府関連遺跡

麻生地区



第57図 越中国府関連遺跡位置図 (1/5万)



第58図 越中国府関連遺跡麻生地区位置図 (1/5,000)

遺跡概観

当「越中国府関連遺跡」は、高岡市街地の北東側、伏木台地一帯に位置する。この「越中国府関連遺跡」と総称している遺跡は、越中国庁跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越国分尼寺跡推定地を中心に、これらに関する施設や集落遺跡を含むものである。また、国府以前の古墳や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に存在している

基本層序

厚さ約80cmの盛土の下に、遺構覆土がある。擾乱を受けており基盤層の確認には至らなかった。

調査概要

所在地：高岡市伏木古国府15番2

対象面積：109㎡

発掘面積：5㎡

調査期間：平成19年6月14日～6月27日

調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は凹地を検出した。遺物は土師器、陶磁器類が出土した。



第59図 越中国府関連遺跡麻生地区全体図 (1/400)

遺跡概観

当「出来田南遺跡」は、高岡市街地の南東郊、J R高岡駅の南東約1.7kmに位置する。東側には庄川が流れ、北西側には地久了川が流れる。これらに囲まれた標高8.5mを測る沖積低地である。遺跡の立地する地形は庄川へ向かって段差をもって落ち込む。

基本層序

厚さ約10cmの表土の下に、厚さ約10cmの旧耕作土があり、厚さ約10cmの暗灰色粘質土がある。その下層に黄褐色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市出来田131番3

対象面積：116㎡

発掘面積：16㎡

調査期間：平成19年6月27日

調査原因：個人住宅建設

調査結果

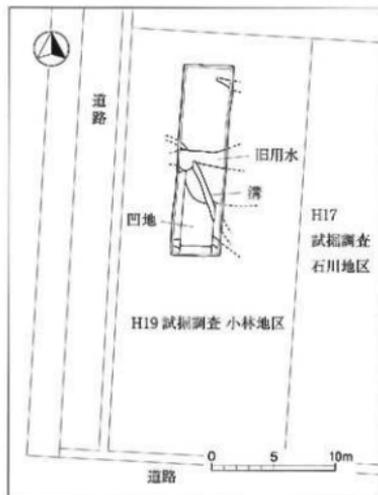
遺構は溝・凹地を検出した。遺物は土師器、須恵器が出土した。

7. 出来田南遺跡

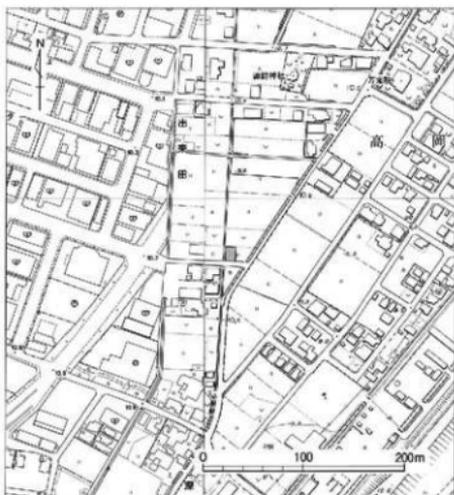
小林地区



第60図 出来田南遺跡位置図（1/5万）



第62図 出来田南遺跡小林地区全体図（1/400）



第61図 出来田南遺跡小林地区位置図（1/5,000）

8. 中曽根館遺跡

区画整理地区



第63図 中曽根館遺跡位置図 (1/5万)

遺跡概観

当「中曽根館遺跡」は、高岡市街地の北東郊、J R高岡駅の北東約6.6kmに位置する。周辺は神楽川等の河川が形成した沖積低地が広がる。旧放生津湯(富山新港)等の低湿地に囲まれた標高1~2mの微高地上に位置する。

基本層序

厚さ約50cmの盛土の下に、厚さ約20cmの旧耕作土があり、灰色粘質土が約20~30cmある。その下層に青灰色粘質土からなる地山(基盤層)がある。

調査概要

所在地: 高岡市中曽根62番 外

対象面積: 7,675㎡

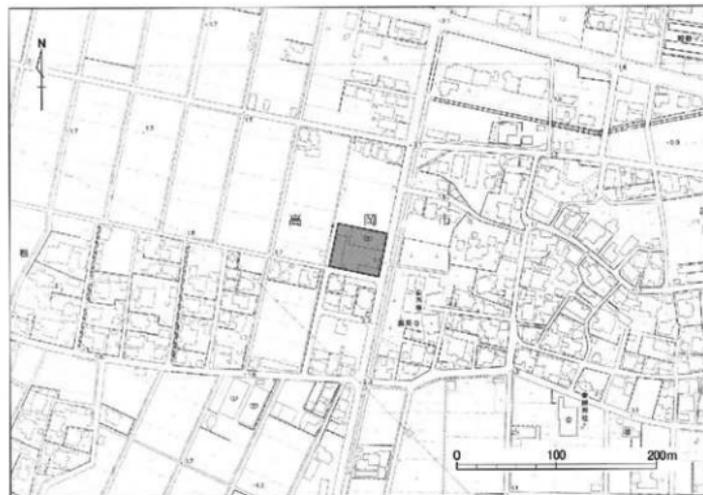
発掘面積: 44㎡

調査期間: 平成19年9月1日~9月3日

調査原因: 土地区画整理

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は土師器、須恵器が出土した。



第64図 中曽根館遺跡区画整理地区位置図 (1/5,000)

遺跡概観

当「越中国府関連遺跡」は、高岡市街地北東側、伏木台地一帯に位置する。この「越中国府関連遺跡」と総称している遺跡は、越中国府跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心に、これらに関する施設や集落遺跡を含むものである。また、国府以前の古墳や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に存在している。

基本層序

厚さ約90～110cmの盛土の下層に灰白色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市伏木古府元町430-5

対象面積：2856㎡

発掘面積：76㎡

調査期間：平成19年9月3日～9月6日

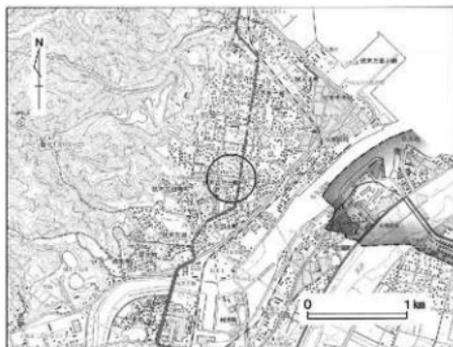
調査原因：物販店建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

9. 越中国府関連遺跡

ハヤマ興産地区



第65図 越中国府関連遺跡位置図（1/5万）



第66図 越中国府関連遺跡ハヤマ興産地区位置図（1/5,000）

10. 中保B遺跡

オスカーホーム地区

遺跡概観

当「中保B遺跡」は、高岡市街地の南西部、祖父川の左岸、標高10～13mの微高地に位置する。昭和39年の農業構造改善事業の工事により発見され、近年では土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施された。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下に、厚さ約20cmの黄褐色砂質土があり、その下に厚さ約35cmの暗灰色粘質土がある。その下層に黄褐色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市中保1224番

対象面積：1,707㎡

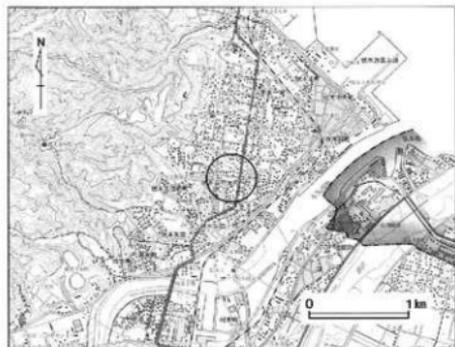
発掘面積：44㎡

調査期間：平成19年9月25日～9月26日

調査原因：宅地造成

調査結果

遺構は凹地を検出した。遺物は土師器、須恵器、陶磁器が出土した。



第67図 中保B遺跡位置図（1/5万）



第68図 中保B遺跡オスカーホーム地区位置図（1/5,000）

遺跡概要

当「鷺北新遺跡」は、高岡市街地の北東側、JR高岡駅の北東約3.4kmに位置し、遺跡中央部を南西から北東方向にJR水見線が走る。東西140m×南北320mの遺跡範囲をもち、遺跡南側には旭ヶ丘遺跡、北東側には古宮遺跡が存在している。

基本層序

厚さ約20～30cmの表土の下に灰白色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市能町駅南28番

対象面積：354㎡

発掘面積：47㎡

調査期間：平成19年10月1日～10月2日

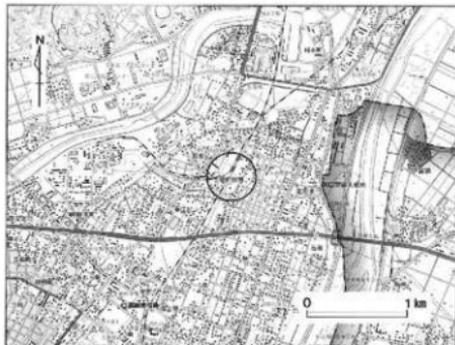
調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は土坑を検出した。遺物は須恵器、珠洲が出土した。

11. 鷺北新遺跡

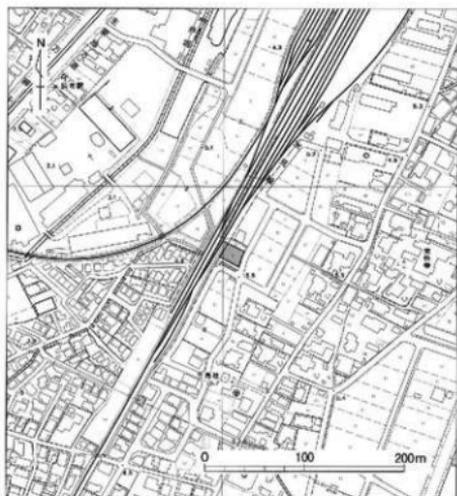
今市地区



第69図 鷺北新遺跡位置図（1/5万）



第71図 鷺北新遺跡今市地区全体図（1/400）



第70図 鷺北新遺跡今市地区位置図（1/5,000）

12. 石塚遺跡

平島地区

遺跡概観

当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、J R 高岡駅の西南西約 3km に位置する。庄川の形成した扇状地の末端、佐野台地の縁辺部にあたる。遺跡の東側には和田川、西側には祖父川が流れ、これらに囲まれた標高約 11m を測る微高地上に位置する。当遺跡は弥生時代の集落遺跡として、県西部において代表的な遺跡として知られる。

基本層序

厚さ約 15cm の表土の下に、厚さ約 15cm の暗褐色砂質土があり、その下層に黄褐色粘質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市石塚154番

対象面積：199m²

発掘面積：8 m²

調査期間：平成19年10月17日

調査原因：納屋の移設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第72図 石塚遺跡位置図（1/5万）



第73図 石塚遺跡平島地区位置図（1/5,000）

遺跡概観

当「前田墓所遺跡」は、高岡市街地の南東、JR高岡駅の東南東側約0.8kmに位置する。加賀藩2代藩主前田利長の墓所である。平成21年2月、当墓所は金沢市野田山前田家墓所とともに「加賀藩主前田家墓所」として国の史跡に指定された。

基本層序

厚さ約50～60cmの盛土の下層に青灰色砂質土からなる地山（葦壑層）がある。

調査概要

所在地：高岡市大野136番1

対象面積：809㎡

発掘面積：56㎡

調査期間：平成19年11月15日～11月20日

調査原因：共同住宅建設

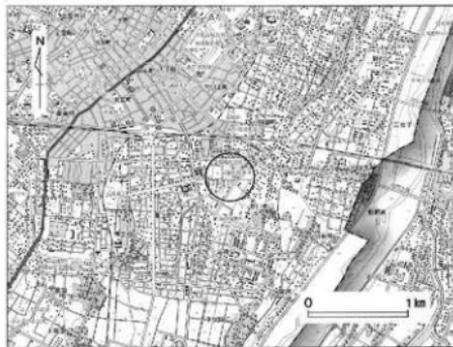
調査結果

遺構は溝を検出した。遺物は出土しなかった。

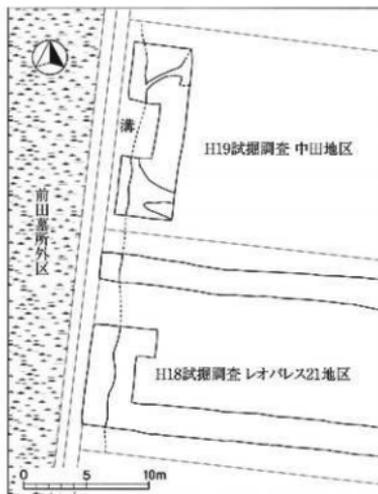
今回検出した溝は南北に走るもので、東側肩部を中心に14mにわたり検出した。西側は調査地区外となり幅等は確認できない。この溝は南側に隣接する平成18年度調査「レオパレス21地区」で検出した溝の続きで、総延長31.4mを確認したことになる。前田墓所東側外堀と考えている溝である。

13. 前田墓所遺跡

中田地区



第74図 前田墓所遺跡位置図（1/5万）



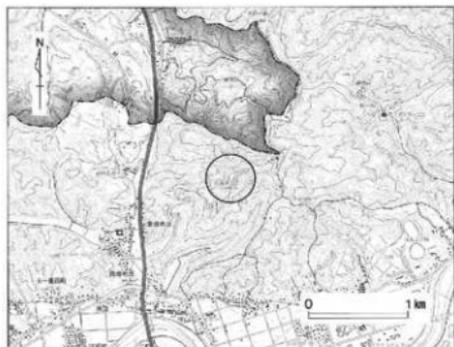
第76図 前田墓所遺跡中田地区全体図（1/400）



第75図 前田墓所遺跡中田地区位置図（1/5,000）

14. 守山城跡

イー・モバイル地区



第77図 守山城跡位置図 (1/5万)

遺跡概観

当「守山城跡」は、高岡市街地の北方、JR高岡駅の北側約5.2kmの二上山西峰にあり、松倉城（現魚津市）・増山城（現砺波市）と並んで越中3大山城の一つとされている。

基本層序

厚さ約30～50cmの表土の下に、厚さ約60～100cmの攪乱土があり、その下層に明黄色砂岩からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市東海老坂字馬鞍2089

対象面積：25㎡

調査面積：16㎡

調査期間：平成20年3月5日～3月7日

調査原因：携帯電話無線中継局建設

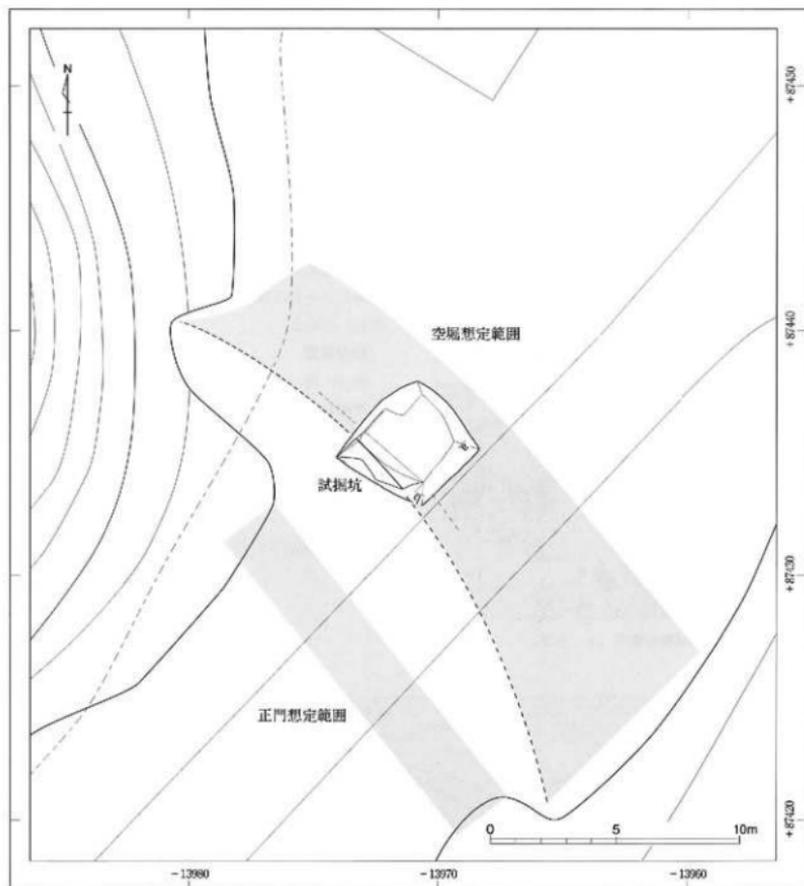
調査結果

遺構は溝を確認した。遺物は出土しなかった。

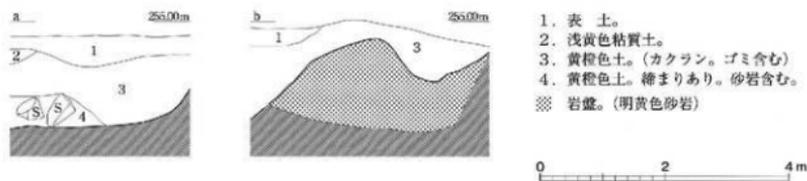
今回確認した溝は正門想定範囲の前に平行して北西から南東にかけて走る。位置関係から空堀の一部になると思われる。



第78図 守山城跡イー・モバイル地区位置図 (1/2,500)



第79図 守山城跡イ・モバイ地区遺構図 (1/200)



第80図 守山城跡イ・モバイ地区土層断面図 (1/80)

15. 下石瀬遺跡

吉田地区

遺跡概観

当「下石瀬遺跡」は、高岡市街地の東北東、J R 高岡駅の東北東側約3.2kmに位置する。昭和47年の富山県遺跡地区に縄文時代の遺跡として記載されている。採集遺物から、縄文時代、古代～中世の遺跡であることが確認された。遺跡北側には下石瀬集落、神明神社がある。南西側には石瀬集落があり、庄川に面した沖積低地にあたる。

基本層序

厚さ約35cmの盛土の下に、厚さ約30cmの旧耕作土があり、その下層に暗緑色砂質土からなる地山（基盤層）がある。

調査概要

所在地：高岡市石瀬574番9

対象面積：158㎡

調査面積：6㎡

調査期間：平成20年3月10日

調査原因：個人住宅建設

調査結果

遺構は検出されなかった。遺物は出土しなかった。



第81図 下石瀬遺跡位置図（1/5万）



第82図 下石瀬遺跡吉田地区位置図（1/5,000）

別 表 土器類観察表

1. 越中国府岡通遺跡、能松地区	77
1-1. 縄文土器	77
1-2. 古代の土器類	77
1-3. 中世の土器類	80
1-4. 近世の陶磁器類	82
2. 瑞龍寺遺跡、芥原地区	82
3. 東木津遺跡、今井地区	83
3-1. 古墳時代の土器類	83
3-1-1. 今井1地区	83
3-2. 古代の土器類	84
3-2-1. 今井1地区	84
3-2-2. 今井2地区	86
3-2-3. 今井3地区	86
3-3. 中世の土器類	88
4. 石塚江之戸遺跡、福島地区	88

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出土位置
1. 越中国府岡通遺跡、能松地区					
1-1. 縄文土器					
1101	-	縄文土器・深鉢	-	縄文地紋に、結節浮線で施文。	第1トレンチ
1-2. 古代の土器類					
1201	43	土師器・高杯	-	外面は赤彩。脚部内面は指圧とナデ。	S K05
1202	43	土師器・高杯	-		第6トレンチ
1203	43	土師器・高杯	-		第7トレンチ
1204	43	土師器・高杯	-	脚部内面はナデ。杯部との接合面に刻み。	第7トレンチ
1205	43	土師器・蓋	145	天井部はヘラ切り。	第9トレンチ
1206	43	土師器・杯	140	内外面に赤彩。	第1トレンチ
1207	43	土師器・杯	138	内面に漆付着。	第6トレンチ
1208	43	土師器・杯	128	内面に油壘付着。	第1トレンチ
1209	43	土師器・杯	120	内面に漆付着。	第6トレンチ

番号	国産	種類	口径	特 徴	撮	出土位置
1210	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内外面に漆付着。		第6トレンチ
1211	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第7トレンチ
1212	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第6トレンチ
1213	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1214	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に油煙付着。		第6トレンチ
1215	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。	S U01	
1216	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第1トレンチ
1217	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1218	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1219	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に油煙付着。		第1トレンチ
1220	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第6トレンチ
1221	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第7トレンチ
1222	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第7トレンチ
1223	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第6トレンチ
1224	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1225	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内外面に赤彩。		第1トレンチ
1226	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内外面に漆付着。		第6トレンチ
1227	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1228	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第1トレンチ
1229	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第7トレンチ
1230	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第6トレンチ
1231	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第6トレンチ
1232	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第1トレンチ
1233	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に油煙付着。		第1トレンチ
1234	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第1トレンチ
1235	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第7トレンチ
1236	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内面に漆付着。		第6トレンチ
1237	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。内外面に赤彩。	S 103	
1238	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。	S K02周辺	
1239	43	土師器・杯	-	底部は回転糸切り。		第9トレンチ
1240	44	土師器・杯	-	高台付。	S K02	
1241	44	土師器・杯	-	高台付。	S X06	
1242	44	土師器・皿	9.6	底部は回転糸切り。体部内面に粘土継ぎみ上げ痕。		第9トレンチ
1243	41	土師器・皿	8.1		S 101	
1244	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切り。		第1トレンチ
1245	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切り。	S X01	
1246	44	土師器・皿	-	底部は台状。		第1トレンチ
1247	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。		第3トレンチ
1248	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。		第9トレンチ
1249	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。		第6トレンチ
1250	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。	S D01	

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出土位置
1251	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。	第6トレンチ
1252	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。	第7トレンチ
1253	44	土師器・皿	-	底部は回転糸切りで、台状。	S X01
1254	44	土師器・甕	-	底部はナデ。	第7トレンチ
1255	44	土師器・甕	-	底部はナデ。	第9トレンチ
1256	44	土師器・甕	176	口縁部外反する。	第1トレンチ
1257	44	土師器・甕	190	口縁部外面は刷毛目、内面はカキ目。	第1トレンチ
1258	44	土師器・甕	214	頸部内面は刷毛目。	S K02周辺
1259	44	土師器・甕	380	胴部外面はカキ目とヘラ削り、内面はカキ目。	第9トレンチ
1301	45	須恵器・杯 A	133	底部はヘラ切り。	第9トレンチ
1302	45	須恵器・杯 A	128	底部はヘラ切り。	S D06
1303	45	須恵器・杯 A	122	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	S K01
1304	45	須恵器・杯 A	120	底部はヘラ切り。体部外面に焼成前ヘラ書き「 」。	第1トレンチ
1305	45	須恵器・杯 A	-	底部はヘラ切り。	S K01
1306	45	須恵器・杯 A	-	底部はヘラ切り。	第7トレンチ
1307	45	須恵器・杯 A	-	底部はヘラ切り。内面に油漣付着の痕跡。	第1トレンチ
1308	45	須恵器・杯 A	-	底部はヘラ切り。	S K01
1309	45	須恵器・杯 A	-	底部はヘラ切り。	第7トレンチ
1310	45	須恵器・杯 B	124	底部はヘラ切り。底部外面に焼成前ヘラ書き「一」。	第11トレンチ
1311	45	須恵器・杯 B	11.1	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	第11トレンチ
1312	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。	S K02
1313	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	第9トレンチ
1314	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は不定方向のナデ。	第7トレンチ
1315	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	第7トレンチ
1316	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	調査地区
1317	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	第1トレンチ
1318	45	須恵器・杯 B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。高台に自然釉。	第9トレンチ
1319	45	須恵器・杯 B	-		第1トレンチ
1320	45	須恵器・杯 B	-		第3トレンチ
1321	45	須恵器・杯 B	-	高台に自然釉。	調査地区
1322	45	須恵器・杯 B	164		第9トレンチ
1323	45	須恵器・杯 B	132		S D01
1324	45	須恵器・杯 B	118	外面に重ね焼き痕。	第7トレンチ
1325	45	須恵器・杯 B	118		S K02
1326	46	須恵器・杯蓋	114	口縁部内面にかえりが付く。	第9トレンチ
1327	46	須恵器・杯蓋	118	口縁部内面にかえりが付く。	第7トレンチ
1328	46	須恵器・杯蓋	116	口縁部内面にかえりが付く。	表探
1329	46	須恵器・杯蓋	166	天井部はヘラ削り調整で、宝珠形つまみが付く。	表探
1330	46	須恵器・杯蓋	166	天井部はヘラ削り。	第9トレンチ
1331	46	須恵器・杯蓋	166	天井部外面に2条の沈線を超らせる。外面に自然釉。	第7トレンチ
1332	46	須恵器・杯蓋	164	天井部はヘラ削り調整。内面は一定方向のナデ。	第9トレンチ

番号	図面	種類	口径	特 徴	出土位置
1333	46	須恵器・杯蓋	16.4	天井部はヘラ削り調整。	表採
1334	46	須恵器・杯蓋	16.0	天井部はヘラ削り調整。内面に油煙。	第7トレンチ
1335	46	須恵器・杯蓋	15.2	天井部はヘラ削り。	第9トレンチ
1336	46	須恵器・杯蓋	14.4	天井部はヘラ削り調整。	第1トレンチ
1337	46	須恵器・杯蓋	13.4		S X01
1338	46	須恵器・杯蓋	-	宝珠形つまみ。	調査地区
1339	46	須恵器・杯蓋	-	宝珠形つまみ。	表採
1340	46	須恵器・杯蓋	-	宝珠形つまみ。内面は一定方向のナデ。	表採
1341	46	須恵器・杯蓋	-	宝珠形つまみ。内面は一定方向のナデ。	第9トレンチ
1342	46	須恵器・鉢	26.5	体部外面に浅い沈線1条。外面に降灰。	S U01
1343	46	須恵器・鉢	16.6	体部外面にカキ目。内面に自然釉。	第9トレンチ
1344	46	須恵器・壺	-	内外面に自然釉。	S U01
1345	46	須恵器・瓶	-	肩部の4～5箇所穿孔と刺痕痕があり、多1瓶と考えられる。	第7トレンチ
1346	46	須恵器・壺	-	底部外面はヘラ削り調整。	第7トレンチ
1347	46	須恵器・壺	-	底部外面はナデ。胴部外面に粘土積み上げ痕。内底部に自然釉。	表採
1348	46	須恵器・壺	-	壺の高台部。	第7トレンチ
1349	44	灰輪陶器・椀	-	高台剥落。内面に東ね焼き痕と朱付着。	S D05
1350	44	灰輪陶器・皿	-	高台肩部は面取り。	S X04
1351	44	輸入白磁・碗	-	外面体部から底部はヘラ削り。内面底部周縁に沈線。	第1トレンチ

1-3. 中世の土器類

1401	47	土師器・皿	18.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I01
1402	47	土師器・皿	17.0	口縁部1段ナデ。	S I01
1403	47	土師器・皿	16.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I01
1404	47	土師器・皿	16.8	口縁部1段ナデ。	S I01
1405	47	土師器・皿	16.8	口縁部1段ナデ。	第1トレンチ
1406	47	土師器・皿	16.8	口縁部1段ナデ。	第7トレンチ
1407	47	土師器・皿	16.6	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	第7トレンチ
1408	47	土師器・皿	16.2	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I01
1409	47	土師器・皿	16.0	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I02
1410	47	土師器・皿	15.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I01
1411	47	土師器・皿	15.0	口縁部1段ナデ。底部内面一定方向ナデ。底部外面粘土帯巻き上げ痕。	S I01
1412	47	土師器・皿	14.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	第7トレンチ
1413	47	土師器・皿	14.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I02
1414	47	土師器・皿	12.7	口縁部1段ナデは深く、内面が窪む。底部内面は一定方向ナデ。	第7トレンチ
1415	47	土師器・皿	12.6	口縁部1段ナデ。	第7トレンチ
1416	47	土師器・皿	12.6	口縁部1段ナデ。口縁内外面に油煙付着。	第1トレンチ
1417	47	土師器・皿	12.4	口縁部1段ナデ。内底面一定方向ナデ。体部ナデ上げは逆「く」字状。	S I01
1418	47	土師器・皿	12.2	口縁部1段ナデ。内底面一定方向ナデ。体部ナデ上げは逆「く」字状。	S D04
1419	47	土師器・皿	11.8	口縁部1段ナデ。	S I01
1420	47	土師器・皿	11.8	口縁部1段ナデ。口縁内外面に油煙付着。	第7トレンチ

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出寸位置
1421	47	土師器・皿	11.8	口縁部1段ナデ。	S I 01
1422	47	土師器・皿	11.8	口縁部1段ナデ。I線内外面に油煙付着。	第7トレンチ
1423	47	土師器・皿	11.4	口縁部1段ナデ。内底面一定方向ナデ。体部ナデ上げは逆「く」字状。	S D04
1421	47	土師器・皿	10.8	I線部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	第7トレンチ
1425	47	土師器・皿	10.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S D04
1436	47	土師器・皿	10.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	第9トレンチ
1427	48	土師器・皿	14.8	口縁部1段ナデ。外面に粘土帯巻き上げ痕。	S I 01
1428	48	土師器・皿	14.8	I線部1段ナデ。内外面に油煙付着。	第7トレンチ
1429	48	土師器・皿	14.8	口縁部1段ナデは不明瞭。	第7トレンチ
1430	48	土師器・皿	14.7	口縁部1段ナデ。体部外面に粘土帯巻き上げ痕。	第1トレンチ
1431	48	土師器・皿	14.2	口縁部1段ナデ。	S I 02
1432	48	土師器・皿	14.0	口縁部1段ナデは不明瞭。体部外面に粘土帯巻き上げ痕。二次被熱。	S I 02
1433	48	土師器・皿	14.0	口縁部1段ナデは不明瞭。口縁内外面に油煙付着。	S I 02
1434	48	土師器・皿	14.0	口縁部1段ナデ。口縁内外面に油煙付着。	第7トレンチ
1435	48	土師器・皿	13.8	口縁部1段ナデは不明瞭。口縁内外面に油煙付着。	第7トレンチ
1436	48	土師器・皿	13.8	口縁部1段ナデ。底部内面はナデ。体部外面に粘土帯巻き上げ痕。	第1トレンチ
1437	48	土師器・皿	13.8	I線部1段ナデ。	第7トレンチ
1438	48	土師器・皿	13.8	口縁部1段ナデ。底部外面に粘土帯巻き上げ痕。	第7トレンチ
1439	48	土師器・皿	13.8	口縁部1段ナデ。	S D09
1440	48	土師器・皿	13.8	I線部1段ナデ。口縁内外面に油煙付着。	S I 01
1441	48	土師器・皿	13.8	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	第7トレンチ
1442	48	土師器・皿	13.8	I線部1段ナデ。	第7トレンチ
1443	48	土師器・皿	13.6	口縁部1段ナデは不明瞭。	第4トレンチ
1444	48	土師器・皿	13.2	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S I 01
1445	48	土師器・皿	13.0	I線部1段ナデ。体部から底部の外周は1'単なナデ。	第9トレンチ
1446	48	土師器・皿	12.8	口縁部1段ナデ。内底面は一定方向ナデ。体部ナデ上げは逆「く」字状。	S I 01
1447	48	土師器・皿	12.8	口縁部1段ナデ。I線内外面に油煙付着。	S U 01
1448	48	土師器・皿	10.8	I線部1段ナデ。口縁内外面に油煙付着。	S I 01
1449	48	土師器・皿	10.7	口縁部1段ナデ。底部内面は一定方向ナデ。	S K04
1450	48	土師器・皿	10.4	口縁部1段ナデは不明瞭。	第7トレンチ
1451	48	土師器・皿	10.2	口縁部直下は指圧とナデ。	S I 01
1452	48	土師器・皿	10.2	口縁部直下は指圧とナデ。内外面に油煙付着。	第1トレンチ
1453	48	土師器・皿	10.0	I線部1段ナデ。	SA01-SSU01
1454	48	土師器・皿	9.8	口縁部1段ナデ。I線内外面に油煙付着。	S I 01
1455	48	土師器・皿	9.6	I線部1段ナデ後に指圧。底部内面に粘土帯巻き上げ痕。	S I 01
1456	48	土師器・皿	9.0	口縁部直下は指圧とナデ。I線内外面に油煙付着。	S I 02
1457	48	土師器・皿	9.0	口縁部1段ナデ後に指圧。体部外面に粘土帯巻き上げ痕。油煙付着。	S I 02
1458	48	土師器・皿	9.0	I線部直下は指圧とナデ。口縁内面に油煙付着。	S I 01
1459	48	土師器・皿	9.0	口縁部1段ナデは不明瞭。	S I 01
1460	48	土師器・皿	9.0	口縁部直下は指圧とナデ。	第7トレンチ
1461	48	土師器・皿	9.0	口縁部1段ナデ。I線内外面に油煙付着。	第9トレンチ

番号	図面	種	類	口徑	特	徴	出土位置
1462	48	土師器	皿	9.0	口縁部直下は指圧と丁寧なナデ。		SA01-SSU01
1463	48	土師器	皿	9.0	口縁部直下は指圧とナデ。		SA01-SSU01
1464	48	土師器	皿	8.8	口縁部直下は指圧とナデ。口縁内面に油煙付着。		S I02
1465	48	土師器	皿	8.8	口縁部1段ナデは不明瞭。		S I01
1466	48	土師器	皿	8.8	口縁部1段ナデは不明瞭。口縁内外面に油煙付着。		第9トレンチ
1467	48	土師器	皿	8.8	口縁部1段ナデ後に指圧とナデ。		SA01-SSU01
1468	48	土師器	皿	8.8	口縁部1段ナデは不明瞭。体部ナデ上げは「の」字状。		SA01-SSU01
1469	47	土師器	皿	9.0	口縁部直下は指圧とナデ。		第7トレンチ
1470	47	土師器	皿	8.8	口縁部1段ナデ。内底面一定方向ナデ。体部ナゲ上げは「の」字状。		S I02
1471	47	土師器	皿	8.4	口縁部1段ナデ後に指圧。		SA01-SSU01
1472	47	土師器	皿	8.4	口縁部直下は指圧とナデ。		SA01-SSU01
1473	47	土師器	皿	8.0	口縁部1段ナデ。体部外面は丁寧なナデ。		SA01-SSU01
1474	47	土師器	皿	8.0	口縁部1段ナデ。		SA01-SSU01
1475	47	土師器	皿	8.0	口縁部直下は指圧とナデ。		SA01-SSU01
1476	47	土師器	皿	8.0	口縁部1段ナデ。底部内面一定方向ナデ。油煙付着。		第10トレンチ
1477	47	土師器	皿	7.9	口縁部1段ナデ。体部外面は丁寧なナデ。		SA01-SSU01
1478	47	土師器	皿	7.8	口縁部直下は指圧とナデ。		S I02
1479	47	土師器	皿	7.8	口縁部直下は指圧とナデ。口縁内外面に油煙付着。		S I01
1480	47	土師器	皿	7.7	口縁部直下は指圧とナデ。		S I01
1481	47	土師器	皿	7.2	口縁部直下は指圧とナデ。		S I02
1482	47	土師器	皿	7.2	口縁部直下は指圧とナデ。内外面とも二次被熱。		S I02
1501	49	土師器	鉢	31.2	磨滅。		S I03
1502	49	土師器	鉢	-	底部内面はナデで、周縁部横ナデ。外面はナデ。		第9トレンチ
1503	49	土師器	碗	-	二次被熱。		S I03
1601	49	輸入有磁	碗	-	高台剥落。底部外面はへら削り。		S I03
1602	49	瀬戸美濃	碗	11.8	鉄輪の天目碗。		第10トレンチ
1603	49	瀬戸美濃	碗	12.0	鉄輪の大目碗。		S I01
1-4. 近世の陶磁器類							
1701	49	土師器	火鉢	-	体部下端は手持ちへら削り。体部外面に赤彩。		第7トレンチ
1702	49	在池	皿	12.6	内外面に灰釉。		調査地区
1703	49	肥前	藍白	4.2			第1トレンチ
1704	49	瀬戸美濃	鉢	-	内外面に黒灰釉(白濁釉)。見込みにトナン痕。		第1トレンチ
1705	49	関西系	鉢	-	内外面に灰釉。見込みにトナン痕。		第6トレンチ
1706	49	関西系	碗	-	外面体部から高台部までと内面に施釉。外面体部下端に指圧。		調査地区
1707	49	関西系	香炉	-	髷輪の獅子形香炉。高火度焼成。		S D01
2. 堀籠寺遺跡、芹塚地区							
4101	70	青磁	碗	-	龍泉窯。見込み印花。外面襷塗弁文。		第11層
4102	70	土師器	皿	13.0	体部外面はナデ。		S D08
4103	70	土師器	皿	-	底部は糸切りのまま。		S U01

番号	図面	種 類	口径	特 徴	散	出土位置
4104	70	瀬戸美濃・鉢	34.0	鉄軸蓋。		S D08
4105	70	肥前陶器・碗	15.5	鉄軸、灰軸。		表 土
4106	70	肥前陶器・皿	-	灯明皿、鉄軸。		S U01
4107	70	肥前陶器・鉢	-	オロシ目が付く蓋鉢、鉄泥による施軸、砂胎土目録。		S U01
4108	70	備前・鉢	25.6	オロシ目が付く蓋鉢、備前系の焼締陶器。		第五層
4109	70	越中瀬戸・皿	10.2	底部はヘラ削り、鉄軸。		S U01
4110	70	越中瀬戸・皿	-	底部はヘラ削り、鉄軸。		第五層
4111	70	越中瀬戸・鉢		蓋鉢、鉄軸。		S D08
4112	70	関西系陶器・皿	8.8	灯明皿、灰軸。		S U01
4113	70	関西系陶器・壺	14.3	銅蓋。		第五層
4114	70	肥前磁器・碗	9.9	染付碗。		第五層
4115	70	肥前磁器・碗	-	染付碗。		S D08
4116	70	肥前磁器・碗	-	染付碗。		S U01
4117	70	肥前磁器・皿	-	染付皿。		S U01
4118	70	肥前磁器・皿	11.8	染付皿、流佐見系。		表 土

3. 東木津遺跡、今井地区

3-1. 古墳時代の土器類

3-1-1. 今井1地区

7101	80	土師器・高杯	18.9	杯部内面は刷毛目後にヘラ磨き、外面はヘラ削り後にヘラ磨き。		S K01-02
7102	80	土師器・高杯	20.6	杯部内外面とも刷毛目後にヘラ磨き。		S K01-02
7103	80	土師器・高杯	19.0	杯部外面は刷毛目後にヘラ磨き、内面はナデ。		S K01-02
7104	80	土師器・高杯	30.0	杯部内外面ともヘラ磨き。		S K01-02
7105	80	土師器・高杯	18.0	杯部外面ヘラ磨き、内面は刷毛目後にヘラ磨き。内外面赤彩。		S K01-02
7106	80	土師器・高杯	15.9	杯部内外面ともにヘラ磨きと赤彩。		S D08
7107	80	土師器・高杯	-	脚部外面一杯部内面までヘラ磨きと赤彩。脚内面は刷毛目状具とナデ。		S K01-02
7108	80	土師器・高杯	-	脚外面はヘラ磨きと赤彩、内面はナデ。		調査地区東側
7109	80	土師器・高杯	-	脚外面はヘラ削り。		調査地区東側
7110	80	土師器・碗	11.0	口縁部は横ナデ。体部から底部は外面ナデとヘラ磨き、内面ナデ。		S K01-02
7111	81	土師器・壺	14.6	胴外面はヘラ削り後に、口縁部内外面は刷毛目後にヘラ磨きと赤彩。		S K01-02
7112	81	土師器・壺	13.0	外面胴部から内面口縁部はヘラ磨きと赤彩。胴内面は刷毛目とナデ。		S K01-02
7113	81	土師器・壺	21.0	口縁部は内外面とも横ナデ後にヘラ磨き。		調査地区東側
7114	81	土師器・壺	20.8	外面頸部は刷毛目とナデ。内面は口縁部有段部に刷毛目。		S K01-02
7115	81	土師器・壺	19.0	口縁部は横ナデ後にヘラ磨き。胴部外面は刷毛目。		S K01-02
7116	81	土師器・壺	17.5	口縁部外面はカキ目状横ナデ、内面は刷毛目とナデ。		S K15
7117	80	土師器・壺	-	外面は胴下端部はナデと赤彩、底部ナデ。内面は刷毛目。		調査地区東側
7118	80	土師器・壺	-	外面ヘラ磨き。内面は口縁部ヘラ磨き、胴部刷毛目と指圧痕。		S K01-02
7119	80	土師器・壺	-	外面胴部は刷毛目後にヘラ磨き、底部ナデ。内面は刷毛目後にナデ。		S K01-02
7120	81	土師器・壺	12.2	頸部内外面と胴部外面は刷毛目。胴部外面に指圧痕。		S K01-02

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出土位置
7121	81	土師器・台付壺	9.7	外面胴部～内面口縁は刷毛目後にヘラ磨きと赤彩。胴内面はナデ。	S K01-02
7122	80	土師器・台付壺	-	外西と底部内面は赤彩。胴内面は刷毛状具。	調査地区
7123	82	土師器・器台	16.8	脚部外面と杯部内面は刷毛目後ヘラ磨き。口縁部外面はヘラ磨き。	S K01-02
7124	82	土師器・器台	-	脚外面は刷毛目後にヘラ磨き、内面は上半ナデ、下半刷毛目。	S K01-02
7125	82	土師器・器台	-	透孔1方。脚外面は刷毛目後にヘラ磨き、内面は刷毛目後にナデ。	S K01-02
7126	82	土師器・器台	9.2	透孔4方。外西は刷毛目後にヘラ磨き、脚内面は刷毛目とナデ。	調査地区東側
7127	82	土師器・器台	9.8	外面～受部内面はヘラ磨きと赤彩。脚内面はナデと上部に赤彩。	S D03
7128	82	土師器・器台	-	脚外面は赤彩。	確認済
7129	82	土師器・器台	-	磨滅。	調査地区東側
7130	82	土師器・器台	8.4	透孔3方。外西と受部内面はヘラ磨き。脚内面はナデ。	S K01-02
7131	82	土師器・器台	-	透孔3方。脚部外面と受部内外面はヘラ磨きと赤彩。	確認済
7132	82	土師器・器台	-	透孔3方。受部の孔は小孔。脚外面はヘラ磨き、内面はナデ。	確認済
7133	82	土師器・器台	-	脚外面はヘラ削り、内面はナデ。	S K12編
7134	82	土師器・鉢	14.0	外面胴部～底部は刷毛目、内面はナデ。外面に煤付着。	S K01-02
7135	82	土師器・鉢	-	鉢形土器のミニチュア。内外面ともナデ。	S D01
7136	82	土師器・甕	18.8	-	S K01-02
7137	82	土師器・甕	17.8	口縁部外面は四線状の横ナデ。	S K01-02
7138	82	土師器・甕	16.0	口縁部横ナデはカキ目状。胴上端内面は刷毛目。	S K01-02
7139	82	土師器・甕	12.0	口縁部横ナデはカキ目状。胴部外面は刷毛目、内面はナデ。	S K01-02
7140	82	土師器・甕	14.0	胴部外面ヘラ削りと刷毛目。内面胴部と底部刷毛目、胴部は刷毛状具。	S K01-02
7141	83	土師器・甕	18.0	口縁部横ナデはカキ目状。胴部内外面は刷毛目。	S K01-02
7142	83	土師器・甕	15.8	外面は頸部ナデ、胴部刷毛目。胴内面はヘラ削り。外面に煤付着。	調査地区東側
7143	83	土師器・甕	15.8	胴外面は刷毛目。内面は刷毛目後にナデ。	S K01-02
7144	83	土師器・甕	15.6	胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削り。	調査地区東側
7145	83	土師器・甕	14.4	口縁部カキ目状の横ナデ、頸部ナデ、胴部刷毛目。胴内面はナデ。	S D02
7146	83	土師器・甕	12.8	外面胴部ナデ、胴部刷毛目。内面口縁から胴上端刷毛目、胴ヘラ削り。	S K01-02
7147	83	土師器・甕	12.6	底部は丸底。口唇部面取り。胴外面は刷毛状具、内面はナデ。	S K03
7148	83	土師器・甕	13.4	外面は頸部ナデ、胴部刷毛目。内面胴部は刷毛状具ナデ。	S K01-02
7149	83	土師器・甕	16.8	胴部外面は刷毛目、内面は刷毛状具によるナデ。	S K03
7150	83	土師器・甕	-	外面胴部は刷毛目、底部はナデ。内面は胴上端が刷毛目、以下ナデ。	S K01-02
7151	83	土師器・甕	-	胴部外面は刷毛目。内面はナデ。	S D03
7152	83	土師器・甕	-	外面胴部はヘラ削り後に刷毛状具、底部ナデ。内面は刷毛状具。	S K01-02
7153	83	土師器・甕	-	外面は胴下端部刷毛目、底部ナデ。内面はヘラ削り。	S K01-02
7154	83	土師器・甕	-	胴下半は内外面刷毛目、底部外面はナデ。	S K01-02
3-2. 古代の土器類					
3-2-1. 今井1地区					
7201	84	土師器・鉢	18.0	胴部外面は回転ヘラ削り。	S D02
7202	84	土師器・鉢	18.0	外面頸部～胴部叩き後に胴下半ヘラ削り。内面は胴上端ヘラナデ。	S D03
7203	84	土師器・甕	19.8	外面頸部～胴部叩き後に胴部カキ目。内面は頸部以下カキ目。	調査地区西側

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出上位置
7204	85	須恵器・杯A	127	底部はヘラ切り。	S D10
7205	85	須恵器・杯A	126	底部はヘラ切り。	S D03
7206	85	須恵器・杯A	125	底部はヘラ切り。	S D03
7207	85	須恵器・杯A	124	底部はヘラ切り。	S D09
7208	85	須恵器・杯A	119	底部はヘラ切り。	S D08
7209	85	須恵器・杯A	118	底部はヘラ切り。体部内面に焼成後の割書「1」。	調査地区東側
7210	85	須恵器・杯A	116	底部はヘラ切り。	調査地区東側
7211	85	須恵器・杯A	115	底部は回転ヘラ削り調整。	S D09
7212	85	須恵器・杯A	109	底部はヘラ切り。	調査地区西側
7213	85	須恵器・杯A	124	底部はヘラ切り。底部外面に焼成前ヘラ書き「一」。	調査地区東側
7214	85	須恵器・杯A	-	底部はヘラ切り。底部外面に焼成前ヘラ書き「一」。	調査地区西側
7215	85	須恵器・杯B	147	底部はヘラ切り。内底部不定方向ナデ。外面に焼成前ヘラ書き「×」。	S D03
7216	85	須恵器・杯B	127	底部はヘラ切り。	調査地区東側
7217	85	須恵器・杯B	126	底部はヘラ切り。内底部一定方向のナデ。	調査地区東側
7218	85	須恵器・杯B	114	底部は大きく歪む。	S D03
7219	85	須恵器・杯B	113	底部はヘラ切り。	調査地区西側
7220	85	須恵器・杯B	110		調査地区西側
7221	85	須恵器・杯B	107	底部はヘラ切り。	S D09
7222	85	須恵器・杯B	104	底部はヘラ切り。	調査地区東側
7223	85	須恵器・杯B	101	底部はヘラ切り。	調査地区
7224	86	須恵器・杯B	157		調査地区
7225	86	須恵器・杯B	152		S D01
7226	86	須恵器・杯B	120	底部はヘラ切り。	調査地区
7227	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。高台割書。	S D03
7228	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は不定方向のナデ。	調査地区東側
7229	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り後にナデ。内底部は一定方向のナデ。	調査地区西側
7230	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。口縁部打ち欠き。	調査地区東側
7231	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。	調査地区西側
7232	85	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。口縁部打ち欠き。	調査地区西側
7233	86	須恵器・杯蓋	183	天井部はヘラ切り。天井部内面はナデと焼成後の割書「×」。	調査地区東側
7234	86	須恵器・杯蓋	130	天井部はヘラ削りで、空糸形つまみが付く。外面に自然釉。	S D02
7235	86	須恵器・杯蓋	127	宝珠形つまみが付く。外面に自然釉。	S K05
7236	86	須恵器・杯蓋	150	天井部はヘラ切り。	調査地区東側
7237	86	須恵器・杯蓋	-	天井部はヘラ切り。	S K08脇
7238	86	須恵器・横瓶	114	横瓶の1頸部。頸部内面に当て具痕。	調査地区東側
7239	86	須恵器・長皿	-	底部はナデ。内底部に自然釉。	調査地区東側
7240	86	須恵器・壺	-	外面肩部に凹線1条。胴下半は回転ヘラ削り調整。	S D02
7241	86	須恵器・壺	220	内面に自然釉。	調査地区東側
7242	86	須恵器・壺	210		調査地区東側
7243	86	須恵器・壺	176	内面に自然釉。	調査地区東側
7244	86	須恵器・壺	450	口縁部外面は2条の凹線の上に髷播波状文。内面に自然釉。	調査地区東側

番号	図面	種類	口径	特 徴	出土位置
7245	86	須恵器・甕	-	胴部は外面平行印き、内面当て具痕。頸部内面ヘラ削り。	調査地区東側
3-2-2. 今井2地区					
7301	87	須恵器・杯A	12.8	底部はヘラ切り。	調査地区
7302	87	須恵器・杯A	12.8	底部はヘラ切り。外面に重ね焼き痕。口縁部は打ち欠き。	調査地区
7303	87	須恵器・杯A	12.2	底部はヘラ切り。	調査地区
7304	87	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り後にヘラ先状工具痕。口縁部外面の一部に煤付着。	S K19
7305	87	須恵器・杯A	11.9	底部はヘラ切り。	S D03
7306	87	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。外面に重ね焼き痕。	調査地区
7307	87	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り後にヘラ先状工具痕。	S N03
7308	87	須恵器・杯A	10.4	底部はヘラ切り。	調査地区
7309	87	須恵器・杯B	15.2	底部はヘラ切り。内底部は不定方向のナデ。	調査地区
7310	87	須恵器・杯B	12.7	底部はヘラ切り。	S D03
7311	87	須恵器・杯B	12.2	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。内面に重ね焼き痕。	調査地区
7312	87	須恵器・杯B	11.3	底部はヘラ切り。	S N03
7313	87	須恵器・杯B	11.4	底部はヘラ切り。高台凋落。	S D03
7314	87	須恵器・杯B	11.1	底部はヘラ切り。内面に重ね焼き痕。	S D03
7315	87	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。	調査地区
7316	87	須恵器・杯B	-	底部は回転ヘラ削り調整。内底部は一定方向のナデ。	調査地区
7317	87	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。	調査地区
7318	87	須恵器・杯蓋	16.0	天井部は回転ヘラ削り調整。天井部内面は不定方向のナデ。	調査地区
7319	87	須恵器・鍋	-	把手凋落。胴外面平行印き後にカキ目。内面は当て具痕後にカキ目。	S D03
7320	87	須恵器・甕	57.2	口縁部外面は1条の凹線の上に横溝波状文。内面ナデ。	S D03
7321	87	須恵器・甕	36.2	口縁部外面に横溝波状文。	調査地区
3-2-3. 今井3地区					
7401	84	土師器・杯	12.2	底部は回転ヘラ削り。内外面とも赤彩。口縁部は打ち欠きの痕跡。	S D07
7402	84	土師器・杯	10.8	外面は体部～底部ヘラ削り。内面はヘラ磨き。	S B03
7403	84	土師器・杯	13.0	外面体部はヘラ削り。内面はヘラ磨き。内面赤彩と漆付着の痕跡。	S D12
7404	84	土師器・杯	-	底部は右回転糸切り後無調整。	調査地区
7405	84	土師器・杯	-	高台付。	調査地区
7406	84	土師器・杯	-	高台付。	調査地区
7407	84	土師器・甕	17.7	天井部は回転ヘラ削り。内外面とも赤彩。	調査地区
7408	84	土師器・甕	23.0	胴部は内外面ともカキ目。外面に煤付着。	調査地区
7409	84	土師器・甕	22.0	外面は頸部～胴部印き後にカキ目。内面は頸部カキ目。	S D11
7410	84	土師器・甕	11.0	外面は胴上半凹線・下半ヘラ削り。底部回転糸切り。外面に煤付着。	S D12
7411	84	土師器・甕	-	胴下半外面はヘラ削り後に刷毛伏具、内面は指ナデ。外面に煤付着。	調査地区
7412	88	須恵器・杯A	13.2	底部はヘラ切り。外面に重ね焼き痕。	調査地区
7413	88	須恵器・杯A	13.0	底部はヘラ切り。	調査地区
7414	88	須恵器・杯A	12.9	底部はヘラ切り。内底部は研磨。底部割れ口に研磨による平坦面。	調査地区

番号	図面	種 類	口径	特 徴	出土位置
7415	88	須恵器・杯A	12.6	底部はヘラ切り後ナデと指圧痕。内底部は不定方向のナデ。	S D11
7416	88	須恵器・杯A	12.6	底部はヘラ切り。外面に重ね焼き痕。	調査地区
7417	88	須恵器・杯A	12.6	底部はヘラ切り後にヘラ先状工具痕。	調査地区
7418	88	須恵器・杯A	12.3	底部はヘラ切り。	調査地区
7419	88	須恵器・杯A	12.3	底部はヘラ切り。	S D04
7420	88	須恵器・杯A	12.2	底部はヘラ切り後に不定方向のナデ。	S D06
7421	88	須恵器・杯A	12.1	底部はヘラ切り。内面に漆付着。	S D04
7422	88	須恵器・杯A	12.0	底部はヘラ切り。	S D11
7423	88	須恵器・杯A	12.0	底部はヘラ切り。体部外面に焼成前ヘラ書き「 」。	S D07
7424	88	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。外面に重ね焼き痕。	調査地区
7425	88	須恵器・杯A	11.8	底部はヘラ切り。	調査地区
7426	88	須恵器・杯A	11.7	底部はヘラ切り。	S D06
7427	88	須恵器・杯A	11.5	底部はヘラ切り。	調査地区
7428	88	須恵器・杯A	11.4	底部はヘラ切り。	調査地区
7429	88	須恵器・杯A	-	底部はヘラ切り。	調査地区
7430	88	須恵器・杯A	-	底部はヘラ切り後にヘラ先状工具痕。	S N03
7431	88	須恵器・杯A	-	底部はヘラ切り後に焼成前ヘラ書き「一」と墨書「祭?」。	調査地区
7432	88	須恵器・杯B	14.0	底部はヘラ切り。	S B02
7433	88	須恵器・杯B	14.0	底部はヘラ切り。	S D04
7434	88	須恵器・杯B	12.1	底部はヘラ切り。	調査地区
7435	88	須恵器・杯B	12.0	底部はヘラ切り。口縁部内面に自然釉。	調査地区
7436	88	須恵器・杯B	10.1	底部はヘラ切り。	S B03
7437	88	須恵器・杯B	9.8	底部はヘラ切り。	S D07
7438	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデと焼成前ヘラ書き「一」。	調査地区
7439	89	須恵器・杯B	-	底縁は回転ヘラ削り調整。内底部は一定方向のナデ。	調査地区
7440	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り後に一定方向のナデ。	調査地区
7441	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は不定方向のナデ。	調査地区
7442	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り。内底部は一定方向のナデ。	S D12
7443	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り後に焼成前ヘラ書き「×」。	S D04
7444	89	須恵器・杯B	-	底部はヘラ切り後に焼成前ヘラ書き「古?」。	S X03
7445	89	須恵器・椀杯	12.2	底部はヘラ切り。	S D06-11
7446	89	須恵器・杯蓋	16.6	天井部はヘラ切り。	S I01
7447	89	須恵器・杯蓋	15.2	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。外面に自然釉。	S D04
7448	89	須恵器・杯蓋	14.3	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみ。内面一定方向ナデ。外面自然釉。	調査地区
7449	89	須恵器・杯蓋	13.5	天井部はヘラ切り。内外面に重ね焼き痕。	調査地区
7450	89	須恵器・杯蓋	12.9	天井部はヘラ切り。	S D04
7451	89	須恵器・杯蓋	12.6	天井部は回転ヘラ削り調整。	調査地区
7452	89	須恵器・杯蓋	12.3	天井部は回転ヘラ削り調整で、宝珠形つまみ。内面はナデと研磨。	S D04
7453	89	須恵器・杯蓋	12.1	天井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。外面に重ね焼き痕。	S X03
7454	89	須恵器・杯蓋	11.9	天井部は回転ヘラ削り調整で、宝珠形つまみが付く。	S K17
7455	89	須恵器・杯蓋	11.4	天井部はナデ調整で、宝珠形つまみが付く。外面に重ね焼き痕。	S B02

番号	図面	種類	口径	特徴	出土位置
7456	89	須恵器・杯蓋	-	犬井部はヘラ切りで、宝珠形つまみが付く。胎土はマーブル状。	S B02
7457	89	須恵器・杯蓋	-	犬井部はヘラ切りで、宝珠形つまみ。内面に焼成前ヘラ書き「一」。	調査地区
7458	89	須恵器・杯蓋	-	宝珠形つまみが付く。外面に自然釉。	調査地区
7459	89	須恵器・杯蓋	-	犬井部はヘラ切りで、宝珠形つまみ。内面に焼成前ヘラ書き「一」。	調査地区
7460	89	須恵器・杯蓋	-	犬井部は回転ヘラ削り調整で、宝珠形つまみ。口縁部は打ち欠き。	調査地区
7461	89	須恵器・杯蓋	-	ボタン状のつまみが付く。内面は一定方向のナデ。	調査地区
7462	90	須恵器・瓶	120	瓶の口頸部。口縁部打ち欠き。	S D06
7463	90	須恵器・瓶	177	瓶の口頸部。	調査地区
7464	90	須恵器・壺	11.8	蓋付きの壺の口縁部。蓋受け部に自然釉。	S D05
7465	90	須恵器・瓶	-	長頸瓶の口頸部。口縁部外面に2条の凹線。内外面に自然釉。	調査地区
7466	90	須恵器・瓶	-	長頸瓶の胴上半。2条の凹線を2段施す。外面自然釉。7465と同一。	調査地区
7467	90	須恵器・瓶	-	凸帯付双耳瓶の胴上半部。肩部外面に1条の沈線。	調査地区
7468	90	須恵器・壺	-	壺の胴下半部。底部は手持ちヘラ削り調整。	調査地区
7469	90	須恵器・壺蓋	122	犬井部外面に自然釉。	S B03
7470	90	須恵器・壺蓋	9.8		調査地区
7471	90	須恵器・壺蓋	124	外面犬井部下端に1条の沈線。	調査地区
7472	90	須恵器・鍋	-	鍋の把手。胴部内外面にカキ目、内面は当て具痕。	調査地区
7473	90	須恵器・壺	21.7	胴部外面は叩き後にカキ目、内面は当て具痕。	S D07
7474	90	須恵器・壺	52.8	口縁部の外面に上から波状文、沈線1条、波状文、沈線3条。	S K16他
3-3. 中世の上器類					
7501	91	珠洲・甕	540	甕の口縁部、口端部は干縁状に肥厚する。	調査地区
7502	91	珠洲・甕	-	甕の底部。	S D07
4. 石塚江之戸遺跡、福島地区					
8101	92	須恵器・杯B	-	底部以外は欠損している。底部はヘラ切り。	2地区
8102	92	須恵器・杯蓋	127	犬井部中央は欠損している。	2地区 S K06
8103	92	須恵器・壺	-	高台付の壺の胴下・底部。胴下部外面はヘラ削り。	1地区 S X01
8201	92	珠洲・鉢	28.6	口縁・胴部。	1地区
8202	92	珠洲・鉢	19.4	片口鉢の口縁・胴上部。	2地区 S D06
8203	92	珠洲・鉢	25.3	口縁部。口唇面は水平になる。	2地区
8204	92	珠洲・鉢	27.9	口縁・胴部。オロシ目が付く。	1地区 S D02
8205	92	珠洲・鉢	-	底部。底部は静止糸切り。オロシ目が付く。	1地区 S D01
8206	92	珠洲・鉢	-	底部。底部は静止糸切り。オロシ目が付く。	2地区 S X02
8207	92	珠洲・鉢	-	底部。底部は静止糸切り。オロシ目が密に付く。	2地区 S D01
8208	92	珠洲・鉢形	-	底部。底部は静止糸切り。	2地区
8209	92	珠洲・壺	29.6	口縁・胴部。口唇面は水平になる。	1地区 S D01
8210	92	珠洲・壺	23.8	口縁部。口端部は外反する。	2地区
8211	92	珠洲・壺蓋	21.0	犬井部中央は欠損している。	1地区

参考文献

- 伊藤 雅文 1997 『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告』Ⅰ 石川県埋蔵文化財センター
- 伊藤 雅文 1998 『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告』Ⅱ 石川県埋蔵文化財センター
- 井上 新太郎 1974 『本瓦葺の技術』 彰国社
- 今泉 潔 1984 「『橋木棧瓦』の造瓦器具と製作技術について」『物質文化』42 物質文化研究会
- 上野 章也 1984 『小杉流通業務団地内遺跡群-第6次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- 上原 真人 1990 『平瓦製作法の変遷-近世造瓦技術成立の前提-』『今里幾次先生古希記念福考古学論叢』
今里幾次先生古希記念論文集刊行会
- 上原 真人 1997 『歴史発掘11-瓦を讀む』 講談社
- 垣内尤次郎他 2001 『近世・近代の瓦』『新修小松市史資料編3-九谷焼と小松瓦』 小松市
- 鹿島 昌也他 1999 『新谷南遺跡』 富山県教育委員会
- 鹿島 昌也他 2002 『富山市新谷南遺跡発掘調査報告Ⅲ』 富山県教育委員会
- 京田 良志 1979 『高岡山福龍寺の草創』『日本海域の歴史と文化』 文獻出版
- 久保 智康 1994 『北陸南西部における軒瓦の受容と伝播-越前地域を中心に-』『古代』第97号 早稲田大学
考古学会
- 佐原 真 1972 『平瓦種差作り』『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
- 正和 勝之助 1991 『越中伏木地埋志稿』 桂書房
- 高岡 徹 1983 『小矢部川河口左岸台地の「館」・「立」地名について』『かんとりい』No.7 越中の歴史と
文化を考える会
- 高澤 等 2008 『家紋の事典』 東京堂出版
- 坪井 利弘 1976 『日本の瓦屋根』 理工学社
- 坪井 利弘 1986 『図鑑瓦屋根(改訂版)』 理工学社
- 坪井 利弘 1987 『瓦屋根のデザイン「瓦屋根の納め方」改題・改訂版』 理工学社
- 中井 淳史 2005 『かわらけ(瀉い技術)としての中世土師器生産』『中世窯業の諸相-生産技術の展開と
編年-』全国シンポジウム「中世窯業の諸相-生産技術の展開と編年-」実行委員会
- 西井 龍儀他 1987 『北陸の古代寺院-その源流と古瓦』(北陸古瓦研究会編) 桂書房
- 橋本 正寿他 1983 『小杉流通業務団地内遺跡群-第5次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- 兼山 哲郎 2002 『考古学からみた古代社会の変容』『日本の時代史5-平安京』 吉川弘文館
- 占岡 英明 1956 『昔の伏木』『学習資料-伏木の文化』 伏木小学校
- 古岡 英明 1960 『勝興寺附近遺存の滄器について(前)』『越中史壇』第19号 越中史壇会
- 古岡 英明 1960 『勝興寺附近遺存の滄器について(後)』『越中史壇』第20号 越中史壇会
- 占岡 英明 1994 『勝興寺地域の考古学的知見』『越中勝興寺伽藍』 高岡市教育委員会
- 古岡 英明 2007 『守山観-古国府城考』『二上山研究』第4号 高岡市教育委員会
- 岡宮 正光 2002 『松山瓦窯跡』 千代田町
- 水島 清他 2001 『北陸の瓦の歩み』 社団法人日本セラミックス協会北陸支部
- 湊 然他 1967 『越中四分寺とその周辺の遺跡調査報告書』 富山県教育委員会
- 宮崎 博 1980 『近世における本瓦の制作技術について』『貝塚』25 物質文化研究会
- 宮山 進一他 1997 『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』 桂書房
- 森田 克行 1984 『摂津高槻城-本丸跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会
- 山崎 信二 2008 『近世瓦の研究』 同成社
- 山中 敏史他 2005 『地方官衙と寺院-郡衙周辺寺院を中心として』 奈良文化財研究所
- 吉岡 康暢他 2004 『奈良時代の富山を探る』 富山県教育委員会

報告書抄録

ふりがな	しないいせきちょうさがいほうじゅうはち							
書名	市内遺跡調査概報ⅩⅧ							
副書名	平成19年度、越中国府・御亭角遺跡の調査他							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第67番							
編者名	山口辰一、常深尚、岡田 広、橋谷潤、伊藤順一							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号							
発行年月日	西暦 2009年3月27日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
越中国府岡通遺跡 能松地区 (御亭角遺跡)	富山県高岡市 伏木古府 2丁目207	016202	202013	36° 79' 12"	137° 05' 16"	070518) 071003	648㎡	住宅建設
瑞龍寺遺跡 芹原地区	富山県高岡市 岡本町93	016202	202145	36° 73' 64"	137° 01' 14"	071108) 071226	180㎡	住宅建設
東木津遺跡 今井地区	富山県高岡市 在野890- 4・5・1	016202	202150	36° 72' 96"	136° 99' 30"	071010) 071226	1,586㎡	店舗建設 資材置場
石塚江之戸遺跡 福島地区	富山県高岡市 上北島2001他	016202	202159	36° 73' 61"	136° 97' 91"	070413) 071011	250㎡	住宅建設
その他の遺跡 ・各調査地区	富山県 高岡市内	016202				070409) 080310		住宅建設等
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
越中国府岡通遺跡 能松地区 (御亭角遺跡)	寺院跡 城郭跡	白鳳時代 奈良・平安時代 中世	土器、堀址 竪穴建物址 瓦溜り、土坑、溝	土師器、須恵器 古代瓦	文字瓦「寺カ」の出土。戦国時代の土塁と堀址の確認。			
瑞龍寺遺跡 芹原地区	寺院	江戸～明治時代	土器、瓦溜り 土坑、溝 竈状遺構	近世陶磁器、焼し瓦 釉薬瓦	瑞龍寺内堀と推測する溝の北岸と規模縮小時の土塁を確認。			
東木津遺跡 今井地区	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物址、土坑 溝、竈状遺構	土師器、須恵器 石製品	古代の柱建物群を確認。			
石塚江之戸遺跡 福島地区	集落跡	中世	土坑、溝、凹地	土師器、須恵器 珠洲、中近世陶磁器	中世の区画溝と推測する溝を確認。			
その他の遺跡 ・各調査地区	中保B遺跡、岩坪岡山島遺跡、東木津遺跡、赤丸古村遺跡、蓮花寺遺跡、越中国府岡通遺跡、出来田南遺跡、中曾根館遺跡、鶯北新遺跡、石塚遺跡、前山墓所遺跡、守山城跡、下石瀬遺跡							

図 面

図 面 目 次

図面01	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	調査地区現況図 (1/400)
図面02	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	調査地区全体図 (1/400)
図面03	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	遺構平面図〔1〕 (1/200)
図面04	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	遺構平面図〔2〕 (1/200)
図面05	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	遺構平面図〔3〕 (1/200)
図面06	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	遺構平面図〔4〕 (1/200)
図面07	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第11トレンチ実測図 (1/80)
図面08	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第4・第6トレンチ実測図 (1/80)
図面09	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	1. 第5トレンチ実測図 (1/80) 2. 第7トレンチ実測図〔1〕 (1/80)
図面10	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第9トレンチ実測図〔1〕 (1/160)
図面11	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第9トレンチ実測図〔2〕 (1/80)
図面12	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第1トレンチ実測図〔1〕 (1/80)
図面13	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第1トレンチ実測図〔2〕 (1/80)
図面14	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第12～第15トレンチ実測図 (1/80)
図面15	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	1. 集石S A01-S S S01 (1/20) 2. 遺物集積S A01-S S U01 (1/80)
図面16	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	第10トレンチ実測図 (1/80)
図面17	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	1. 第7トレンチ実測図〔2〕 (1/80) 2. 瓦溜りS U01実測図 (1/80)
図面18	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	竪穴建物址S I03、溝S D09、土坑S K04実測図 (1/80、1/40、1/20)
図面19	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	竪穴建物址S I01実測図 (1/40)
図面20	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	竪穴建物址S I02実測図 (1/40)
図面21	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	竪穴建物址S M01実測図 (1/80)
図面22	遺構実測図	越中国府岡道遺跡能松地区	1. 土坑S K01実測図 (1/40) 2. 土坑S K02・03実測図 (1/20)
図面23	遺構実測図	瑞雲寺遺跡芥原地区	遺構平面図 (1/200)
図面24	遺構実測図	瑞雲寺遺跡芥原地区	溝S D08平面図・土層断面図 (1/80、1/40)
図面25	遺構実測図	瑞雲寺遺跡芥原地区	溝S D01・02、土坑S K03平面図・土層断面図 (1/80、1/40)
図面26	遺構実測図	瑞雲寺遺跡芥原地区	瓦溜りS U01平面図 (1/40)
図面27	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	東木津遺跡、既往の主な調査地区 (1/1,000)
図面28	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	調査地区全体図 (1/400)
図面29	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	遺構平面図〔1〕 (1/200)
図面30	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	遺構平面図〔2〕 (1/200)
図面31	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	遺構平面図〔3〕 (1/200)
図面32	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	1. 掘立柱建物址S B01平面図 (1/80) 2. 掘立柱建物址S B04平面図 (1/80)
図面33	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	掘立柱建物址S B02・03、構址S A01-03平面図 (1/80)
図面34	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	土坑S K01・02実測図 (1/40)
図面35	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	土坑S K01・02遺物分布図 (1/40)
図面36	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	1. 土坑S K06-12周辺平面図 (1/80) 2. 土坑S K03実測図 (1/20)
図面37	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	溝実測図 (1/400、1/40)
図面38	遺構実測図	東木津遺跡今井地区	溝S D01・02・08実測図 (1/100、1/50)
図面39	遺構実測図	石坂江之戸遺跡福島地区	調査地区全体図 (1/200)

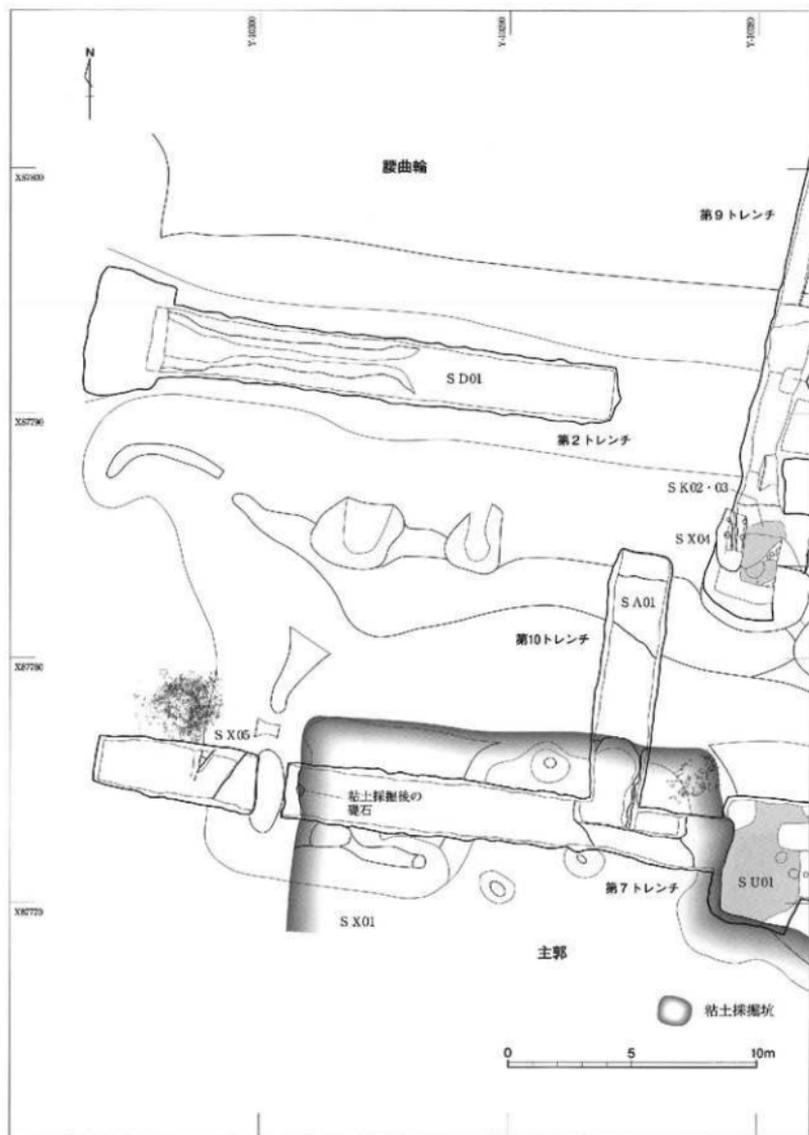
図面40	遺構実測図	石塚江之戸遺跡福島地区	遺構平面図〔1〕	(1/100)
図面41	遺構実測図	石塚江之戸遺跡福島地区	遺構平面図〔2〕	(1/100)
図面42	遺構実測図	石塚江之戸遺跡福島地区	溝 S D01・02平面図・土層断面図	(1/100、1/80)
図面43	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	古代の土師器 (1/3)
図面44	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	古代の土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁 (1/3)
図面45	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面46	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面47	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	中世の土師器 (1/3)
図面48	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	中世の土師器 (1/3)
図面49	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土器類	中世～近世の土師器・陶磁器 (1/3)
図面50	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の軒丸瓦 (1/3)
図面51	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の軒平瓦 (1/3)
図面52	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の丸瓦 無叩き (1/4)
図面53	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の丸瓦 無叩き (1/4)
図面54	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の丸瓦 無叩き・平行叩き (1/4)
図面55	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の丸瓦 縄叩き (1/4)
図面56	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の平瓦 A1叩き (1/4)
図面57	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の平瓦 A2叩き (1/4)
図面58	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の平瓦 A3叩き・A4叩き・B1叩き (1/4)
図面59	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の平瓦 B2叩き・縄叩き・溝切瓦・菱斗瓦等 (1/4)
図面60	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	白鳳時代の平瓦 無叩き (1/4)
図面61	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	奈良時代の丸瓦 (1/4)
図面62	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	奈良時代の平瓦 (1/4)
図面63	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	奈良時代の平瓦 (1/4)
図面64	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	奈良時代の平瓦 (1/4)
図面65	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	軒丸瓦・椀瓦頭拍形・特殊瓦 (1/3、1/6)
図面66	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	椀瓦 (1/6)
図面67	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	瓦	椀瓦 (1/6)
図面68	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	土・鉄製品	獸蹄・土鍬・釘 (1/2)
図面69	遺物実測図	越中国府岡達遺跡能松地区	石製品	打製石斧・台石・白玉・磁石・茶臼 (1/3、2倍等)
図面70	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	陶磁器類	青磁・瀬戸灰潰・土師器・肥前陶器・備前・越中瀬戸等 (1/3)
図面71	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦 (1/3)
図面72	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・丸瓦 (1/4)
図面73	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・平瓦 (1/4)
図面74	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・平瓦 (1/4)
図面75	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・輪造り瓦・特殊瓦・面戸瓦・菱斗瓦・鬼瓦・筒瓦 (1/3)
図面76	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の焼し瓦・刺印 (2/3)
図面77	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の釉薬瓦・丸瓦 (1/4)
図面78	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦	近世の釉薬瓦・平瓦 (1/4)
図面79	遺物実測図	瑞徳寺遺跡芹原地区	瓦等	近世の釉薬瓦・平瓦・木製品・鉄製品 (1/4、1/2)
図面80	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古墳時代の土師器 (1/3)
図面81	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古墳時代の土師器 (1/3)
図面82	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古墳時代の土師器 (1/3)
図面83	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古墳時代の土師器 (1/3)
図面84	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の土師器 (1/3)
図面85	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面86	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面87	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面88	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面89	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面90	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類	古代の須恵器 (1/3)
図面91	遺物実測図	東木津遺跡今井地区	土器類等	珠洲・蝦夷・土鍬・砥石 (1/3、1/2)
図面92	遺物実測図	石塚江之戸遺跡福島地区	土器類	須恵器・珠洲 (1/3)

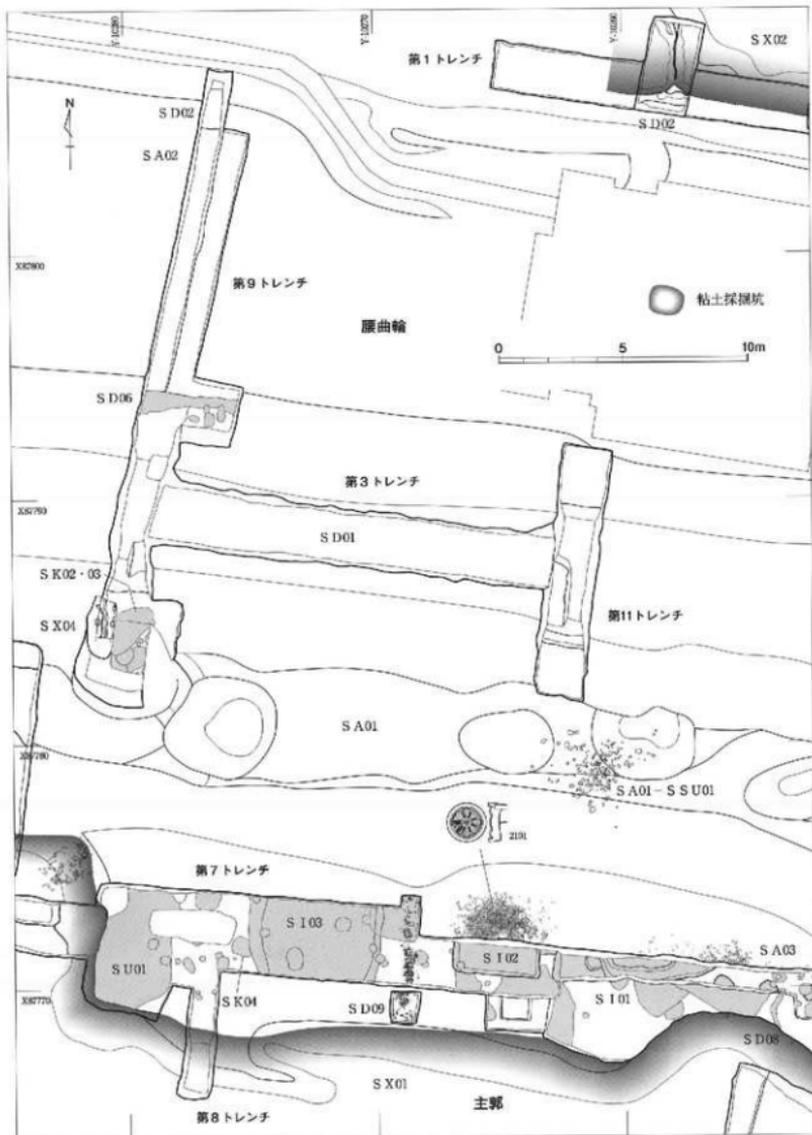
図面〇一 遺構実測図 越中国府関連遺跡能松地区

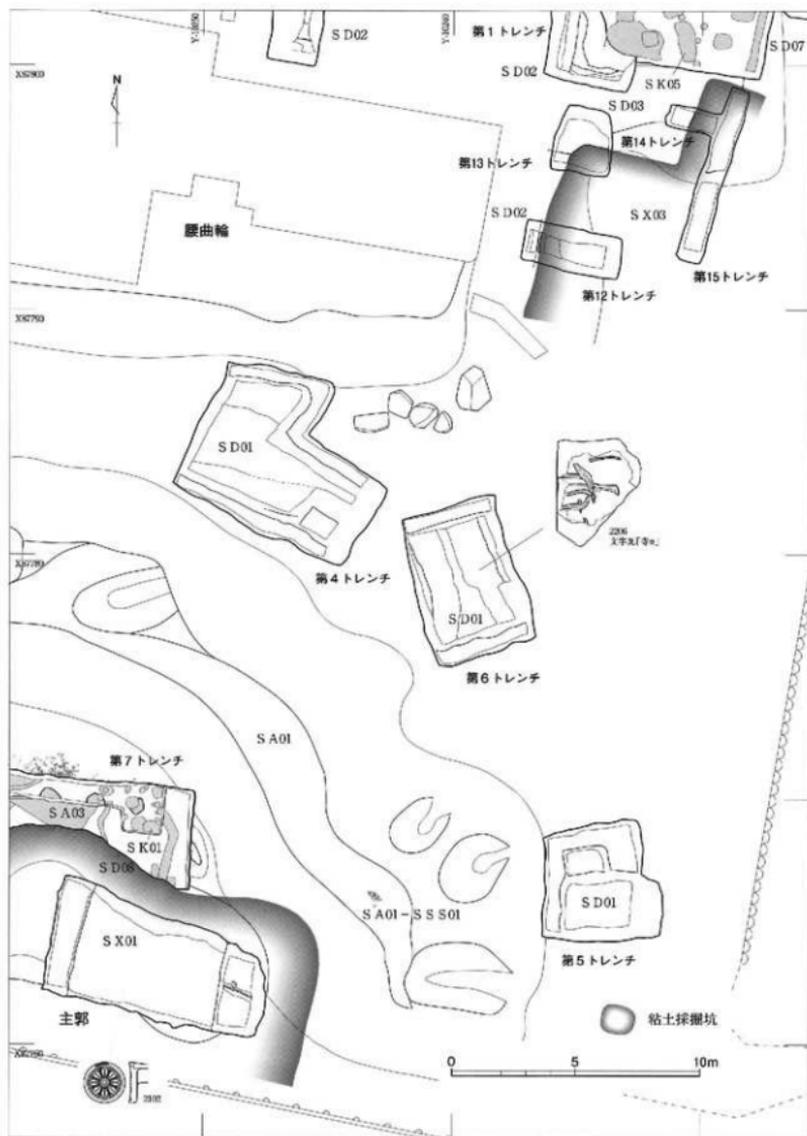


調査地区現況図 縮尺1/400

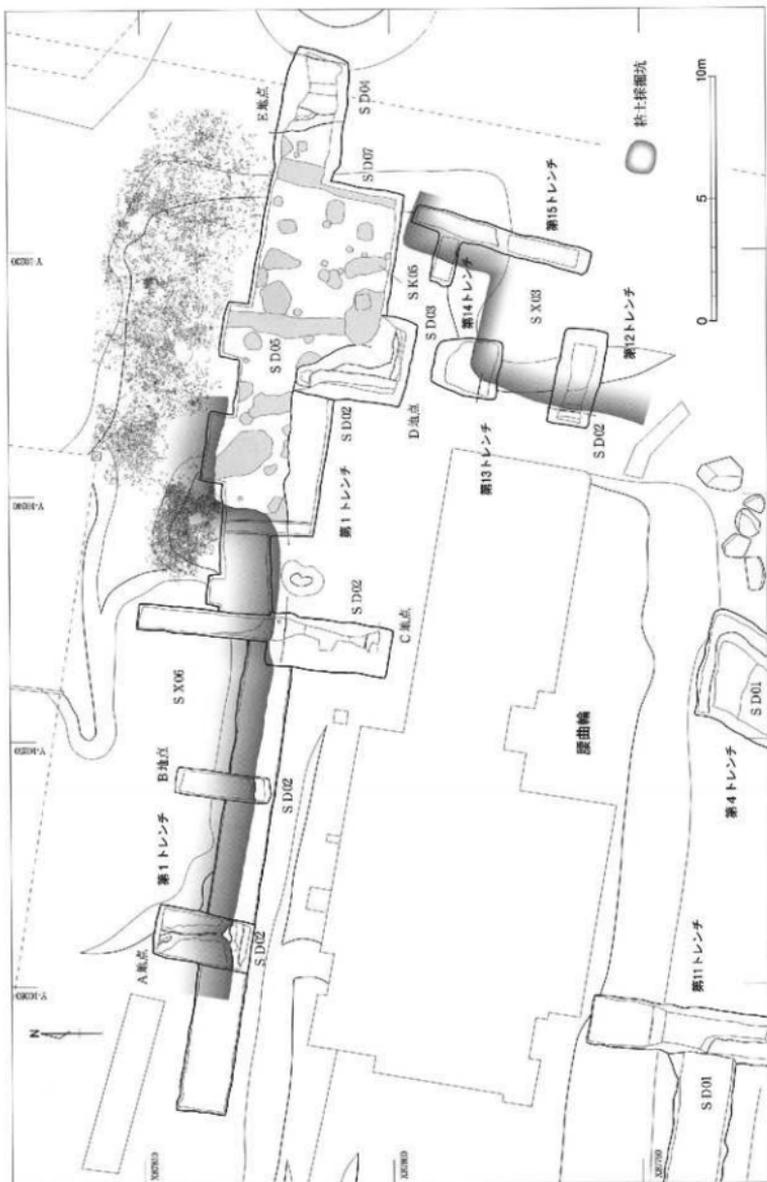




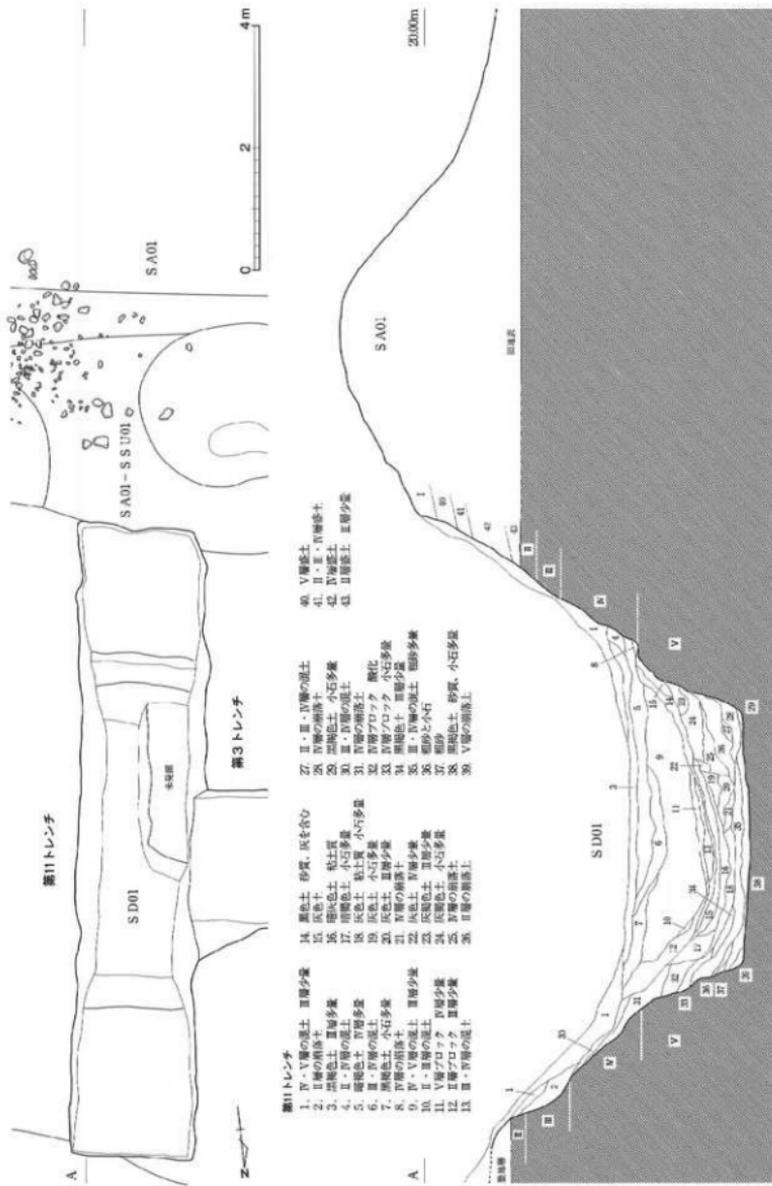




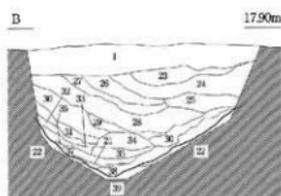
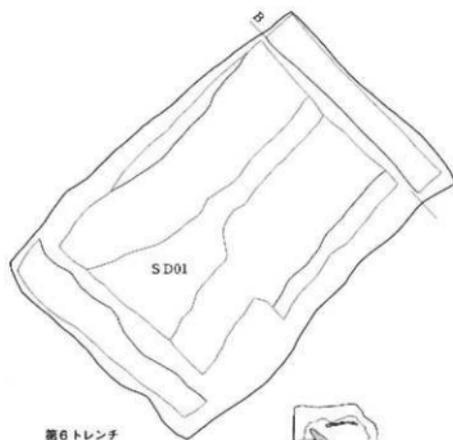
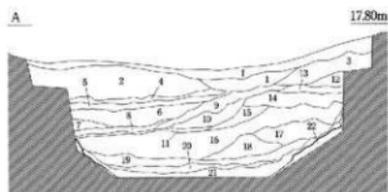
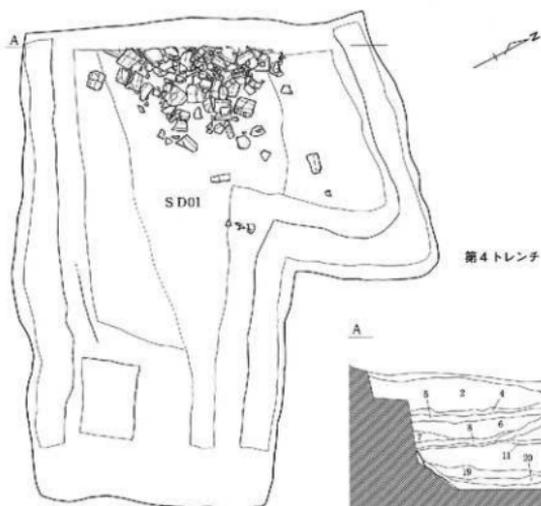
図面〇六 遺構実測図 越中国府関連遺跡能松地区



遺構平面図〔4〕 縮尺1/200



第11トレンチ実測図 縮尺1/80

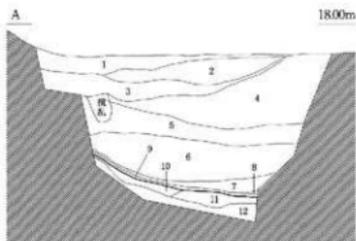
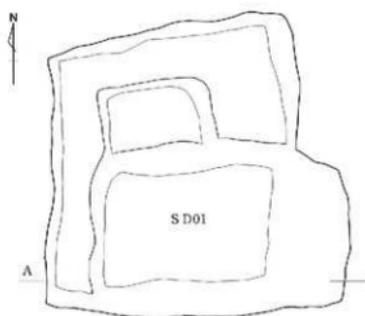


第6トレンチ



第4・第6トレンチ

- | | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 黒褐色土 Ⅱ層少量 | 21. 黒色土 砂質、灰6含む |
| 2. 黄褐色土 砂質 | 22. 凝灰色土 砂質 |
| 3. Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層の混土 | 23. 黄褐色土 砂質 |
| 4. 黒褐色土 | 24. 黒褐色土 |
| 5. 黒層ブロック Ⅱ層少量 | 25. 黄褐色土 粘土質 |
| 6. 黒褐色土 Ⅱ層多量 | 26. 黄褐色土と黒色土の混土 |
| 7. Ⅱ層ブロック Ⅱ層多量 | 27. 黒色土 |
| 8. 黒色土 砂質、小石多量 | 28. Ⅱ層土黒色土の混土 |
| 9. 黒褐色土 Ⅲ層少量 | 29. 黒色土 Ⅱ層多量 |
| 10. Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層の混土 | 30. 灰褐色土 粘土質 |
| 11. Ⅳ層の二次堆積 | 31. 黒褐色土 Ⅱ層多量 |
| 12. Ⅲ・Ⅳ層の混土 | 32. 黒褐色土 Ⅱ層少量 |
| 13. 暗褐色土 Ⅲ層少量 | 33. 黒色土 Ⅱ層少量 |
| 14. Ⅱ・Ⅳ層の混土 | 34. 塊と小石 |
| 15. Ⅳ・Ⅴ層の混土 | 35. Ⅳ層ブロック |
| 16. Ⅳ層ブロック Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層少量 | 36. 灰褐色土 粘土質 |
| 17. Ⅳ層ブロック Ⅱ層少量 | 37. Ⅳ層ブロックと砂の混土 |
| 18. Ⅳ層ブロック Ⅴ層少量 | 38. Ⅲ層の二次堆積 |
| 19. Ⅳ・Ⅴ層の混土 凝灰 | 39. 凝灰色土 Ⅱ層多量 |
| 20. 灰褐色土 Ⅱ・Ⅳ層多量 | |



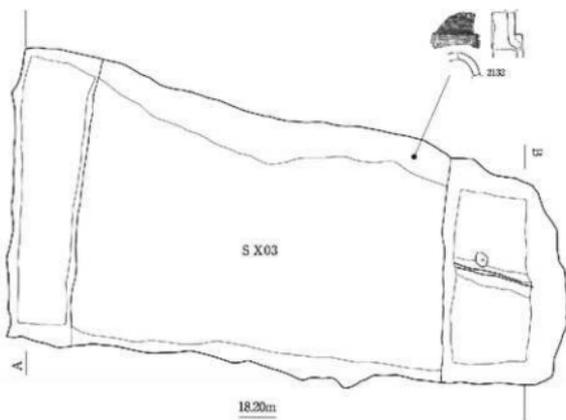
第5トレンチ

- | | | | |
|---------|------------|----------|---------|
| 1. 灰褐色土 | 小石多量 | 7. 灰褐色土 | 粘土質、酸化 |
| 2. 黄褐色土 | 砂質、遺多量 | 8. 黄褐色土 | 粘土質 |
| 3. 灰褐色土 | 現代ゴミ含む | 9. 黒色土 | 砂質、小石少量 |
| 4. 黄褐色土 | 砂質 | 10. 灰褐色土 | 黄褐色土多量 |
| 5. 黒褐色土 | 粘土質、現代ゴミ含む | 11. 褐色土 | 礫・古代瓦含む |
| 6. 黄褐色土 | 粘土質、小石多量 | 12. 褐色土 | 黄褐色土多量 |



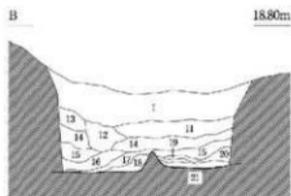
1. 第5トレンチ実測図

縮尺 1/80



第7トレンチ

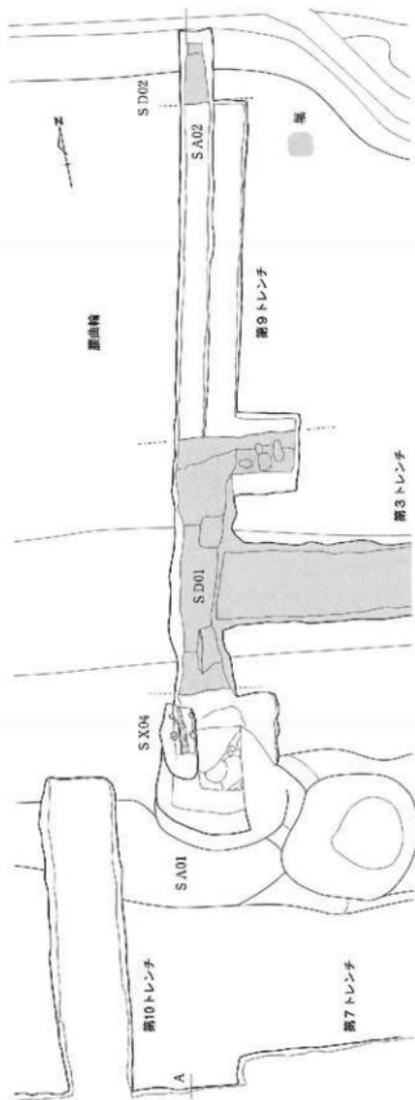
- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. II・III層の粘土 | 11. 現代ゴミ |
| 2. II層ブロック | 12. 現代ゴミ |
| 3. III層ブロック | 13. 灰褐色土 |
| 4. II・III・IV層の粘土 | 14. 黒褐色土 |
| 5. II・III層の粘土 | 15. II・III・IV層の粘土 |
| 6. III層ブロック | 16. II・IV層の粘土 |
| 7. II層ブロック | 17. III層ブロック |
| 8. II・IV層の粘土 | 18. II・IV層の粘土 |
| 9. IV層ブロック | 19. II層ブロック |
| 10. IV層ブロック | 20. II・III層の粘土 |
| | 21. II・IV層の粘土 |



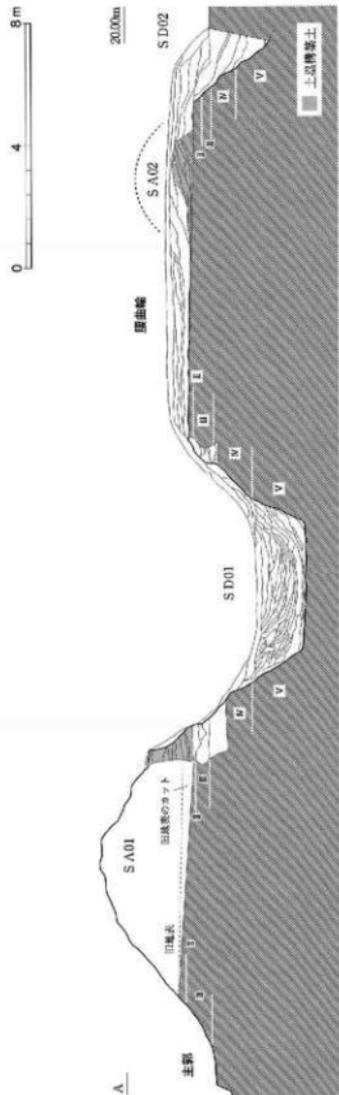
2. 第7トレンチ実測図〔1〕

縮尺 1/80

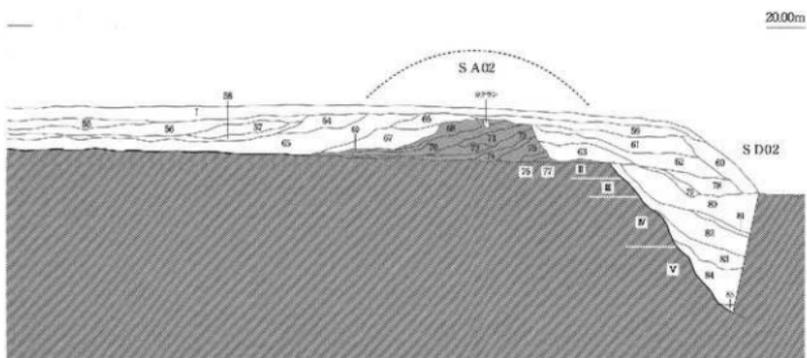
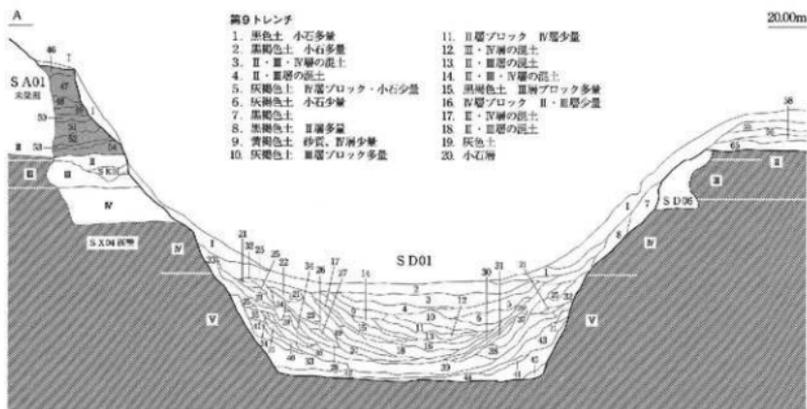
図面一〇 遺構実測図 越中国府関連遺跡能松地区



第9トレンチ実測図【1】

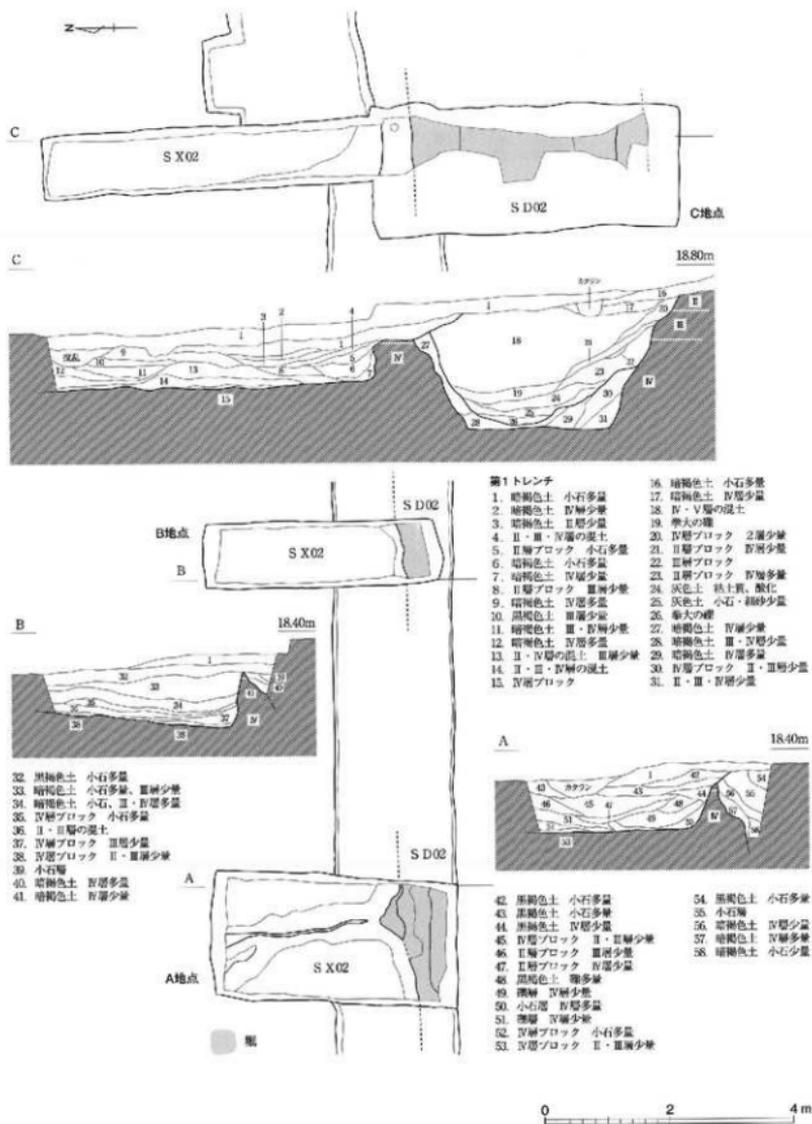


縮尺1/160

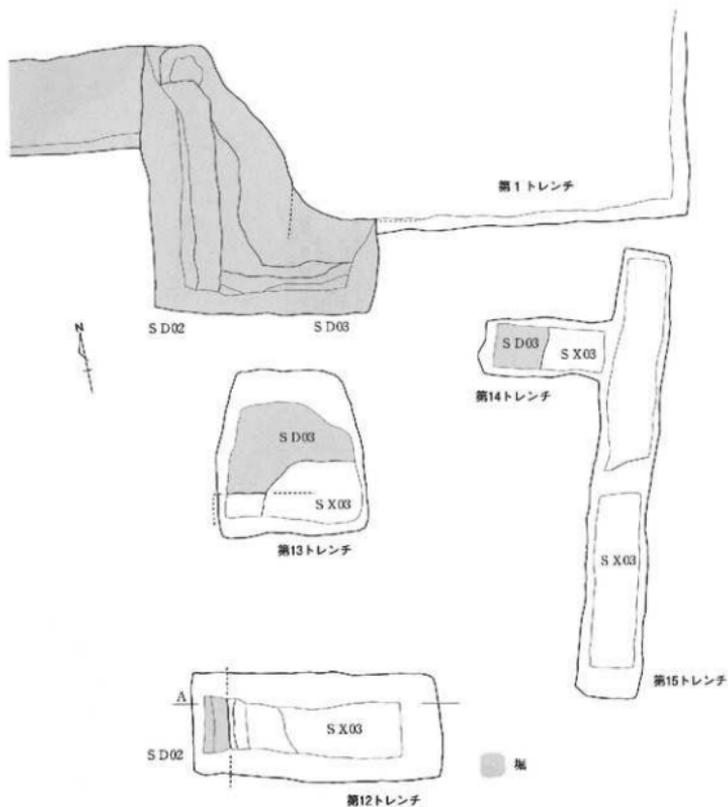


第9トレンチ実測図〔2〕

縮尺 1/80

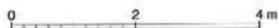
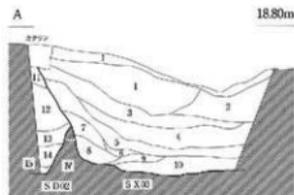


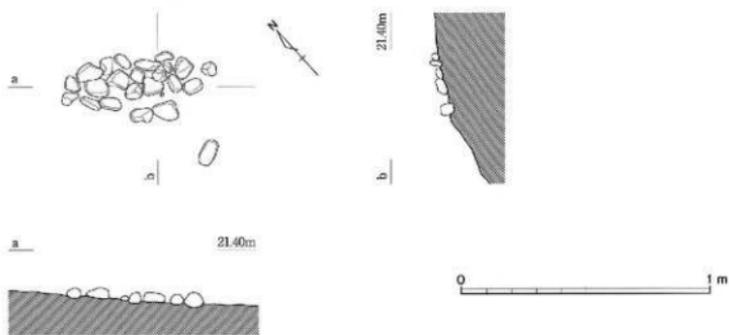
第1トレンチ実測図〔1〕



第12トレンチ

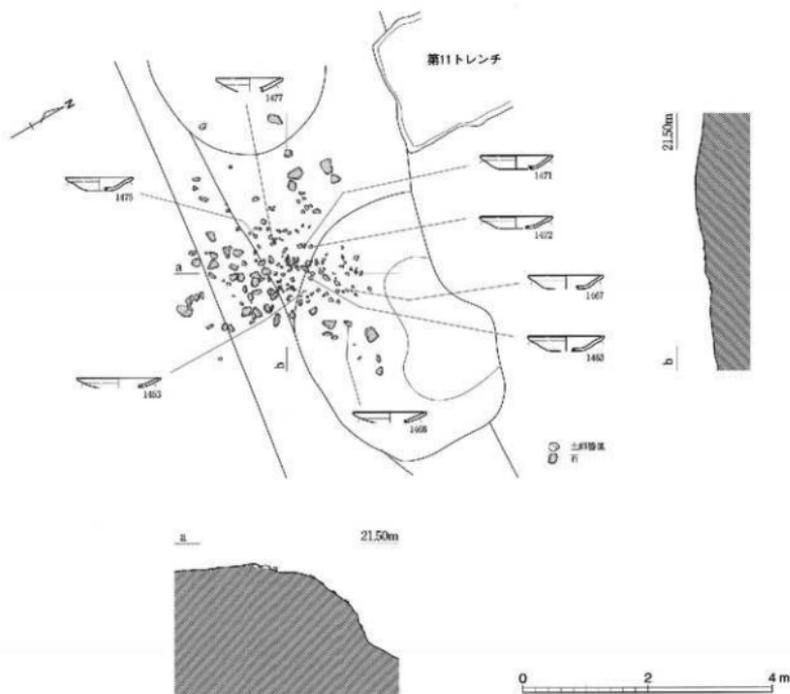
1. 黄褐色土 砂質、現代ゴミ含む
2. 黒褐色ブロック 現代ゴミ含む
3. 黒色土 礫多量
4. 黒褐色土 小石多量
5. 暗褐色土 礫多量
6. 暗褐色土 小石少量
7. V層ブロック 黒褐色土少量
8. IV-V層の泥土
9. IV層ブロック 小石少量
10. E・遺跡の泥土
11. 黒褐色土 小石多量
12. 小石層
13. 小石層
14. 赤土の層
15. 暗褐色土 IV層小ブロック少量





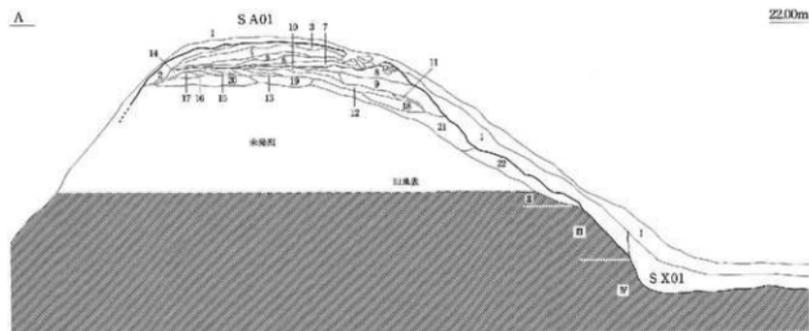
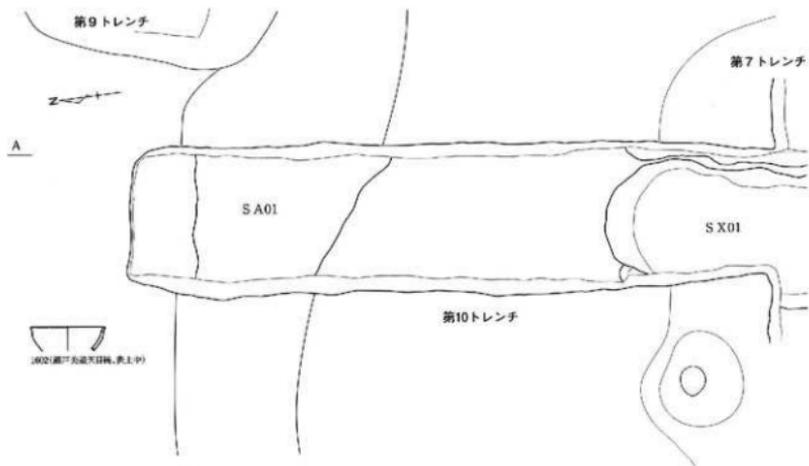
1. 集石 SA01 - S S S 01 実測図

縮尺 1/20



2. 遺物集積 SA01 - S S U 01 実測図

縮尺 1/80



第10トレンチ

1. V層アロック 縮まりなし
2. V層盛土
3. IV・V層盛土
4. IV層盛土 V層少量
5. IV層盛土 III層少量
6. III層盛土 II層少量
7. II層盛土 III層少量
8. II・III層盛土
9. IV層盛土 II層少量
10. IV層盛土

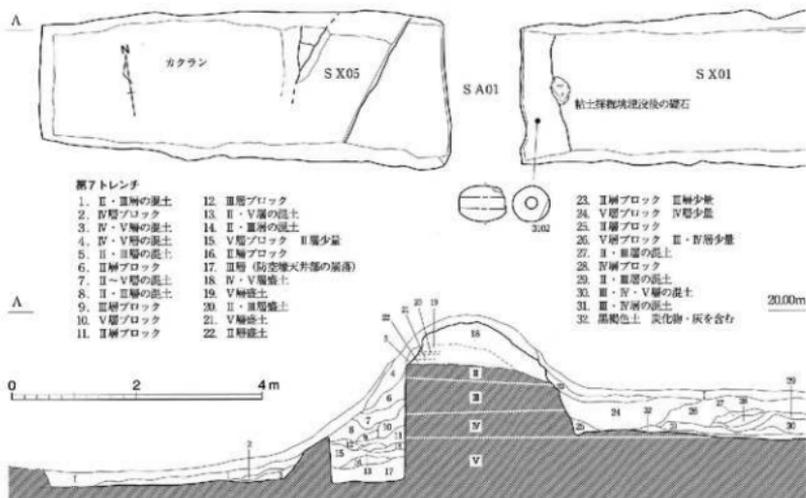
11. IV層盛土
12. IV・V層盛土
13. V層盛土 IV層少量
14. IV・V層盛土
15. IV層盛土
16. V層盛土
17. IV・V層盛土
18. IV・V層盛土
19. V層盛土
20. V層盛土 IV層少量

21. V層盛土 産少量
22. V層盛土 産大の黒多量



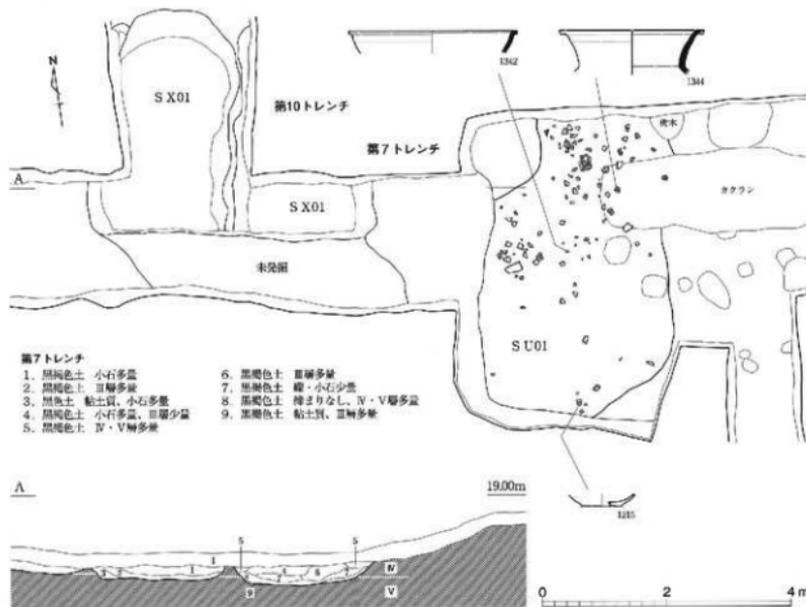
第10トレンチ実測図

縮尺 1/80



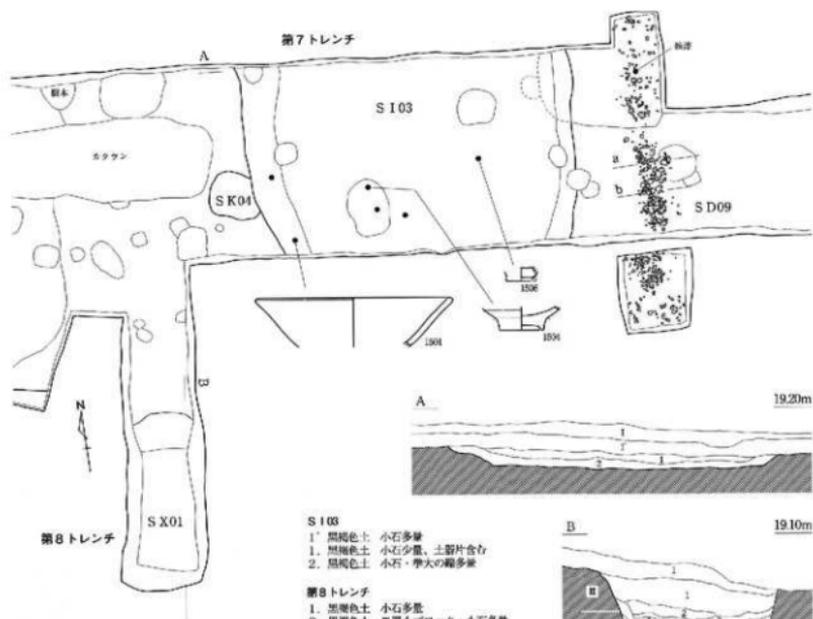
1. 第7トレンチ実測図〔2〕

縮尺1/80



2. 瓦溝り S U01実測図

縮尺1/80

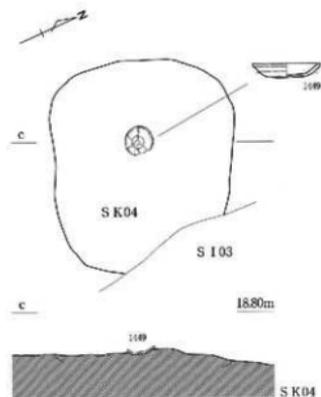
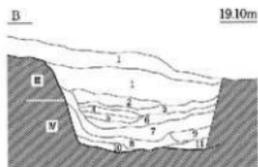


S I 03

- 1' 黒褐色土 小石多量
 1. 黒褐色土 小石少量、土器片含む
 2. 黒褐色土 小石・準大の礫多量

第8トレンチ

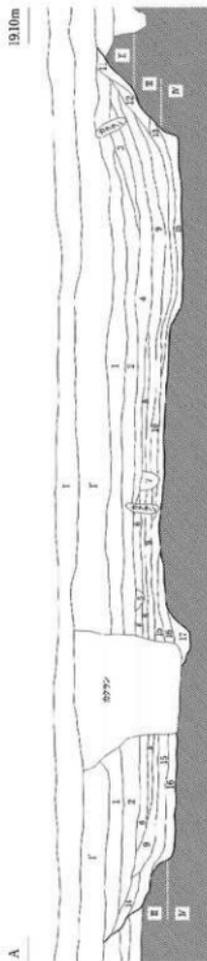
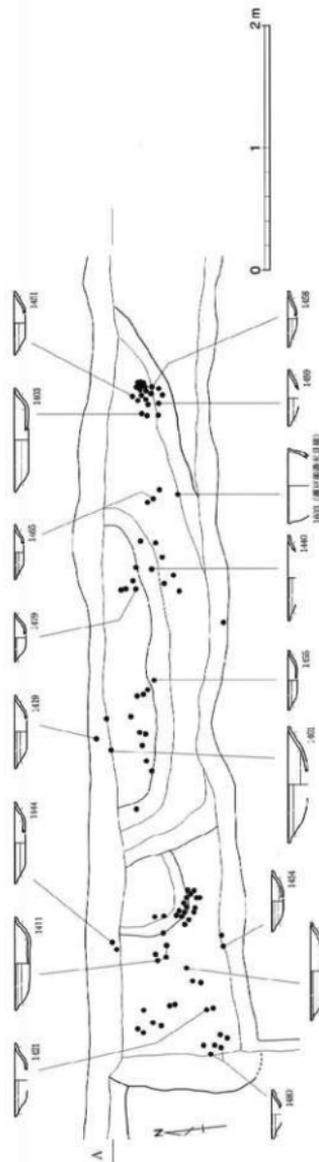
1. 黒褐色土 小石多量
 2. 黒褐色土 厚層小ブロック・小石多量
 3. 黒褐色土 厚層ブロック・小石多量
 4. 灰褐色土 厚層ブロック少量
 5. 黒褐色土 小石多量
 6. 黒褐色土 厚層小ブロック・礫多量
 7. 小石層
 8. 黒褐色土 厚層ブロック多量
 9. 厚層ブロック 小石少量
 10. III・IV層の混土
 11. III・IV・V層の混土



竪穴建物址 S I 03、溝 S D 09、土坑 S K 04実測図

縮尺 1/80、1/40、1/20

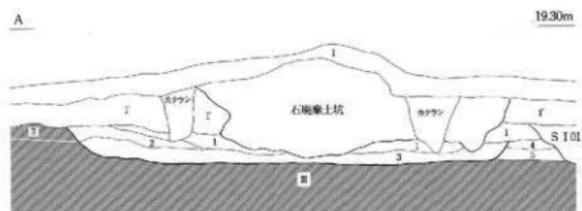
竪穴建物址 S I 01実測図



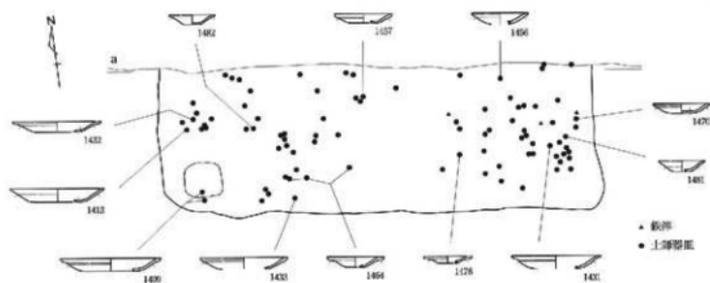
S I 01

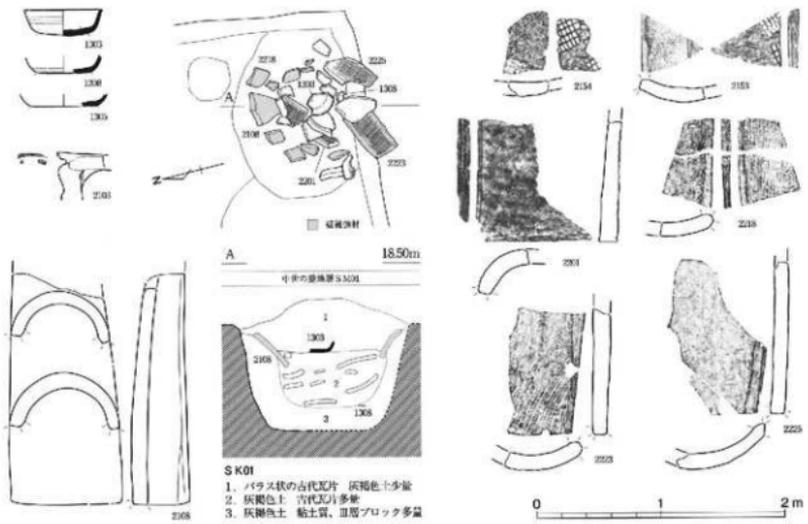
1. 竪穴プロトック IV・V層少量
2. 竪穴プロトック V層少量
3. 竪穴プロトック V層少量
4. 竪穴プロトック V層少量
5. 竪穴プロトック V層少量
6. 竪穴プロトック V層少量
7. 竪穴プロトック V層少量
8. 竪穴プロトック V層少量
9. 竪穴プロトック V層少量
10. 竪穴プロトック V層少量
11. 竪穴プロトック V層少量
12. 竪穴プロトック V層少量
13. 竪穴プロトック V層少量
14. 竪穴プロトック V層少量
15. 竪穴プロトック V層少量
16. 竪穴プロトック V層少量
17. 竪穴プロトック V層少量

図面一九 遺構実測図 越中国府関連遺跡跡能松地区



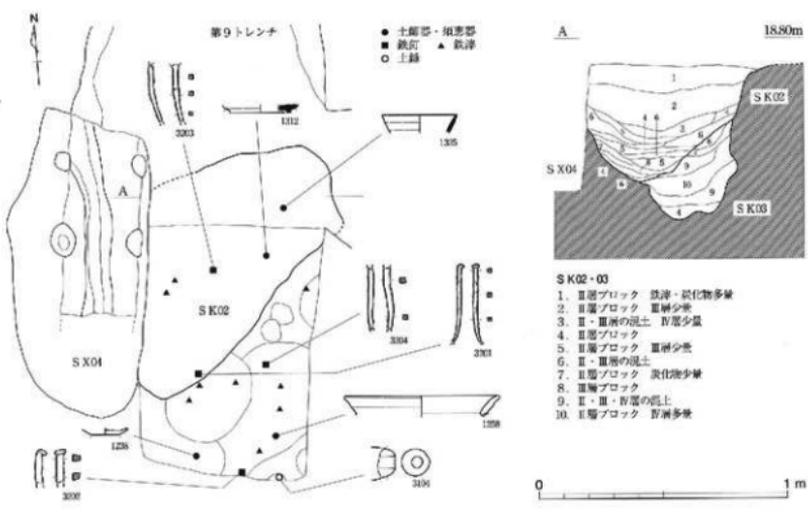
- S 102
 I' 赤褐色土 小石多量
 1. 赤層アロック 土層少量 (敷地面)
 2. 赤褐色土 土層少量
 3. 黒褐色土 赤層少量、炭化物多量
 4. II層アロック 土層少量
 5. II - 土層の混土





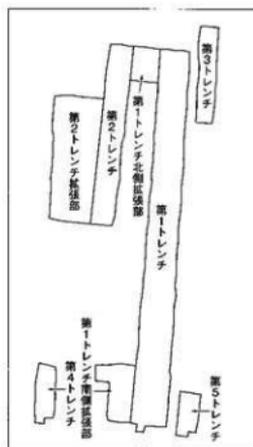
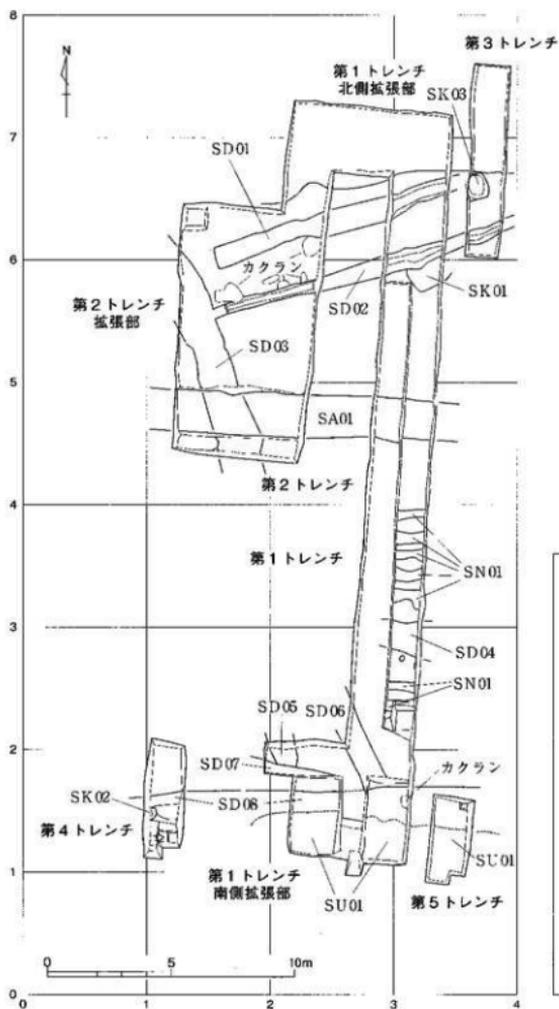
1. 土坑 S K01実測図

縮尺 1/40

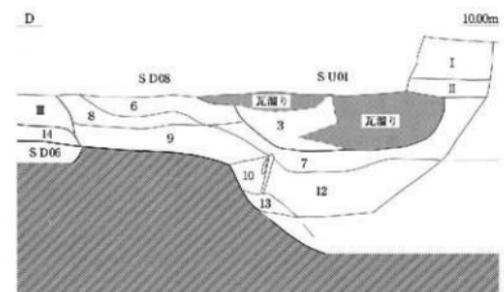
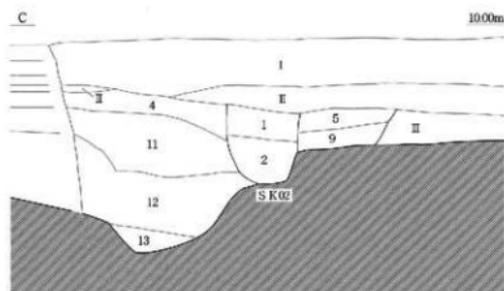
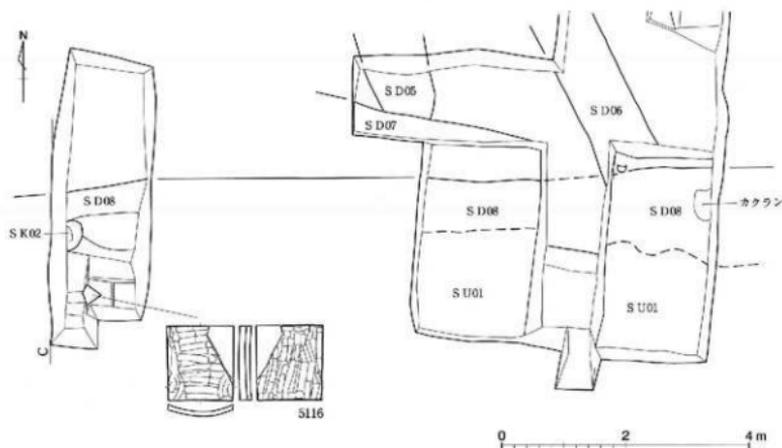


2. 土坑 S K02・03実測図

縮尺 1/20



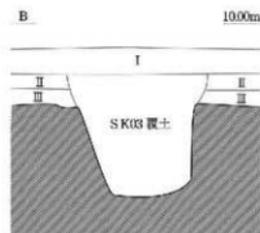
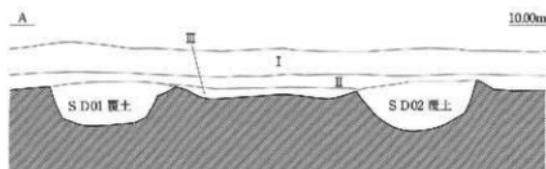
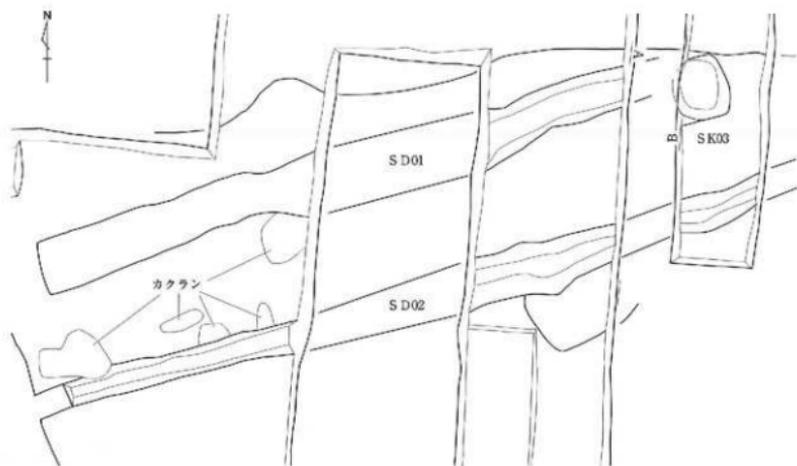
トレンチ配置概略図



- I. 褐色粘質土。(盛土)
- II. 灰褐色粘質土。(大正～昭和時代の埋埋層)
- III. 灰褐色粘質土。(江戸～明治時代の埋埋層)
1. 灰褐色細粒質シルト、流土混入。(S K02 覆土)
2. 暗灰色細粒質シルト。(S K02 覆土)
3. 灰色粘質土、褐色砂質土・瓦含む。(S X01 覆土)
4. 灰褐色細粒質シルト、礫・瓦含む。
5. 暗褐色粘質土・灰褐色細粒質シルトの混土层。
6. 褐色粘質土、灰色粘質土・黒色粘質土混入。
7. 灰褐色粘質土・褐色砂質土の混土层、瓦少量含む。
8. 灰色粘質土・黄白色粘質土・褐色砂質土の混土层。
9. 暗灰色粘質土。
10. 暗灰色シルト質細粒砂、礫少量含む。
11. 灰褐色シルト質細粒砂。
12. 暗灰色粘質土。
13. 灰色粘質土。
14. 黒褐色粘質土。(S D06 覆土)

溝 S D06 平面図・土層断面図

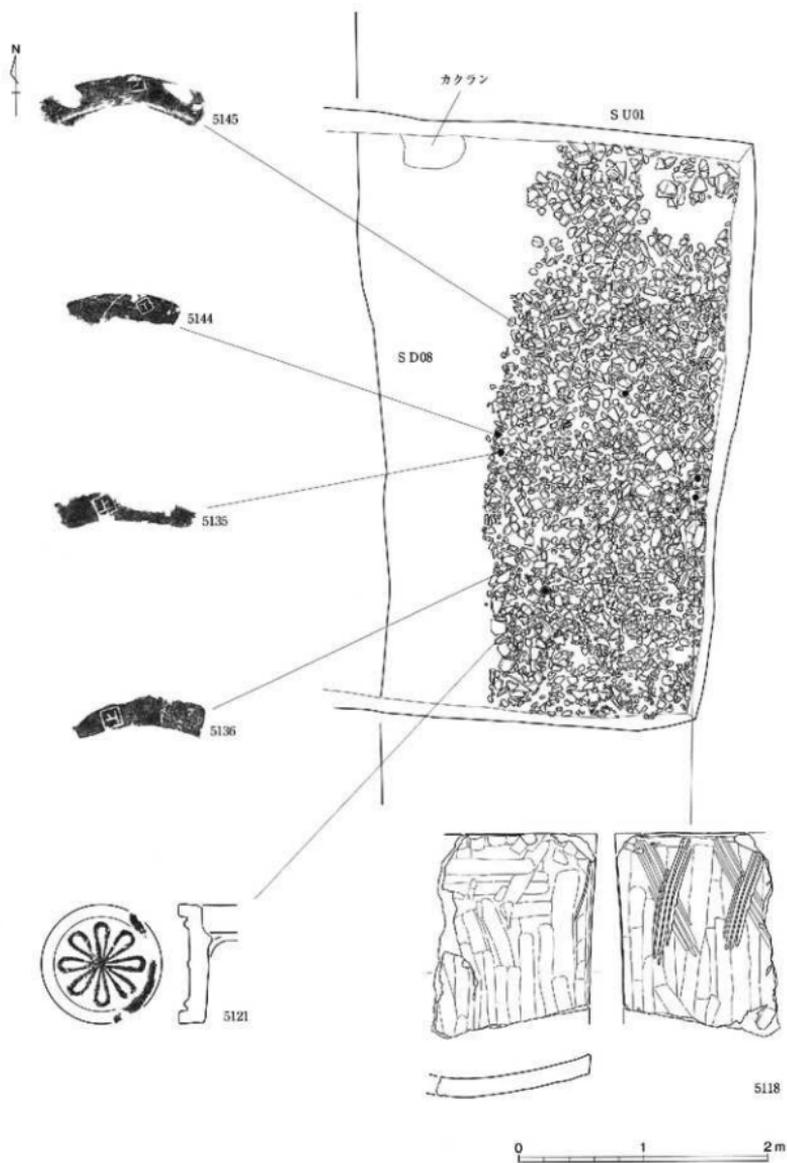
縮尺 1/80, 1/40



- I. 褐色粘質土。(盛土)
- II. 暗灰褐色粘質土。(大正～昭和時代の盛土層)
- III. 灰色粘質土。(江戸～明治時代の盛土層)
- SD01・02 覆土。黒褐色粘質土。
- SK03 覆土。暗褐色粘質土。

0 1 2 m

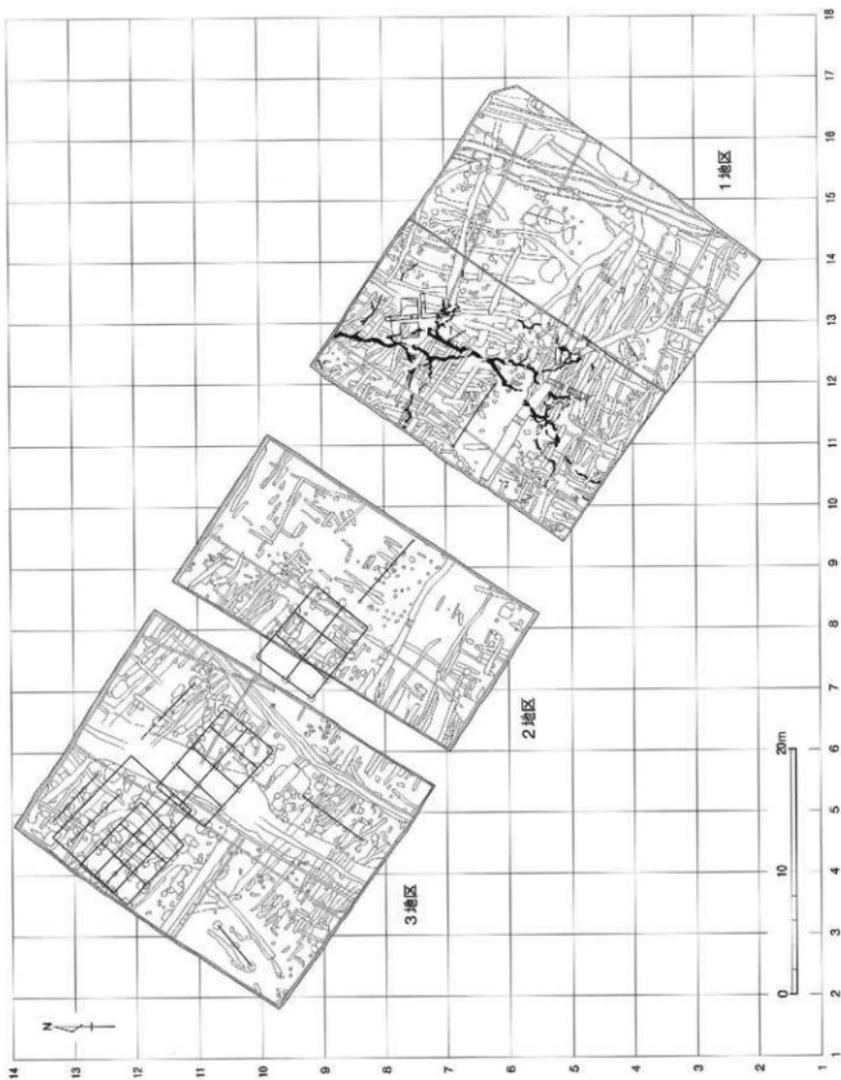
図面二六 遺構実測図 瑞龍寺遺跡芦原地区



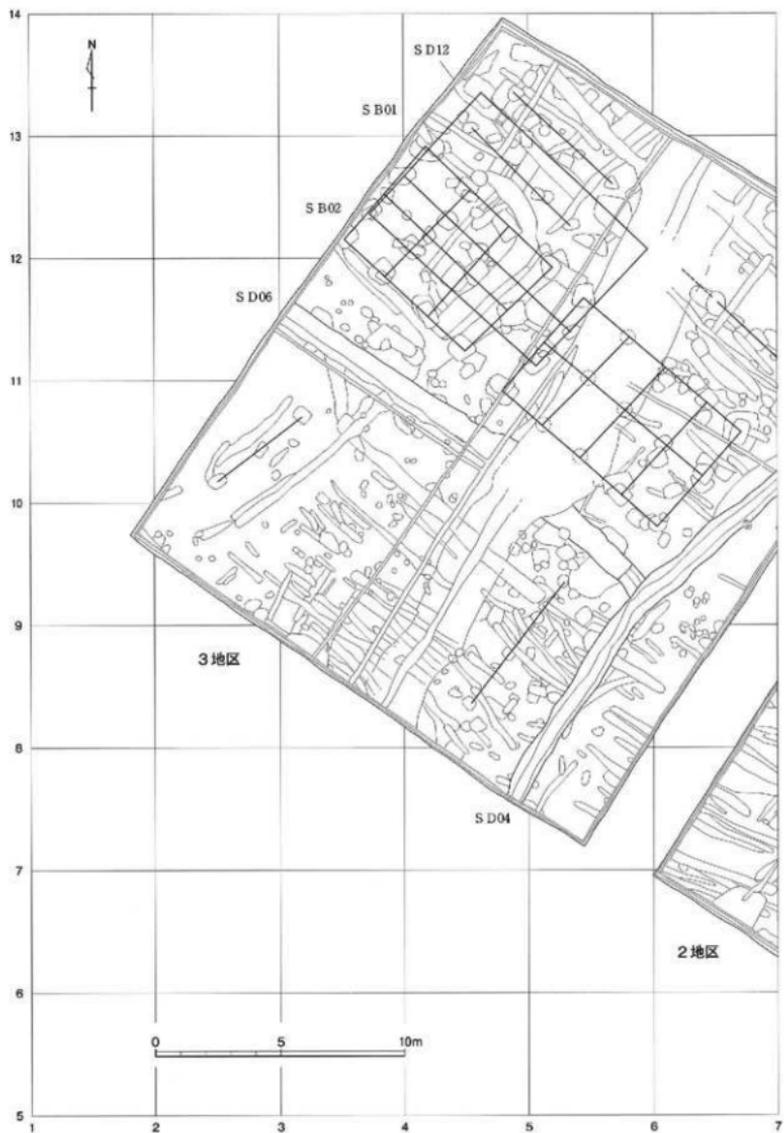
瓦溜りSU01平面図

縮尺 1/40

図面二八 遺構実測図 東木津遺跡今井地区



図面二九 遺構実測図 東木津遺跡今井地区



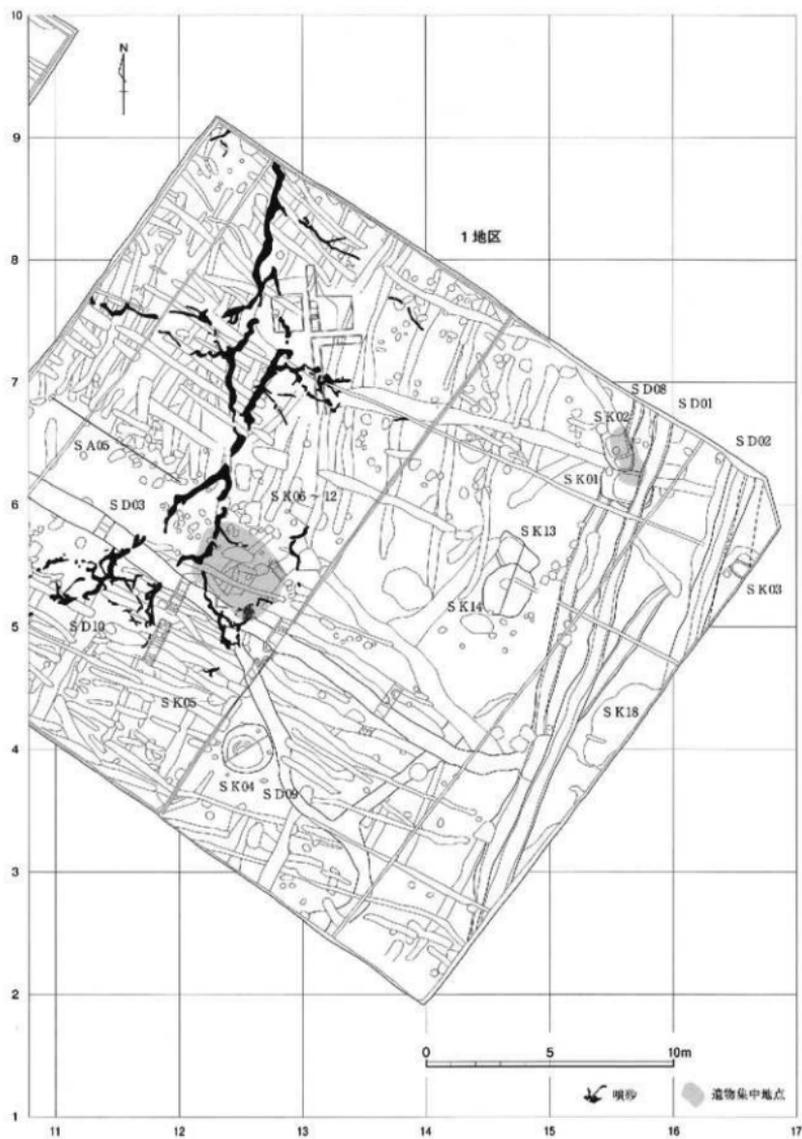
図面三〇 遺構実測図 東木津遺跡今井地区

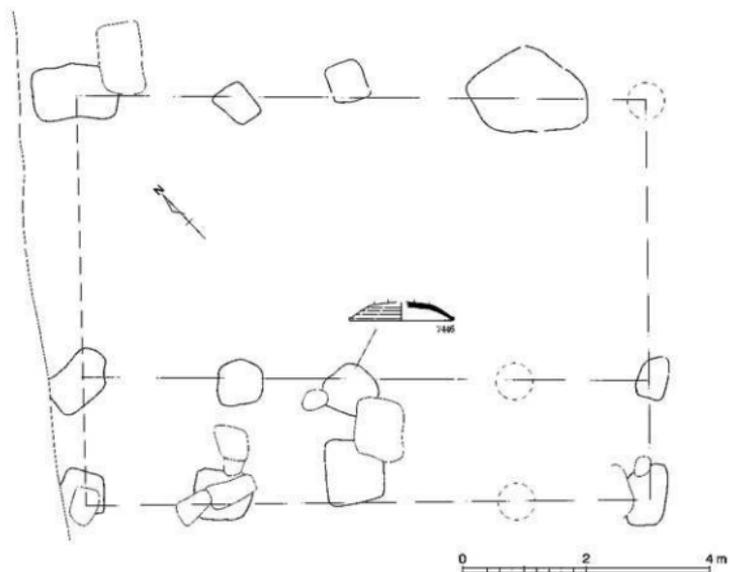


遺構平面図〔2〕

縮尺 1/200

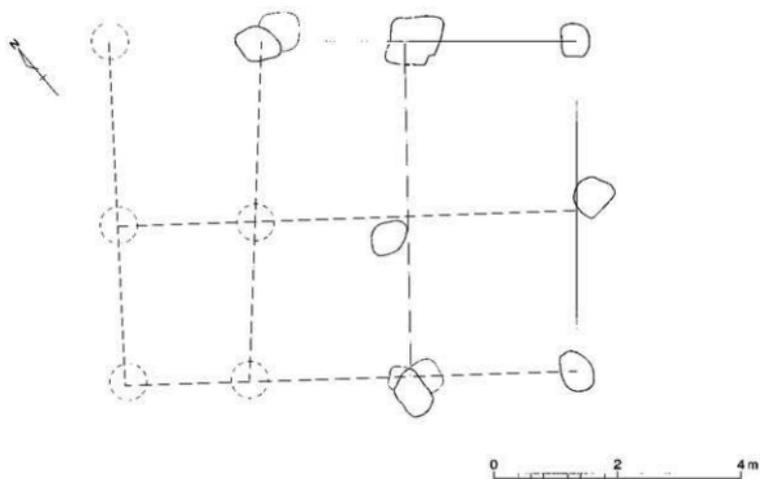
図面三一 遺構実測図 東木津遺跡今井地区





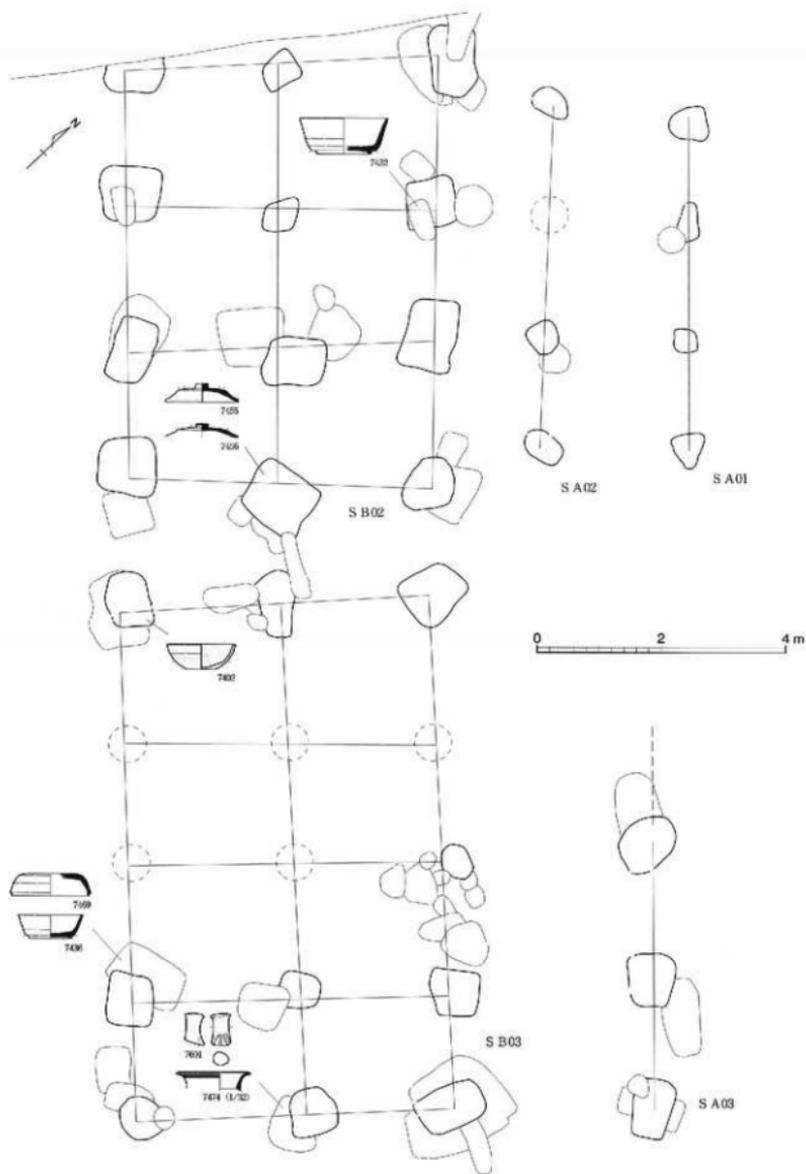
1. 掘立柱建物址 S B01平面図

縮尺 1/80



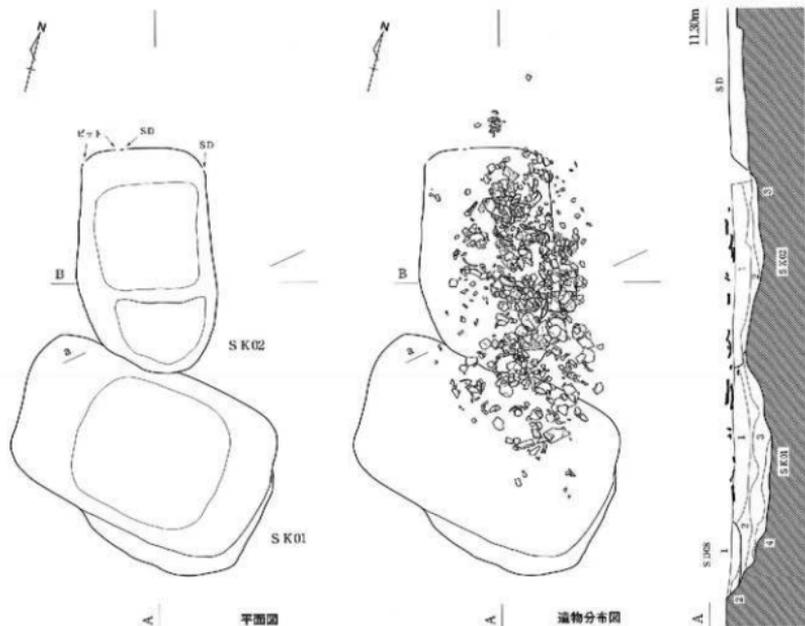
2. 掘立柱建物址 S B04平面図

縮尺 1/80



掘立柱建物址 S B02・03、横址 S A01～03平面図

縮尺 1/80



SK01

1. 黒褐色土 炭化物微量
2. 黒褐色土 VI層ブロック少量、炭化物微量
3. 黒褐色土 VI層ブロック多量
4. 灰褐色土 VI層多量

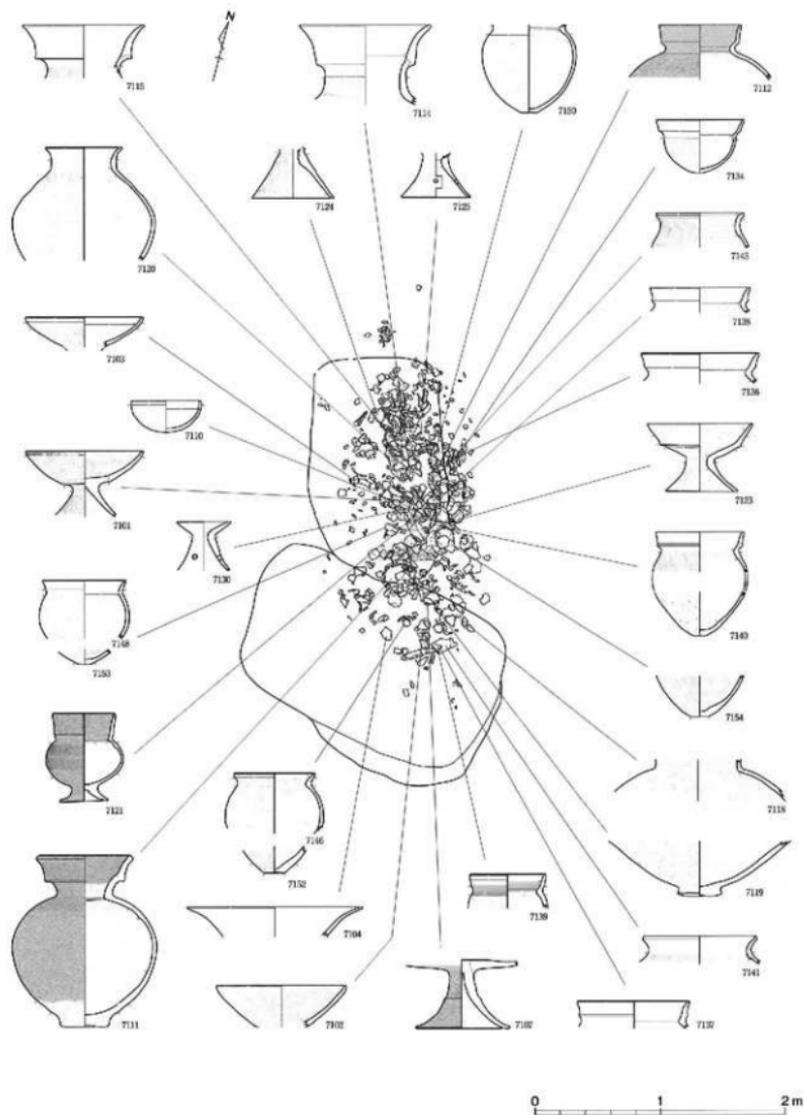
SK02

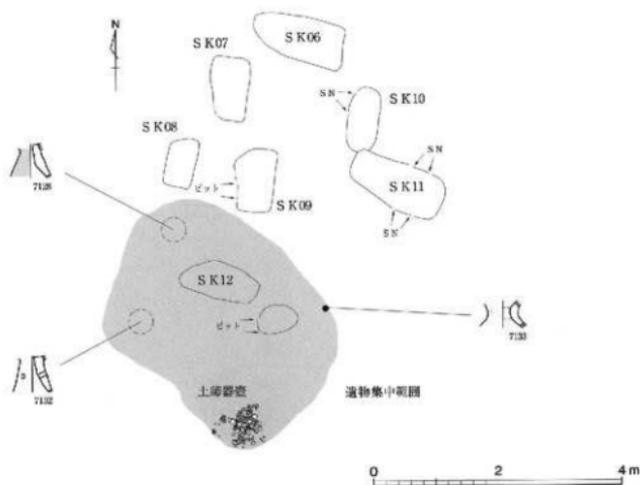
1. 灰褐色土 砂質、VI層少量
2. 黒褐色土 炭化物微量
3. 黒褐色土 VI層ブロック・炭化物微量
4. 黒褐色土 VI層ブロック多量、炭化物微量

SD08

1. 黒褐色土 VI層ブロック少量
2. 黒褐色土 VI層ブロック多量

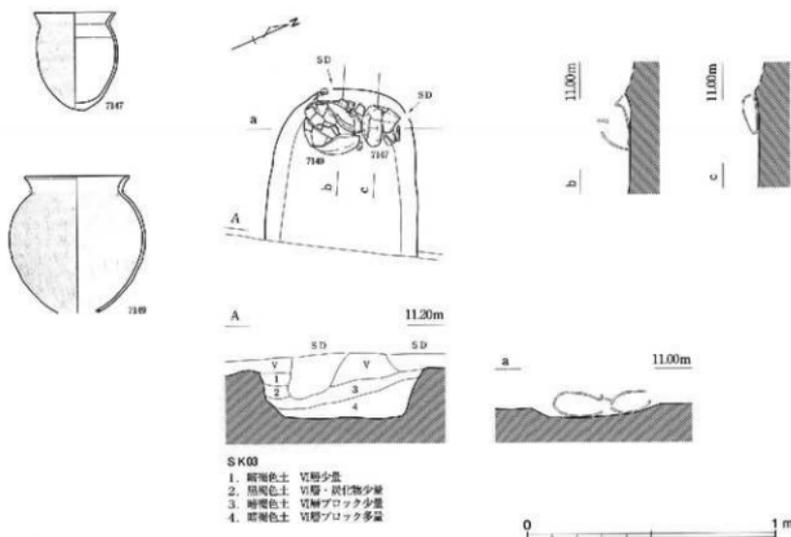
0 1 2m





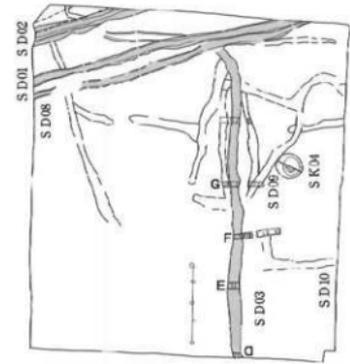
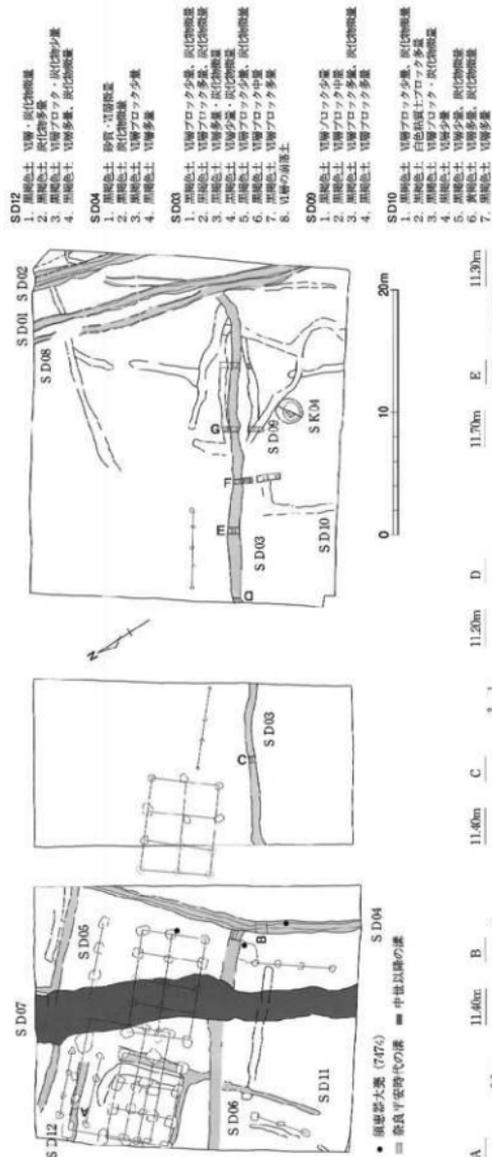
1. 土坑 S K06~12周辺平面図

縮尺 1/80



2. 土坑 S K03実測図

縮尺 1/20



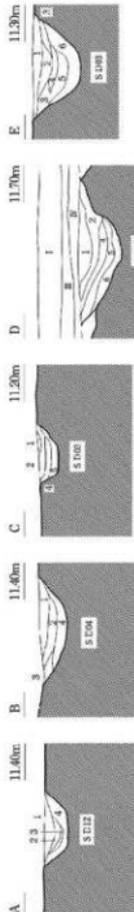
- SD19**
1. 黒褐色土 灰化物微量
 2. 黒褐色土 灰化物多量
 3. 黒褐色土 灰化物少量
 4. 黒褐色土 灰化物微量

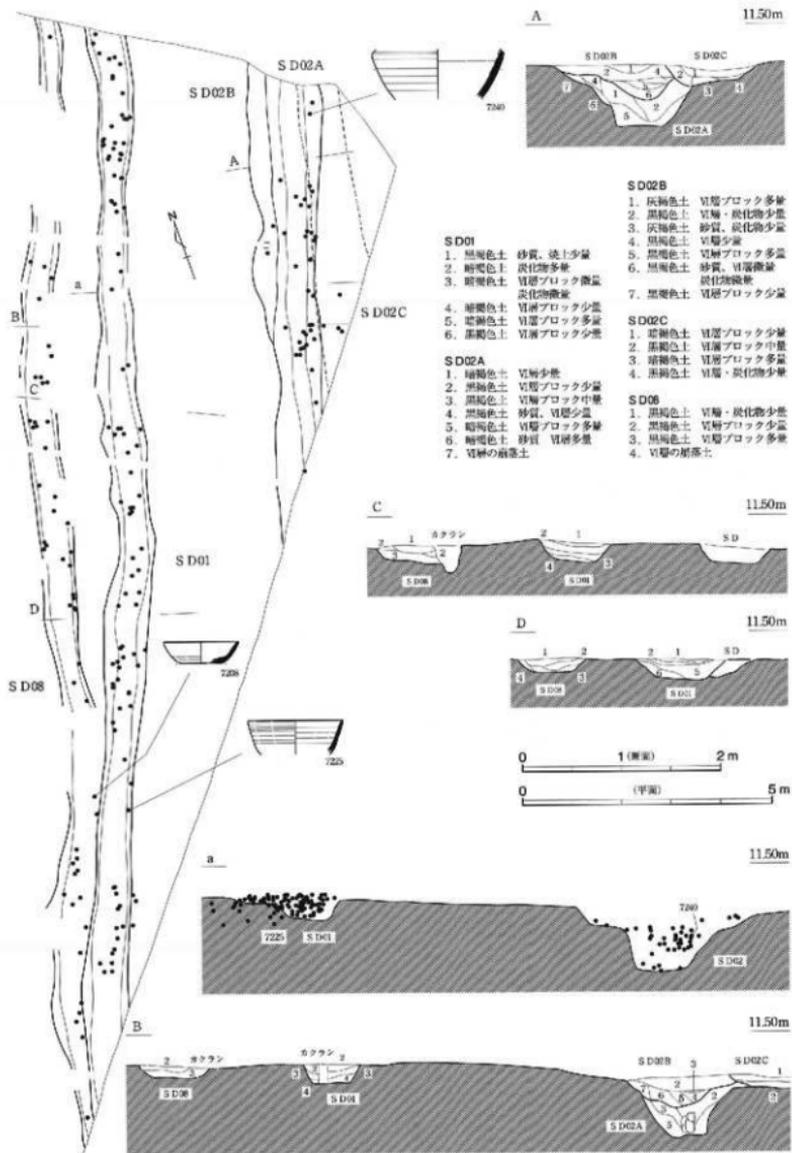
- SD01**
1. 黒褐色土 砂質・灰化物微量
 2. 黒褐色土 灰化物微量
 3. 黒褐色土 灰化物微量
 4. 黒褐色土 灰化物微量

- SD03**
1. 黒褐色土 灰化物少量
 2. 黒褐色土 灰化物微量
 3. 黒褐色土 灰化物微量
 4. 黒褐色土 灰化物微量
 5. 黒褐色土 灰化物微量
 6. 黒褐色土 灰化物微量
 7. 黒褐色土 灰化物微量
 8. 灰褐色土

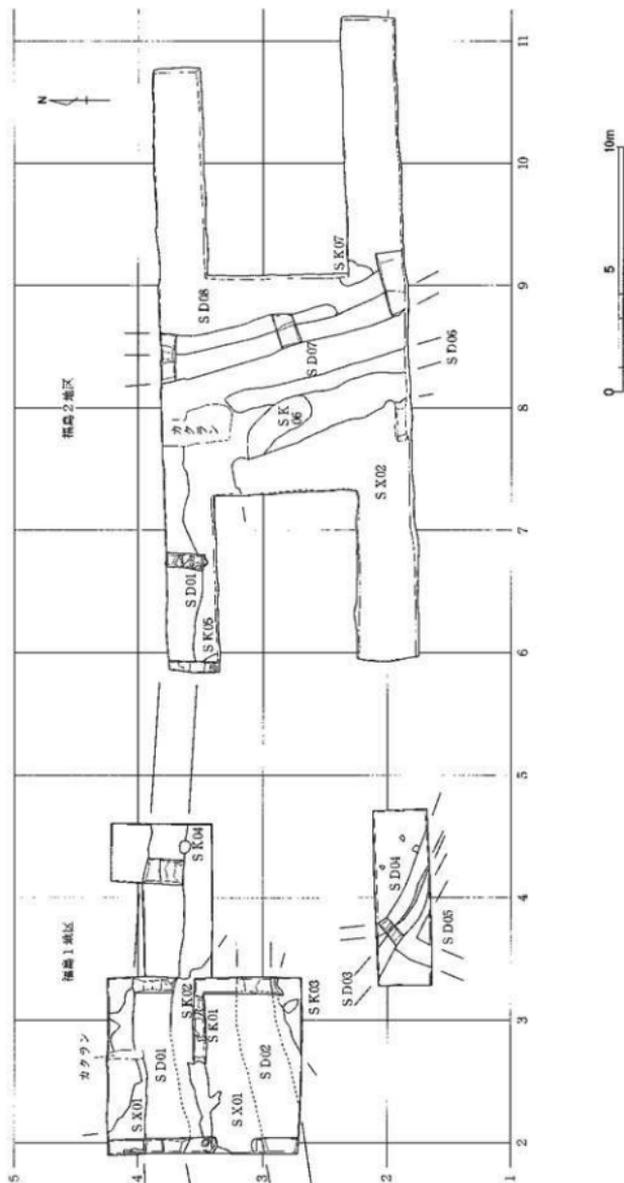
- SD09**
1. 黒褐色土 灰化物少量
 2. 黒褐色土 灰化物微量
 3. 黒褐色土 灰化物微量
 4. 黒褐色土 灰化物微量

- SD10**
1. 黒褐色土 灰化物少量
 2. 黒褐色土 灰化物微量
 3. 黒褐色土 灰化物微量
 4. 黒褐色土 灰化物微量
 5. 黒褐色土 灰化物微量
 6. 黒褐色土 灰化物微量
 7. 黒褐色土 灰化物微量

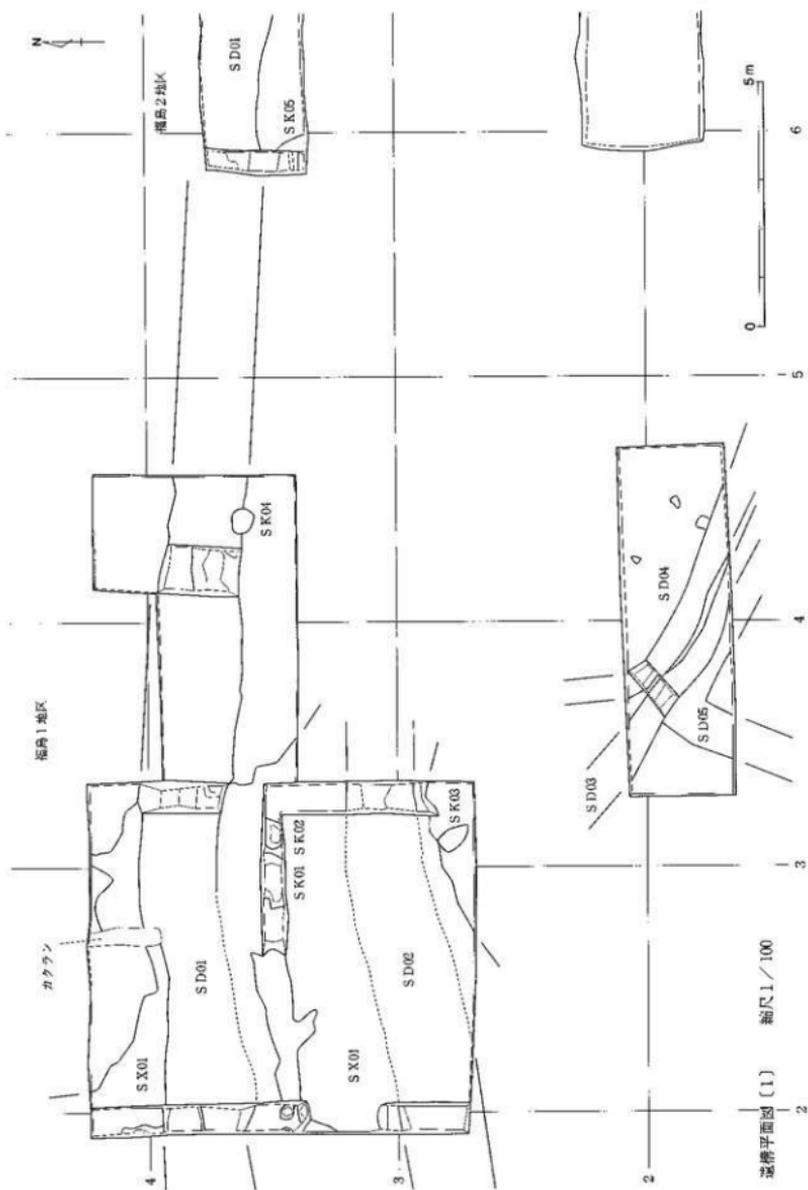




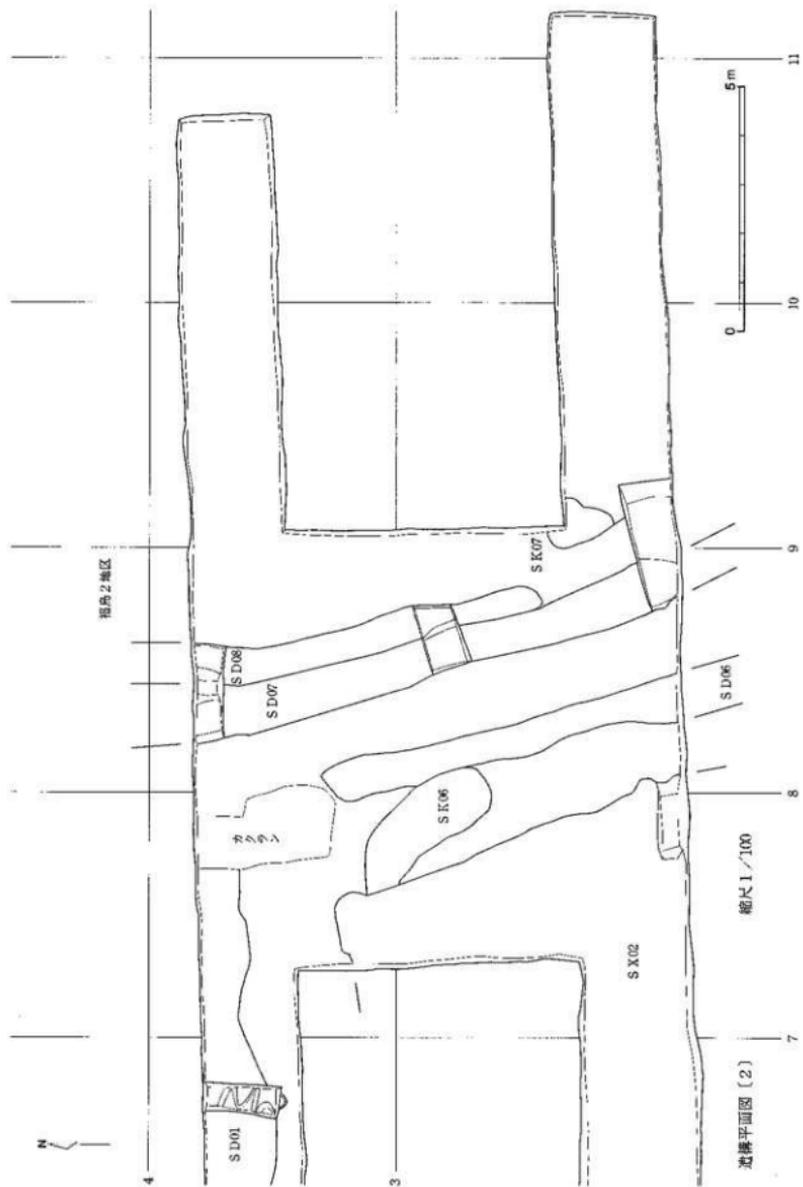
図面三九 遺構実測図 石塚江之戸遺跡福島地区

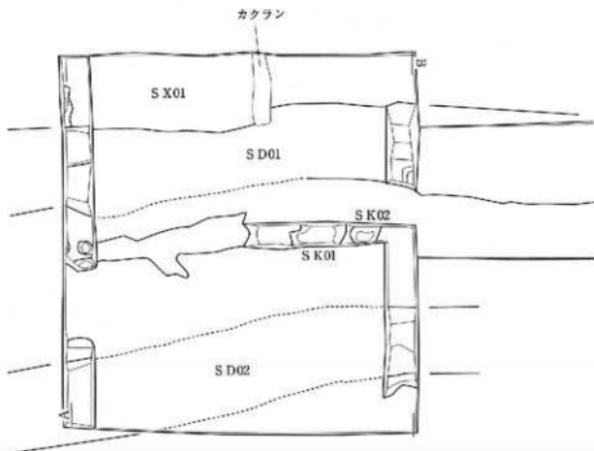


図面四〇 遺構実測図 石塚江之戸遺跡福島地区

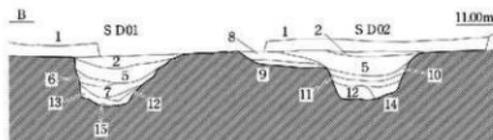
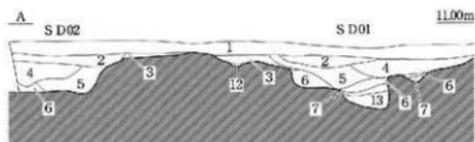


図面四一 遺構実測図 石塚江之戸遺跡福島地区



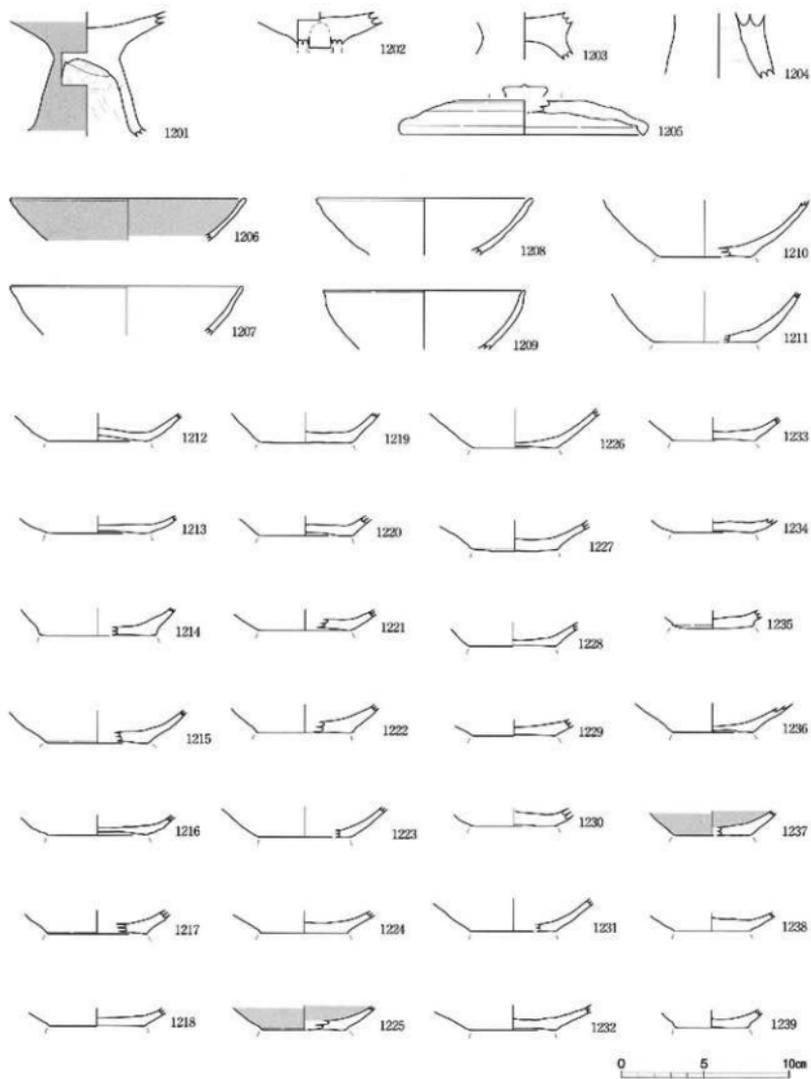


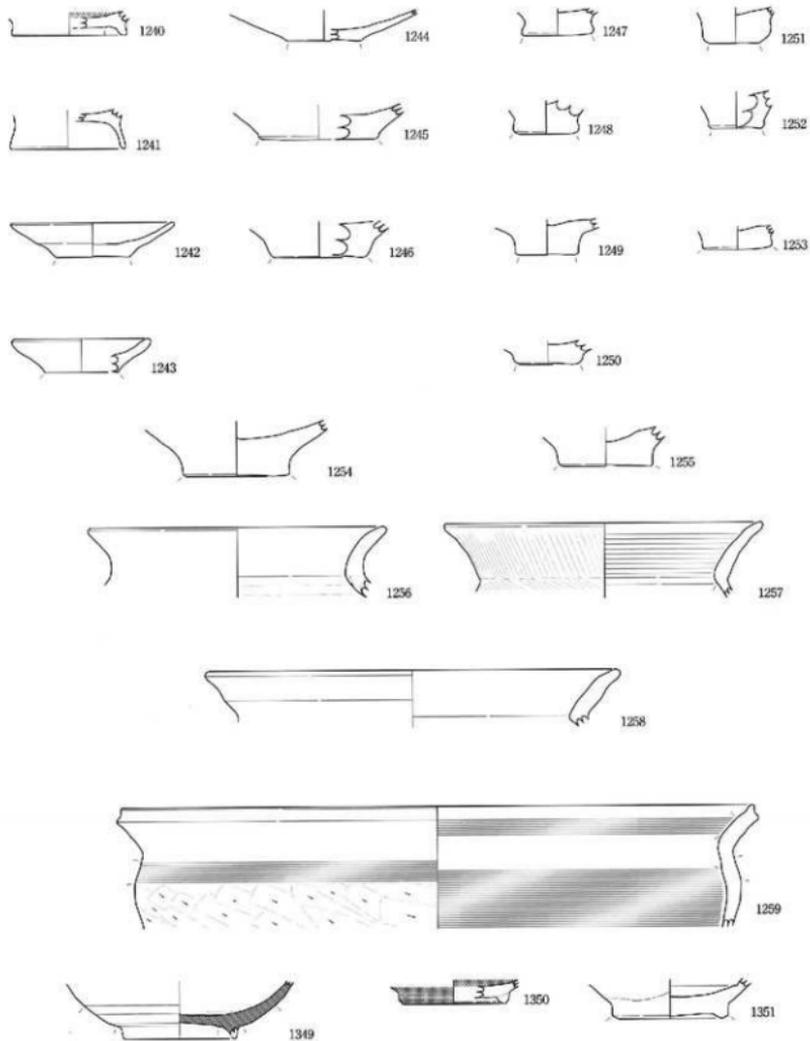
0 5m



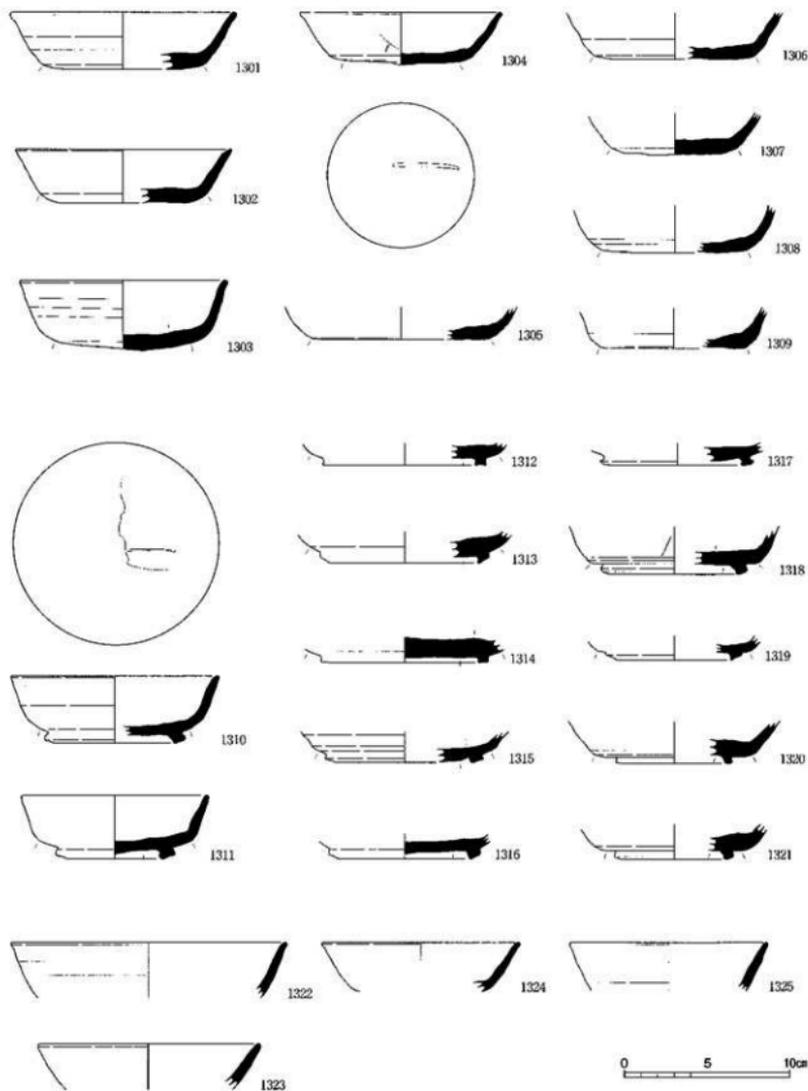
0 2 4m

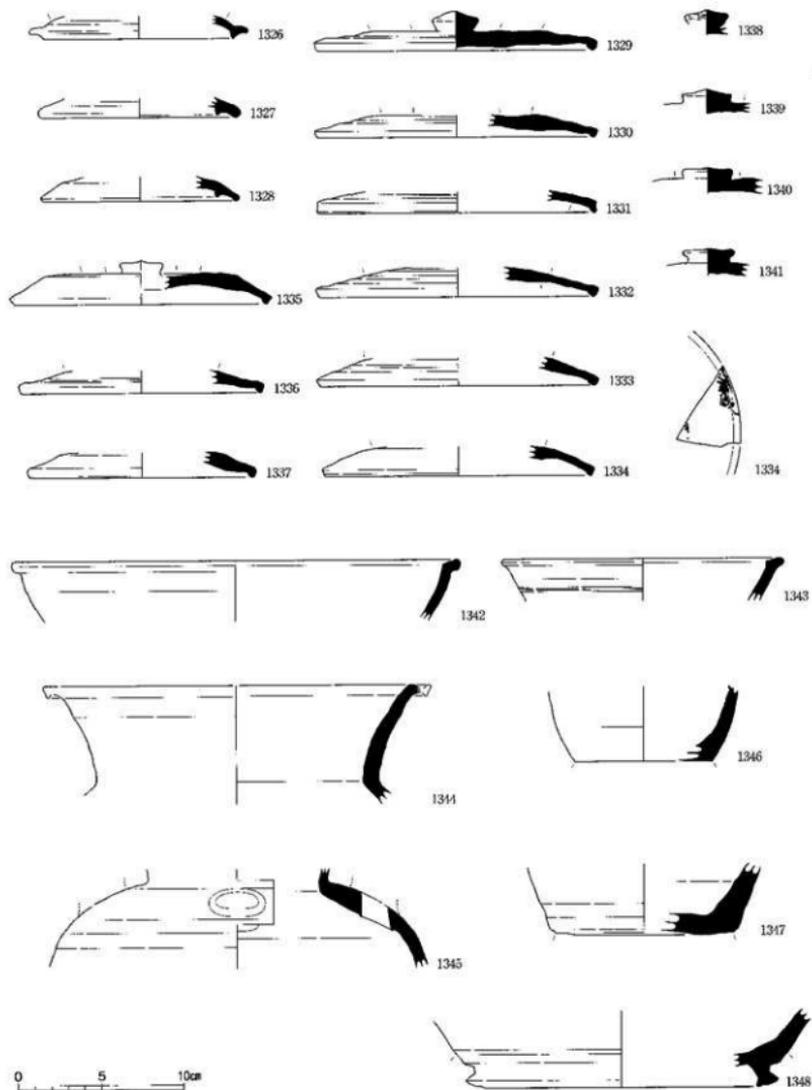
1. 表土
2. 明灰色粘質土
3. 灰褐色弱粘質土 礎舎む
4. 灰褐色粘質土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 暗灰色粘質土 黄白色粘質土ブロック混入
7. 暗灰色砂質土
8. 黄褐色粘質土 黄白色粘質土ブロック混入
9. 灰褐色砂質土 砂利多く含む
10. 明灰色砂質土
11. 暗灰色粘質土
12. 灰色粘質土 黄白色粘質土ブロック混入
13. 灰褐色砂質土
14. 暗灰褐色粘質土 黄白色粘質土ブロック混入
15. 褐色砂

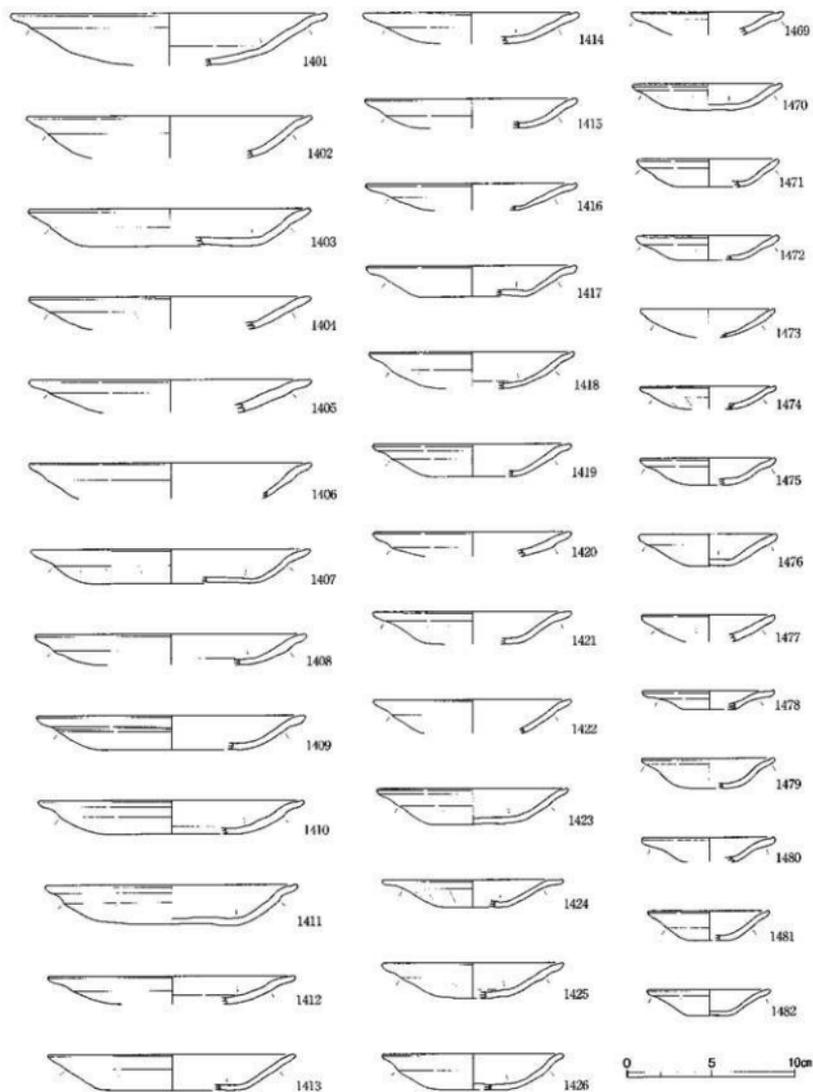


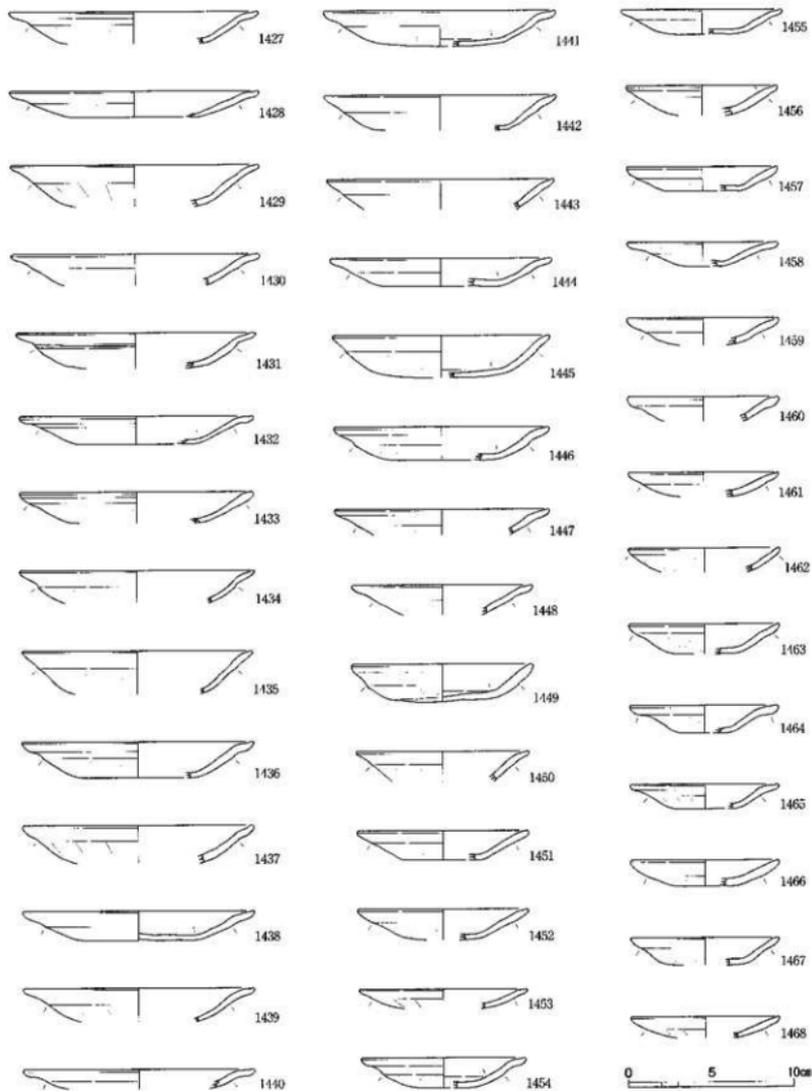


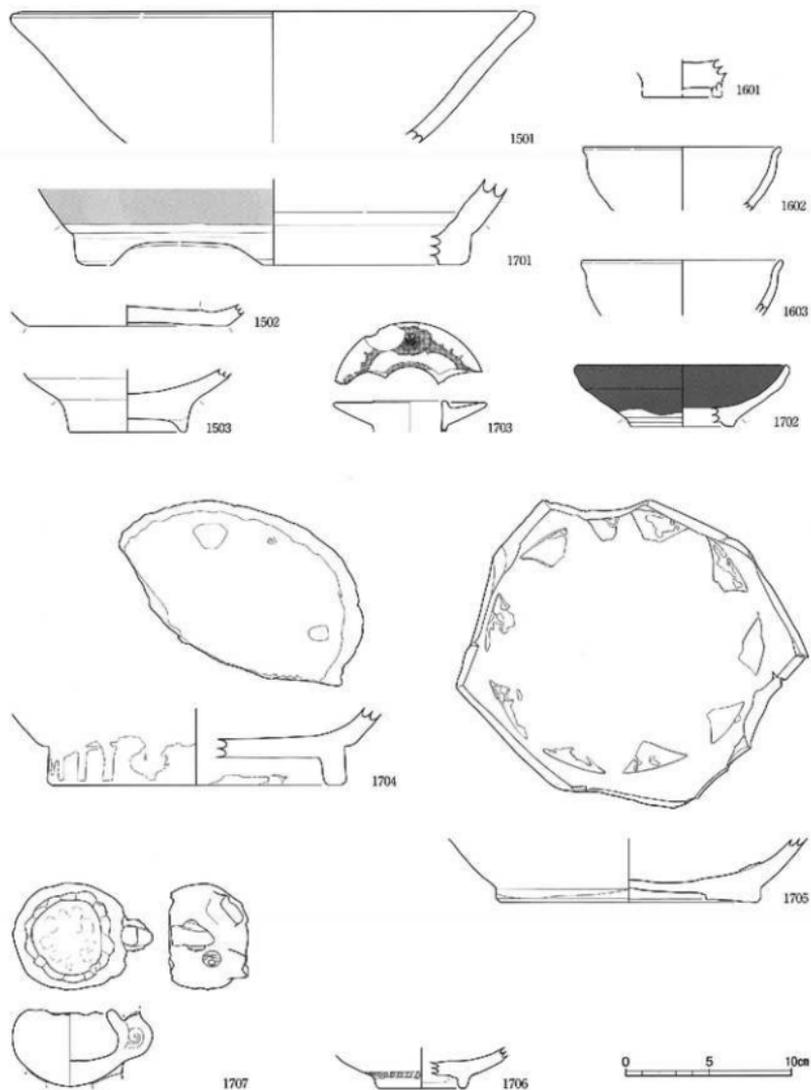
0 5 10cm



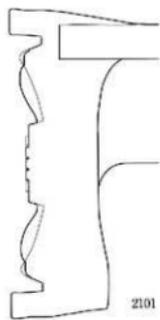
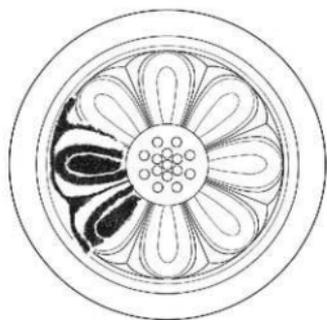




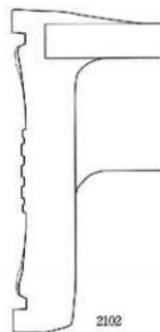




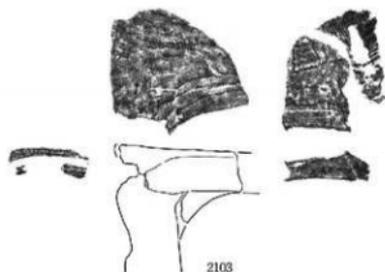
図面五〇 遺物実測図 越中国府関連遺跡能松地区 瓦



2101

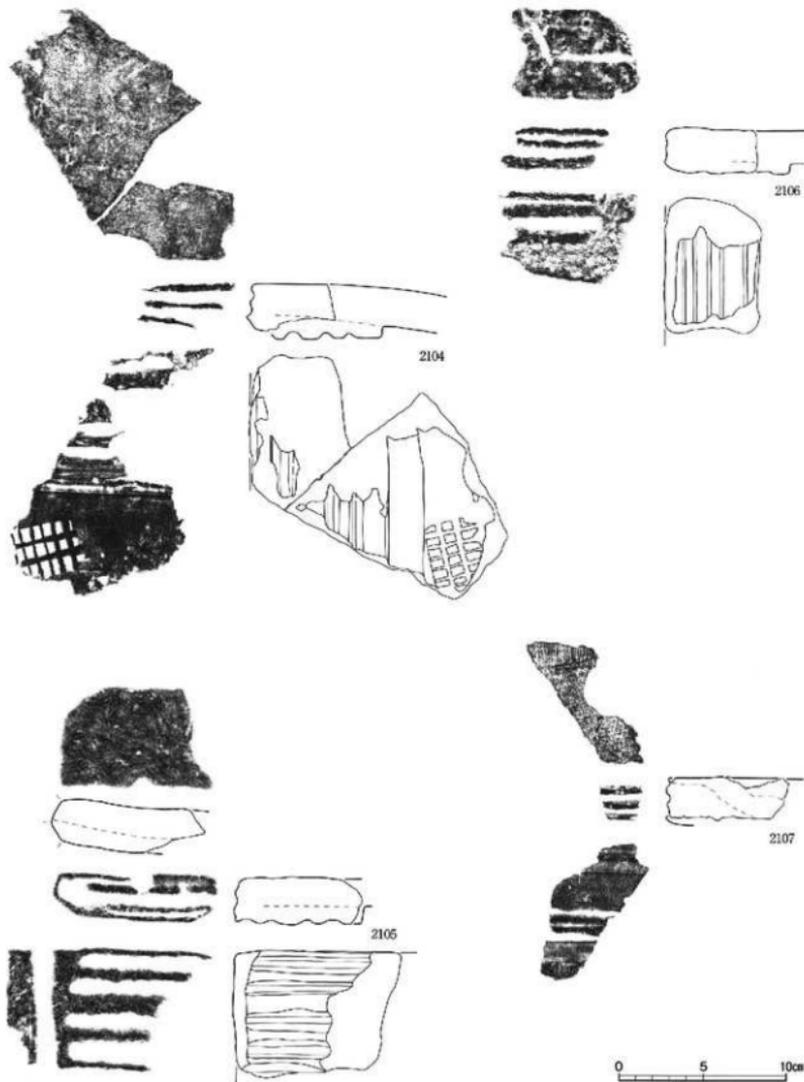


2102

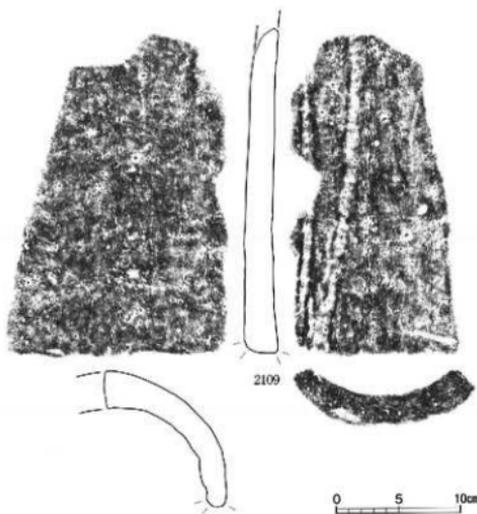
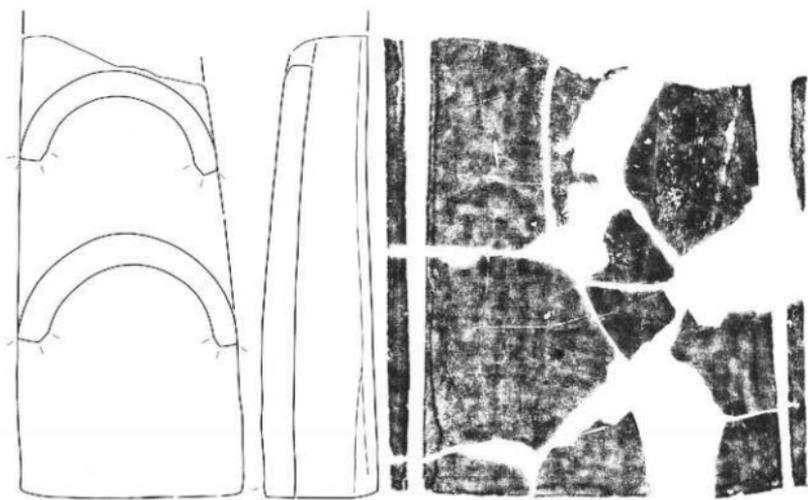


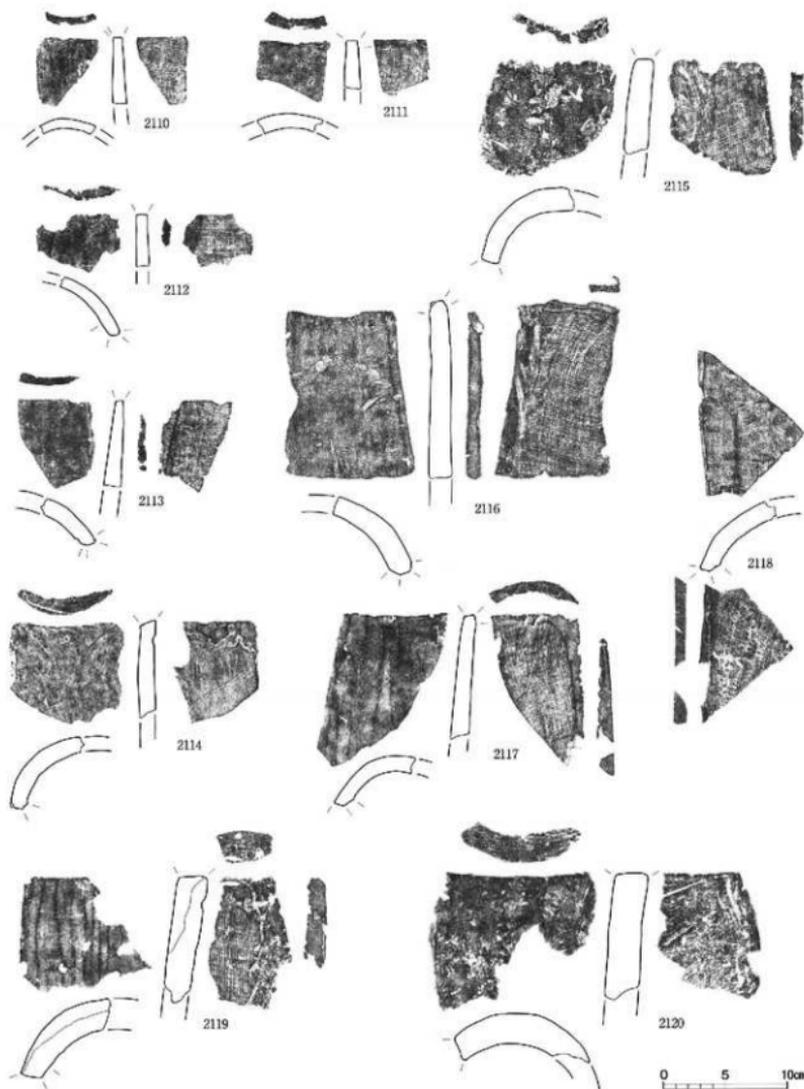
2103

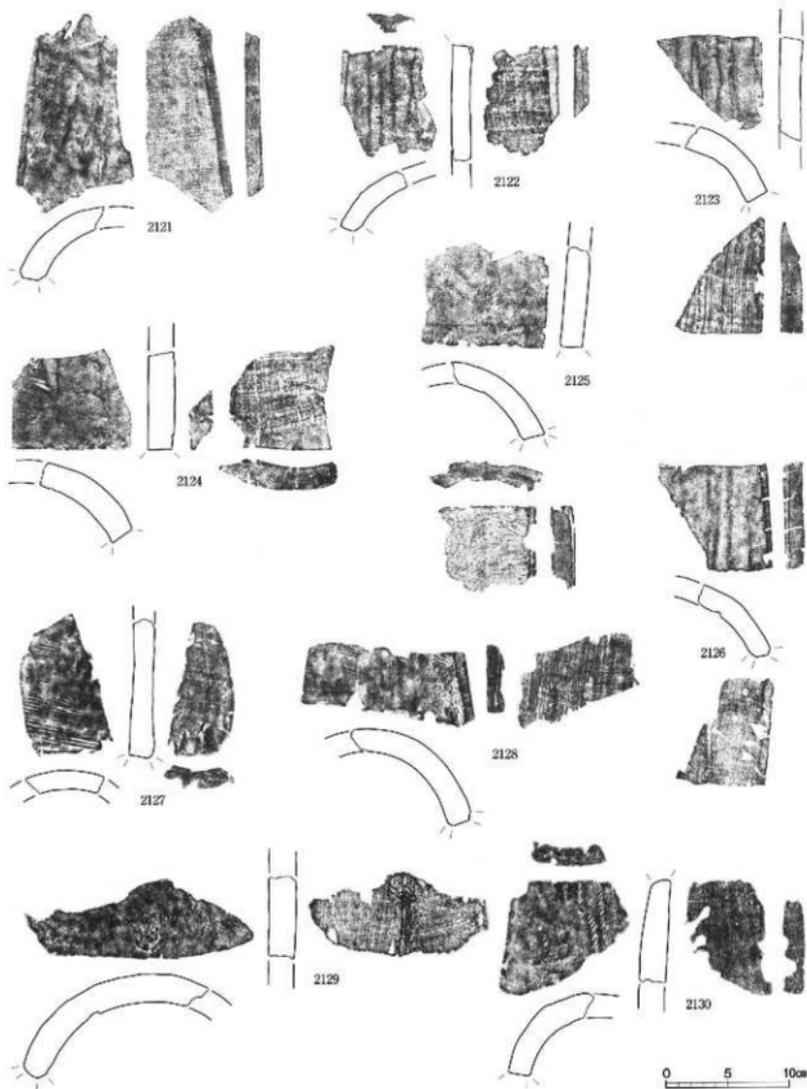


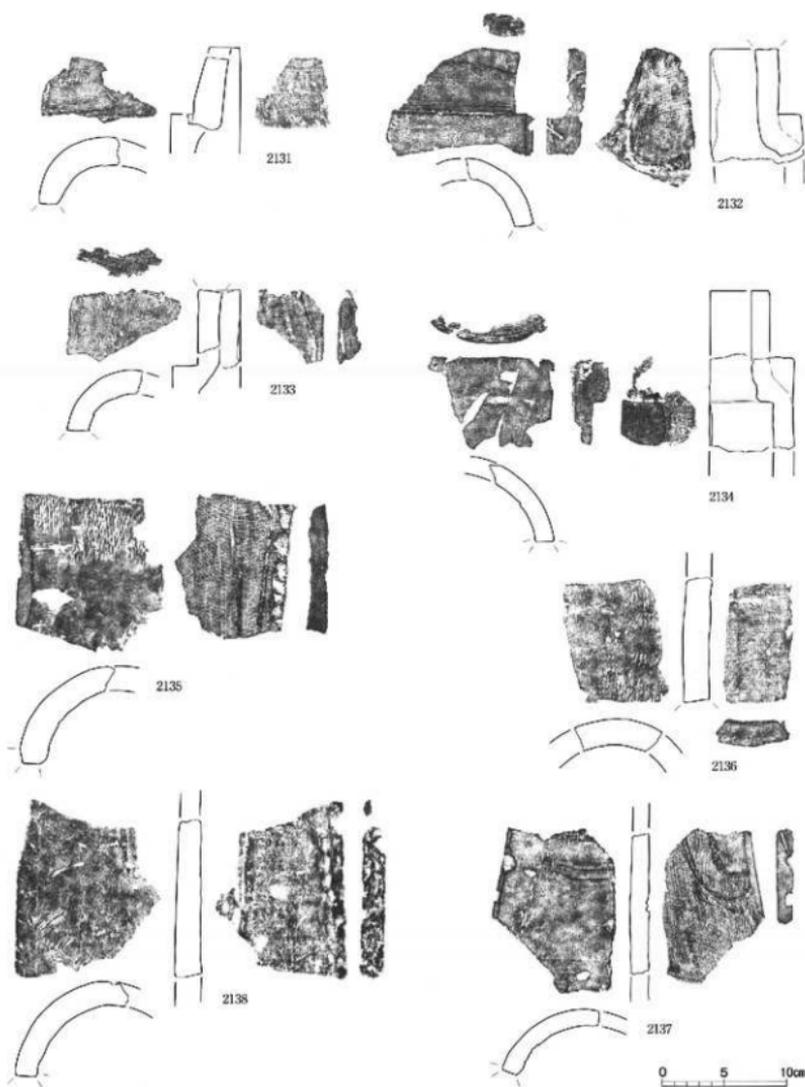


図面五二 遺物実測図 越中国府関連遺跡能松地区 瓦

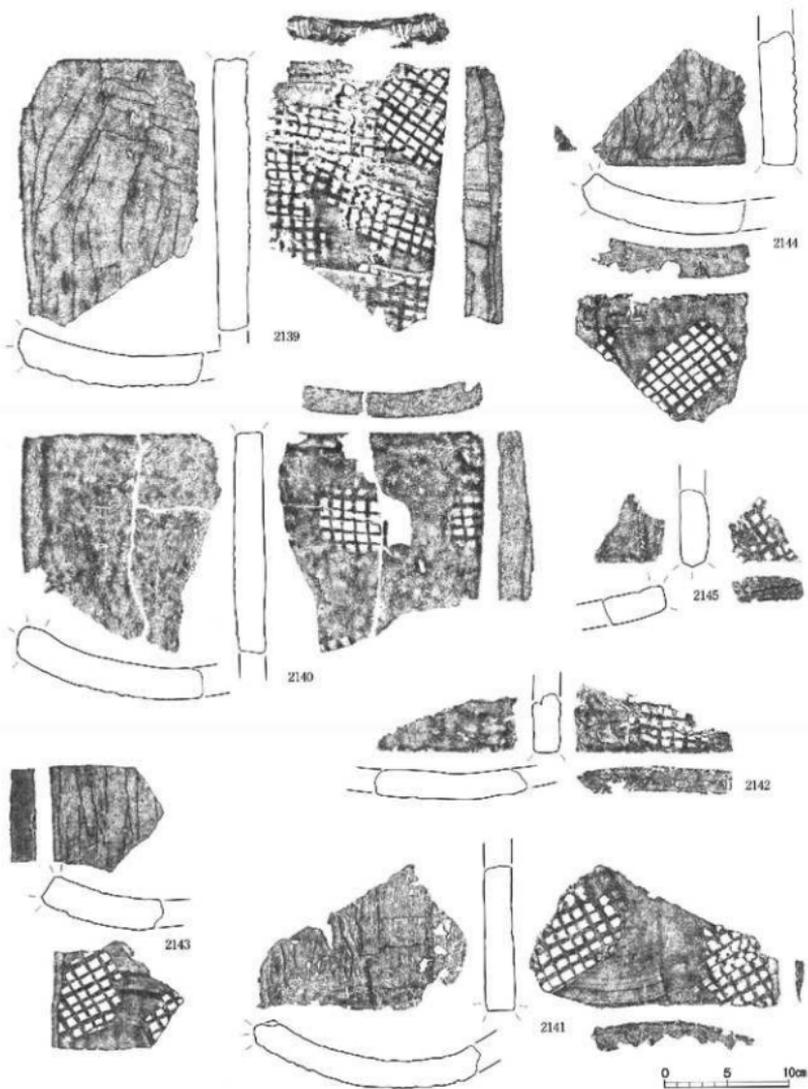


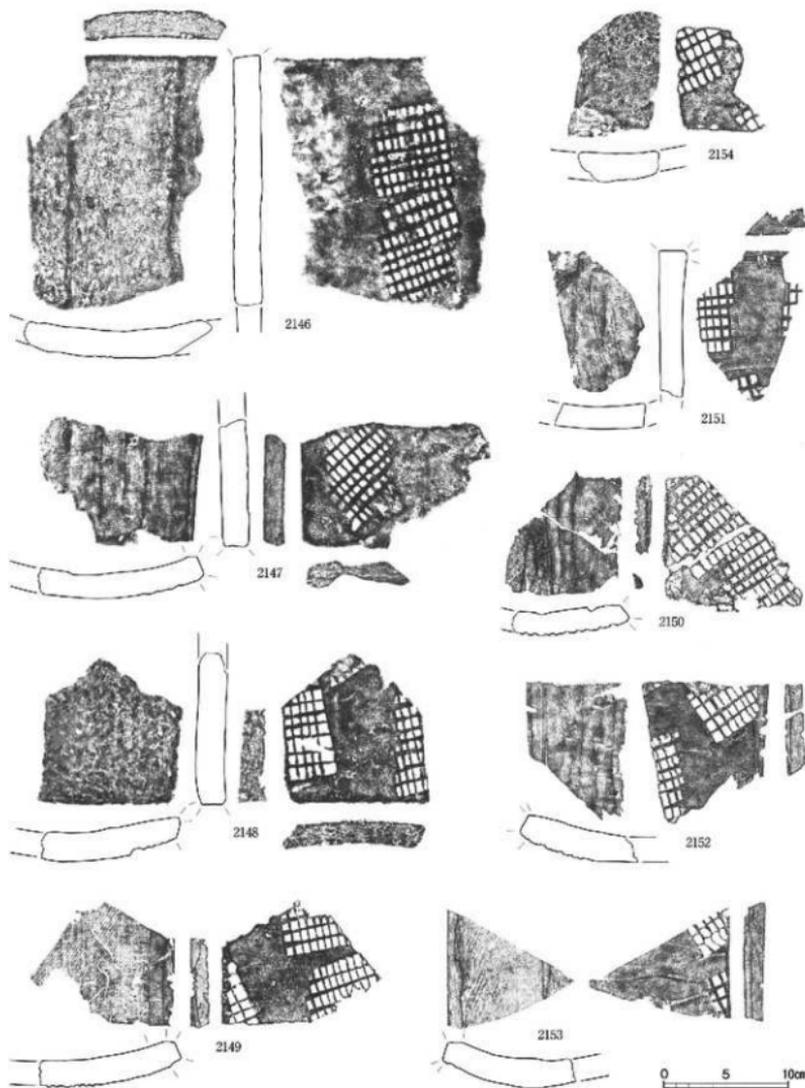


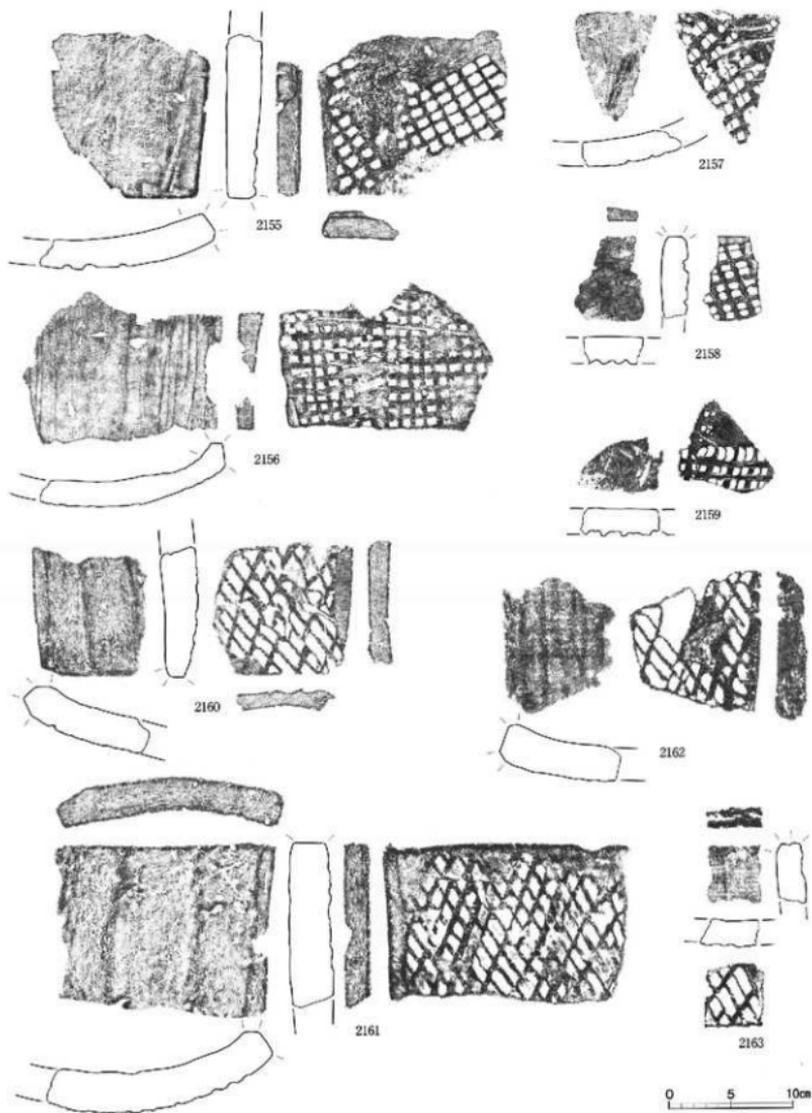




図面五六 遺物実測図 越中国府関連遺跡能松地区 瓦

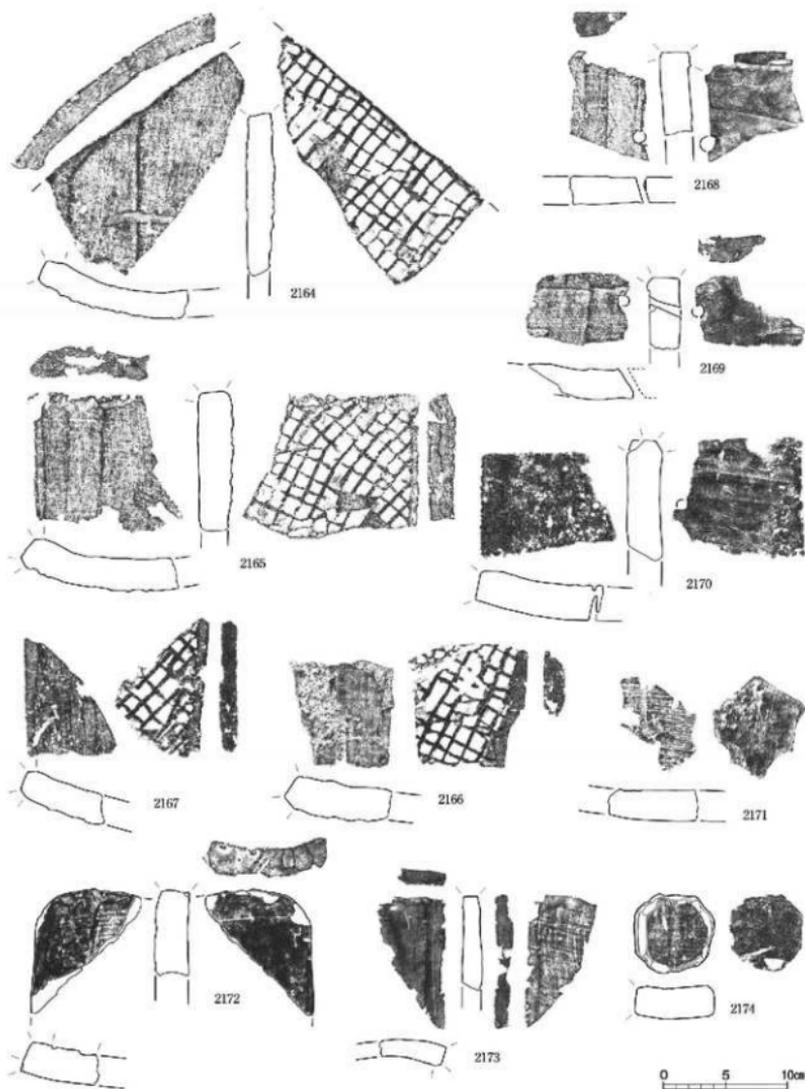




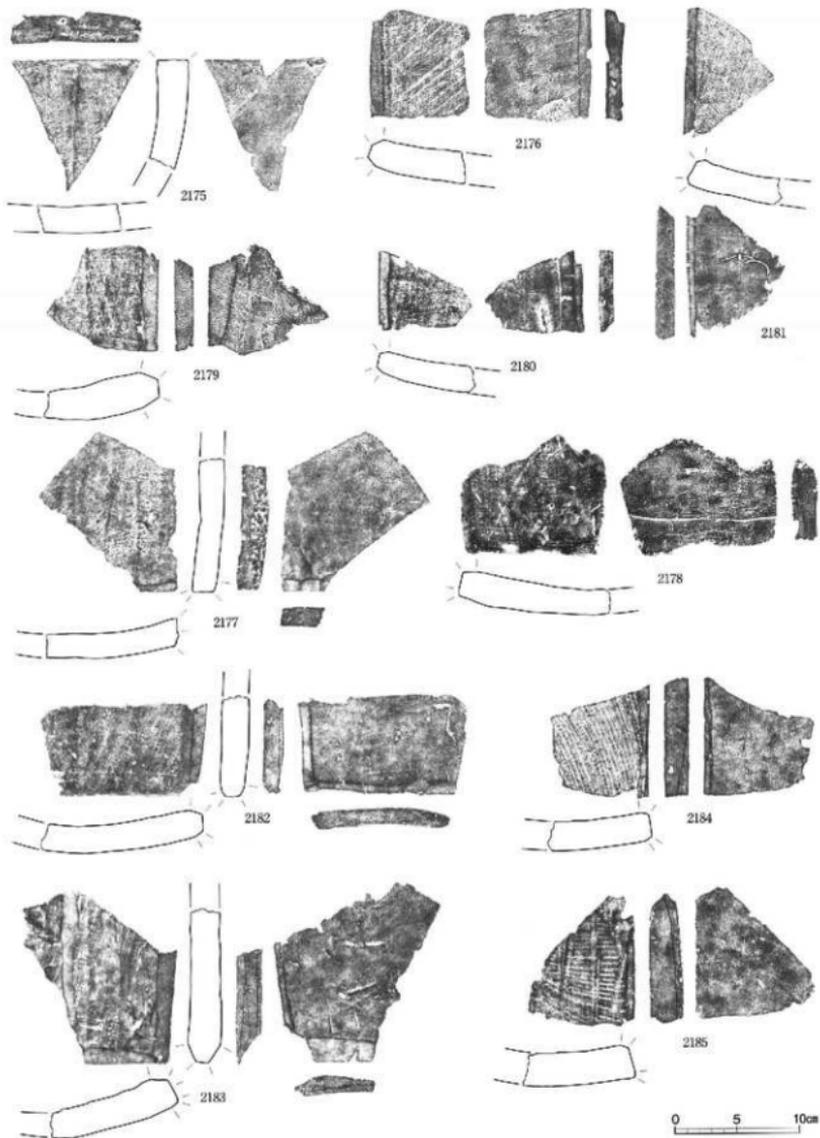


白鳳時代の平瓦 A 3 叩き : 2155・2156、A 4 叩き : 2157~2159、B 1 叩き : 2160~2163

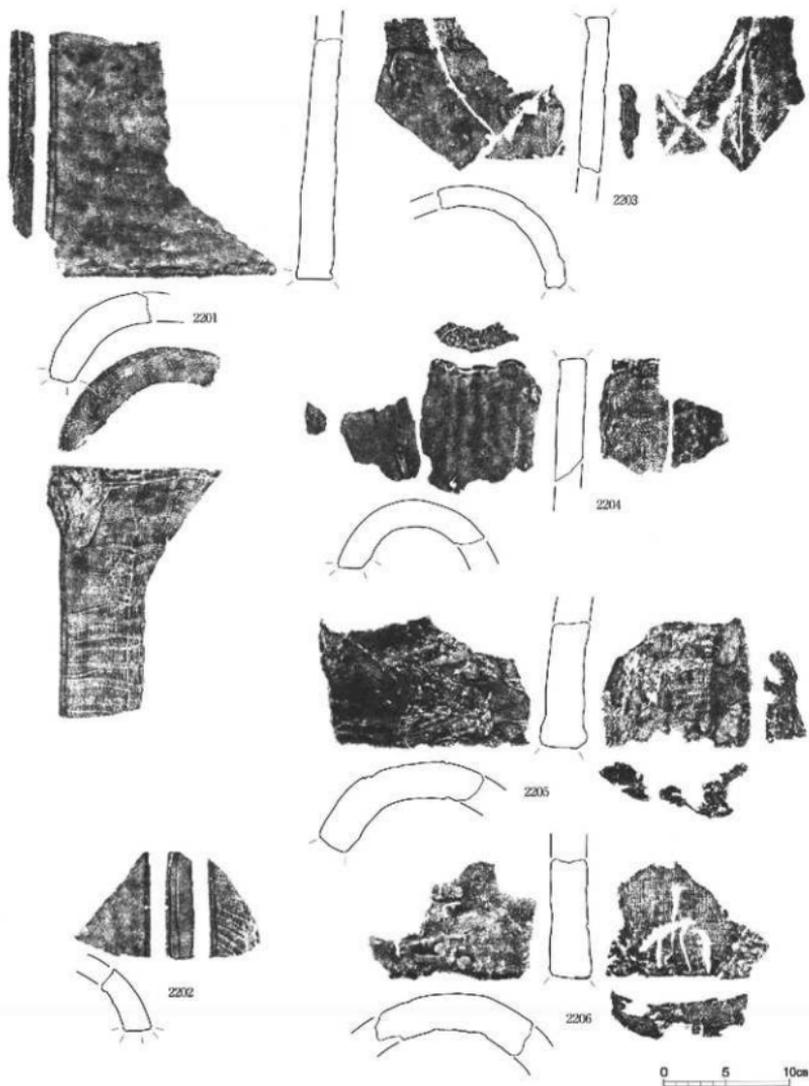
縮尺 1/4

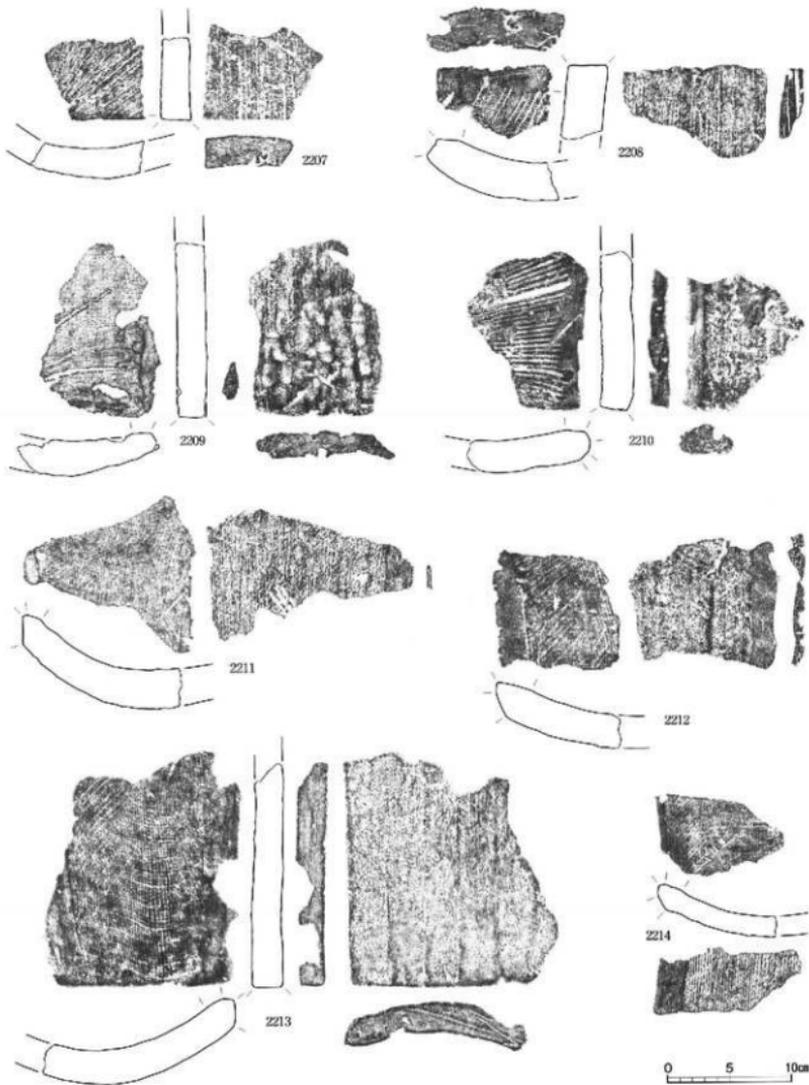


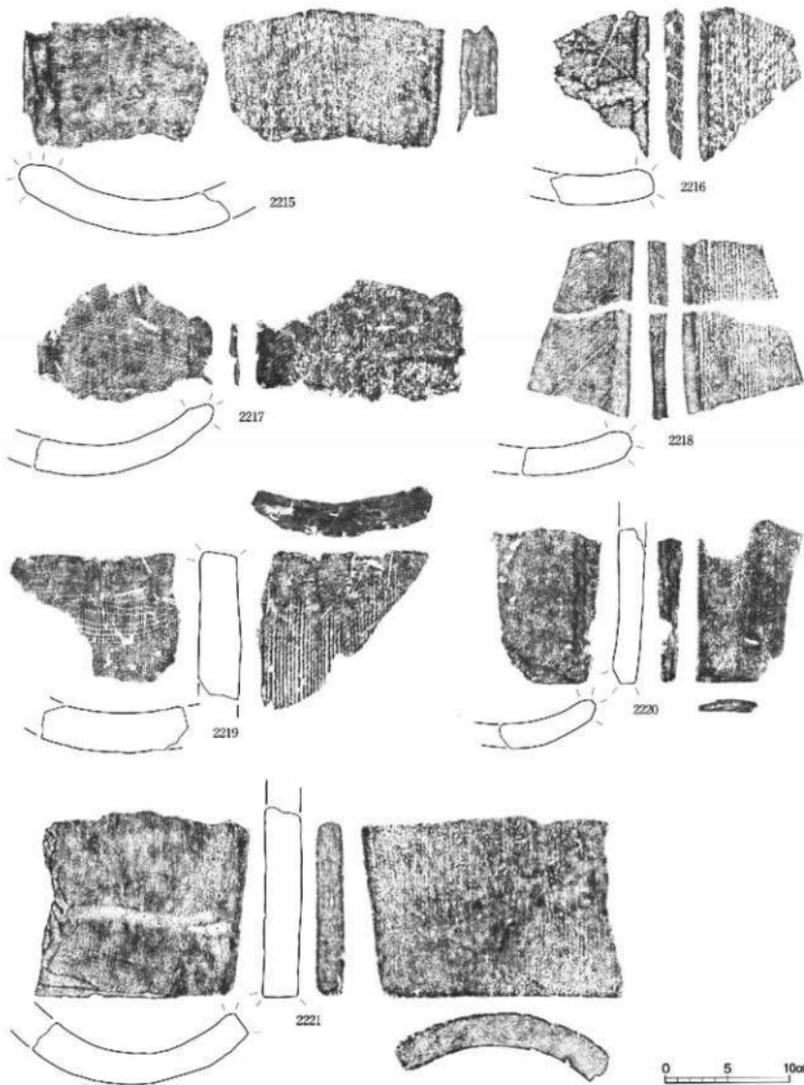
白鳳時代の平瓦 B2叩き：2164～2167、釘穴付：2168～2170、縄叩き：2171
 兩切瓦：2172、鬘斗瓦：2173、加工内盤：2174



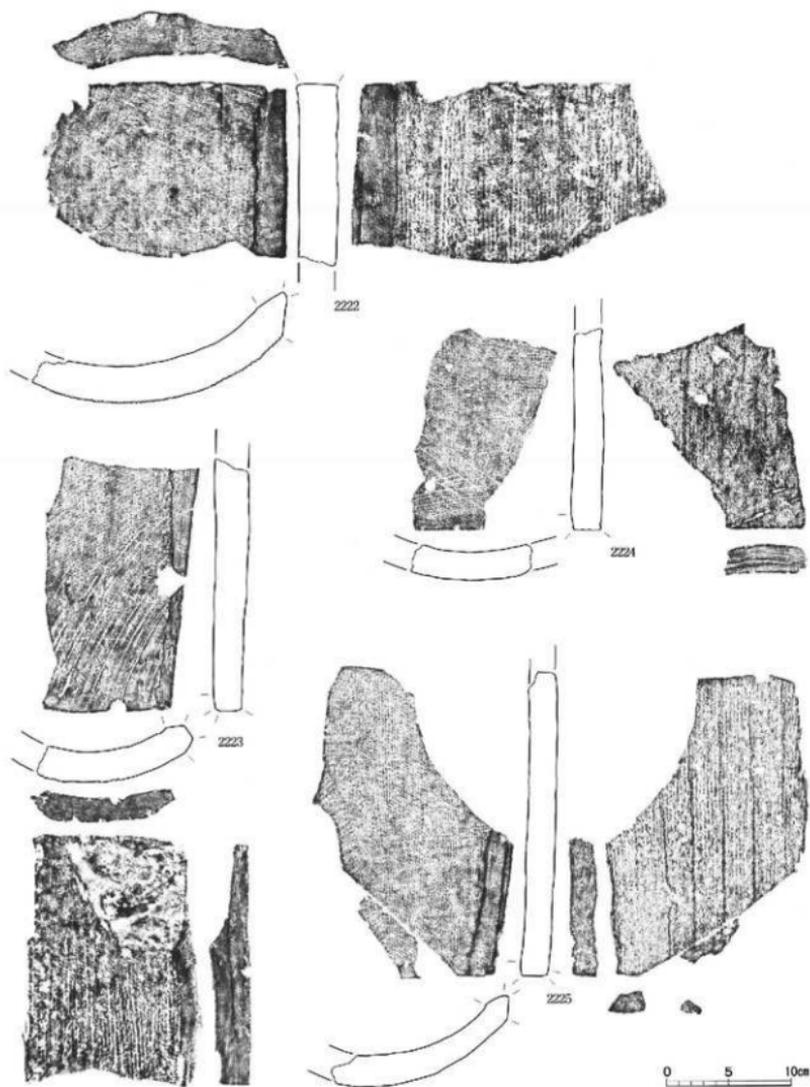
白鳳時代の平瓦 無叩き

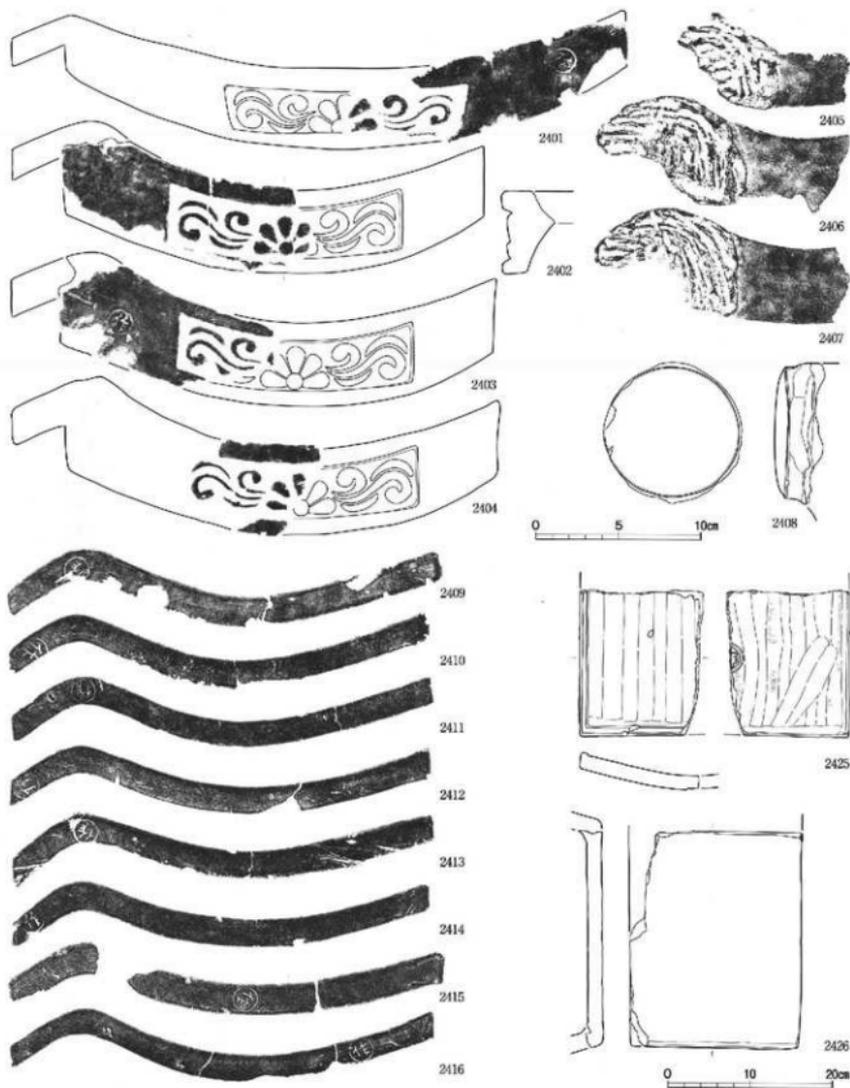






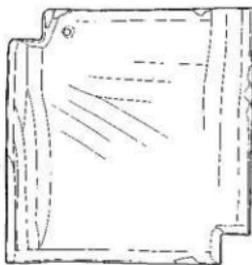
図面六四 遺物実測図 越中国府関連遺跡能松地区 瓦



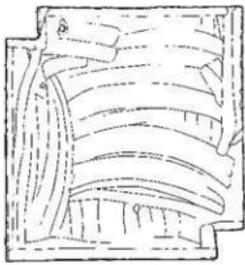


軒棧瓦：2401～2408、棧瓦頭拓影：2409～2416、特殊瓦：2425・2426

縮尺 1/3、1/6



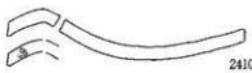
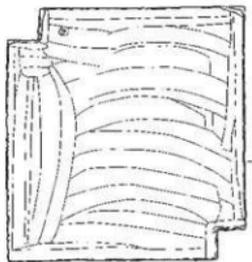
2409



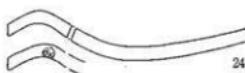
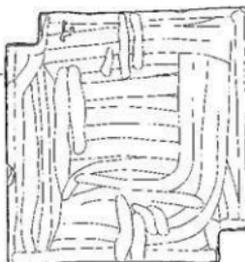
2412



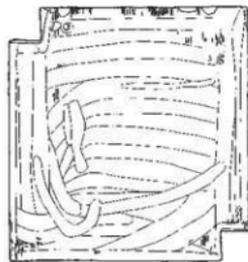
2415



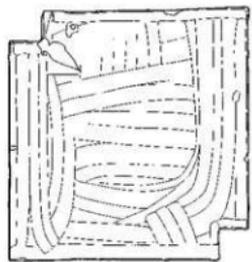
2410



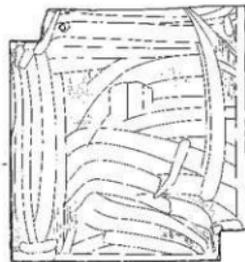
2413



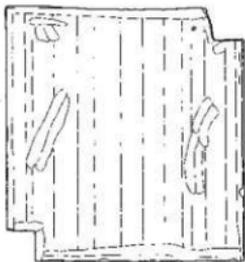
2416



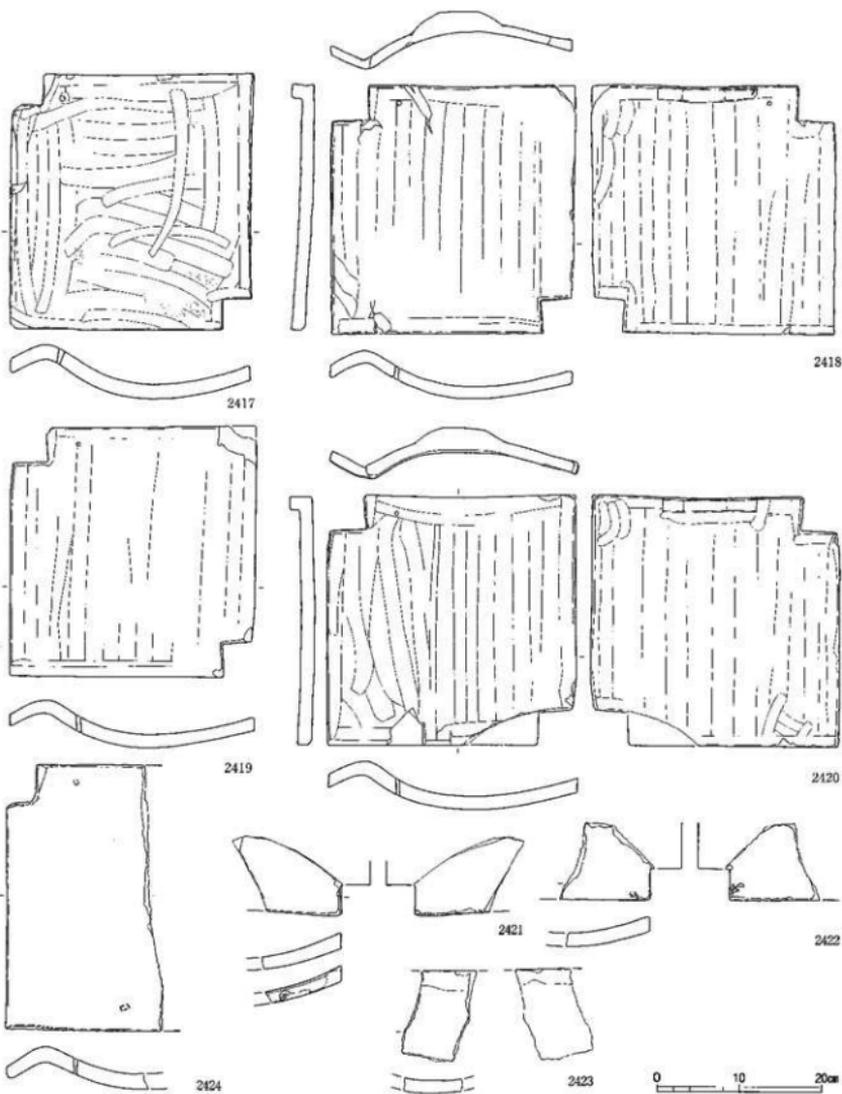
2411

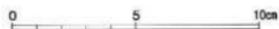
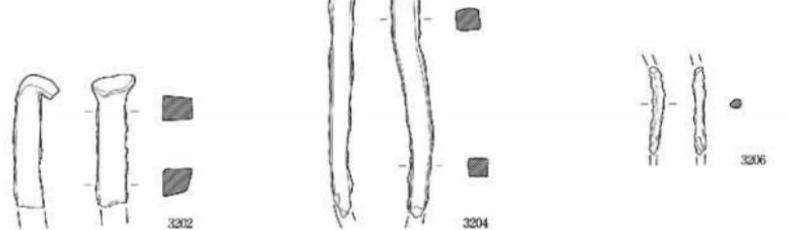
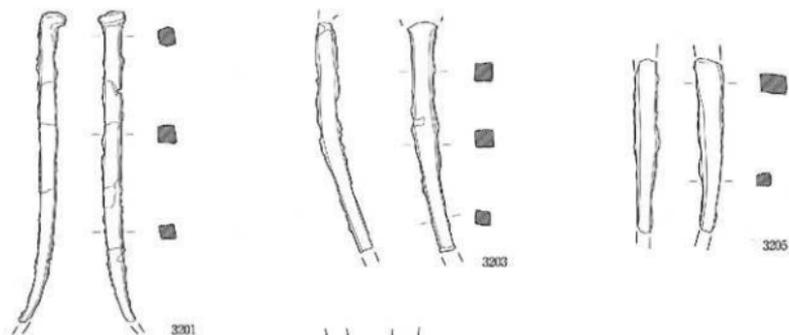
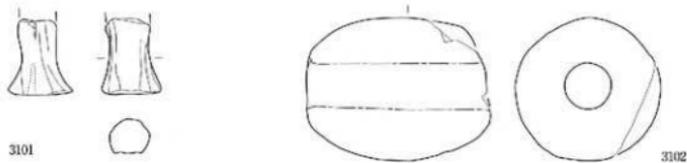


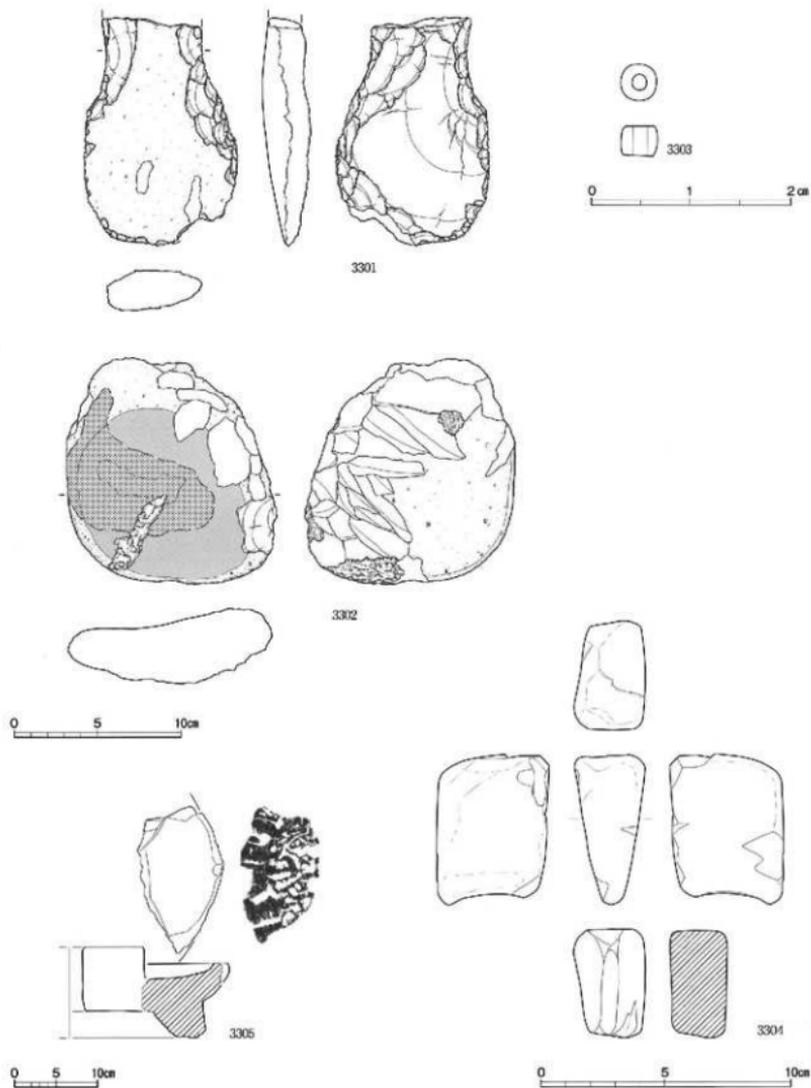
2414



0 10 20cm

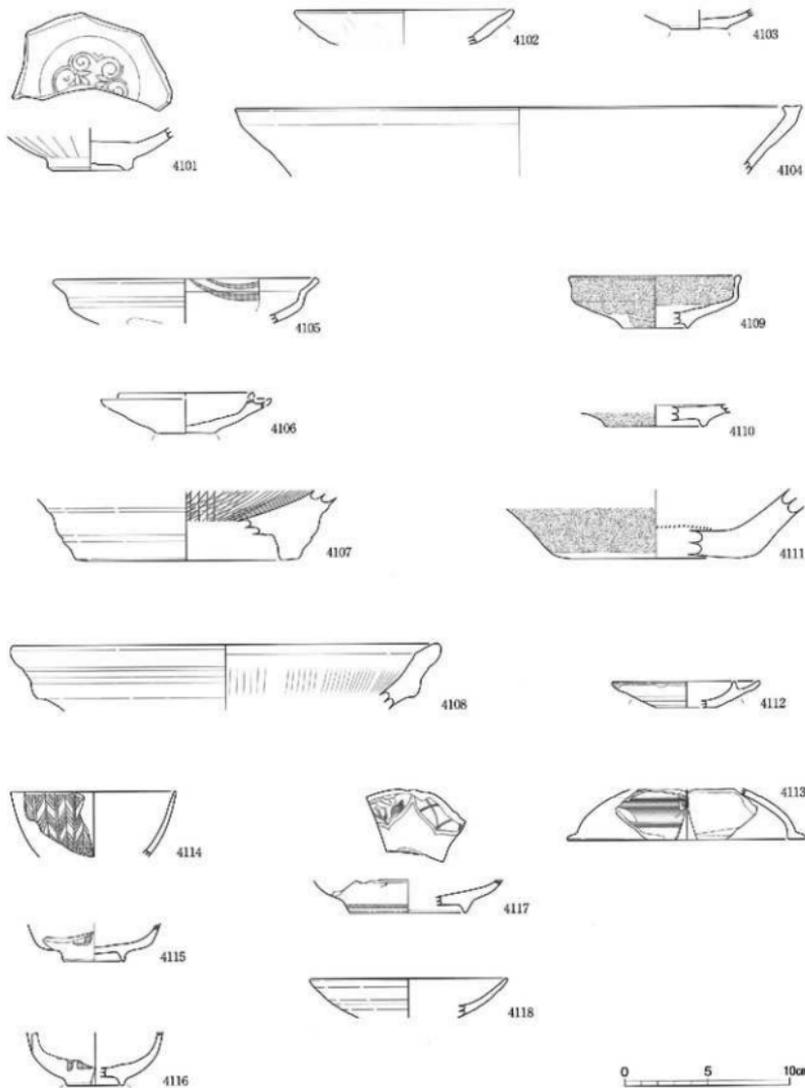




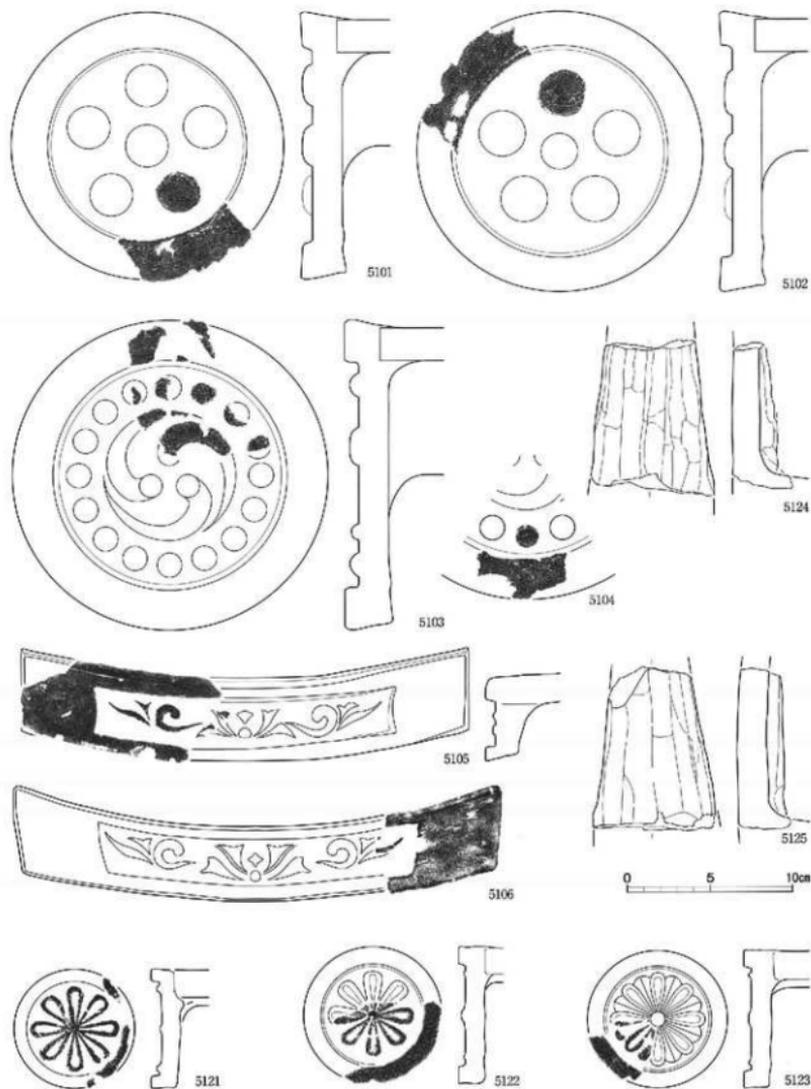


打製石斧：3301、台石：3302、白玉：3303、砥石：3304、茶臼：3305

縮尺1/3、2倍、1/6、1/2



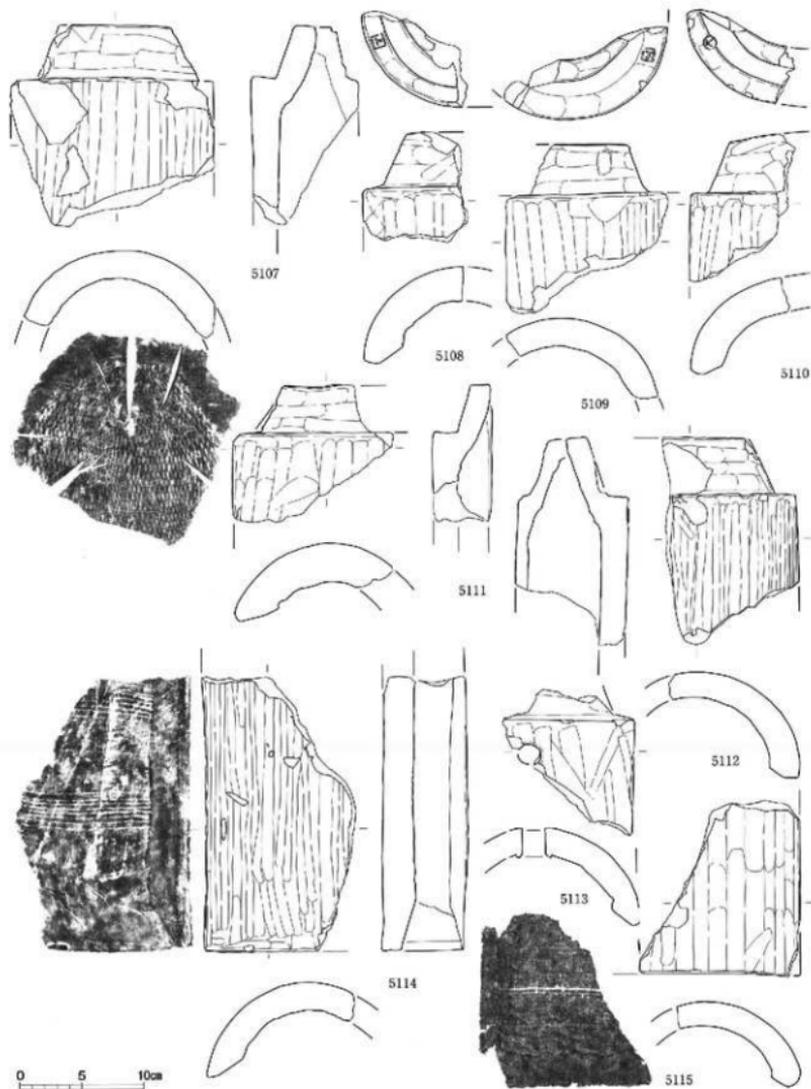
青磁：4101、土師器：4102・4103、瀬戸美濃：4104、肥前陶器：4105～4107、備前：4108
 越中瀬戸：4109～4111、関西系陶器：4112・4113、肥前磁器：4114～4118

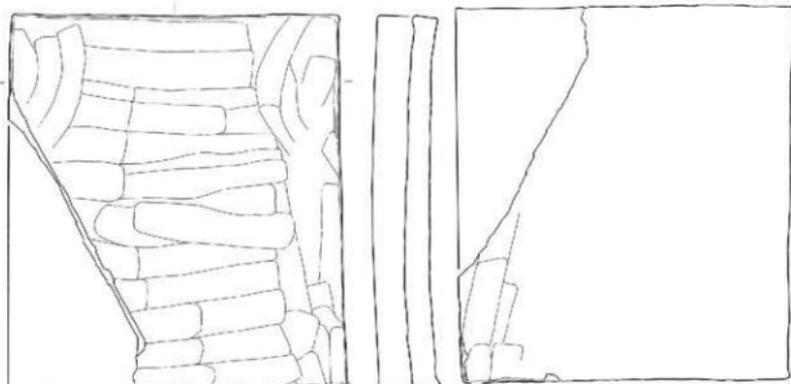


近世の焼し瓦-軒丸瓦：5101～5104、軒平瓦：5105・5106、菊丸瓦：5121～5125

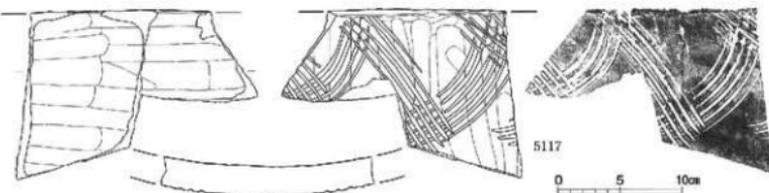
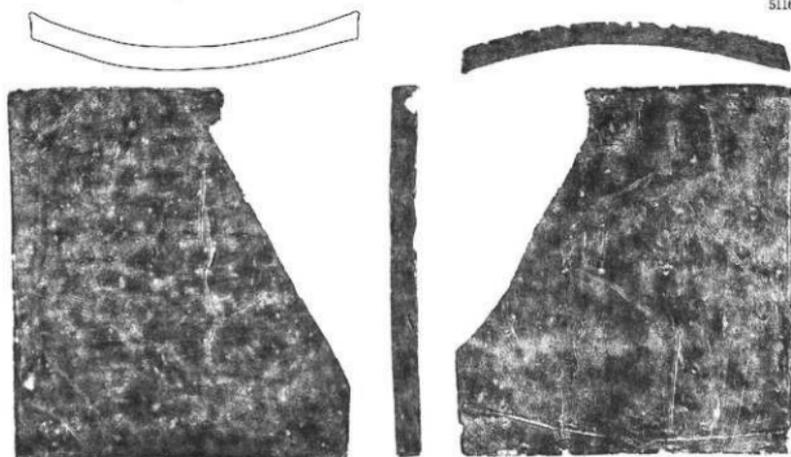
縮尺1/3

図面七一 遺物実測図 瑞龍寺遺跡芦原地区 瓦





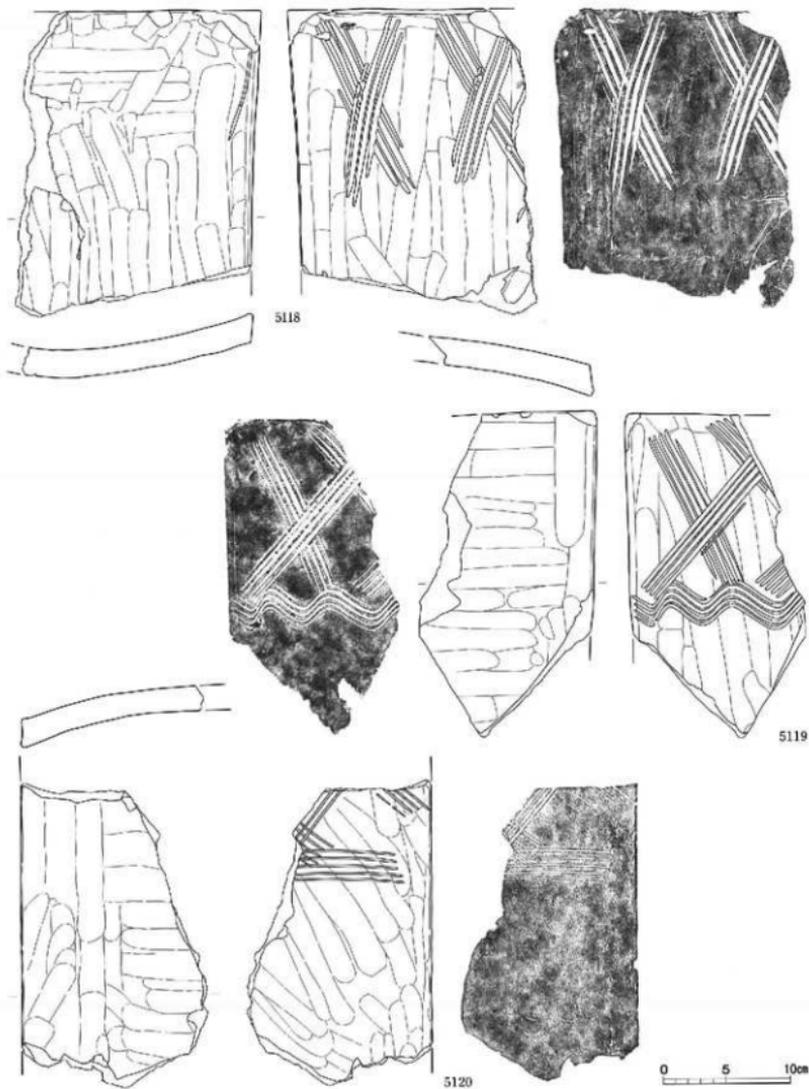
5116

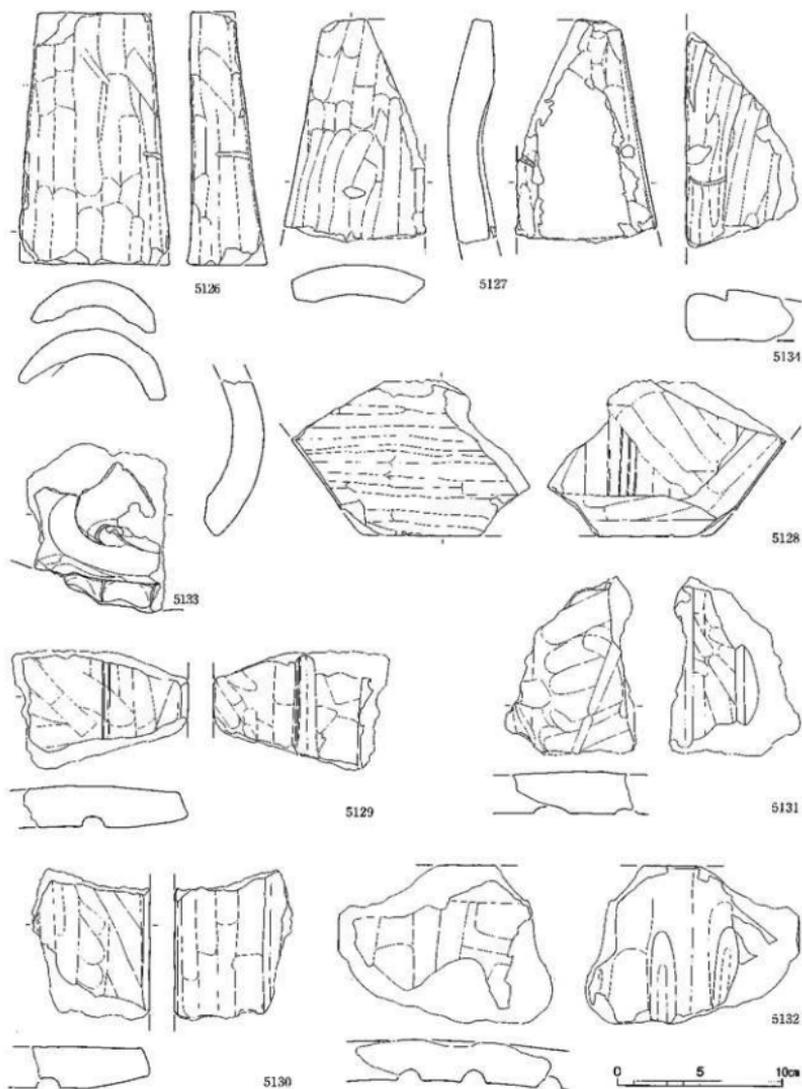


5117

0 5 10cm

図面七四 遺物実測図 瑞龍寺遺跡芦原地区 瓦





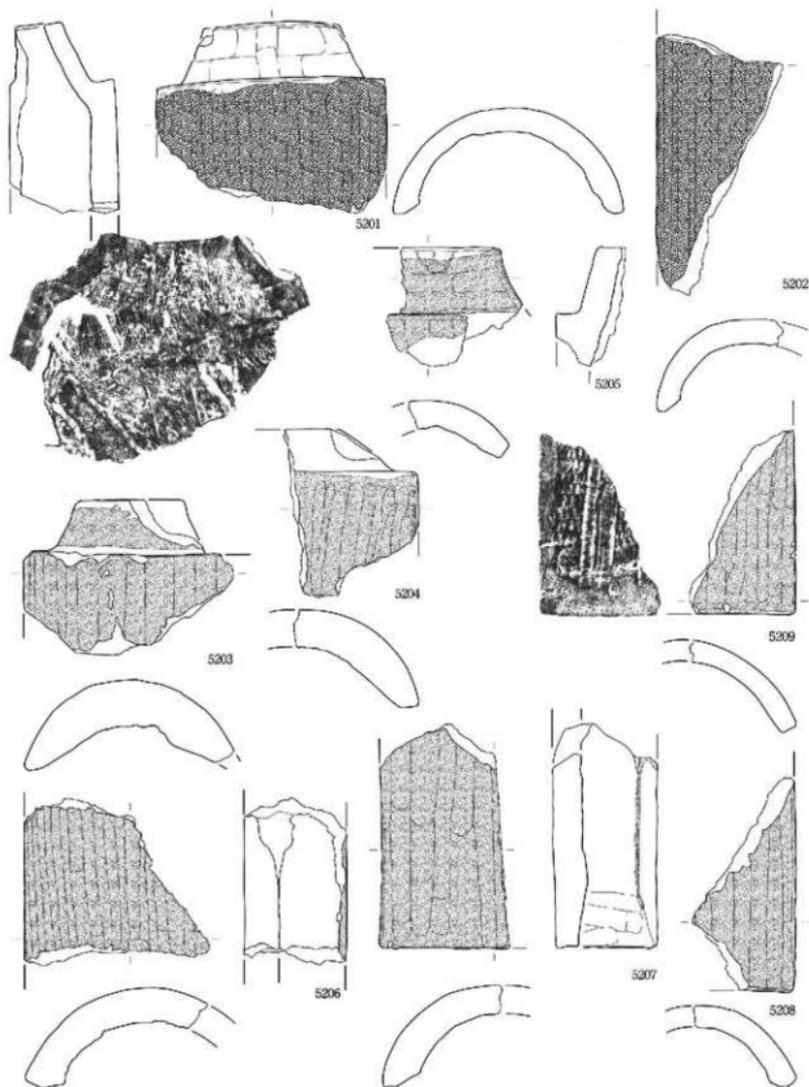
近世の懸し瓦-輪違い瓦：5126、特殊瓦：5127、面ノ瓦：5128
 鬘斗瓦：5129-5132、鬼瓦：5133、飾瓦：5134

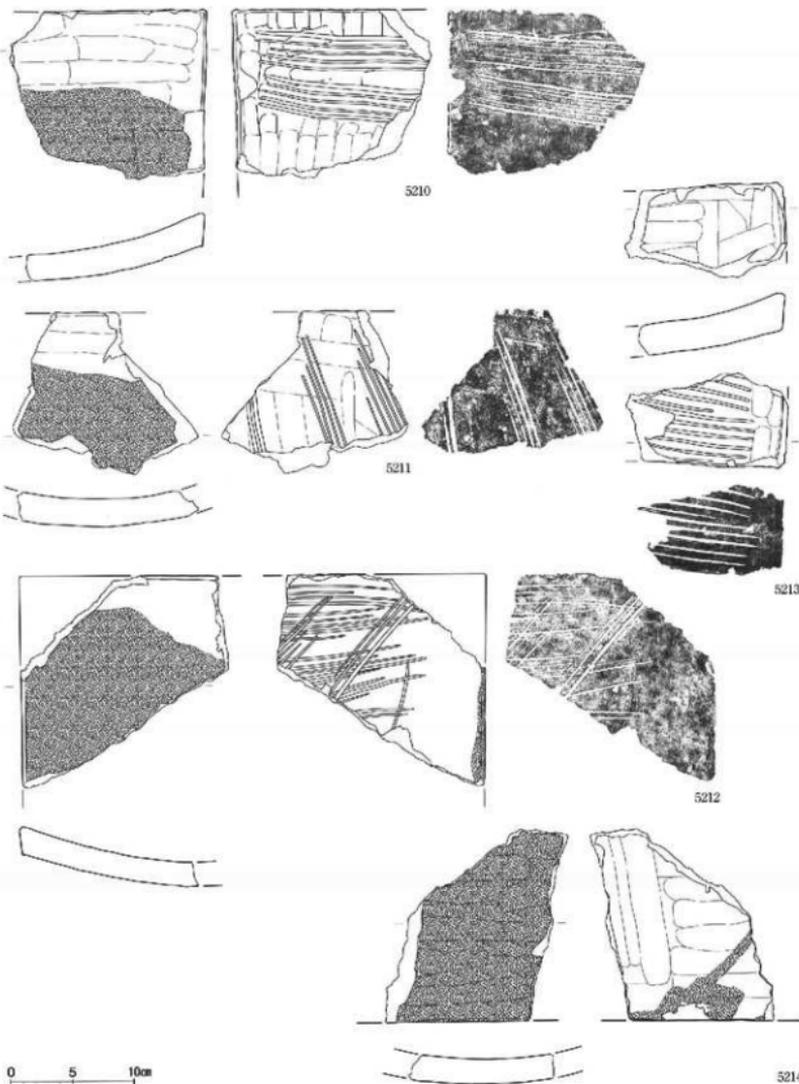
縮尺 1/3

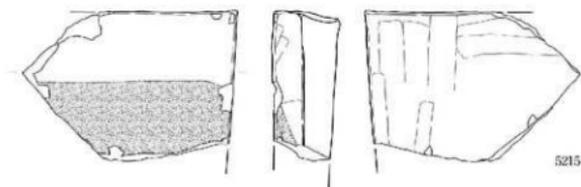
図面七六 遺物実測図 瑞龍寺遺跡片原地区 瓦



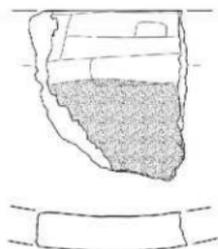
近世の施し瓦 - 刻印



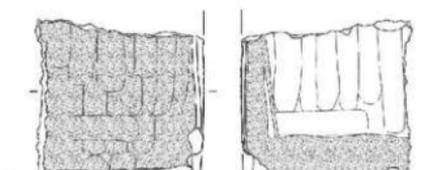




5215



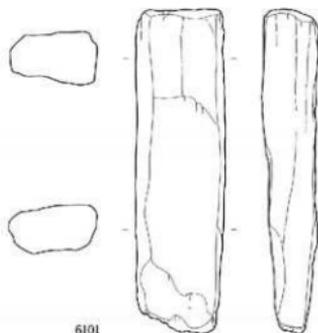
5216



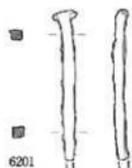
5217



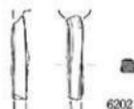
0 5 10cm



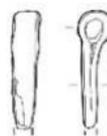
6101



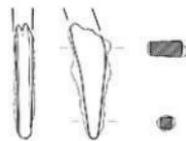
6201



6202



6203

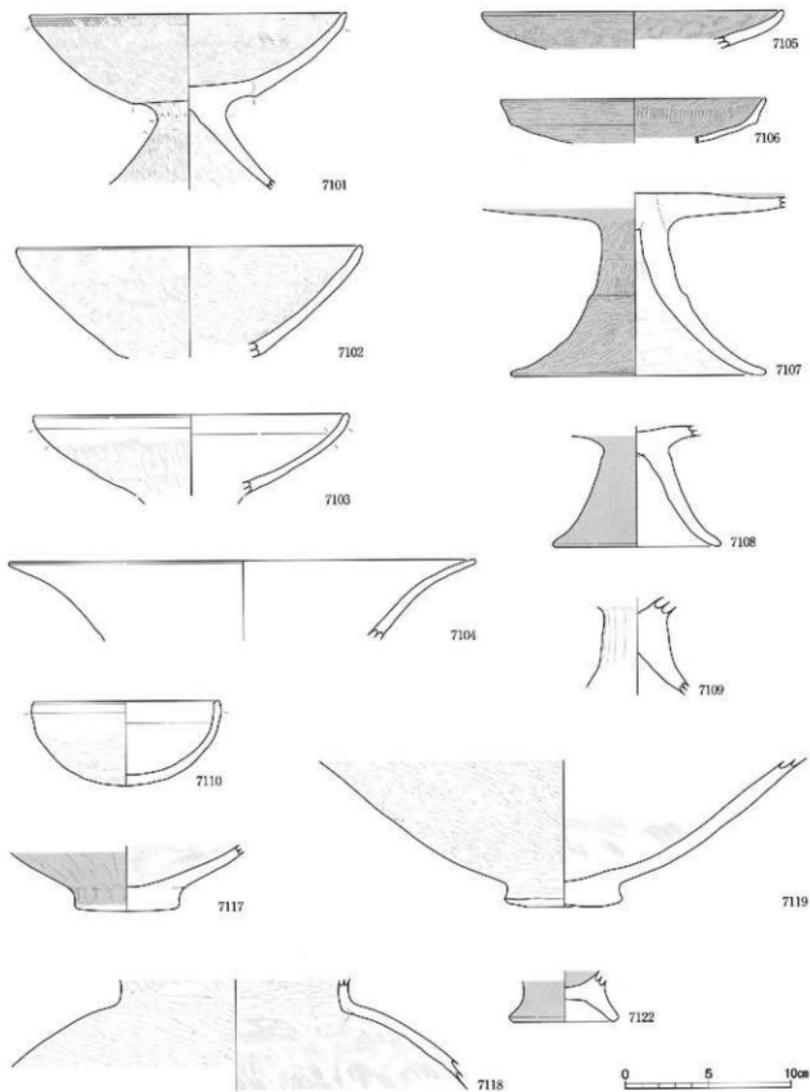


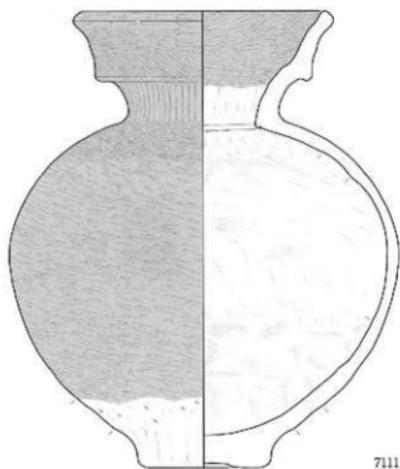
6304

0 5 10cm

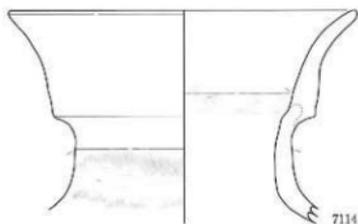
近世の軸梁瓦-平瓦: 5215~5217、木製品-楔: 6101
鉄製品-釘: 6201・6202、環金具: 6203、刀子: 6204

縮尺 1/4、1/2

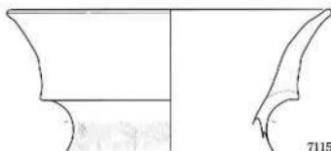




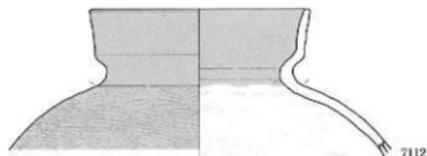
7111



7114



7115



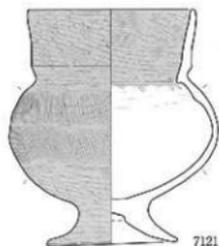
7112



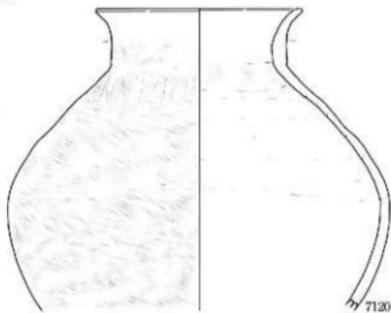
7116



7113

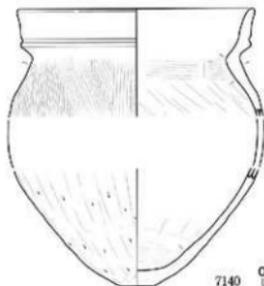
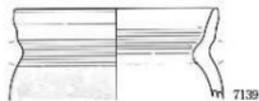
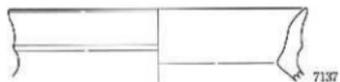
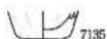
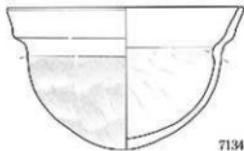
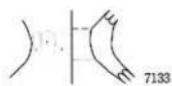
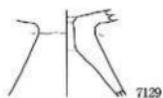
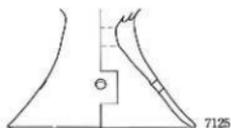
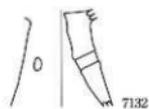
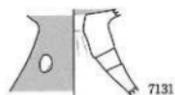
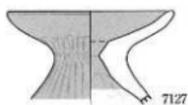
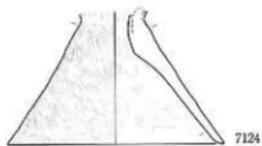
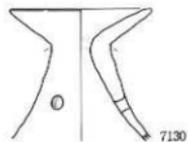
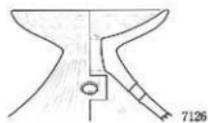
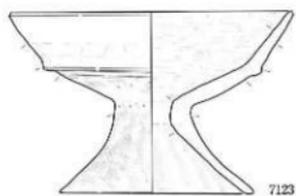


7121

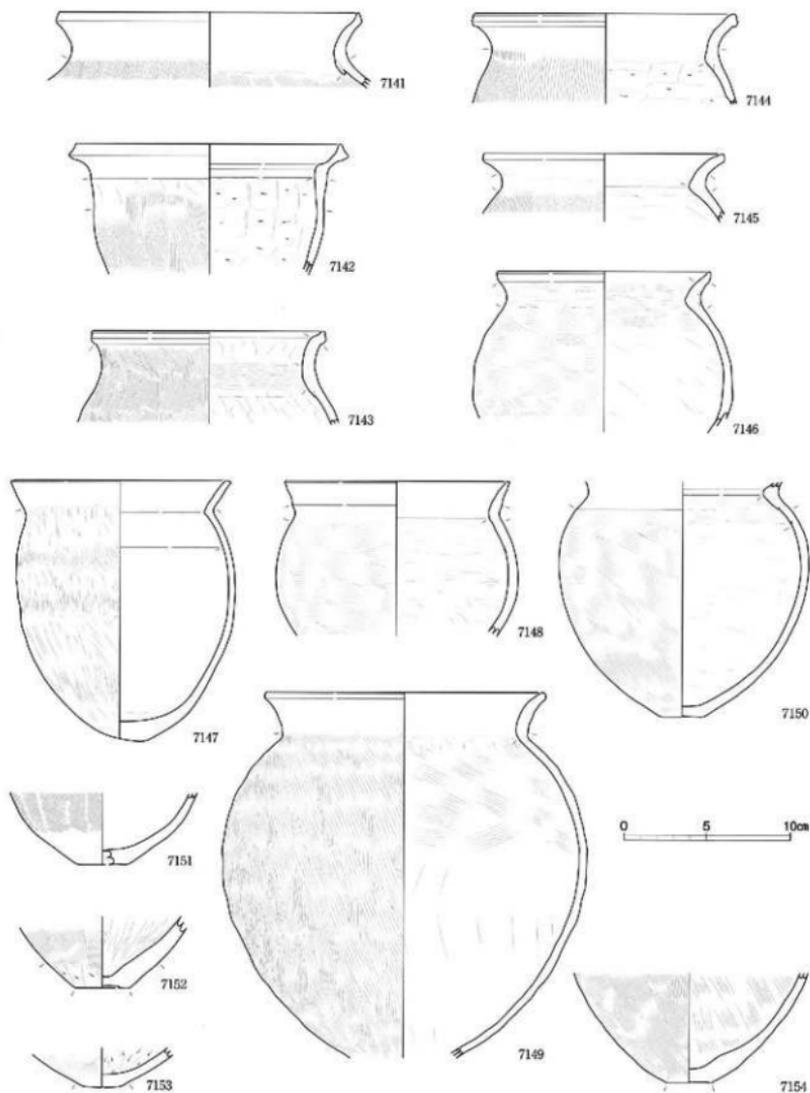


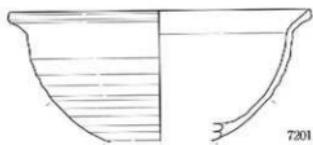
7120



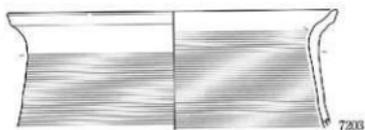


0 5 10cm

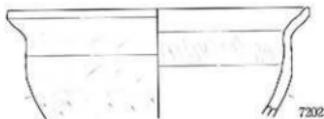




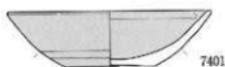
7201



7203



7202



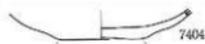
7401



7402



7403



7404



7405



7406



7407



7408



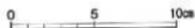
7410

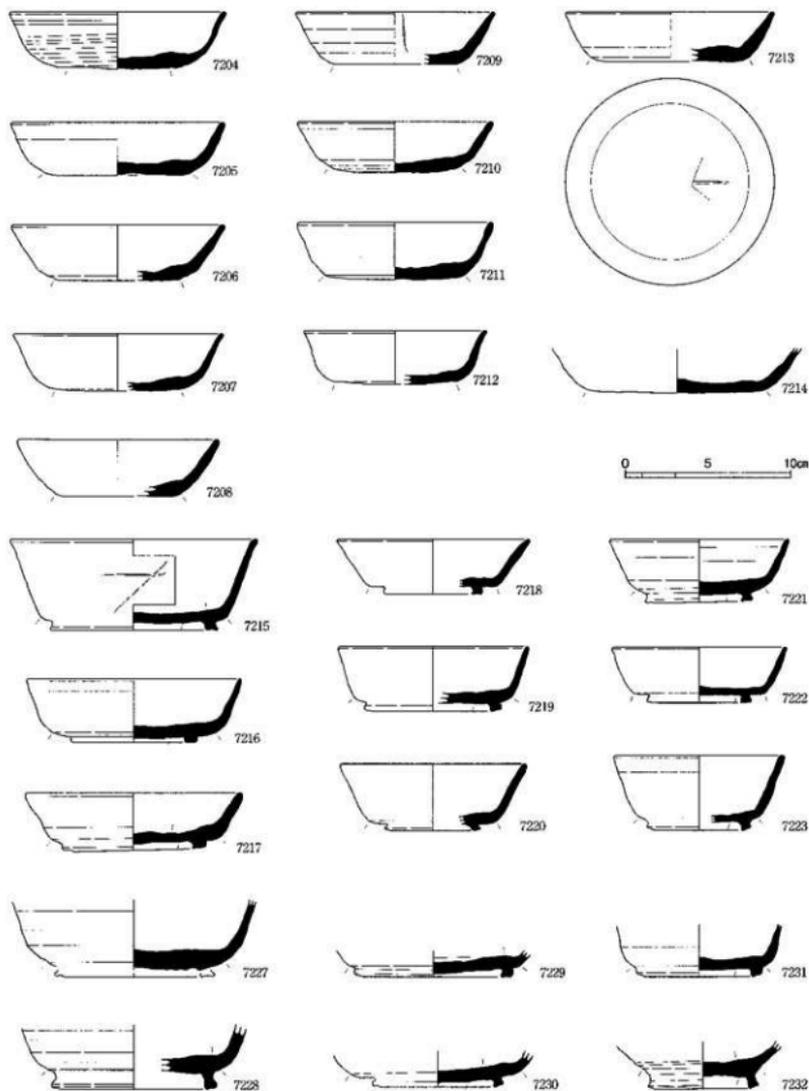


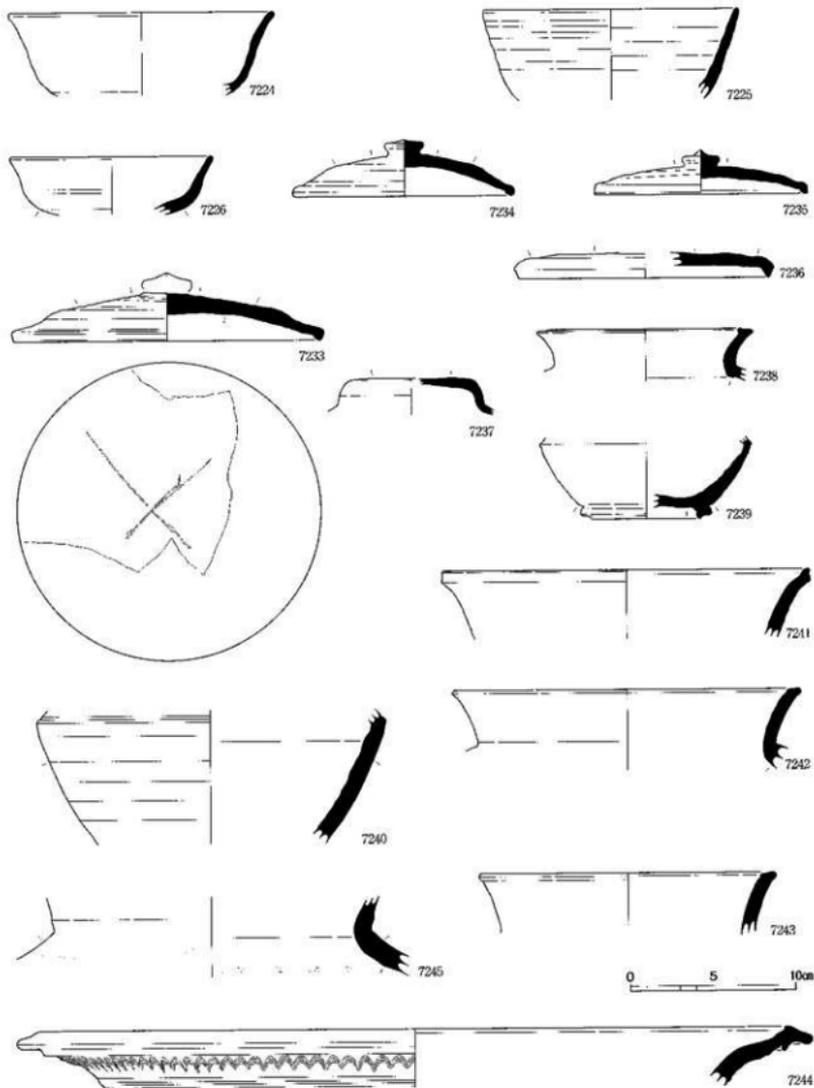
7409



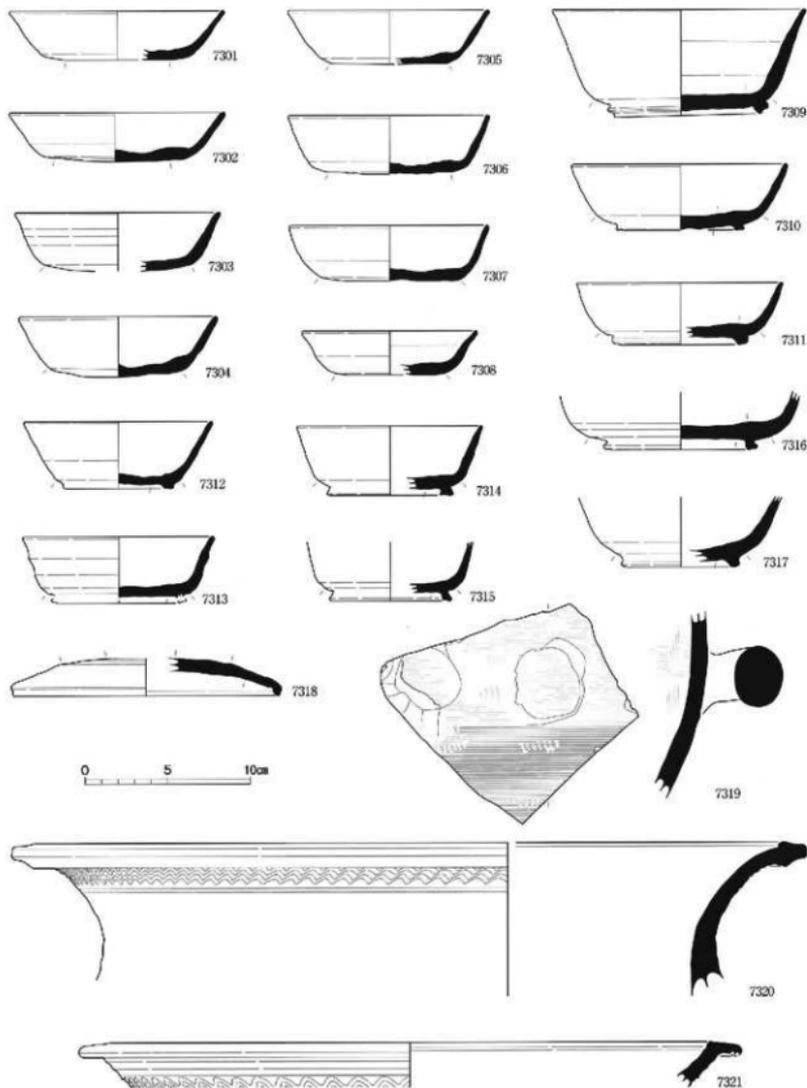
7411

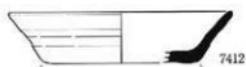






図面八七 遺物実測図 東木津遺跡今井地区 土器類

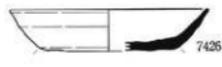




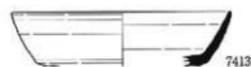
7412



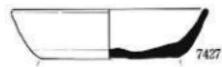
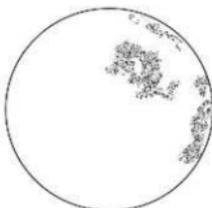
7420



7426



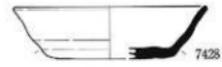
7413



7427



7414



7428



7415



7421



7429



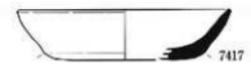
7416



7422



7430



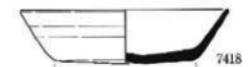
7417



7423



7431



7418



7424



7419



7425



7432



7434



7436



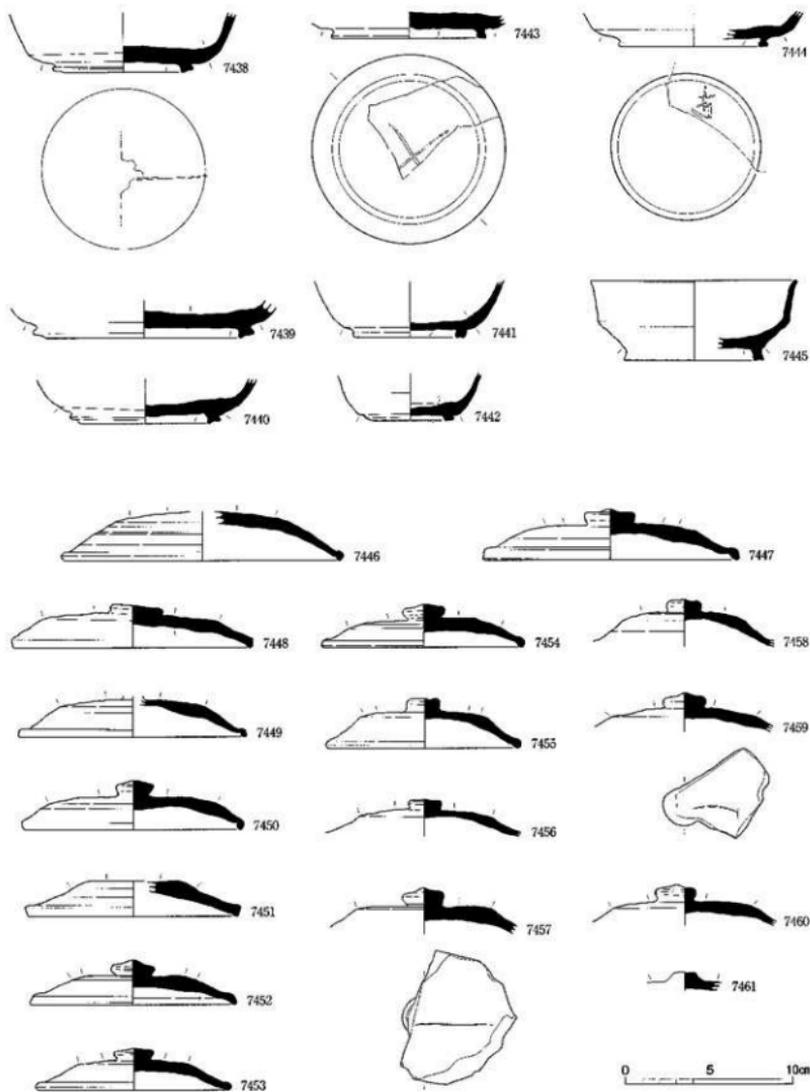
7433

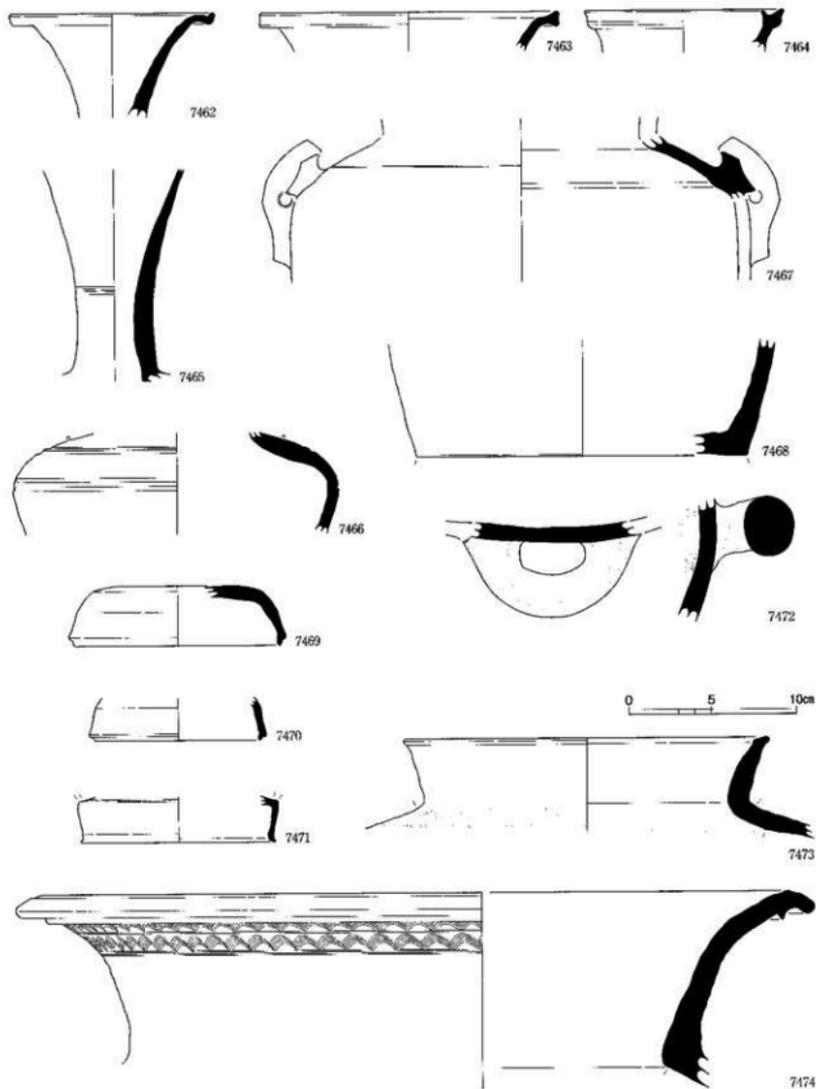


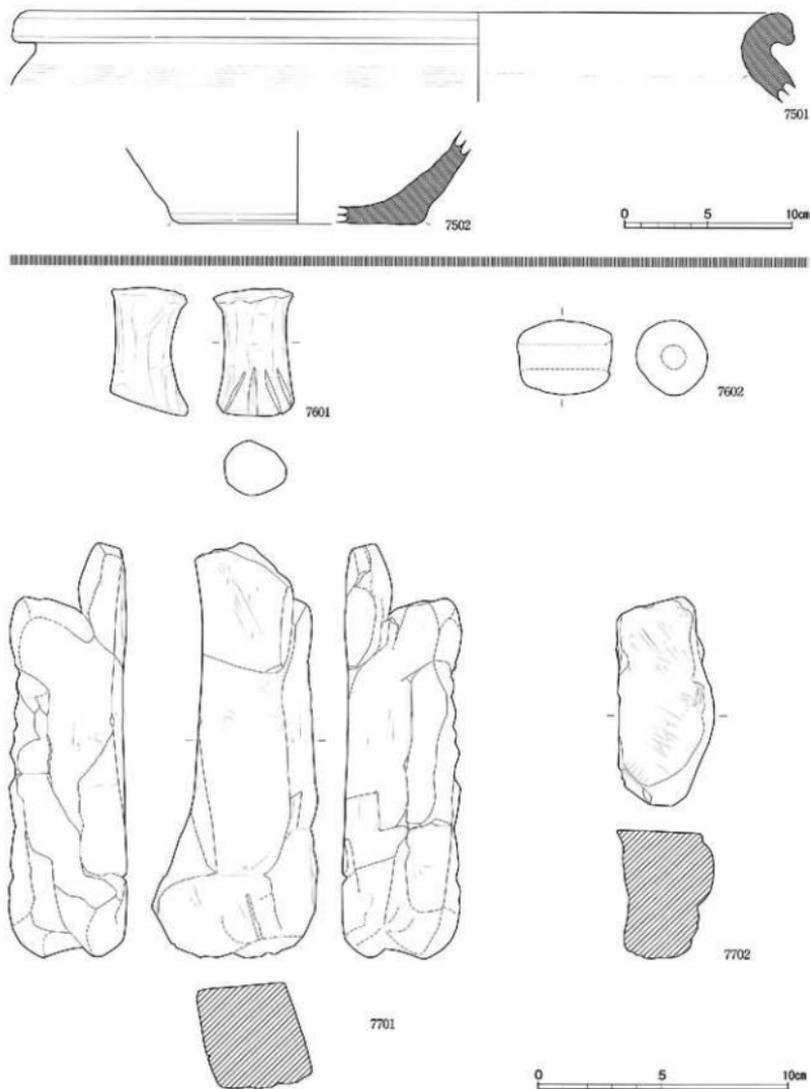
7435



7437

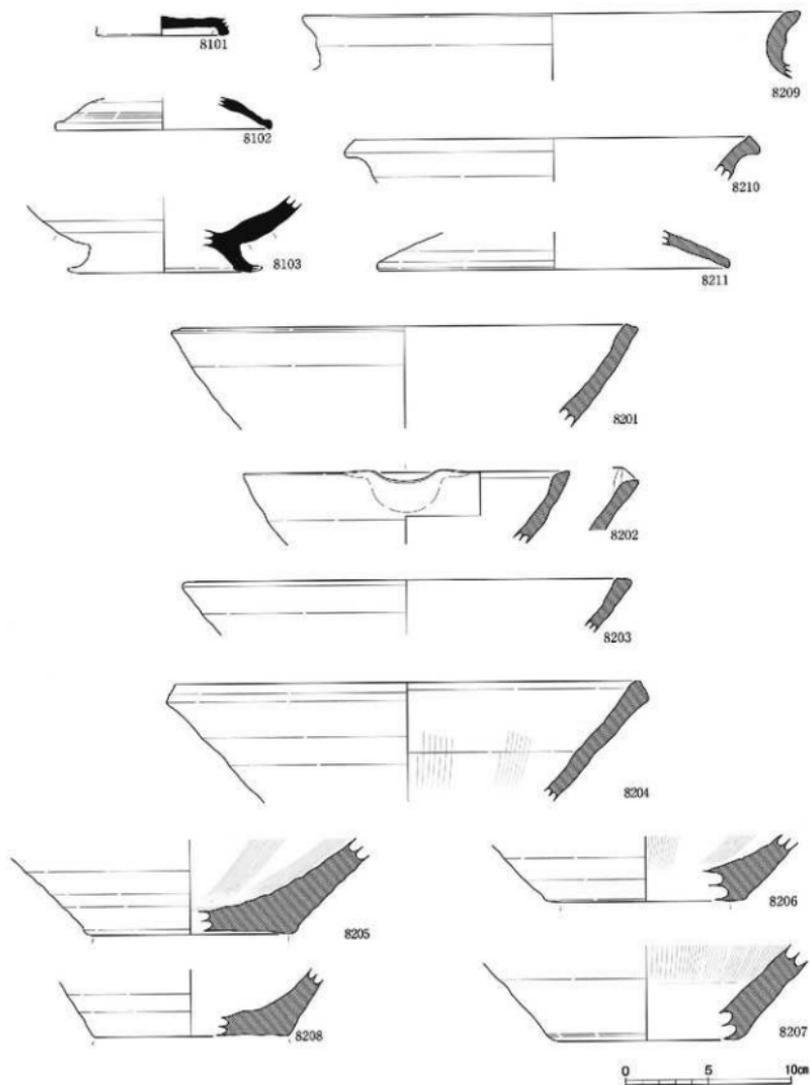






土器類-珠洲：7501・7502、土製品-獣脚：7601、土錘：7602
石製品-砥石：7701・7702

縮尺1/3、1/2



目 次

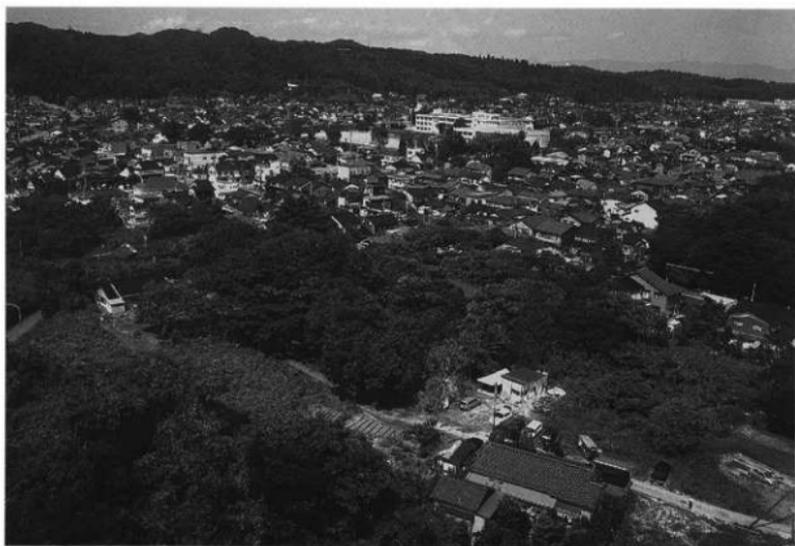
目 次

図版01	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 調査地区全景(南西) 2. 調査地区全景(南東)	図版14	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土坑S K01横出状態(北) 2. 土坑S K02・03検出状態(北東) 3. 土坑S K02鉄釘出土状態(北)
図版02	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01北西階現況(西) 2. 土塁S A01南西部現況(東)	図版15	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土坑S K04遺物出土状態(北) 2. 瓦葺りS U01検出状態(南西) 3. 軒丸瓦出土状態(西)
図版03	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01・堀址S D01と腰曲輪(西) 2. 堀址S D01土層断面(東)	図版16	遺構写真	瑞臨寺遺跡片原地区 1. 調査地区全景(北東) 2. 調査地区全景(北)
図版04	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01と堀址S D01(北) 2. 堀址S D01土層断面(北西)	図版17	遺構写真	瑞臨寺遺跡片原地区 1. 溝S D01・02近景(北) 2. 溝S D08、瓦葺りS U01全景(西南西)
図版05	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01と堀址S D01(東) 2. 堀址S D01近代瓦山土状態(南東)	図版18	遺構写真	瑞臨寺遺跡片原地区 1. 瓦葺りS U01検出状態(北東) 2. 瓦葺りS U01礎石状態(南東)
図版06	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 堀址S D02東側と粘土探掘坑S X03(南) 2. 堀址S D02北東隅(南東) 3. 堀址S D02北側と粘土探掘坑S X02(西)	図版19	遺構写真	瑞臨寺遺跡片原地区 1. 土坑S K03全景(南東) 2. 溝S D08平瓦出土状態(北) 3. 瓦葺りS U01南丸瓦山出土状態(北北東)
図版07	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 堀址S D02北側(北西) 2. 堀址S D04(南) 3. 堀址S D04中世土師器出土状態(北西)	図版20	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 1・2・3地区全景(西) 2. 1地区東部全景(南)
図版08	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01と防空壕S X05(南) 2. 堀址S D01と腰曲輪(南) 3. 土塁S A02上層断面(南東)	図版21	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 1地区西部全景(南) 2. 1地区西部遺物集中地点(東)
図版09	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 土塁S A01上部断面(西) 2. 土塁S A01下部断面(西) 3. 遺物発掘S A01-S U01(西)	図版22	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 2地区全景(南西) 2. 3地区全景(南西)
図版10	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 第7トレンチ東部全景(西) 2. 築地層S M01及び遺構検出状態(西)	図版23	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 掘立柱建物址S B01-03検出状態(北西) 2. 掘立柱建物址S B01・02検出状態(南西)
図版11	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 竪穴建物址S I01全景(西) 2. 竪穴建物址S I01土層断面(南西)	図版24	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 土坑S K01・02遺物出土状態(北) 2. 土坑S K01・02遺物出土状態(西)
図版12	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 竪穴建物址S I02検出状態(西) 2. 竪穴建物址S I02遺物出土状態(南西)	図版25	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 土坑S K01・02遺物出土状態(西) 2. 土坑S K01・02全景(北西) 3. 土坑S K16遺物出土状態(北東)
図版13	遺構写真	越中国府岡通遺跡能松地区 1. 竪穴建物址S I03全景(北西) 2. 溝S D09検出状態(北)			

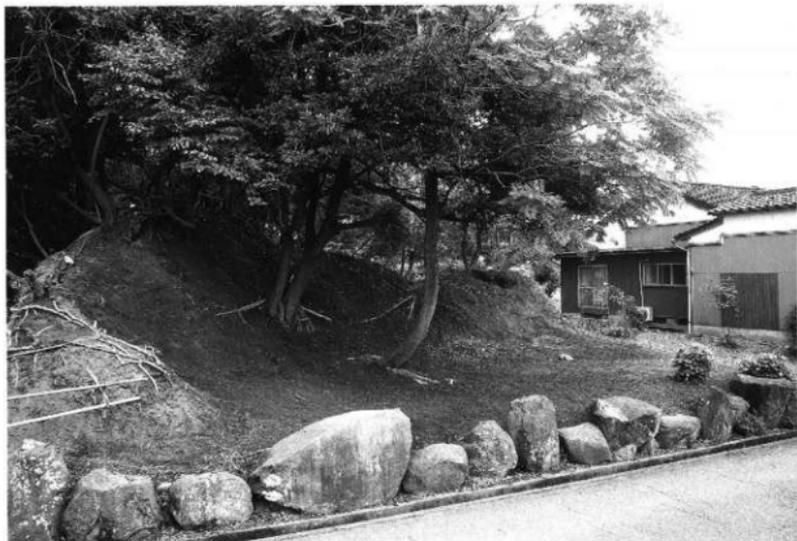
図版26	遺構写真	東木津遺跡今井地区 1. 上坑SK03遺物出土状態(西) 2. 溝SD02全景(南) 3. 溝SD02遺物出土状態(南東)	図版45	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 奈良時代の平瓦凹面 2. 奈良時代の平瓦凸面
図版27	遺構写真	石塚江之戸遺跡福島地区 1. 1地区全景(南東) 2. 2地区全景(南西)	図版46	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 奈良時代の平瓦凹面 2. 奈良時代の平瓦凸面
図版28	遺構写真	石塚江之戸遺跡福島地区 1. 1地区溝SD01出土状態(東) 2. 1地区溝SD01確認状態(西南西) 3. 2地区溝SD01全景(西)	図版47	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 奈良時代の平瓦凹面 2. 奈良時代の平瓦凸面
図版29	遺構写真	前田墓所遺跡中田地区 1. 調査地区全景(南東) 2. 溝SD01全景(北)	図版48	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 近世瓦-横し瓦、輪葉瓦 2. 近代瓦-軒瓦 3. 近代瓦-特殊瓦
図版30	遺構写真	守山城跡イ・・・モバイル地区 1. トレンチ全景(北) 2. 南東壁土層断面(北西)	図版49	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 近代瓦-横瓦
図版31	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 土器類 1. 古代土師器内面 2. 古代土師器外面	図版50	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 近代瓦-横瓦
図版32	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 土器類 1. 須恵器 2. 古代施地陶器	図版51	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 土・石製品他 1. 縄文土器、軟陶、土師、磁石 2. 打製石斧、台石、茶臼
図版33	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 土器類 1. 中世土師器 2. 中世土師器のナゲ上げ技法	図版52	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 鉄製品他 1. 鉄釘 2. 鍛冶関連遺物
図版34	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 陶磁器類 1. 中近世陶磁器内面 2. 中近世陶磁器外面	図版53	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 陶磁器類 1. 陶磁器内面 2. 陶磁器外面
図版35	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の軒丸瓦 2. 白鳳時代の軒平瓦	図版54	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 1. 横し瓦-軒丸瓦、軒平瓦、菊丸瓦 2. 横し瓦-平瓦
図版36	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の丸瓦凸面 2. 白鳳時代の丸瓦凹面	図版55	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 1. 横し瓦-丸瓦凸面 2. 横し瓦-丸瓦凹面
図版37	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の丸瓦凸面 2. 白鳳時代の丸瓦凹面	図版56	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 横し瓦-平瓦
図版38	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の丸瓦凸面 2. 白鳳時代の丸瓦凹面	図版57	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 1. 横し瓦-輪葉瓦、特殊瓦、面口瓦 2. 横し瓦-縦斗瓦、鬼瓦、飾瓦
図版39	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の平瓦凹面 2. 白鳳時代の平瓦凸面	図版58	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 1. 輪葉瓦-丸瓦凸面 2. 輪葉瓦-丸瓦凹面
図版40	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の平瓦凹面 2. 白鳳時代の平瓦凸面	図版59	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 瓦 1. 輪葉瓦-平瓦凹面 2. 輪葉瓦-平瓦凸面
図版41	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の平瓦凹面 2. 白鳳時代の平瓦凸面	図版60	遺物写真	瑞巖寺遺跡片原地区 木・鉄製品 1. 木製品、鉄製品 東木津遺跡今井地区 土・石製品 2. 土製品、石製品
図版42	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の平瓦凹面 2. 白鳳時代の平瓦凸面	図版61	遺物写真	東木津遺跡今井地区 土器類 古墳時代の土師器
図版43	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 白鳳時代の平瓦凹面 2. 白鳳時代の平瓦凸面	図版62	遺物写真	東木津遺跡今井地区 土器類 古墳時代の土師器
図版44	遺物写真	越中国府岡連遺跡能松地区 瓦 1. 奈良時代の丸瓦凸面 2. 奈良時代の丸瓦凹面 3. 奈良時代の丸瓦(文字瓦「寺」)	図版63	遺物写真	東木津遺跡今井地区 土器類 1. 古墳時代の土師器 2. 古代の須恵器
			図版64	遺物写真	石塚江之戸遺跡福島地区 土器類 1. 須恵器、珠西内面 2. 須恵器、珠西外面



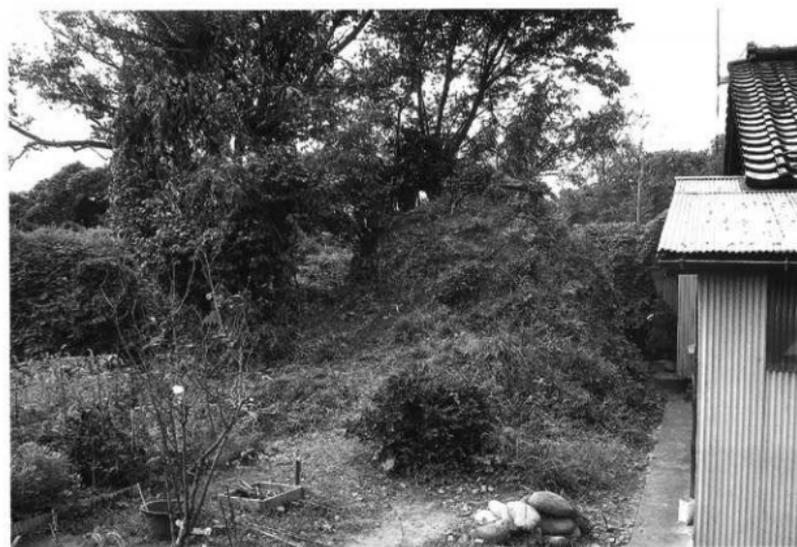
1. 調査地区全景（南西）



2. 調査地区全景（南東）



1. 主郭の土塁 S A01北西隅現況 (西)



2. 主郭の上塁 S A01南西部現況 (東)



1. 主郭の上層S A01・堀址S D01と腰曲輪（第2トレンチ、西）



2. 主郭の堀址S D01土層断面（第3・9トレンチ、東）



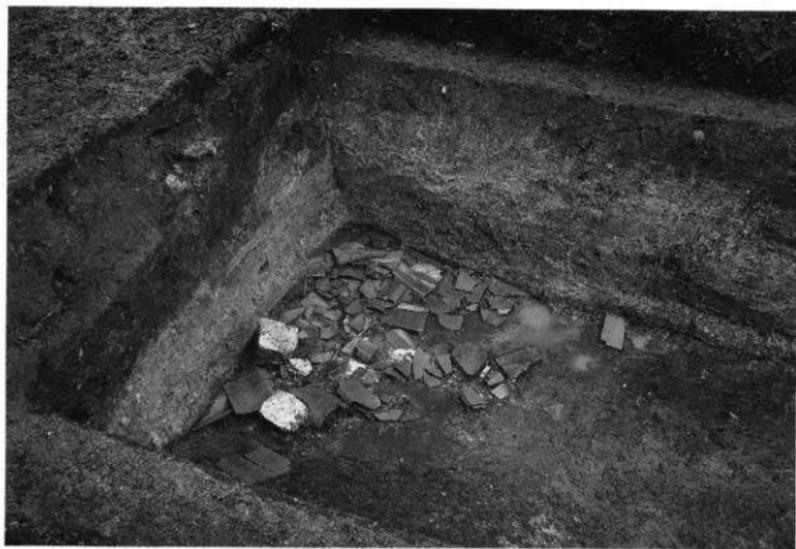
1. 主郭の土層SA01と堀址SD01 (第9トレンチ、北)



2. 主郭の堀址SD01土層断面 (第11トレンチ、北西)



1. 主郭の土塁S A01と堀址S D01 (第4トレンチ、東)



2. 主郭の堀址S D01近代瓦出土状態 (第4トレンチ、南東)



1. 腰曲輪の堀址 S D02東側
と粘土採掘坑 S X03
(第12トレンチ、南)



2. 腰曲輪の堀址 S D02
北東隅
(第1トレンチ、南東)



3. 腰曲輪の堀址 S D02北側
と粘土採掘坑 S X02
(第9トレンチ、西)



1. 腰曲輪の堀址S D02北側
(第1トレンチC地点、
北西)



2. 堀址S D04
(第1トレンチ、南)



3. 堀址S D04
中世土師器出土状態
(第1トレンチ、北西)



1. 主郭の土塁S A01と
防空壕S X05
(第7トレンチ、南)



2. 主郭の堀址S D01と
腰曲輪
(第9トレンチ、南)



3. 腰曲輪の土塁S A02
土層断面
(第9トレンチ、南東)



1. 主郭の土塁 S A01
上部断面
(第10トレンチ、西)



2. 主郭の土塁 S A01
下部断面
(第9トレンチ、西)



3. 主郭土塁上の遺物集積
S A01-S S U01
(西)



1. 第7トレンチ東部全景(西)



2. 第7トレンチ東部整地層SM01及び遺構検出状態(西)



1. 竪穴建物址S I01全景（第7トレンチ、西）



2. 竪穴建物址S I01土層断面（第7トレンチ、南西）



1. 竪穴建物址S I 02検出状態（第7トレンチ、西）



2. 竪穴建物址S I 02遺物出土状態（第7トレンチ、南西）



1. 竪穴建物址S103全景(北西)



2. 溝SD09検出状態(北)



1. 土坑SK01検出状態
(第7トレンチ、北)



2. 土坑SK02・03検出状態
(第9トレンチ、北東)



3. 土坑SK02鉄釘出土状態
(第9トレンチ、北)



1. 土坑SK04遺物出土状態
(第7トレンチ、北)



2. 瓦溜りSU01検出状態
(第7トレンチ、南西)



3. 軒丸瓦出土状態
(第7トレンチ付近、西)



1. 調査地区全景（北東）



2. 調査地区全景（北）



1. 溝SD01・02近景(北)



2. 溝SD08、瓦葺りSU01全景(西南西)



1. 瓦溜りS U01検出状態（北東）



2. 瓦溜りS U01確認状態（南東）



1. 土坑SK03全景(南東)



2. 溝SD08
平瓦出土状態(北)



3. 瓦溜りSU01
菊丸瓦出土状態(北北東)



1. 1・2・3地区全景(西)



2. 1地区東部全景(南)



1. 1地区西部全景(南)



2. 1地区西部遺物集中地点(東)



1. 2地区全景(南西)



2. 3地区全景(南西)



1. 掘立柱建物址 S B01・03検出状態 (北西)



2. 掘立柱建物址 S B01・02検出状態 (南西)



1. 土坑S K01・02遺物出土状態(北)



2. 土坑S K01・02遺物出土状態(西)



1. 土坑SK01-02
遺物出土状態(西)



2. 土坑SK01-02
全景(北西)



3. 土坑SK16
遺物出土状態(北東)



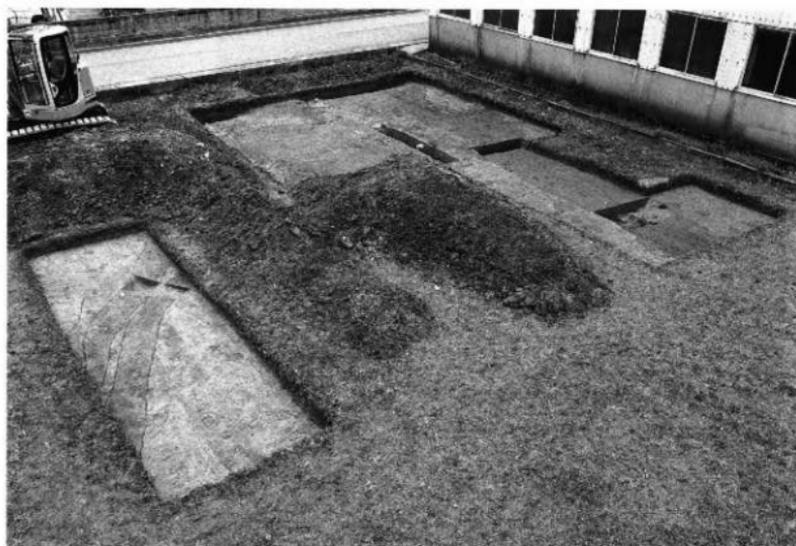
1. 土坑SK03
遺物出土状態(西)



2. 溝SD02全景(南)



3. 溝SD02
遺物出土状態(南東)



1. 1地区全景 (南東)



2. 2地区全景 (南西)



1. 1地区溝S D01
検出状態(東)



2. 1地区溝S D01
確認状態(西南西)



3. 2地区溝S D01
全景(西)



1. 調査地区全景 (南東)



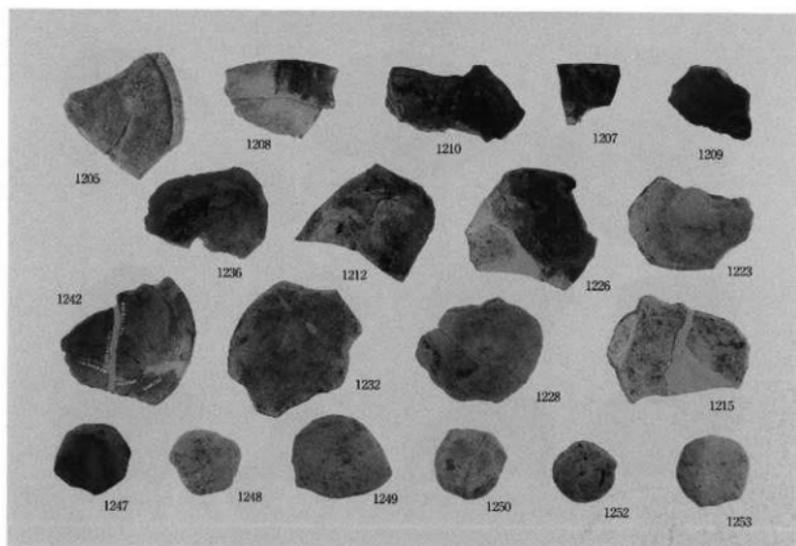
2. 溝S D01全景 (北)



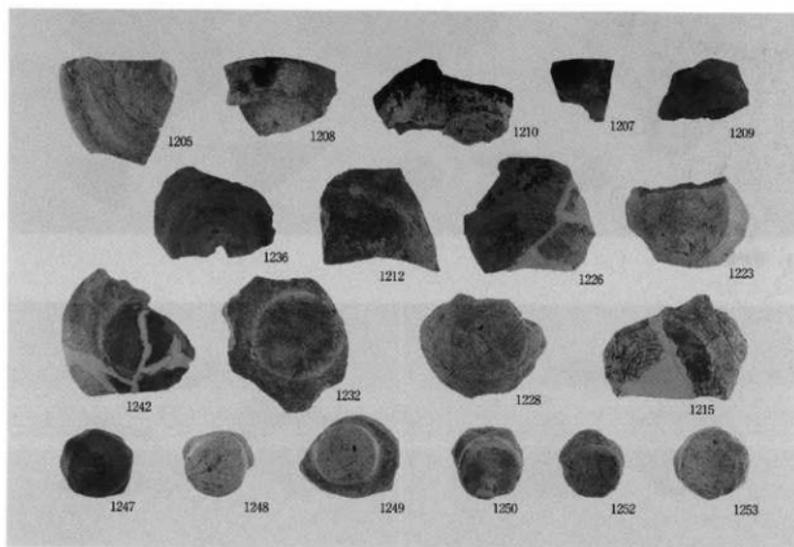
1. トレンチ全景(北)



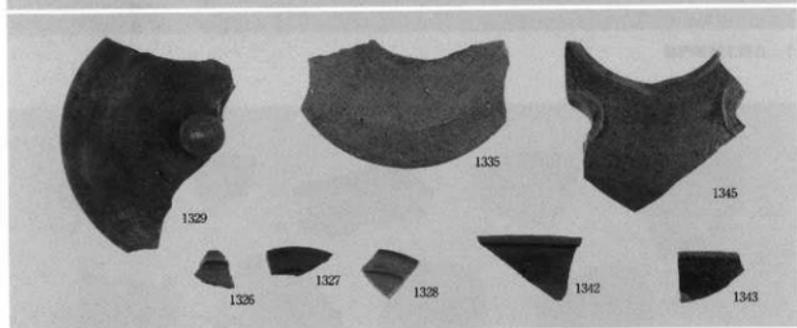
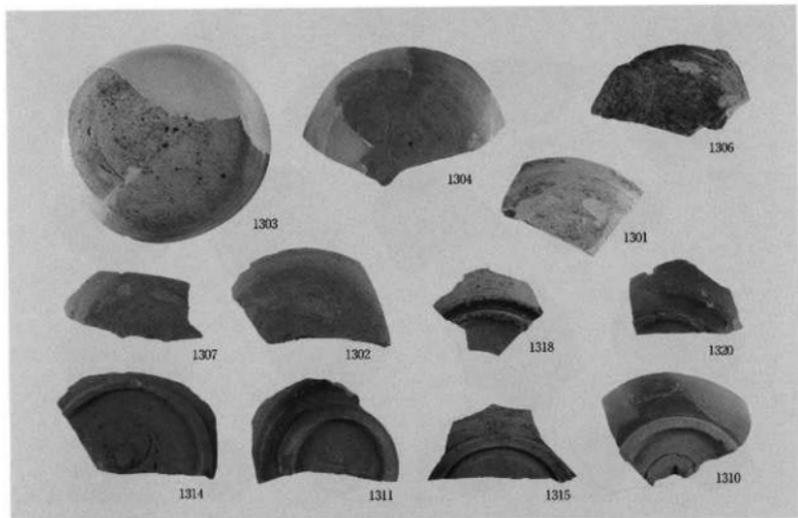
2. 南東磁土層断面(北西)



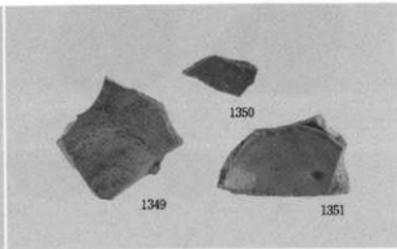
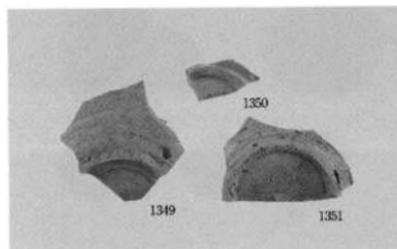
1. 古代土器内面



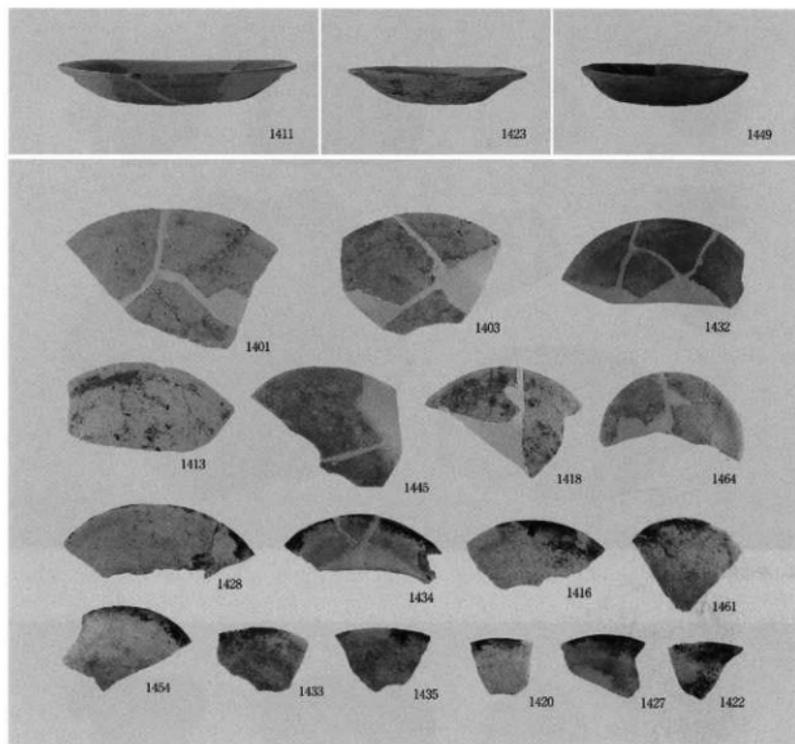
2. 古代土器外面



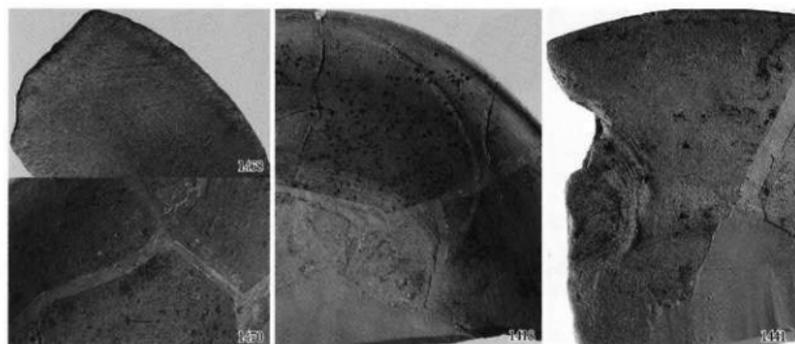
1. 須恵器



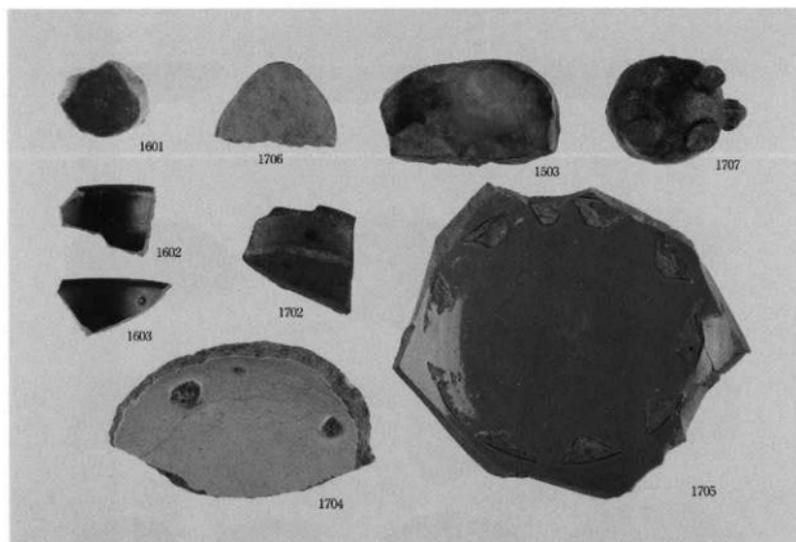
2. 古代施釉陶器



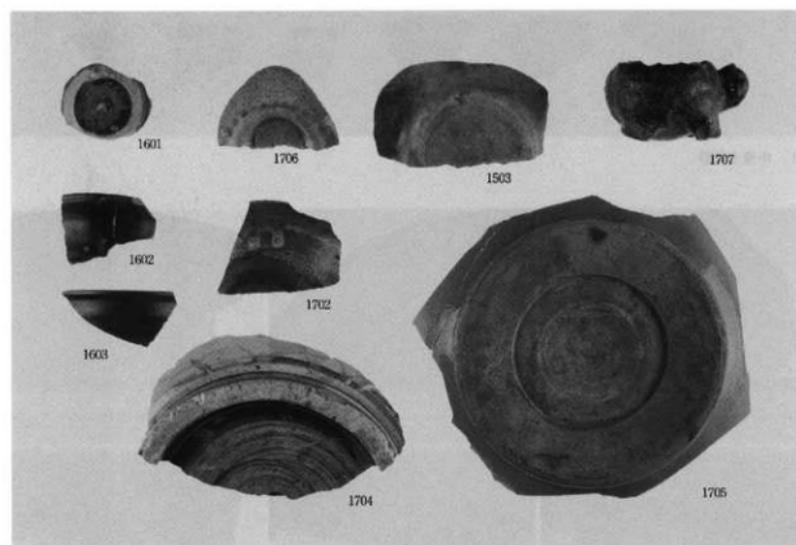
1. 中世土師器



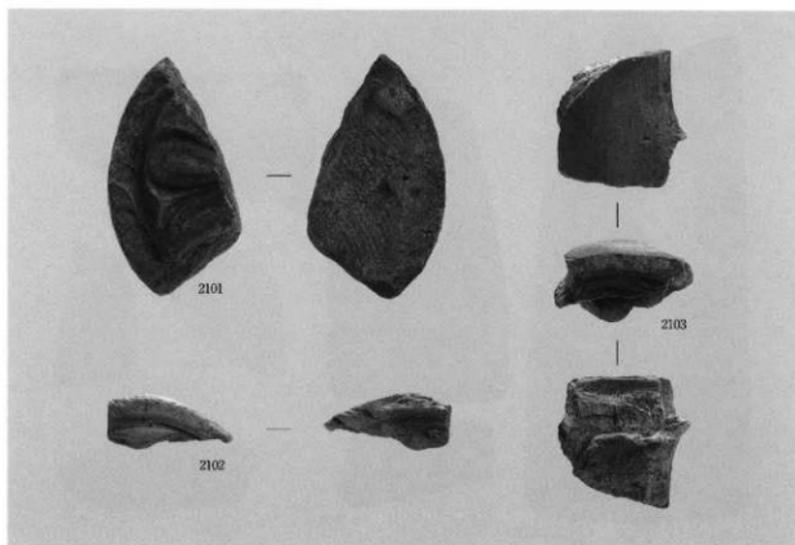
2. 中世土師器のナデ上げ技法 (左:「の」字状ナデ, 中央・右: 逆「く」字状ナデ)



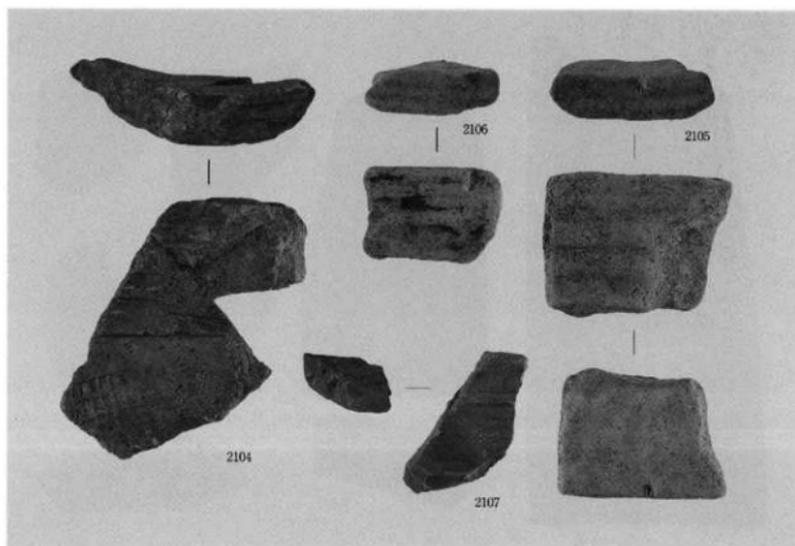
1. 中近世陶磁器内面



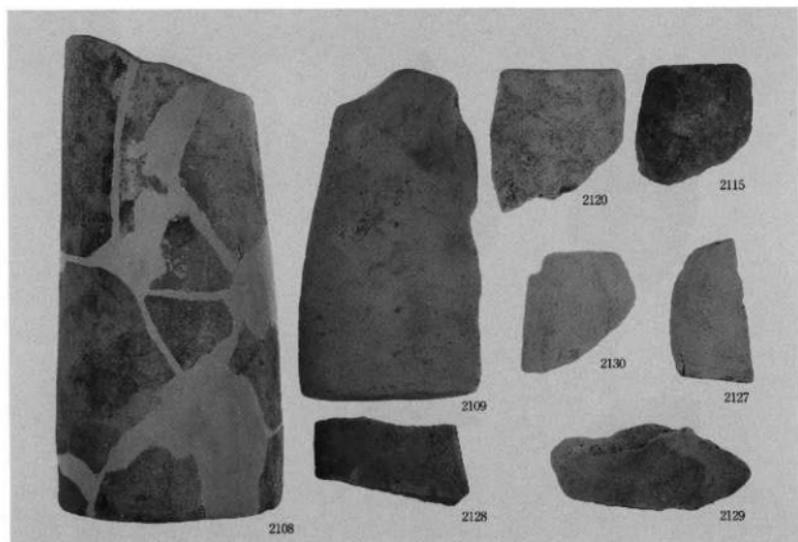
2. 中近世陶磁器外面



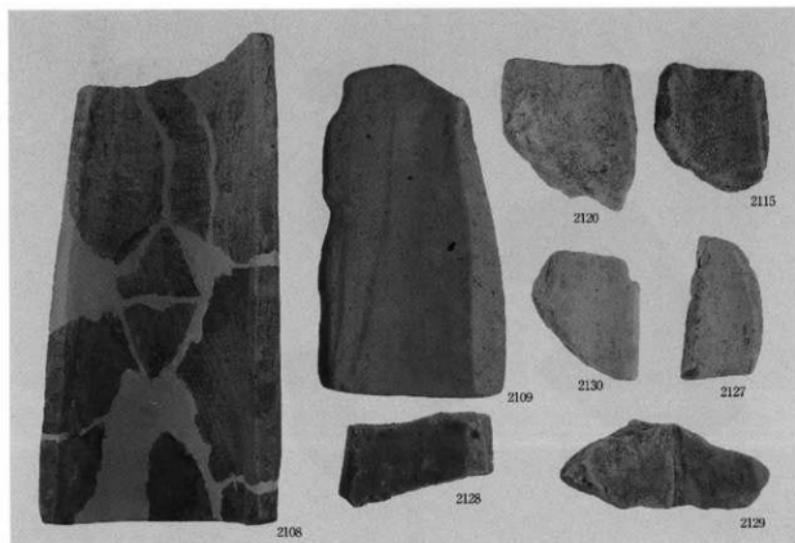
1. 白鳳時代の軒丸瓦



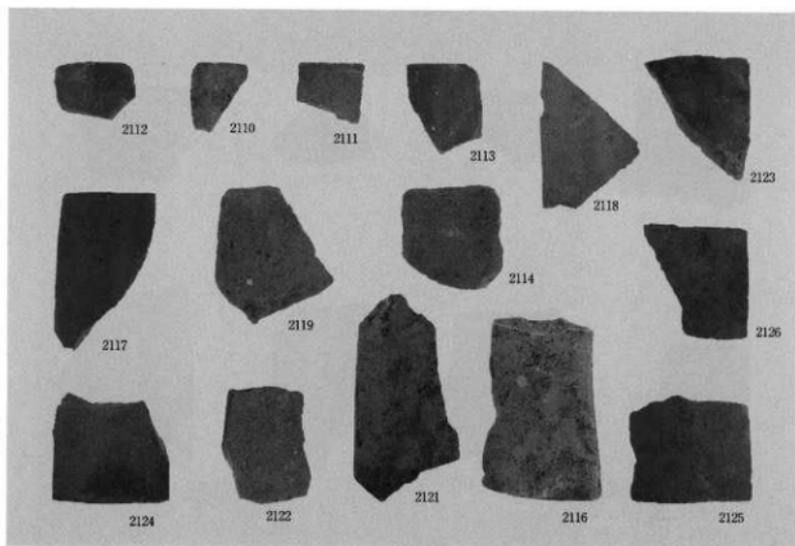
2. 白鳳時代の軒平瓦



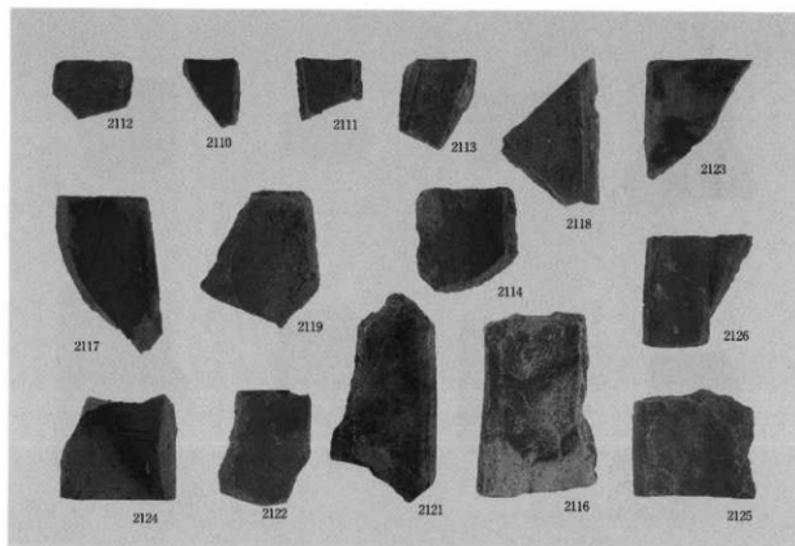
1. 白鳳時代の丸瓦凸面 無叩き・平行叩き



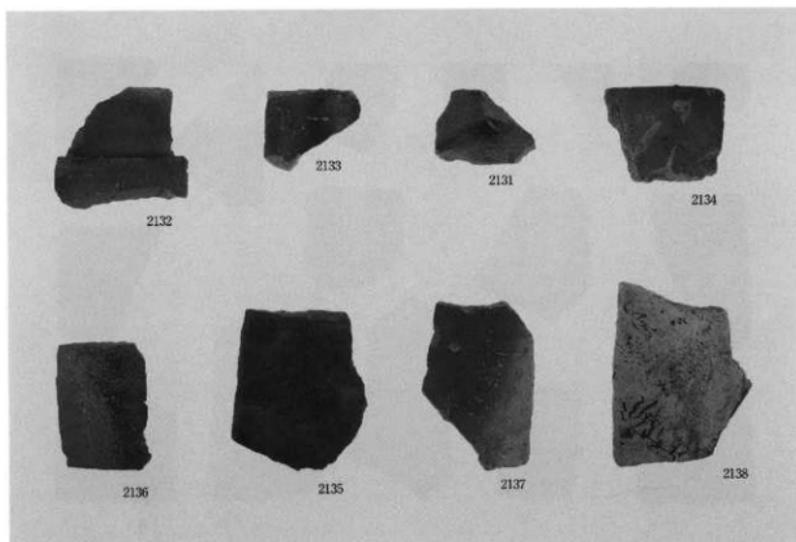
2. 白鳳時代の丸瓦凹面



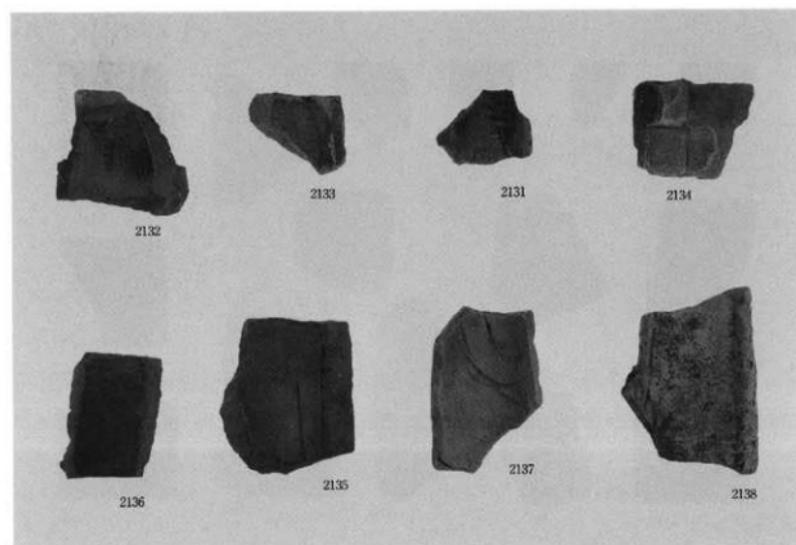
1. 白鳳時代の丸瓦凸面 無叩き



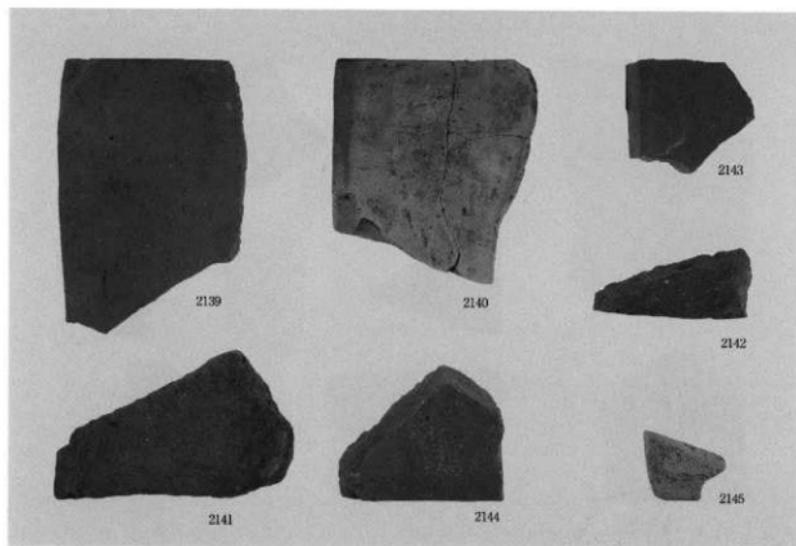
2. 白鳳時代の丸瓦凹面



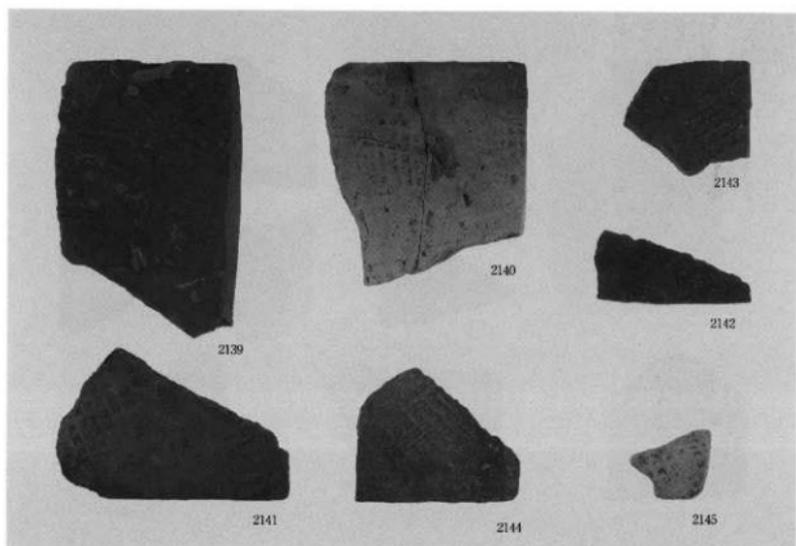
1. 白鳳時代の丸瓦凸面 縄叩き



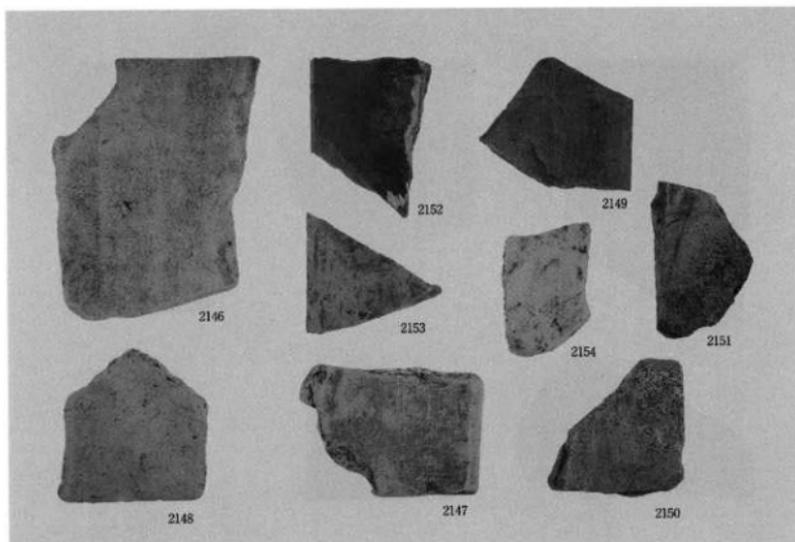
2. 白鳳時代の丸瓦凹面



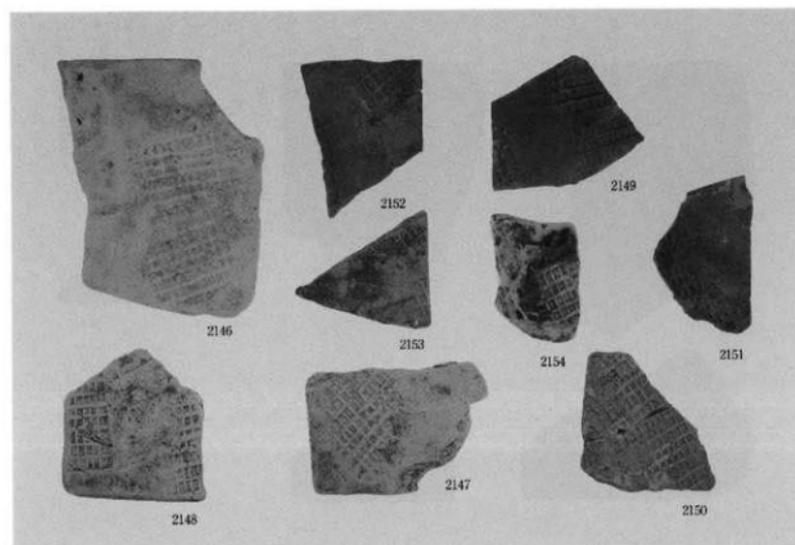
1. 白鳳時代の平瓦凹面



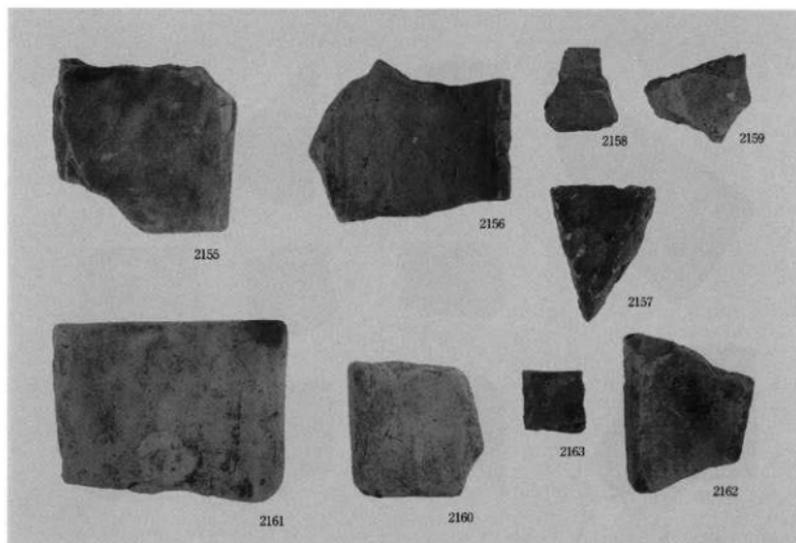
2. 白鳳時代の平瓦凸面 A1叩き



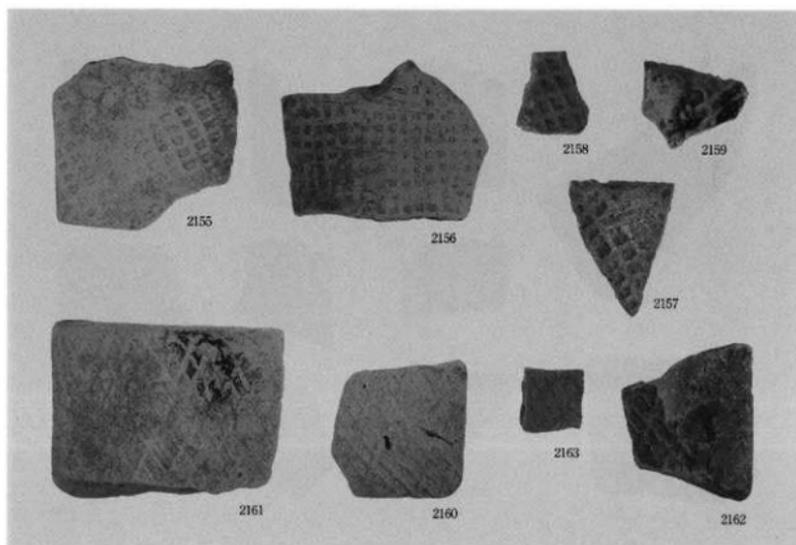
1. 白鳳時代の平瓦凹面



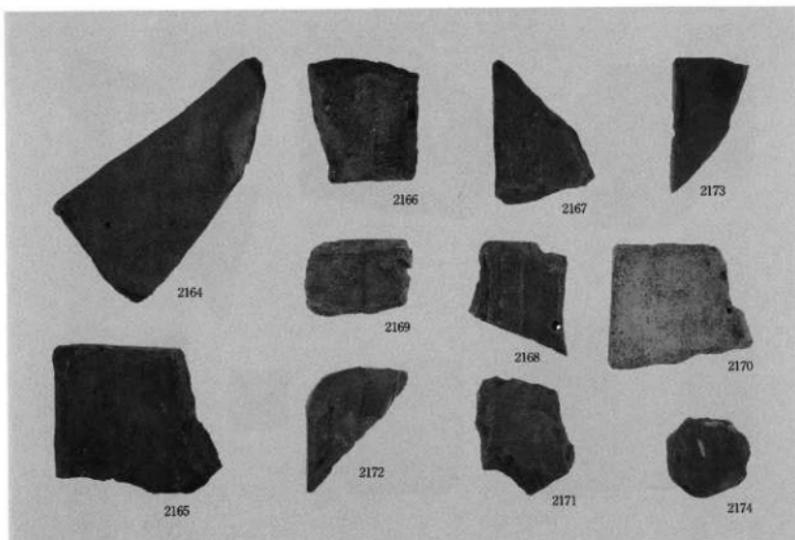
2. 白鳳時代の平瓦凸面 A 2 叩き



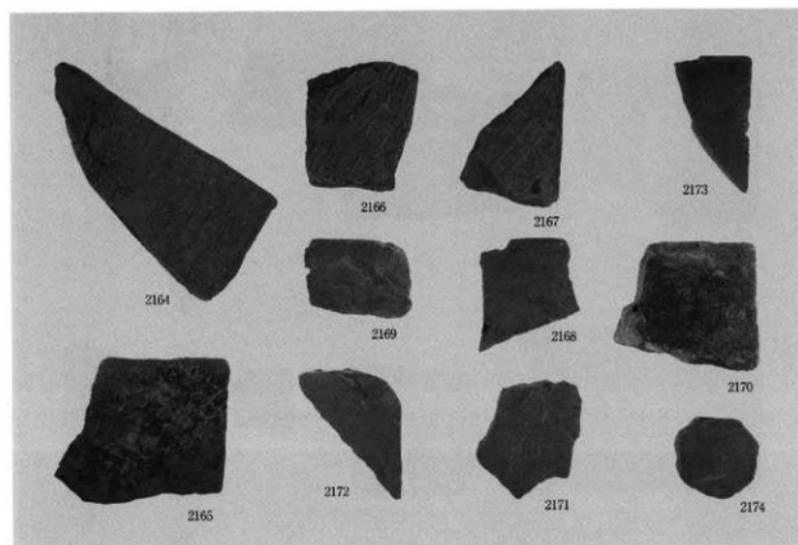
1. 白鳳時代の平瓦凹面



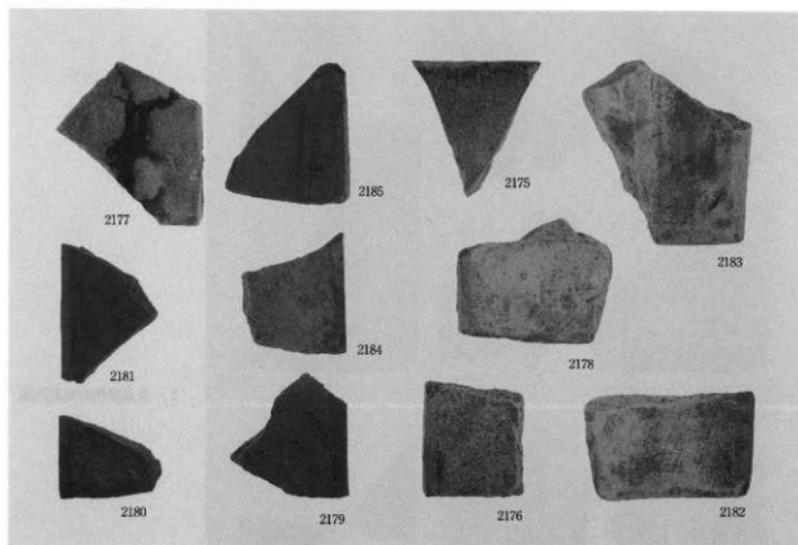
2. 白鳳時代の平瓦凸面 A3叩き・A4叩き・B1叩き



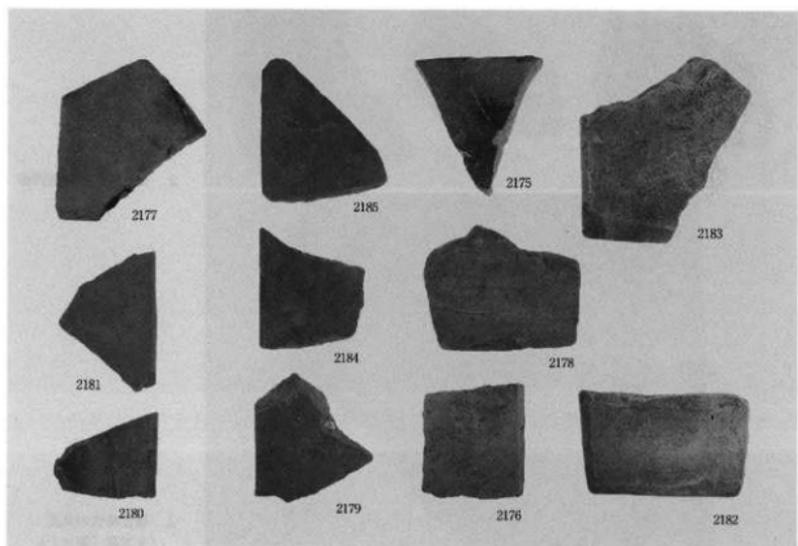
1. 白鳳時代の平瓦凹面



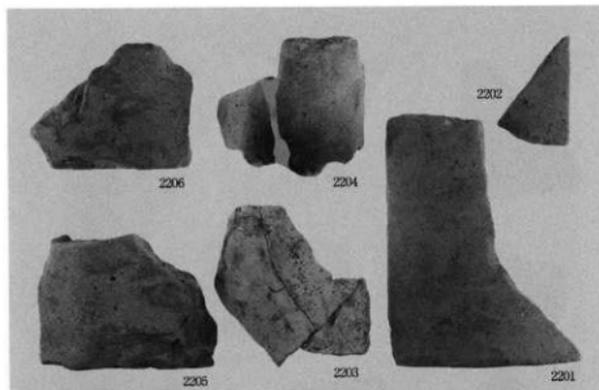
2. 白鳳時代の平瓦凸面 B 2 叩き・縄叩き等



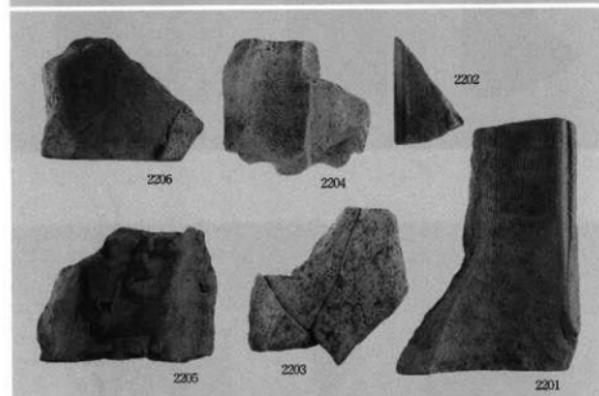
1. 白鳳時代の平瓦凹面



2. 白鳳時代の平瓦凸面 無叩き



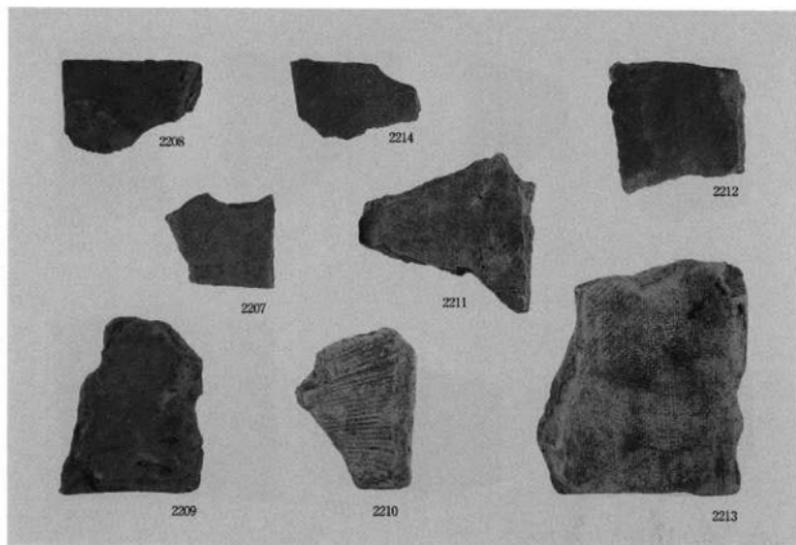
1. 奈良時代の丸瓦凸面



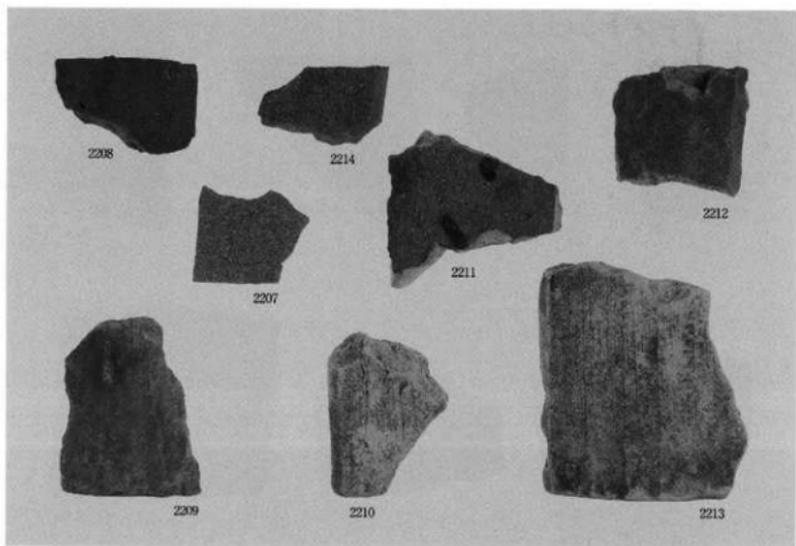
2. 奈良時代の丸瓦凹面



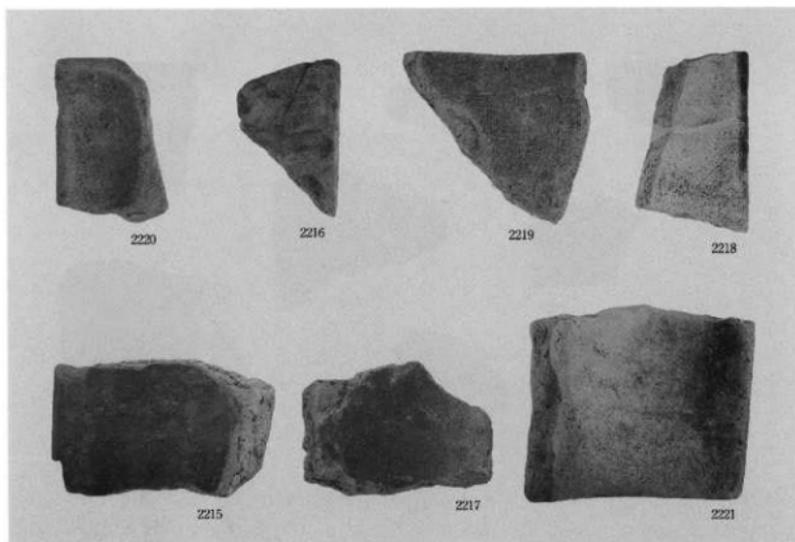
3. 奈良時代の丸瓦
(文字瓦「カ」)



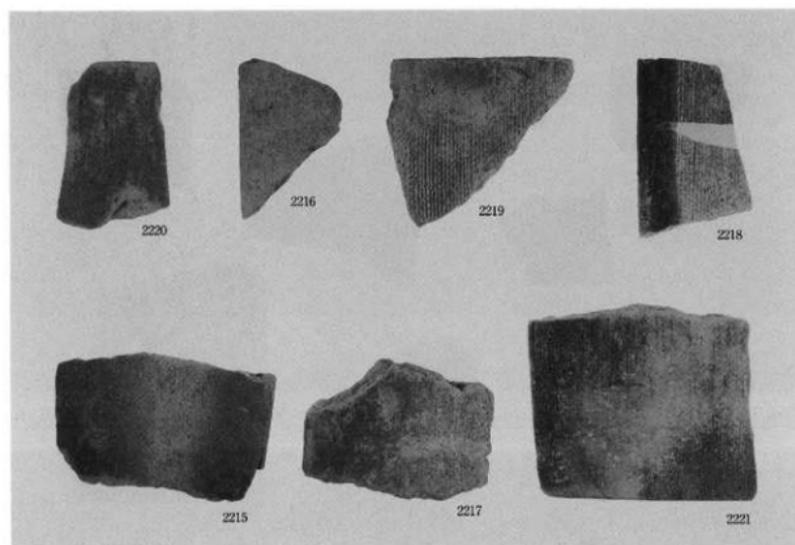
1. 奈良時代の平瓦凹面



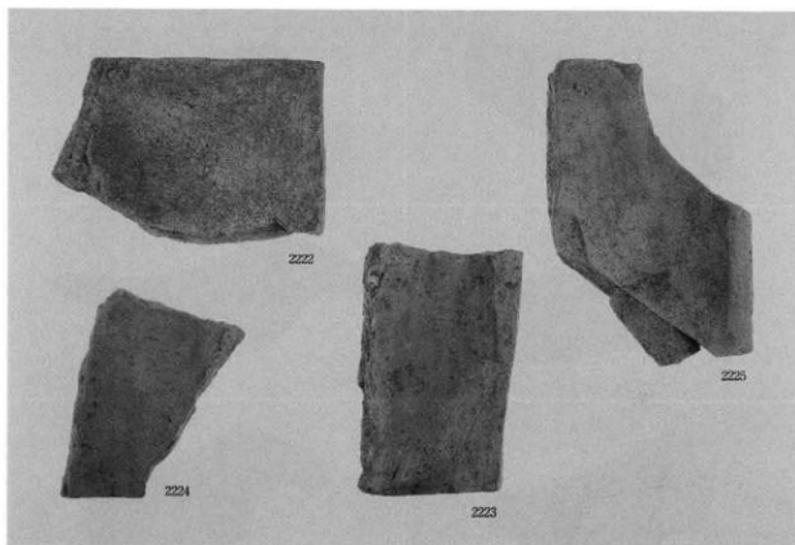
2. 奈良時代の平瓦凸面



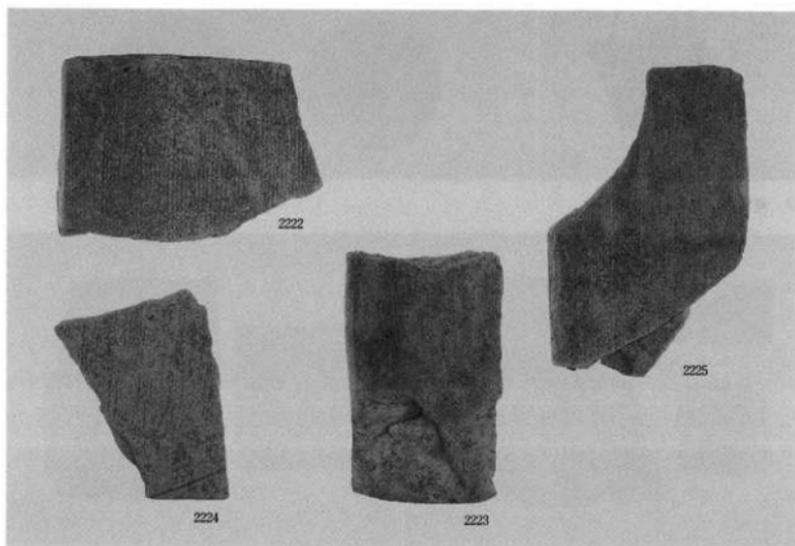
1. 奈良時代の平瓦凹面



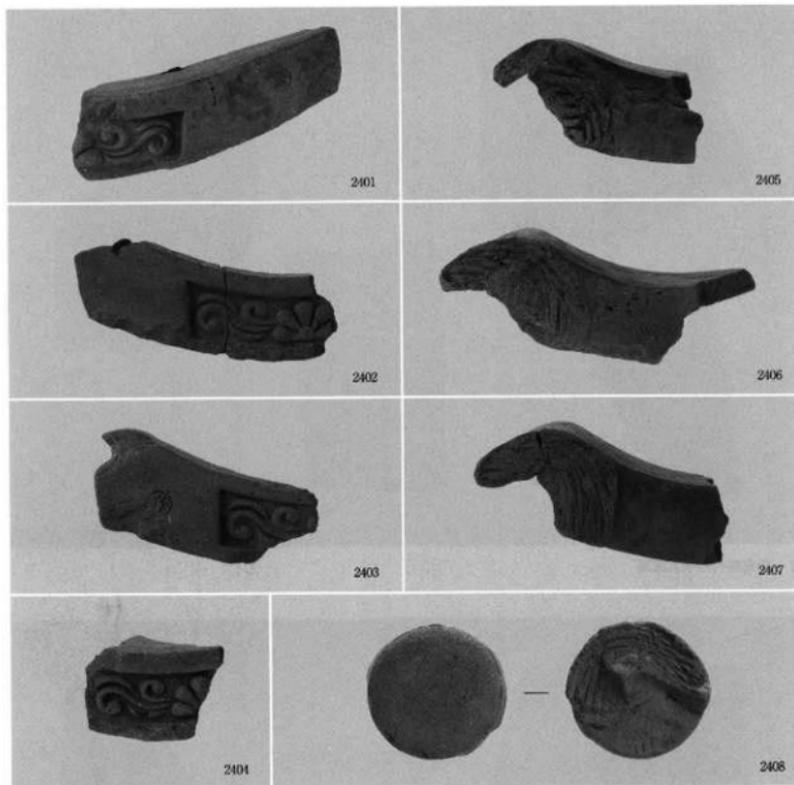
2. 奈良時代の平瓦凸面



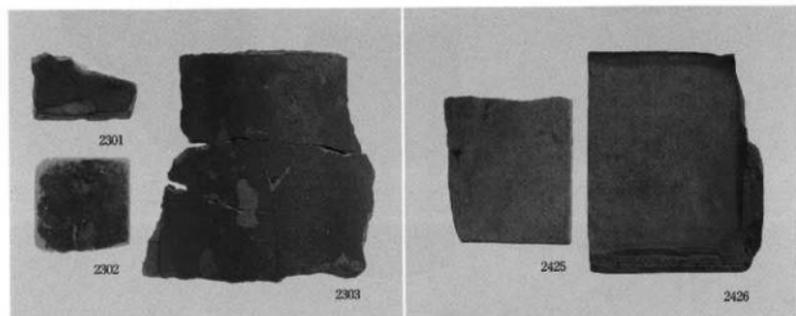
1. 奈良時代の平瓦凹面



2. 奈良時代の平瓦凸面

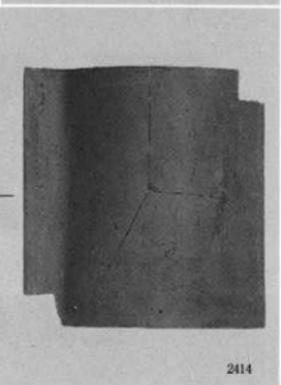
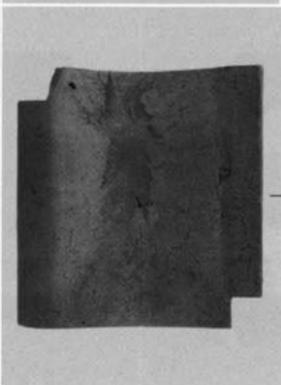
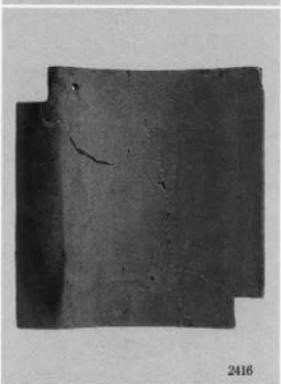
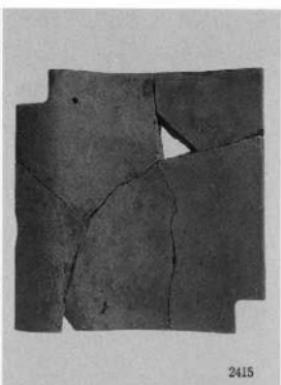
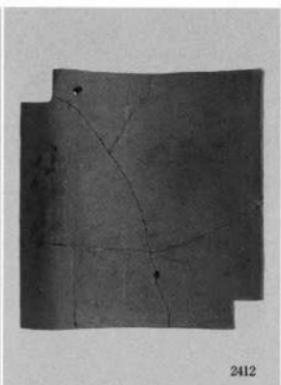
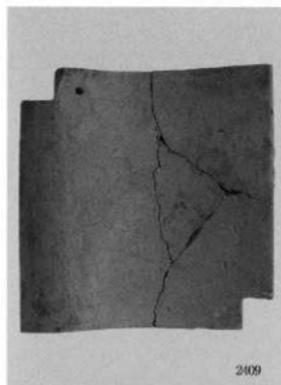


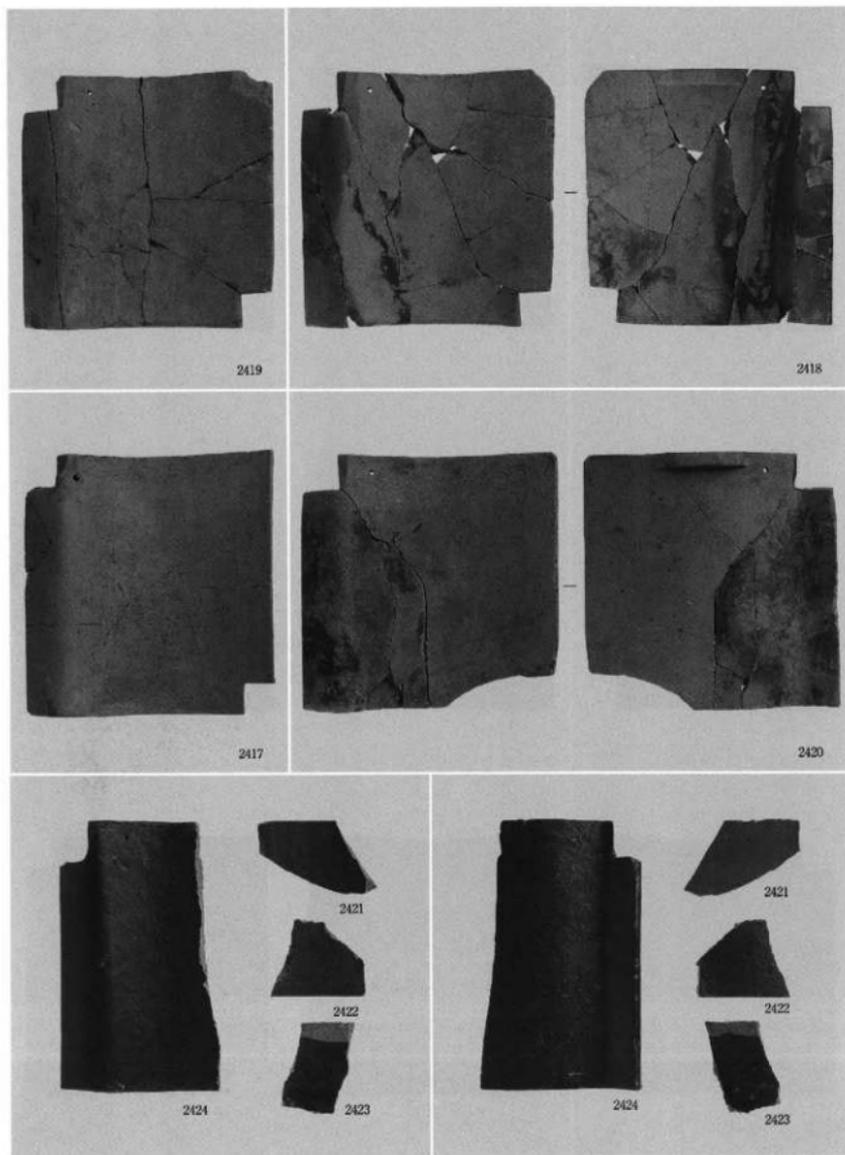
2. 近代瓦-軒棧瓦



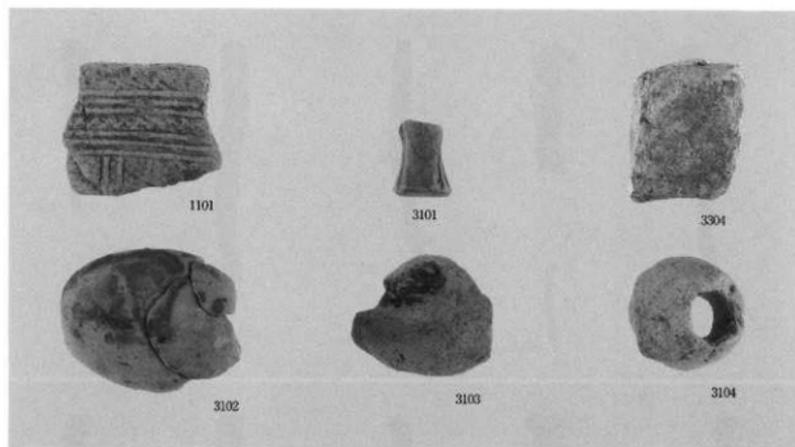
1. 近世瓦-燻し瓦、釉薬瓦

3. 近代瓦-特殊瓦

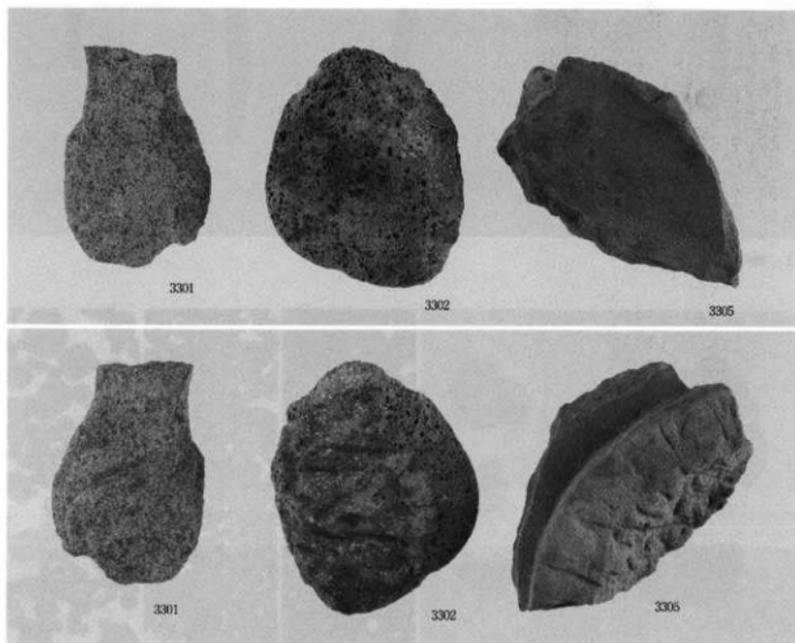




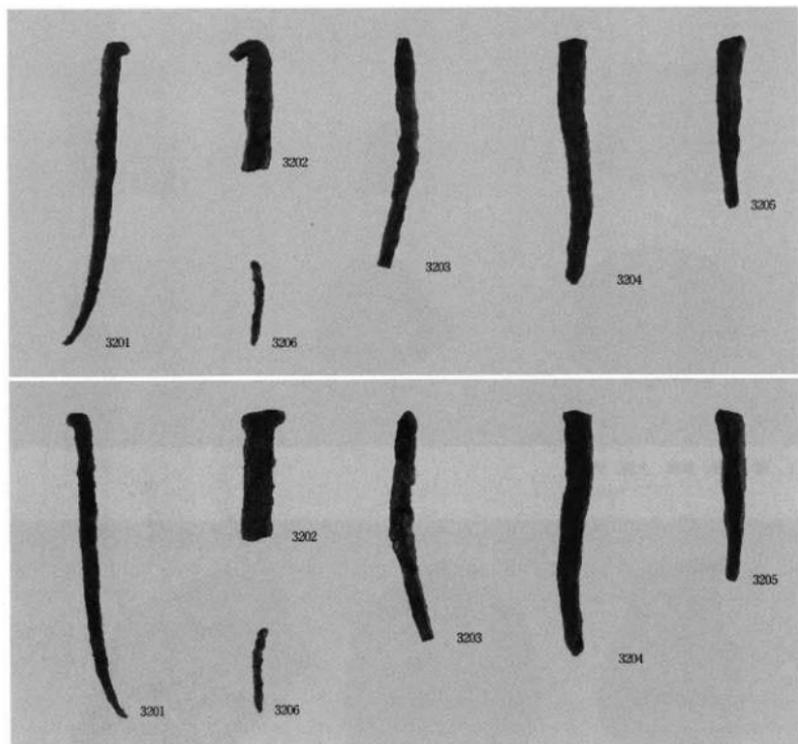
近代瓦 - 棧瓦



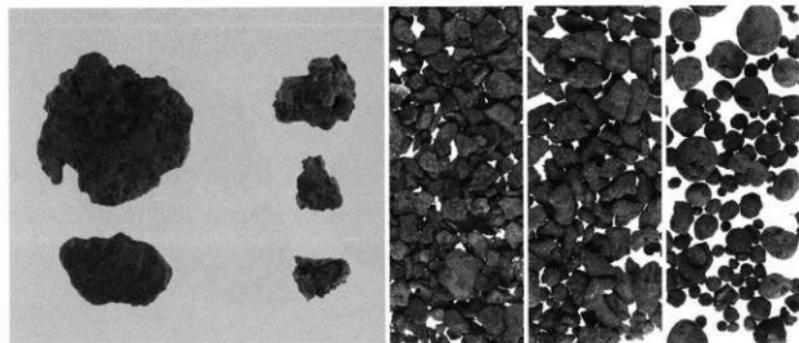
1. 縄文土器、獣脚、土錘、砥石



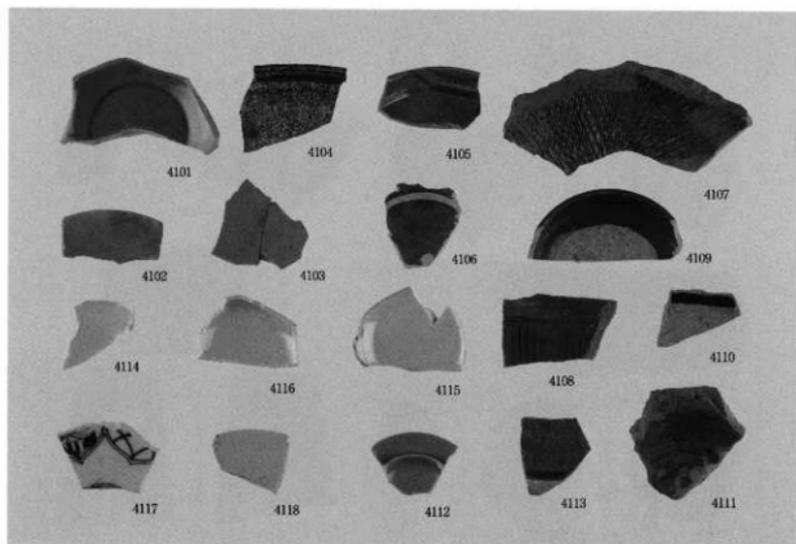
2. 打製石斧、台石、茶臼



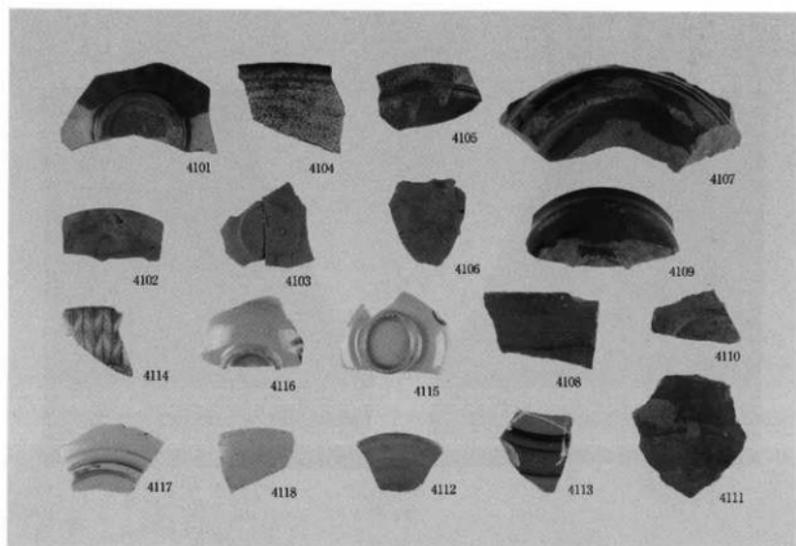
1. 鉄釘



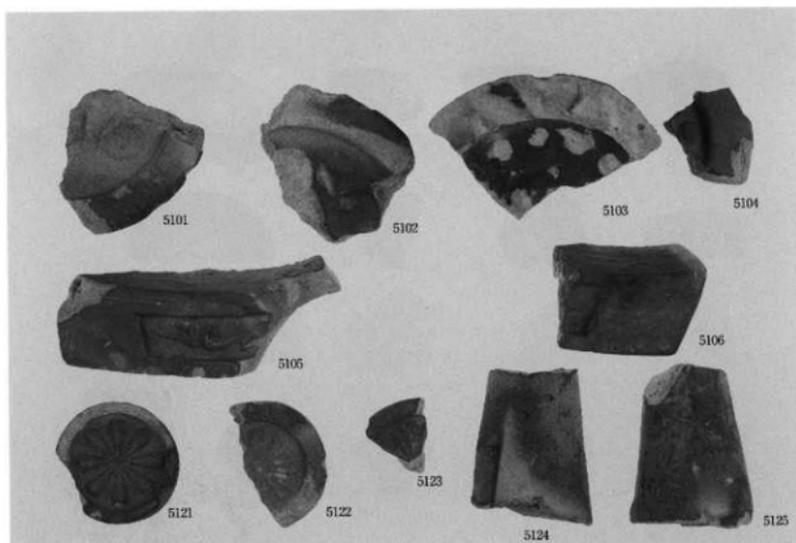
2. 鍛冶関連遺物（塊形滓、炉壁、鍛造剥片、再溶解物、粒状滓）



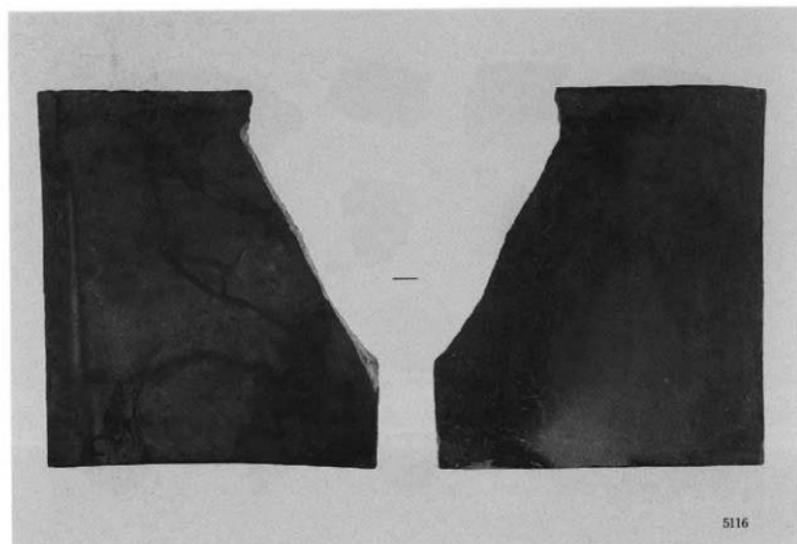
1. 陶磁器内面



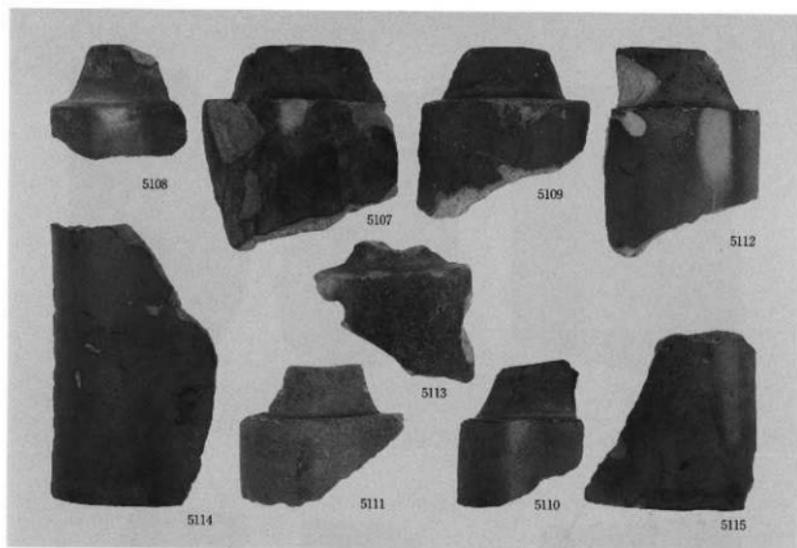
2. 陶磁器外面



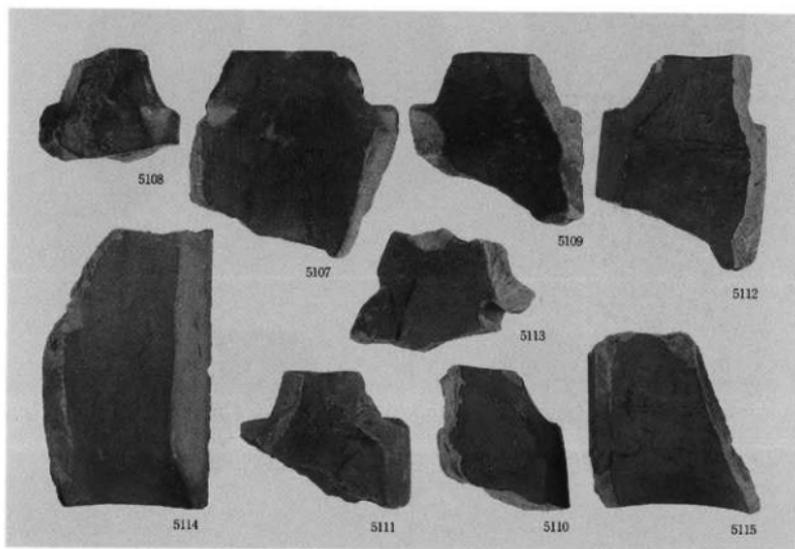
1. 焼し瓦-軒丸瓦、軒平瓦、菊丸瓦



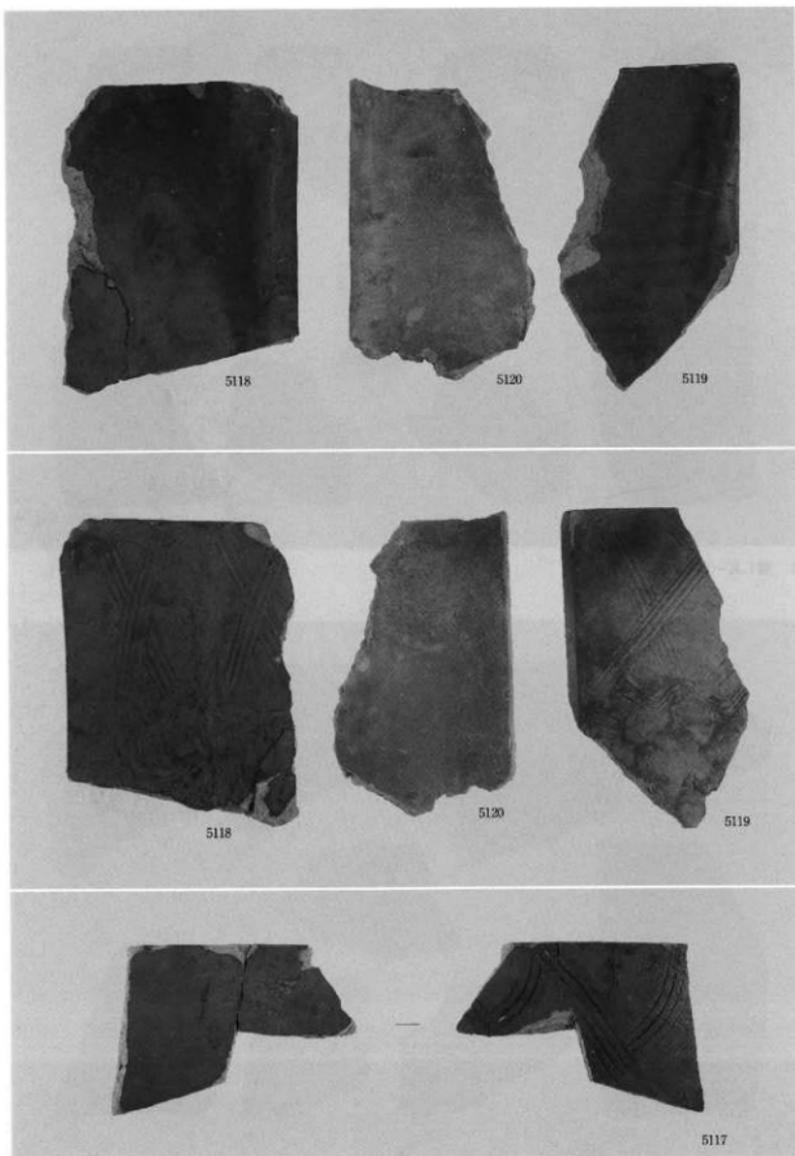
2. 焼し瓦-平瓦



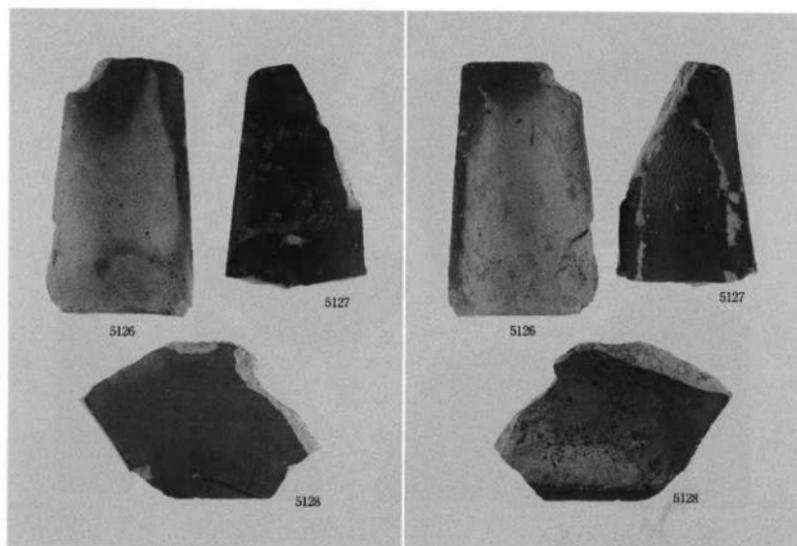
1. 焼し瓦-丸瓦凸面



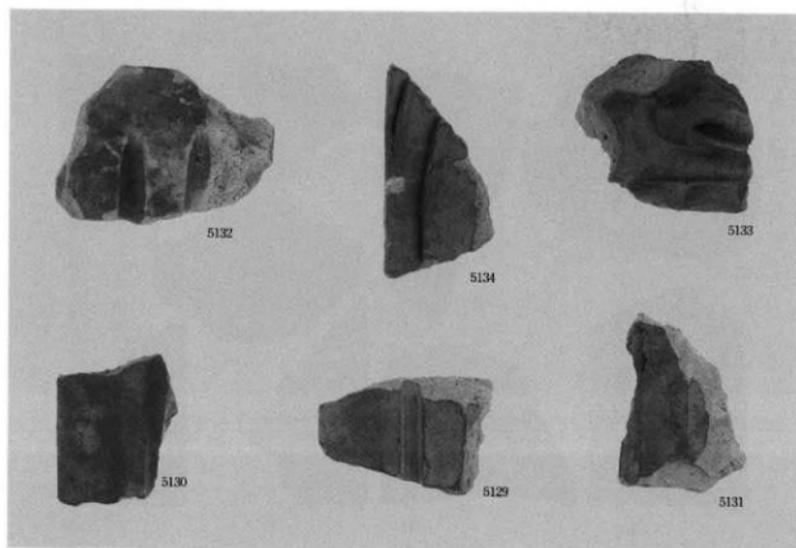
2. 焼し瓦-丸瓦凹面



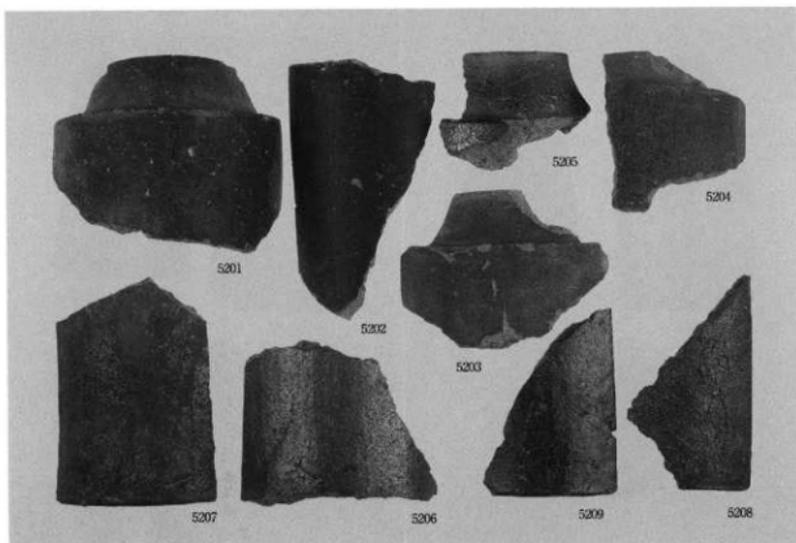
横七瓦-平瓦



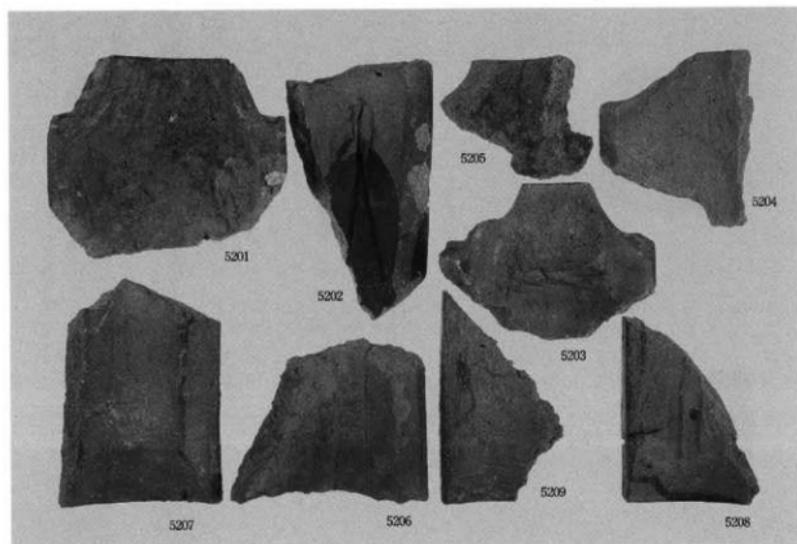
1. 燃し瓦-輪造り瓦、特殊瓦、面戸瓦



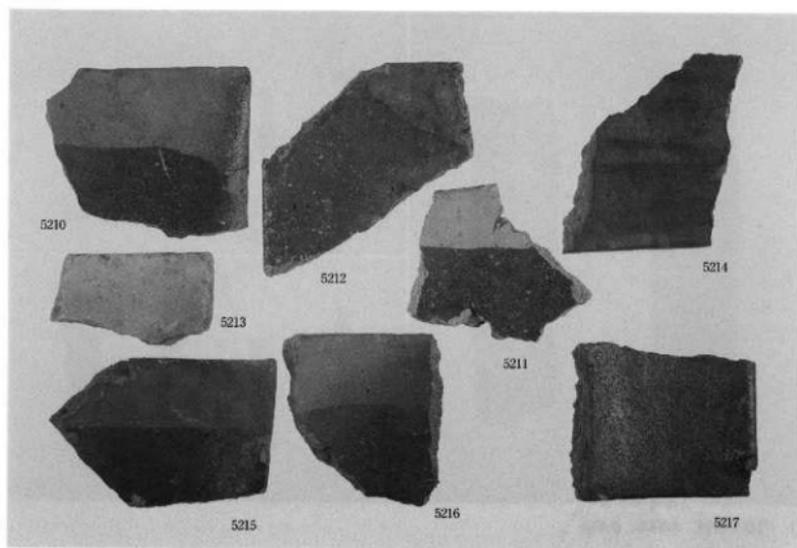
2. 燃し瓦-製斗瓦、鬼瓦、飾瓦



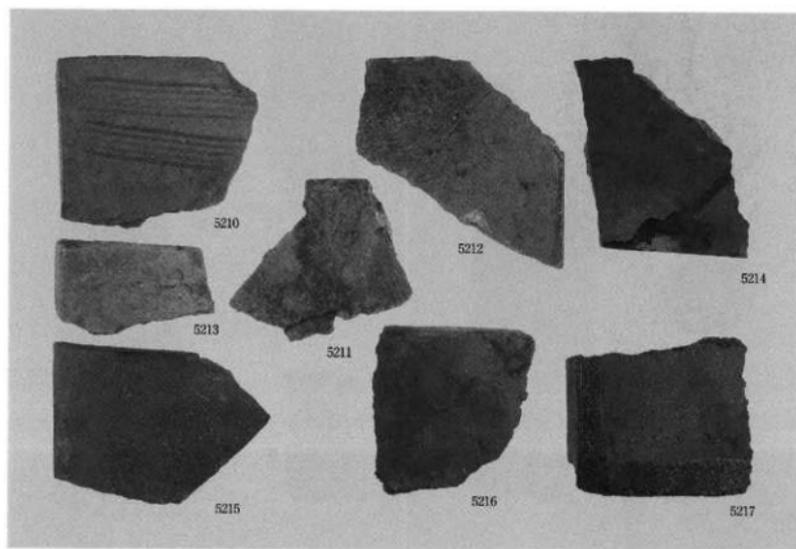
1. 軸葉瓦-丸瓦凸面



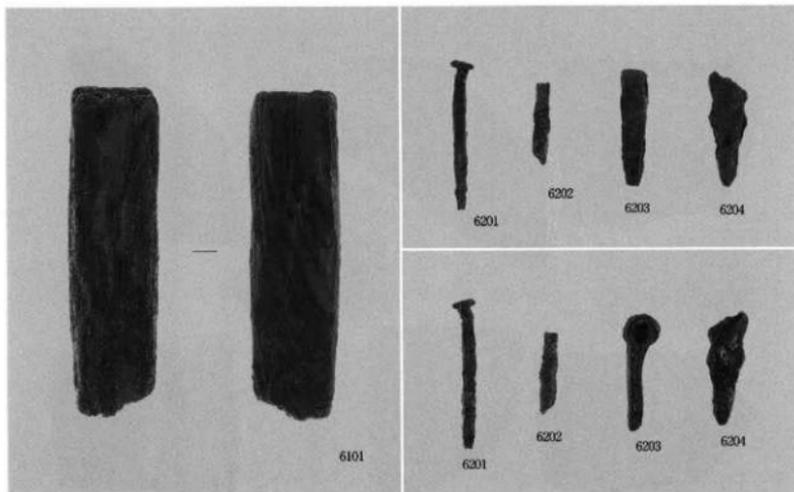
2. 軸葉瓦-丸瓦凹面



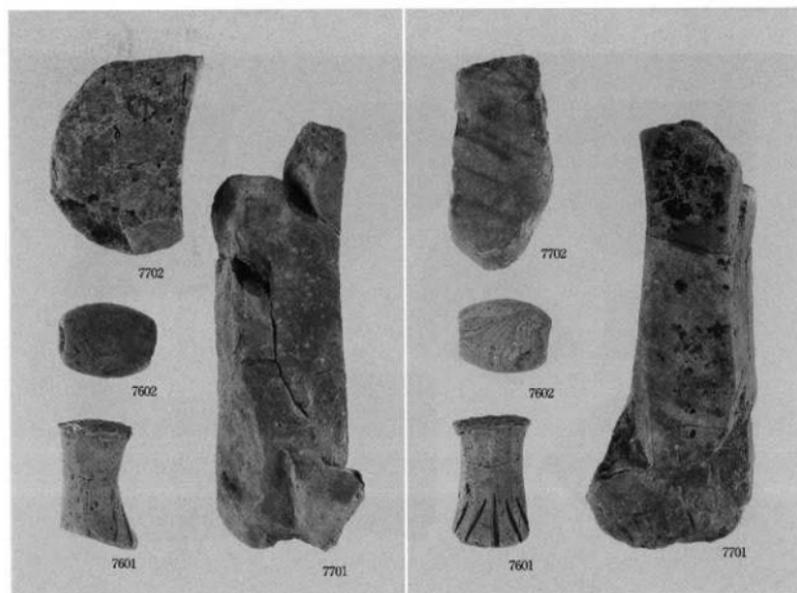
1. 軸葉瓦-平瓦凹面



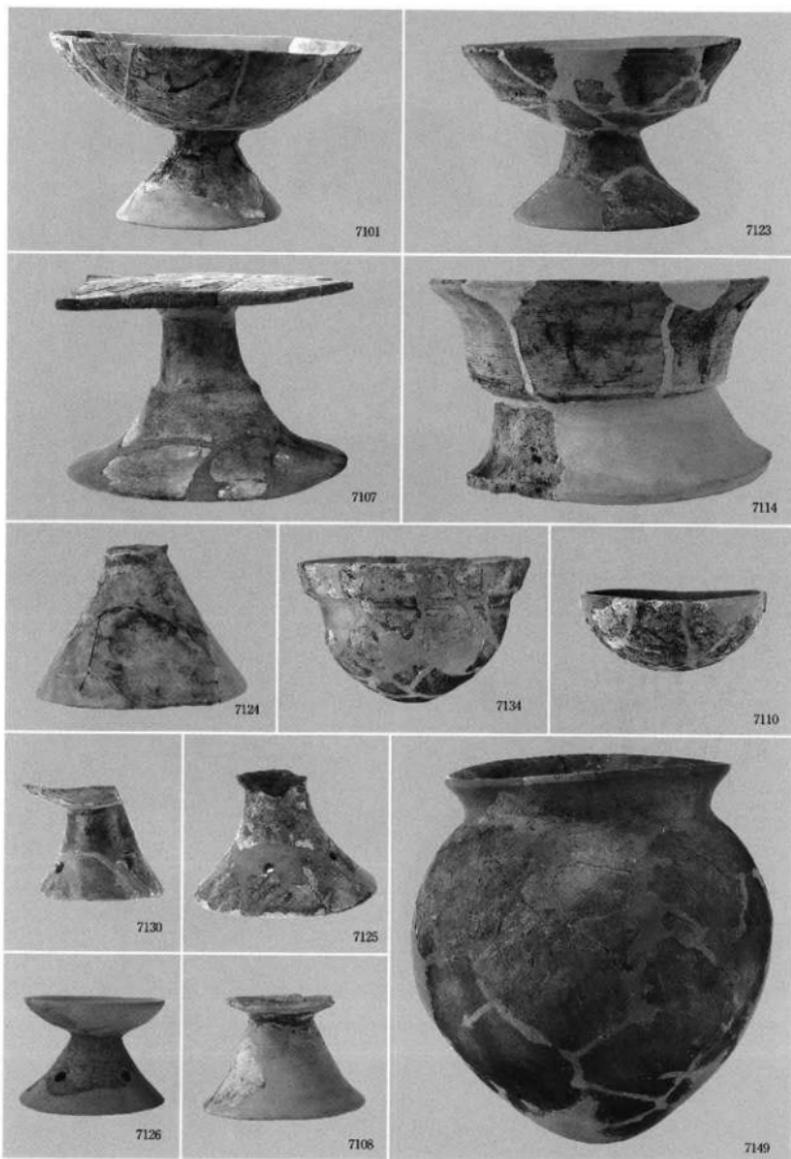
2. 軸葉瓦-平瓦凸面



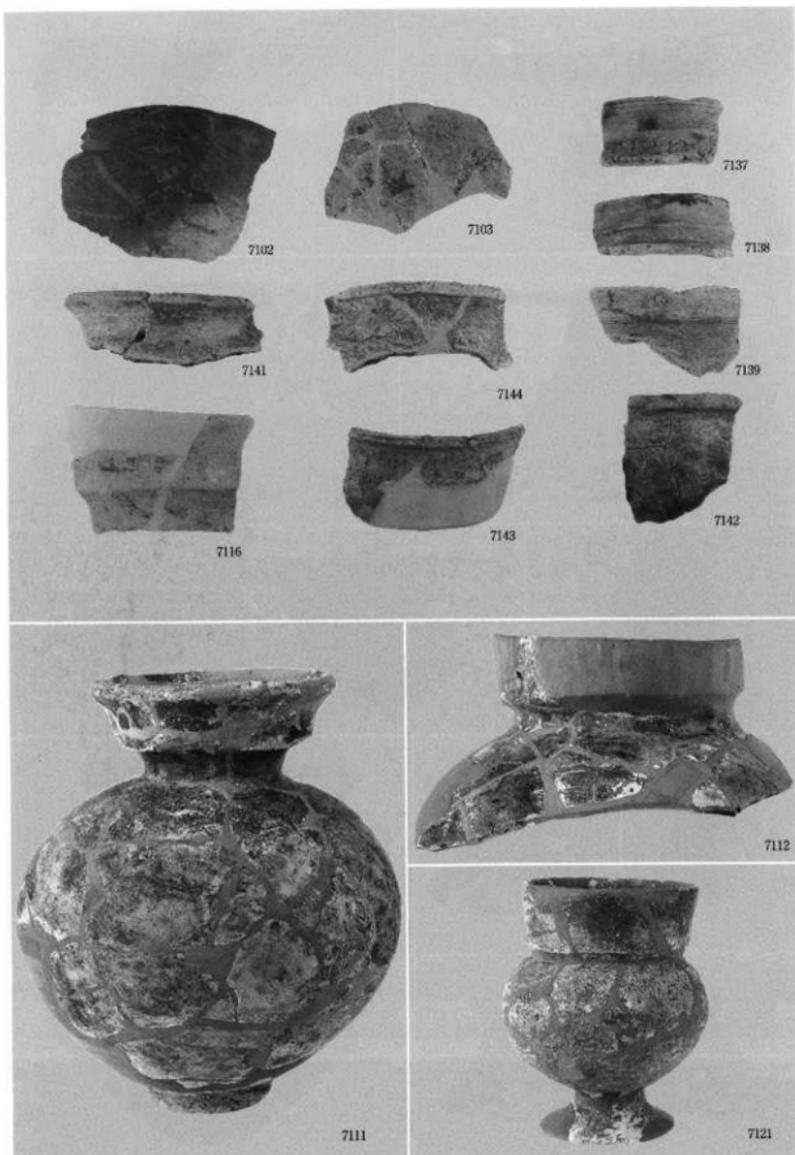
1. 瑞龍寺遺跡 木製品、鉄製品



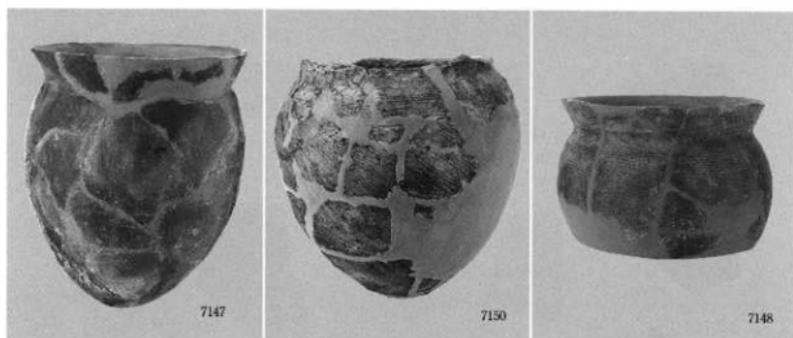
2. 東木津遺跡 土製品、石製品



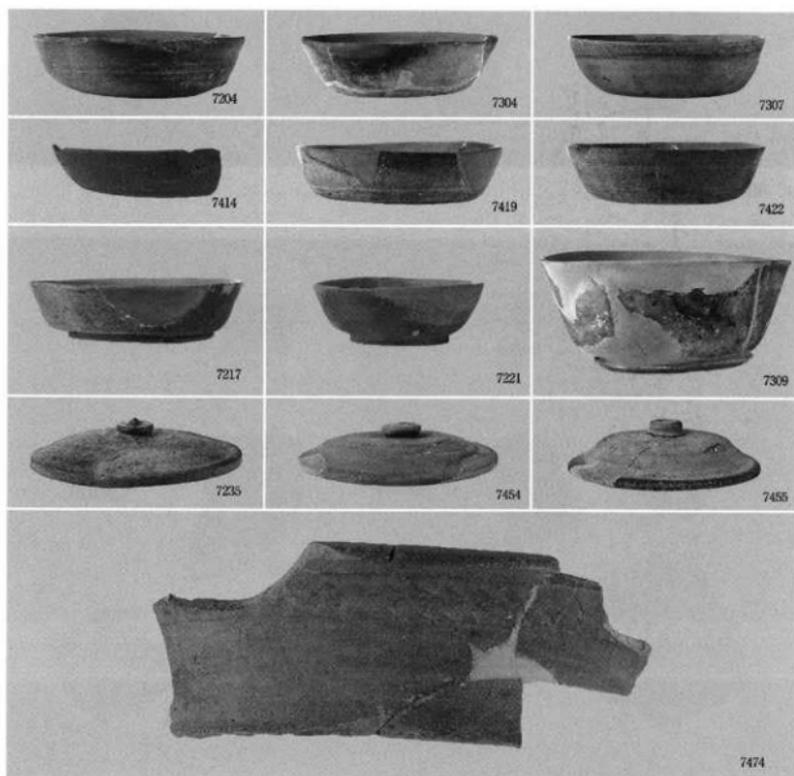
古墳時代の土師器



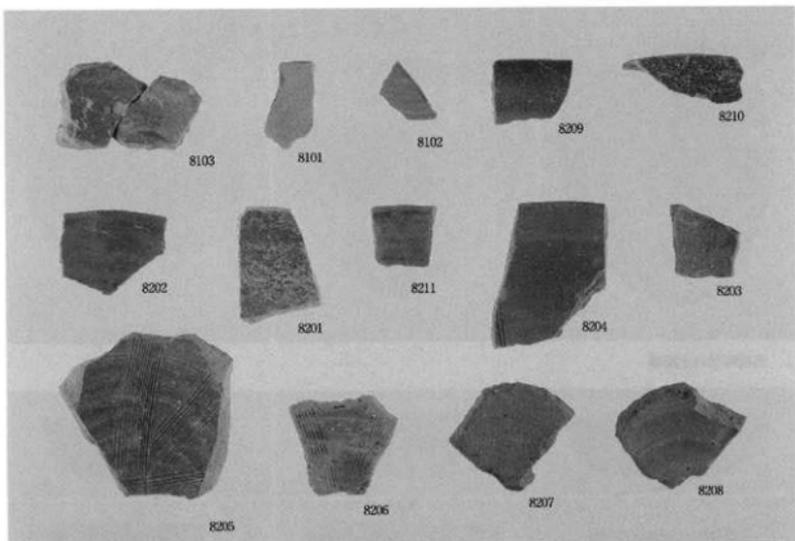
古墳時代の土師器



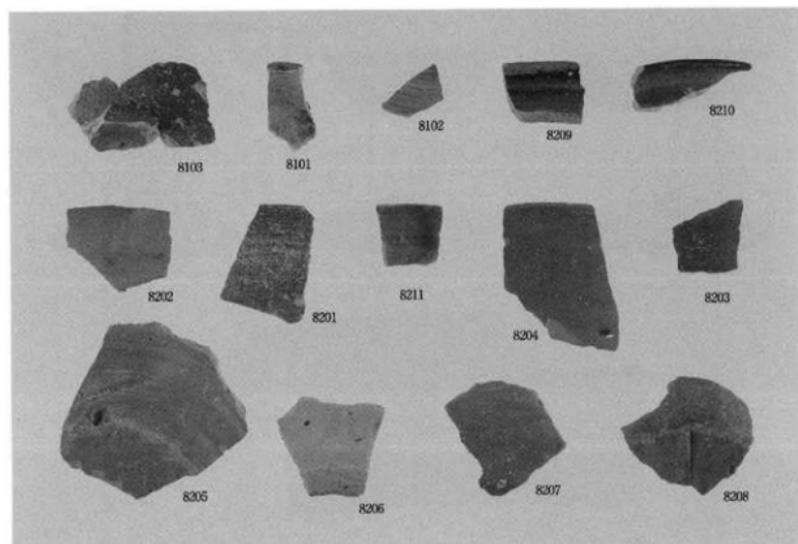
1. 古墳時代の土師器



2. 古代の須恵器



1. 須恵器、珠洲内面



2. 須恵器、珠洲外面

高岡市埋蔵文化財調査概報第67冊
市内遺跡調査概報XⅧ

2009年3月27日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社アヤト
富山県小矢部市赤倉220-3
